東温市の風土と人々のくらし

2009

重信川扇状地（平成21年５月撮影）

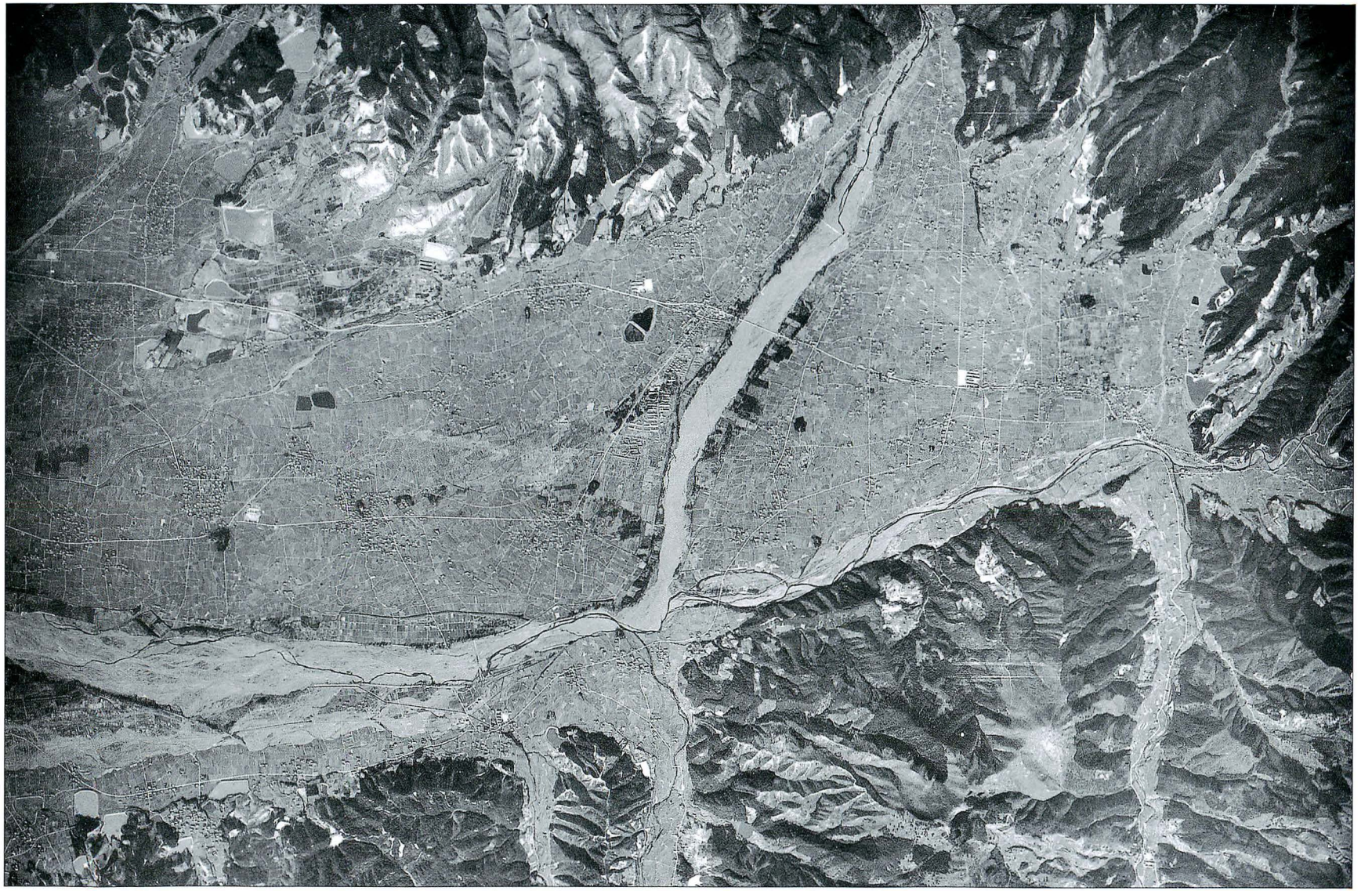
重信工業団地（平成21年５月撮影）

横灘団地（川内グリーンタウン）（平成21年10月　米澤俊二撮影）

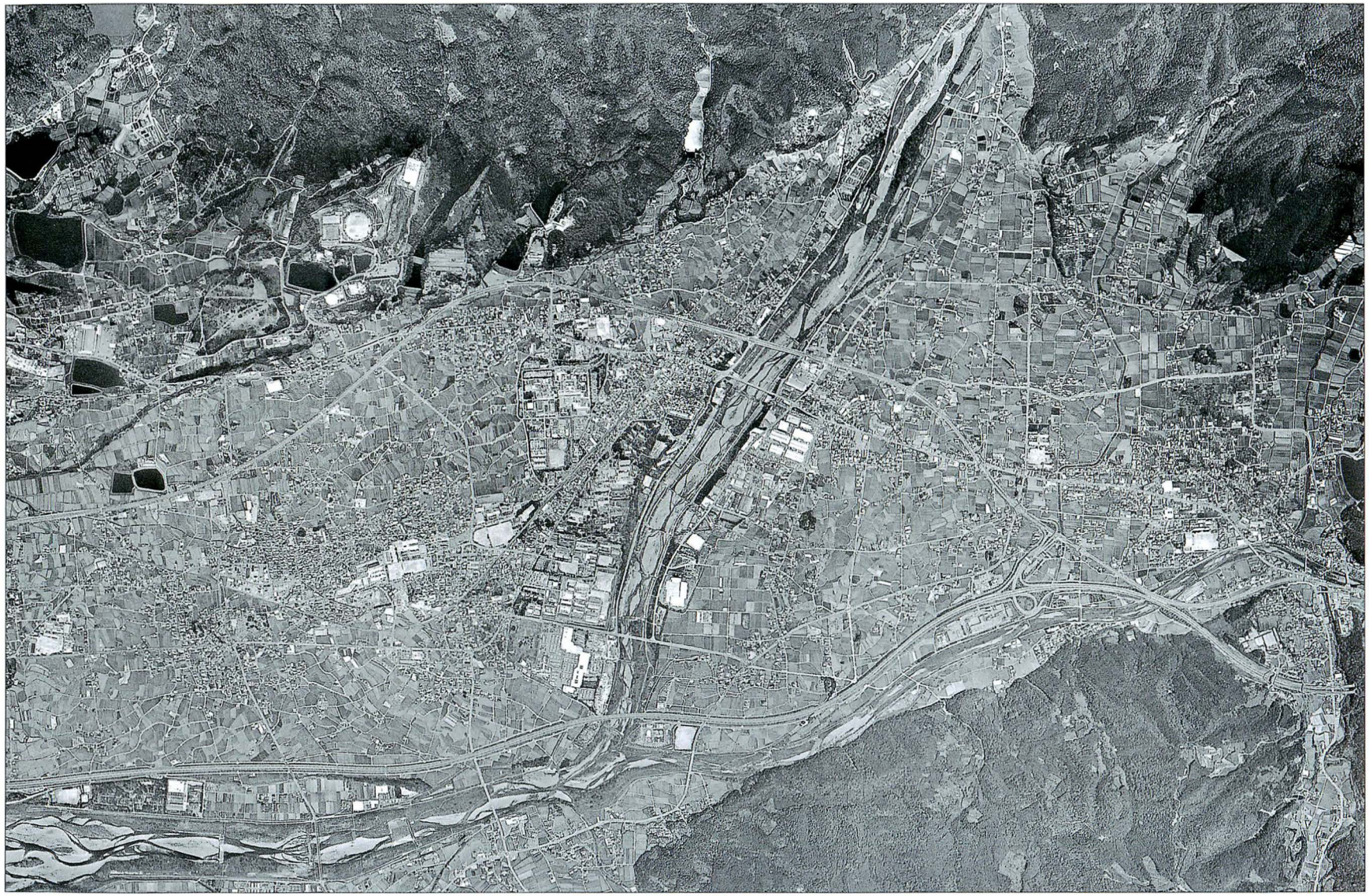
重信川右岸の大規模施設群（平成21年５月撮影）

東温市地域調査に参加の会員（平成20年８月撮影）

東温高校での打ち合わせ（平成20年８月　立石淳撮影）

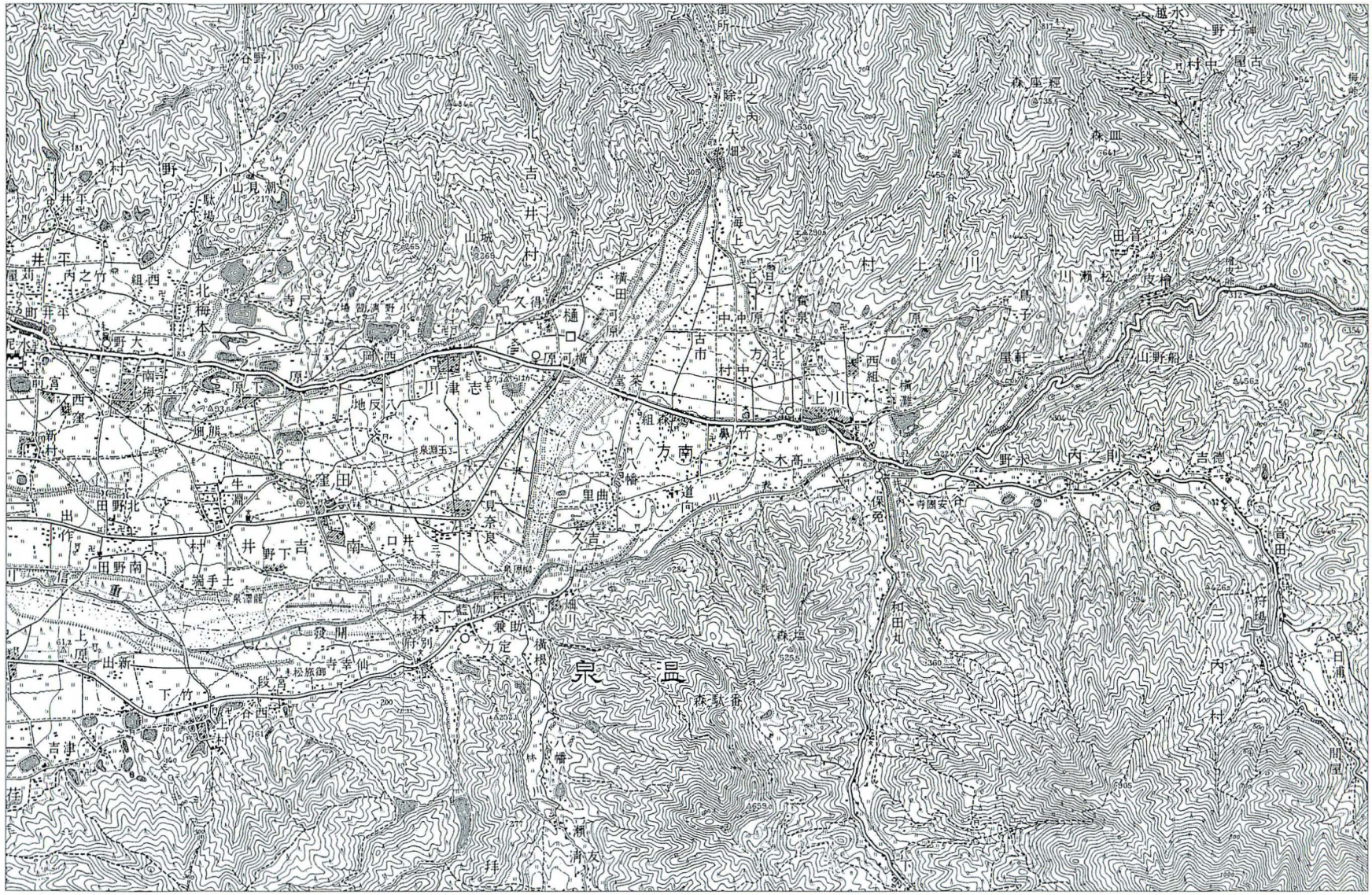


昭和23年（1948）の東温市（昭和23年　米軍撮影）



平成18年（2006）の東温市（平成18年　国土地理院撮影）

明治42年（1909）　５万分の１地形図「川上」



昭和27年（1952）　5万分の1地形図「松山南部」

平成18年（2006）　5万分の1地形図「松山南部」

ま　え　が　き

本報告書は、愛媛県の高等学校地理歴史・公民科教員で組織された「東温市地域調査委員会」が平成20年８月に実施した東温市地域調査の集大成である。愛媛の地理教員を中心とする地域調査は、昭和33年（1958）の「青島」（旧喜多郡長浜町沖）に始まり、愛媛県下各地を対象に既に20回実施されている。50年以上の長きにわたり県内各地にフィールドを求め、調査が継続してきたのは、愛媛の地理の先生方の熱意の賜物である。県内各地の人々に触れ合い、その地域の様子が明らかになってゆく喜びや、調査のたびに、昼はタオルで汗を拭きながら共にフィールドにでかけ、夜には同じ釜の飯を食べ語り合う仲間が増えていく喜びは、地理教師ならではのものであろう。「西条市」の地域調査からは、地理部門だけでなく当時の社会科全体に枠を広げ参加を呼びかけた。予備調査・本調査の２年がかりの調査になったのもこの時からである。しかし近年の予算削減の影響で予備調査・本調査は実施が困難になり、今回の調査は本調査のみということになった。

地域調査の場所が、今回東温市に選定された理由としては、次の諸点が挙げられる。中予地方の中で今まで地域調査を実施していない地域であること、会員から調査希望が多かったこと、「安心して住める街」ランキングで上位にランキングされた市であること、「アクロス重信」や「坊っちゃん劇場」など新たな情報・文化発信基地として東温市が興味深く、今までの調査対象地域にない大変興味深いフィールドであることなどである。

こうして選定された東温市で調査を行うにあたり、平成19年度に委員長の米澤俊二が東温市の髙須賀功市長に御協力をお願いしたところ、快く引き受けていただいた。地域調査にあたり行政の協力はなくてはならないものであり、市役所の窓口として総務部総務課の髙須賀広一課長補佐、総務部企画財政課の山本一英企画調整課長には大変お世話になった。

しかし８月は夏休みといっても、われわれ教員は、様々な研修会、部活動指導、補習、家庭訪問などがあり、今回の調査期間はわずか２泊３日という短い期間しか実施できなかった。さらに、参加できる人数と能力には限界があることや、近年地理専門の教員が減少したことなどもあり、十分な分析や考察がなされていない箇所も多いのではないかと心配している。

今回の地域調査では、東温市役所をはじめ関係諸機関並びに地元の各界の方々から多大の御支援・御協力を賜った。さらに市内各地では、市民の皆様の温かい御協力をいただいた。

会場校となった東温高校の丹生谷吉昭校長先生、黒田幸美教科主任ほか地理歴史・公民科の先生方には、準備の段階からいろいろ御世話になった。さらに愛媛県高等学校地歴・公民部会の山内譲前会長（前西条高校校長）、末廣久行会長（松山中央高校校長）、愛媛県教育委員会の島瀬省吾指導主事、東温市在住の渡部文也先生には、調査全般についての御指導をいただいた。ここに深甚の謝意を表する次第である。

平成21年11月20日

愛媛県の高等学校地理歴史・公民科教員で組織された
「東温市地域調査委員会」

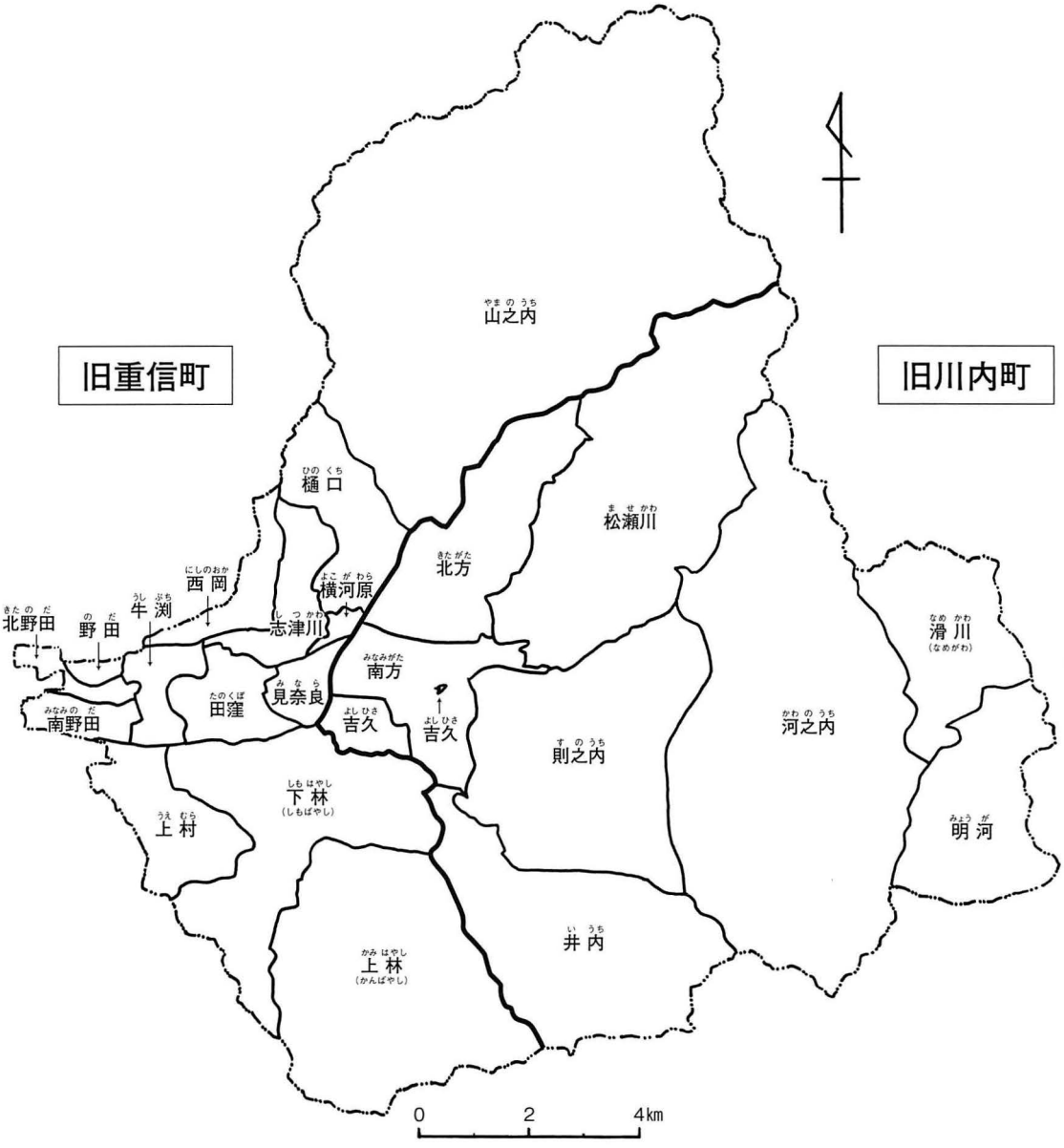
委員長　米　澤　俊　二
（伊予高等学校）

東温市地域調査班編成表

（◎班長　○副班長）

本部	◎米澤　俊二（伊予・調査委員長） 末廣　久行（松山中央校長） 平岡　　徹（津島校長） ○安藤　　計（川之江） ○繁桝　義一（宇和島南中等） ○高津　富男（松山東・調査報告書担当） ○加藤　伸弥（松山東） ○黒田　幸美（東温・会場校教科主任）	山内　　譲（西条校長） 玉井　治樹（今治北校長） 堤　　純（愛媛大学・准教授） ○二神　弘明（松山南）
Ⅰ 自然環境	◎谷口　治義（松山北）　○越智　　学（松山東雲）	
Ⅱ 農業・林業	◎安藤　　計（川之江）　○清川　的（東温）　米澤　俊二（伊予） 安藤　哲次（済美）	
Ⅲ 工業	◎加藤　伸弥（松山東）　○國田　誠司（川之江） 三好　哲司（松山工業）　渡部　文也（OB）	
Ⅳ 商業	◎渡邉　　豊（松山中央）　○山本　清文（松山中央）　井上　　浩（松山中央） 田口　昭彦（松山中央）　兵頭　俊二（松山中央）　河本　潤也（松山中央） 門田　邦彦（済美平成）	
Ⅴ 人口	◎二神　弘明（松山南・紙上参加）　○松本賢太郎（松山西中等） 高山　利典（済美）　山本　篤志（済美平成）	
Ⅵ 集落・都市	◎渡邊　洋人（新居浜西）　○平田　剛啓（今治西） 立石　　淳（生涯学習センター）　西丸　和仁（宇和島東） 惣谷　　清（宇和島東高生）	
Ⅶ 交通・生活圏	◎髙津　富男（松山東）　○橋本　貴登（松山北） 一柳　保彦（松山商・紙上参加）　本田めぐみ（松山商）	
Ⅷ 観光	◎繁桝　義一（宇和島南中等）　○川井　博樹（伊予） （門田　邦彦（済美平成））	
Ⅸ 特論	伊予鉄道横河原沿線の景観と地域変貌	窪田　重治（OB） 窪田　賢治（文化振興財団）
	東温市の水利史－菖蒲堰を中心として－	門田恭一郎（OB・紙上参加）
	明治時代の旧街道と町並み	柚山　俊夫（生涯学習センター）
	東温市の苗字	松木　義明（松山北）

※（　）内の所属は，平成20年度の調査時点のものである。


旧重信町
旧川内町
山之内
樋口
松瀬川
北方
西岡
横河原
牛渕
北野田
野田
志津川
南方
見奈良
田窪
南野田
吉久
吉久
則之内
河之内
滑川
(なめがわ)
下林
(しもばやし)
上村
明河
井内
上林
(かんばやし)
0
2
4km

東温市の地域区分図

目　　次

グラビア
まえがき
調査班編成表
東温市の地域区分図
Ⅰ　自然環境 …… 1
　1　地形 …… 1
　2　陸水 …… 4
　3　気候 …… 9
Ⅱ　農業・林業 …… 13
　1　概要 …… 13
　2　稲作 …… 14
　3　麦作 …… 16
　4　野菜栽培 …… 17
　5　花き・花木 …… 21
　6　農産物直売所 …… 24
　7　農産物等のブランド化について …… 27
　8　林業 …… 27
Ⅲ　工業 …… 31
　1　東温市の工業の概況 …… 31
　2　工業の現況 …… 33
　3　工業生産の今後の課題 …… 46
Ⅳ　商業 …… 48
　1　東温市の商業活動の現況 …… 48
　2　商店街の推移 …… 49
　3　大規模小売店舗の展開 …… 56
　4　周辺地域での商業活動 …… 58

Ⅴ　人口 …… 63
1　概要 …… 63
2　昼間人口比率 …… 63
3　人口構成 …… 66
4　人口動態 …… 67
Ⅵ　集落・都市 …… 72
1　概要 …… 72
2　東温市の都市計画 …… 72
3　都市構造の変化 …… 77
4　都市化の進展 …… 82
5　まちづくりに向けた現状と課題 …… 93
Ⅶ　交通・生活圏 …… 95
1　道路交通 …… 95
2　バス交通 …… 100
3　鉄道交通 …… 103
4　生活圏 …… 106
Ⅷ　観光 …… 118
1　はじめに …… 118
2　概観 …… 119
3　観光資源 …… 120
4　レジャー施設・スポーツ施設 …… 125
5　イベント …… 127
6　まとめ …… 127
Ⅸ　特論 …… 128
1　伊予鉄道横河原線沿線の景観と地域変貌 …… 128
1　はじめに …… 128
2　横河原線の開通 …… 128
3　横河原線開通による集落の変貌 …… 131
4　扇端地域の開発と駅前集落の立地 …… 144
5　牛渕団地住宅の建設と駅前集落の形成 …… 151
6　おわりに …… 154

2　東温市の水利史－菖蒲堰を中心として－ …… 156
1　はじめに …… 156
2　東温地区の用水源 …… 156
3　水利の史的考察 …… 159
4　菖蒲堰の構造と修繕 …… 160
5　旱魃時の用水慣行 …… 161
3　明治時代の旧街道と町並み …… 163
1　はじめに …… 163
2　東温市域の明治時代の旧街道 …… 163
3　志津川の町並み …… 167
4　川上の町並み …… 170
5　桜三里の名所「曙橋」について …… 173
6　おわりに …… 178
4　東温市の苗字 …… 179
1　はじめに …… 179
2　東温市の苗字の特徴 …… 179
3　東温市の代表的苗字 …… 180
4　まとめ …… 190
あとがき
地理共同調査の歩み

Ⅰ 自 然 環 境

東温市は、平成16年（2004）９月に温泉郡重信町と川内町が合併して誕生した。松山平野の東部地域を占め、旧町名重信町の由来となった重信川が市域を西流する。市の中心部からは、北に高縄山地、南に皿ヶ峰連峰、東に石鎚山脈を望み、重信川が形成した扇状地性の低地が広がる。近隣の市町には、西部の松山市のほか、今治市、西条市、久万高原町があり、行政界を接している（図１）。地理的には高縄半島の付け根部分のほぼ中央部に位置しており、県都松山や東予地区とを結ぶ交通の要衝として発展してきた。交通の利便性や自然環境に恵まれ、今日松山との結びつきはますます強くなっている。

東温市の面積は211.45㎢、平成19年10月現在では県下20市町の中で13番目の面積規模である。

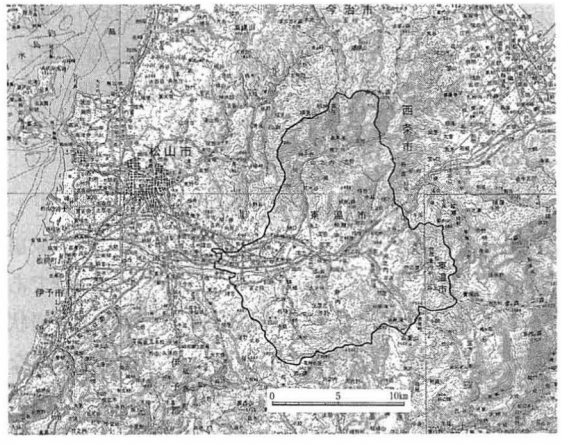


図１　東温市の位置

注）20万分の１地勢図「松山」「高知」（縮小）より

１　地形

(1)　地形の概要

東温市は東西23.1㎞、南北25.5㎞の領域を持つ。市域をほぼ東西に貫く中央構造線が、西南日本の地質構造を大きく内帯と外帯に分けている。

中央構造線の北側である内帯は領家帯に分類され、基盤岩となる領家花崗岩類、領家変成岩類、中生代白亜紀に堆積した和泉層群や第四紀に堆積した洪積層、沖積層が分布している。和泉層群は白亜紀末期の海成層で、礫岩層や砂岩層、泥岩層より成っている。東温市山之内ではこの地質を反映して大規模な採石場が谷に沿って分布している。また、最上流域の木地集落東方約1,000mの右岸には海底の水流の痕跡である漣痕化石が観察され（写真１）、これにより堆積時の和泉層群の様子を窺い知ることができる。和泉層群の南限が中央構造線となる。

中央構造線の南側は三波川帯に分類される。そのうち中山川の上流域から東にかけては三波川変成岩類が、石鎚山から皿ヶ嶺連峰にかけては新生代古第三紀に堆積した久万層群と火山岩類により構成される石鎚層群が分布している。

写真１　山之内の漣痕化石（東温市天然記念物）

注）平成20年８月　谷口治義撮影

主な山地には北部の高縄山地と南部の皿ヶ嶺連峰がある。前者には松山市の市境になっている明神ヶ森（1,216.9m）や今治市・西条市の市境になっている東三方ヶ森（1,232.7m）があり、山地の最高峰をな

している。後者には石鎚山脈の西端に位置する皿ヶ峰（1,270.5m）があり、その名の通り平坦な頂上線が断層崖上にそびえている。山頂付近の平坦な地形は中央構造線の活動に伴い隆起した準平原が残存したものと考えられ、侵食小起伏面となっている。この皿ヶ嶺連峰は、瀬戸内海側と太平洋側の分水界にもなっている。

県内最大の面積を持つ松山平野は、重信川とその支流の堆積作用によって形成された扇状地性の平野である。中央を流れる重信川は東三方ヶ森に源を発し、表川、拝志川、内川、石手川などの支流を集めて伊予灘に注ぐ。全長は約36km、県内では肱川とともに一級河川に指定されている。

重信川は、東温市大畑の標高170m地点を扇頂として横河原、北方、南方、見奈良に広がる「横河原扇状地」を形成している。その発達はきわめて明瞭であり（写真２）、平均勾配は16／1000と比較的急な扇状地となっている。表川との合流点までは表流水は少なく伏流している。扇央の見奈良付近はもともと乏水地域であったため水田化されず、かつては桑畑や雑木林として利用されていた。戦前に国立療養所が設置され、戦後東温高校や養護学校、刑務所、愛媛大学医学部が置かれ、新たな土地利用が進んだ。横河原扇状地の扇端部分には、お吉泉（戌亥泉）、柳原泉、三ヶ村泉、龍沢泉などの湧泉が多く見られる。

表１に地形区分面積とその占有率を示した。東温市域の79%は山地であり、低地は12%弱である。わずかな低地もその成因では、扇状地性低地が9.7%を示しており、重信川が扇状地の性格を帯びていることがわかる。また、台地・段丘は4.3%となっており、山地山麓や表川、井内川、拝志川の両岸に分布している。扇状地が完新世（沖積世）における堆積作用で形成されたのに対して、台地･段丘は更新世（洪積世）から完新世に形成されたものである。図２に地形分類図を示した。

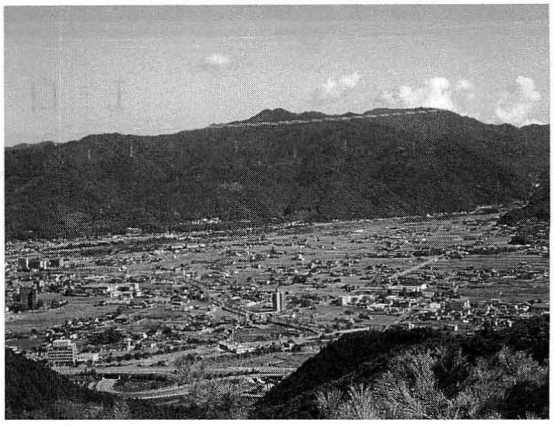


写真２　塩ヶ森から望む横河原扇状地

注）平成20年８月　谷口治義撮影

(2)　中央構造線と活断層

西南日本の地質構造を大きく分ける中央構造線は、糸魚川・静岡構造線との接点である長野県諏訪湖より西に九州まで延び、その距離は1,000kmにも及ぶ。中央構造線は地質時代に何度も繰り返しながら大きく変位している。その活動は１本の断層だけではなく、並走する断層や活動の時期や位置も異なるため、総称して「中央構造線断層系」と呼ばれる。その中で第四紀に活動している部分は「中央構造線活断層系」と呼ばれている。

高縄山地と石鎚山脈との地狭部では、中央構造線の方向が大きく屈曲している。この弯曲部を「桜樹屈曲」と呼び、「地質境界としての中央構造線」と活断層が一致している。桜樹屈曲をまたぎ、西条市丹原町湯谷口から東温市原にかけて約13km連なる川上断層

表１　旧重信町・旧川内町における地形区分別面積（㎢）と占有率（%）

	山地				丘陵地		台地・段丘			低地			合計
	大起伏山地	中起伏山地	小起伏山地	山麓地	大起伏丘陵地	小起伏丘陵地	砂礫台地（上位）	砂礫台地（中位）	砂礫台地（下位）	扇状地性低地	三角州性低地	自然堤防砂州	
旧重信町	43.45	21.81	15.23			1.13		0.81	1.17	14.06		3.23	100.89
旧川内町	27.73	48.74	11.74		5.29	2.73	0.96	2.60	3.53	6.45		1.12	110.89
合計	71.18	70.55	26.97	0	5.29	3.86	0.96	3.41	4.70	20.51	0	4.35	211.78
占有率（%）	33.6	33.3	12.7	0.0	2.5	1.8	0.5	1.6	2.2	9.7	0.0	2.1	100.0
	79.6				4.3		4.3			11.8			100.0

注）昭和46年（1971）「土地分類図付属資料」（愛媛県）により谷口治義作成

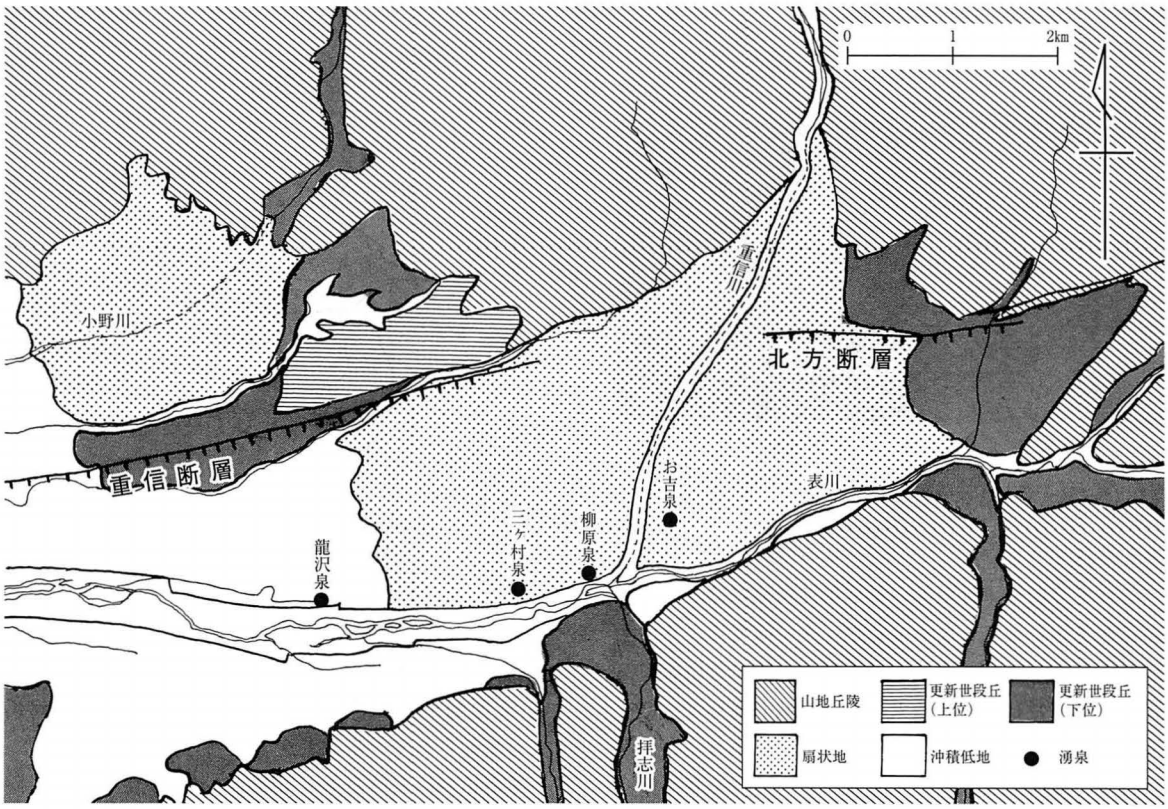


図2　松山平野東部の地形分類図

注）都市圏活断層図「松山」（平成10年）より谷口治義作成

は、断層線の走向が東北東－西南西の直線状となっている。また断層線に沿って右横ずれの河谷変位も確認できる。

中央構造線は桜樹屈曲から南に分岐し、南南西そして南西へと方向を変えながら東温市の南部、砥部町へと伸びる。東温市上音田の表川河床や、砥部町の「砥部衝上断層」では露頭があり、中央構造線を観察できる。

川上断層の西方延長部にあたるのが北方断層である。東温市三軒屋から北方にかけて約3.8km連なる（図2）。横河原扇状地の左岸では、比高２～11mの低崖が東西方向にに分布しており、北方や宝泉の医王寺前では南側落ちの低断層崖が確認できる。

重信断層は、近年の研究により発見され、1999年に命名された断層である[1]。東温市西岡から松山市高井町にかけて約６kmにわたり連なっている（図２）。明瞭な低断層崖地形が存在しており、南側落ちの右横ずれ断層である。ここでは比高数10cm～３mの低断層崖を認めることができる（写真３・４）。愛媛県による活断層調査の「重信・北方・川上断層」の報告によると、重信断層は最新活動時期は10世紀以降、再来間隔は3,500～4,000年、地震規模はマグニチュード７クラ

写真3　重信断層（東温市西岡）

注）平成21年２月　谷口治義撮影

写真４　重信断層（東温市野田）
注）平成21年２月　谷口治義撮影

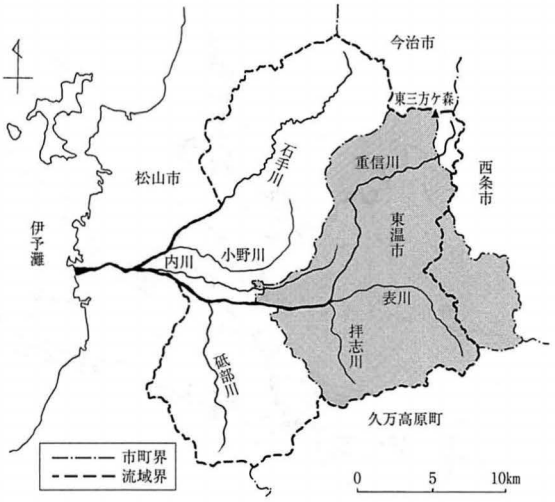


図３　東温市域と重信川流域
注）地形図をもとに越智学作成

スとされている[2)]。

これまで松山平野東部の重信川沖積地には、活断層の存在が知られていなかったが、先の研究により川上断層（北方断層）と伊予断層を結ぶ中間に重信断層の存在が認識された意義は大きい。地域の地形特性を把握することは、自然環境の多様性を認識することのみならず、地域防災においても何らかの示唆を与えてくれるものである。平成７年１月の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）以降、地震災害対策についての関心は全国的に高まっている。また近い将来発生が心配される南海地震の影響も懸念されており、総合的な地震対策や備えは必要である。

以上東温市の地形を概観したが、不十分な点は今後の課題としたい。　（谷口　治義）

２　陸水

(1)　陸水の概要

重信川流域と東温市域を図３に示す。東温市域は、その大部分が重信川中～上流域で占められている。重信川は、愛媛県のほぼ中央部に位置し、その流路は東温市、西条市、今治市の市境となっている東三方ヶ森（1,232.7m）を水源として東温市山之内地区を南西に流れる。そして、東温市吉久地区において表川と合流し流れを西に変え、拝志川、砥部川、内川、石手川など大小70余の支流を合わせて松山平野を貫流して瀬戸内海の伊予灘へ注いでいる。幹川流路延長は約36kmと短いが、水源地の標高が1,000m以上と高いため、河床勾配が極めて大きく、全国でも有数の急流河川として知られている。

東温市域における重信川は、本流と支流の表川を除けば、流路延長がほとんど数km未満の短小河川ばかりである。また市域における重信川流域の形状は、南北にやや長く、南部が多少東西方向に膨れた形となっている。

そのほか、重信川の支流の一つである内川が、東温市西部山麓に沿って西方へと流れている。一方、市域の最東部に位置する明河と滑川地区は、隣接する西条市域から燧灘へ注ぐ中山川の流域となっている。

東温市域における重信川流域の形状は、前述したようにやや南北に長いものの全体としては円形に近く、多くの支流が中央低地に集まり合流するので、重信川の水はしばしばあふれ氾濫して、家屋浸水や土砂くずれなどの災害を繰り返していた。そのため、昔から大雨、洪水対策としての治水事業が施されてきた。堤防を築き、水制などを設置して洪水や土砂の制御が試みられた。さらに河川敷の整備をはじめ、数多くの砂防ダム（堰堤）なども造成されてきた（写真５）。

また、重信川にはいくつかの霞堤が残存している。これは堤防のある区間に開口部を設け、上流側の堤防と下流側の堤防が二重になるようにした不連続な堤防のことであるが、急流河川において用いられてきた治

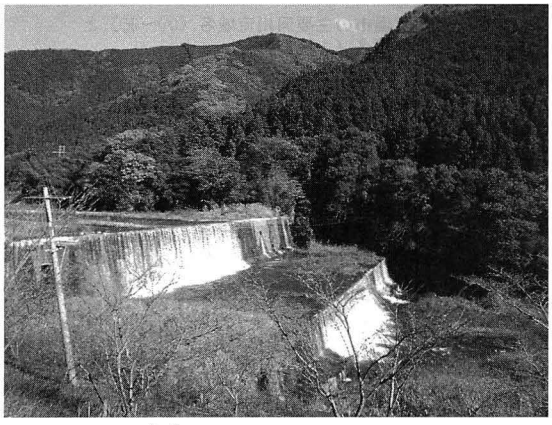


写真５　除ケの堰堤　国指定登録有形文化財
（重信側本流、山之内地区除）
注）平成20年12月　越智学撮影

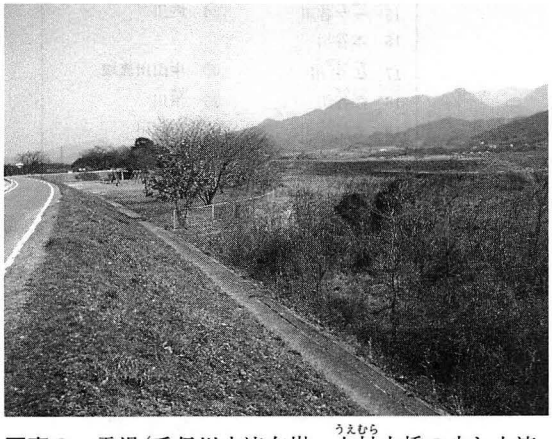


写真６　霞堤（重信川本流右岸　上村大橋の少し上流、井口霞といわれる）
注）平成21年２月　越智学撮影

水方式であった。このような霞堤が残存しているのも重信川の特徴の一つとなっている（写真６）。

一方、大雨、洪水とは正反対に少雨、干ばつに備えるために数多くのため池が造成されている。山麓緩斜面や谷筋を利用したものがほとんどである。松山市との境界にある「播磨塚池」や川内公園として整備された「吹上池」などが知られている。

(2)　河川

図４は、東温市域における主要な河川水系模式図である。愛媛県河川調書により、１次支川以上を有する河川を選択し表している。また、図５は東温市域にお

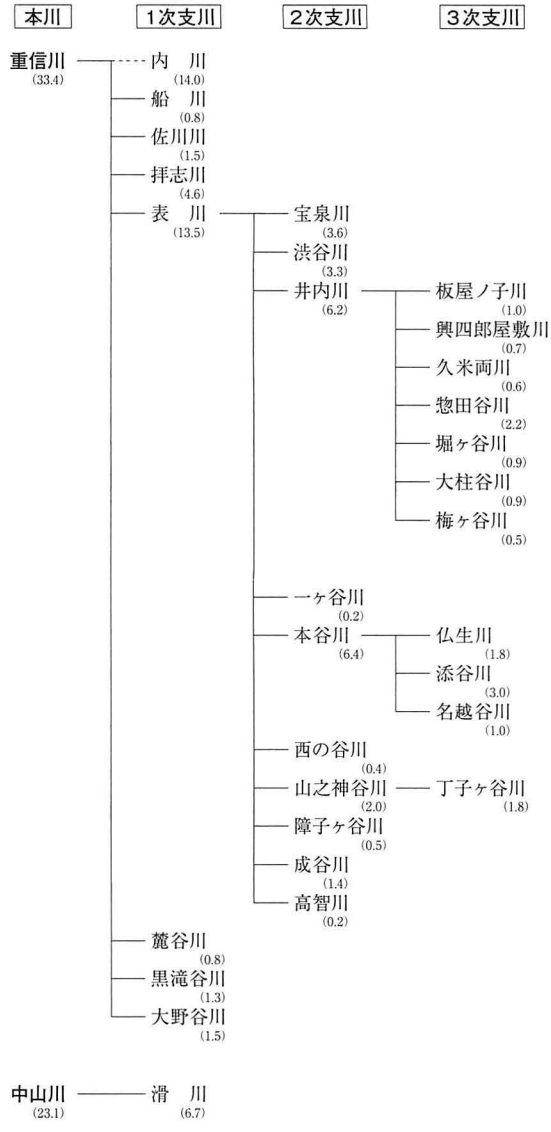
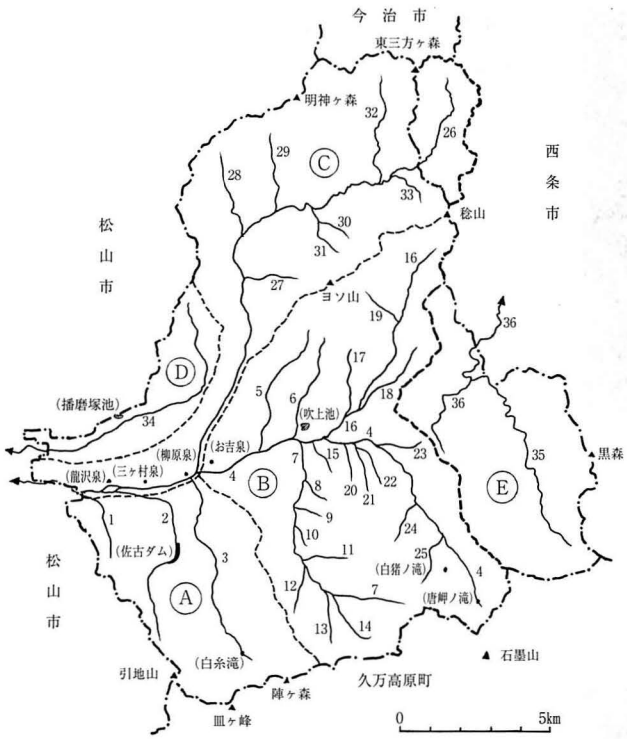


図４　東温市内の主要河川水系模式図
注）河川名の下の数字は河川延長（km）を示す。
「河川調書（平成16年版）」（愛媛県土木部河川課）などにより越智学作成

ける主要河川流域名および河川名とその位置を表している。それら流域の特性をまとめるため、さらにⒶ～Ⓔの流域に区分している。

Ⓐは拝志川を中心とする流域である。東温市南西の一角を占めている。その最大の河川である拝志川は林川ともいわれ、南に隣接する久万高原町との境界に連なる皿ヶ峰連峰を水源とし、上林地区から下林地区をほぼ北流して重信川本川へ合流する。上流の上林地



東温市の主要河川流域名（Ⓐ～Ⓔ）と河川名（１～36）

Ⓐ	拝志川流域	21	山之神谷川
1	船川	22	丁字ヶ谷川
2	佐川川	23	疇子ヶ谷川
3	拝志川	24	成谷川
		25	嵩智川
Ⓑ	表川流域		
4	表川	Ⓒ	重信川本川流域
5	宝泉川	26	重信川
6	渋谷川	27	麓谷川
7	井内川	28	河原桶谷川
8	板屋ノ子川	29	黒滝谷川
9	與四郎屋敷川	30	大野谷川
10	久米両川	31	美ノ谷川
11	惣田谷川	32	阿歌古渓谷川
12	堀ヶ谷川	33	小松谷川
13	大柱谷川		
14	梅ヶ谷川	Ⓓ	内川流域
15	一ケ谷川	34	内川
16	本谷川		
17	仏生川	Ⓔ	中山川流域
18	瑟谷川	35	簿川
19	名越谷川	36	中山川
20	西の谷川		

図５　東温市水系図（流域区分と河川名）

注）国土交通省四国地方整備局松山河川国道事務所「重信川管内図」等により越智学作成

区は典型的な地すべり地形となっており、緩斜面には集落が立地している。近年、圃場整備が行われたが、標高500m付近まで見事な棚田が見られる。また水源近くの上林峠北方には、白糸滝がある。落差約20mで二段の滝となっており、水が岩肌を白い絹糸のように流れ落ち、優雅な面影を見せている（写真７）。また、下林地区を流れる佐川川には、佐古ダムが構築され、市内最大のため池（ダム湖）となっている。

Ⓑは表川流域である。流域面積は約80㎢で東温市域では最も広い面積を有している。表川本流は東温市南東部の割石峠付近に水源を発し、すぐさま渓谷となり、110m余りの落差を持つ唐岬ノ滝を経て一気に北西方向へ流出し問屋付近へ至る。この辺りで、落差100m近い白猪ノ滝（写真８）が形成される白猪谷川と合流する。白猪ノ滝に沿った渓谷一帯には遊歩道が整備され、四季折々の美しい景観が楽しめる。特に厳冬期には真っ白に氷結した滝の大観を見ることができる。

問屋付近を経て、さらに表川は北西方向へ流下し続け、国道11号の通る則之内付近で西へ流路を変える。

写真７　白糸滝（拝志川上流）

注）平成20年８月　越智学撮影

写真８　白猪ノ滝（表川上流）
注）平成21年１月　越智学撮影

そして、国道11号に沿うように西流し、右岸に本谷川、渋谷川、宝泉川、左岸に井内川などと合流し、吉久地区で重信川本流と合流する。この合流点付近にはお吉泉（戌亥泉）があるが、国の特別天然記念物であるオキチモズクの発生地として知られている（写真９）。

©は重信川幹川流域である。東温市北方、高縄山系の東三方ヶ森にその源を発するが、最上流域の柳谷川は西条市域を流れる。そして、しばらく南西方向に流れ、東温市山之内地区へ入る。この間を流れる重信川は、山間流域で川幅もせまく、河床勾配は10分の１～50分の１と極めて急である。流路は谷あいに沿って西ないし南西方向に流れるが、神子野や岡地区まで下ると谷底平野が見られる。そして、岡地区辺りから南へと流路は変わり、再び谷筋に沿うように流れ下り、大畑地区へ至る。ここから山間流域を脱し、見奈良地区にかけて南西方向にほぼ一直線に流れ下る。川幅も一気に増し、河床勾配も緩やかになる。そして、吉久地区付近で西流してきた表川と合流し、幹川流路も西方向となり東温市域から松山市域へと流れ出す。

重信川の中～上流域には、もろくて崩壊されやすい礫岩や砂岩が分布しており、それらは急流で運搬力の

写真９　お吉泉（吉久地区）
注）平成21年１月　越智学撮影

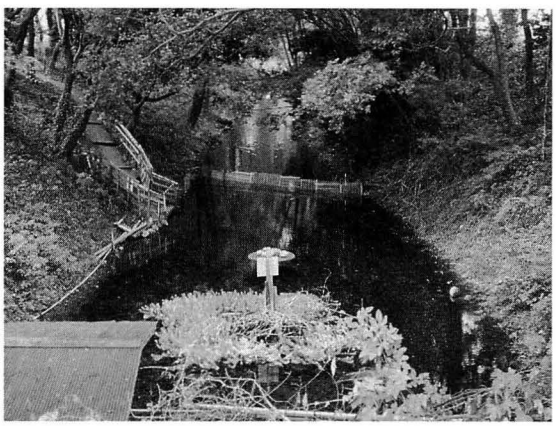


写真10　柳原泉
（重信川本流右岸　上重信橋より少し上流）
注）平成20年８月　越智学撮影

大きな河川によって下流域へと運ばれ、長い年月をかけて堆積されてきた。このような地形・地質的な特性により、重信川流域には扇状地性地形が多く見られる。なかでも、重信川本流が山間流域から平野流域へさしかかる大畑地区から横河原、見奈良地区にかけては見事な扇状地が形成されている。扇状地の扇央部では、通常地表水は伏流し乏水性の表面となる。一方、伏流した水は地下水となり扇端部で泉となって湧出している。このような湧水地（泉）は、開発に伴い埋没したものもあり、かなり減少したが、重信川本流の両岸に沿って点在している。上重信橋付近の柳原泉、三ヶ村泉、上村大橋付近の龍沢泉がよく知られている（写

写真11　三ヶ村泉
（重信川本流右岸　上重信橋より少し下流）
注）平成20年８月　越智学撮影

写真12　龍沢泉
（重信川本流右岸　上村大橋より少し上流）
注）平成21年１月　越智学撮影

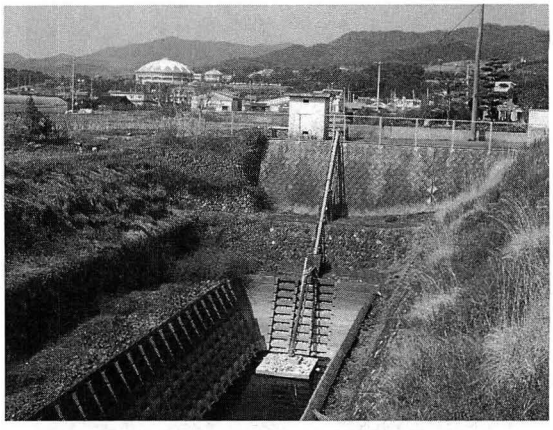


写真13　八反地泉
（志津川地区、灌漑用水として利用されている）
注）平成21年１月　越智学撮影

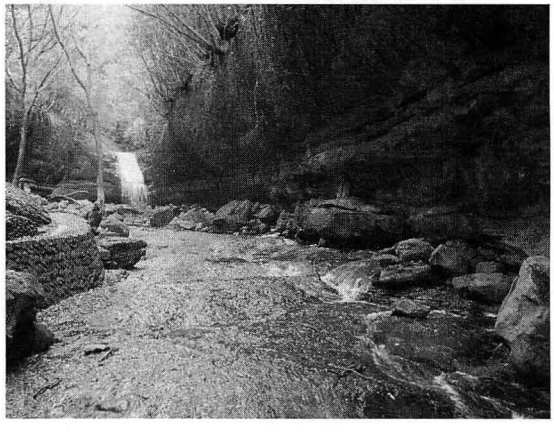


写真14　滑川渓谷（最上流部　奥の滝）
注）平成21年２月　越智学撮影

真10・11・12)。またポンプアップされ農業灌漑用水などに利用されている泉も点在している（写真13)。

Ⓓは内川流域で、東温市西部の一角を占めている。上流域は日吉谷川とよばれる山間流域であるが、横河原地区まで南下するとそこからは山麓に沿うように西方向へ流れを変えて西岡地区へ至る。その後やや南西方向へ流路を変えて牛渕地区へ至る。そこからは、本流の重信川に並行するように西流して松山市域へ流れ出る。山麓は扇状地性の地形であるが、西岡～牛渕地区は氾濫原となっており、水田が広がる流域を形成する。

Ⓔは滑川流域である。流域区分上、この流域だけが、唯一中山川流域となっている。皿ヶ峰連峰の東部で東温市、西条市、久万高原町の市町境界付近に水源を発し、北西方向へ流れ、明河（みょうが）地区の海上（かいしょ）へ至る。この間約１㎞が滑川渓谷と呼ばれ、長い年月をかけて侵食された砂岩、礫岩の奇怪な岩肌を目の当たりにすることができる。また、流水が河床にある小さな窪みで渦を巻き、小石が内側を削って形成された甌穴（おうけつ）も見られるなど、変化に富む景勝地となっている（写真14)。海上からは、谷間に沿ってほぼ北へ向かって流れ、滑川地区落出付近で中山川と合流し、そこからはさらに深く刻まれた谷あいに沿って西条市千原地区へと流れ出る。　（越智　学）

3　気候

(1)　気候の概要

東温市は、市域の中心を重信川が貫流し西側に開けた地域である。一般的には瀬戸内気候区に属し、温暖で晴天日数が多く、降水量は四国山地南側地域に比べると少ない。市内にみられるため池や湧泉の分布は、少ない雨量と扇状地性の地形特性を反映したものであり、乏水地域の水利用の姿を景観の中に読むことができよう。梅雨期・台風期に集中する大雨は、時として重信川を暴れ川に変貌させるため、治水事業は欠かせない。その一方で地下水を涵養し、地域に潤いある水環境をもたらしている。

以下、多様性に富む東温市の気候要素についてまとめた。

(2)　気候要素

表２に東温市内及び周辺の気象観測地点一覧を示した。東温市消防本部、地域気象観測所（アメダス）の資料をもとに、東温市の気候特性を明らかにしたい。

(ア)　気温

表３は横河原における平均気温・日最高気温・日最低気温の月平均について、松山と同期間の値とを比較したものである。図６には月毎の気温の変化を示した。表３より横河原の年平均気温は15.9℃、松山よりは0.9℃低い。この要因として、松山に比べると標高が90mばかり高いこと、周囲が開けた地形であること、25.9%のDID（人口集中地区）人口割合[3]が示すよう

表２　調査対象地域における観測地点一覧

地　点	所　在	標　高	所　管	利用した気候要素	利用対象観測期間
横河原	東温市横河原1376番地	123m	東温市消防本部	気温・降水量・風向	1996年1月～2007年12月
上　林	東温市上林湧水	460m	気象庁	降水量	1996年1月～2007年12月
松　山	松山市北持田町102	32m	気象庁	気温・降水量	1996年1月～2007年12月

注）谷口治義作成

表３　横河原と松山の気温（1996年～2007年）

種別＼月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年平均
平均気温（℃）	横河原	4.8	5.7	8.9	14.2	19.1	22.7	26.6	27.5	24.1	18.2	12.2	7.3	15.9
	松　山	6.1	6.8	9.8	14.8	19.6	23.1	27.0	28.0	24.9	19.2	13.7	8.6	16.8
日最高気温（℃）	横河原	9.2	10.5	13.9	19.5	25.1	27.4	30.8	32.1	29.3	22.8	17.1	12.1	20.8
	松　山	10.1	11.1	14.4	19.7	24.3	27.3	31.1	32.4	29.3	23.9	18.1	12.7	21.2
日最低気温（℃）	横河原	1.1	1.9	4.7	9.6	14.3	18.8	22.8	23.8	20.7	14.3	9.1	4.1	12.1
	松　山	2.4	2.7	5.4	10.3	15.3	19.6	23.6	24.6	21.3	15.1	9.5	4.8	12.9

注）横河原の日最高気温と日最低気温については、2001年・2005年・2006年の資料の誤りにつき、集計せずに算出する。谷口治義作成

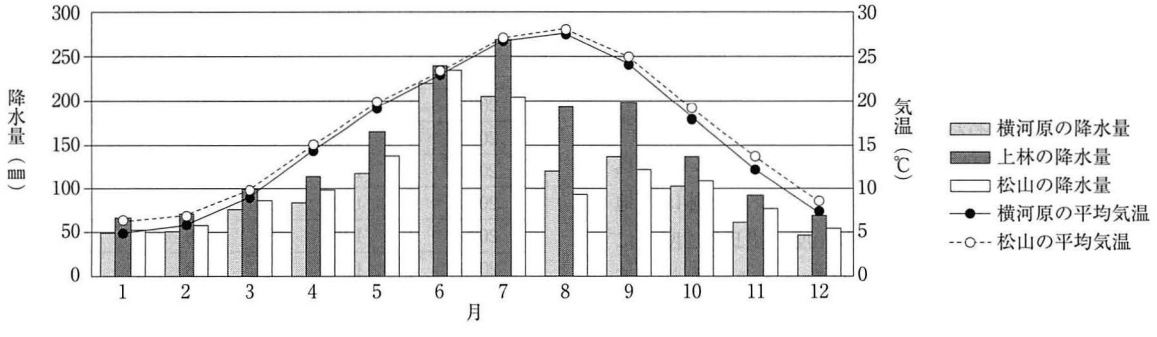


図６　東温・松山の気温・降水量

注）表２・３より谷口治義作成

に、都市化の影響が松山よりは軽微であるためと考えられる。その一方で日最高気温の差異はより小さくなっており、5月、6月では松山より高く、9月では同じ値となっている。概ね5月から9月にかけて暖候期では、松山とほぼ同じ気温値といってもよい。推察するに、5月、6月において松山の日最高気温が横河原より逆に低くなるのは、松山が瀬戸内海に面しており、水温がまだ低い海上の気塊を海風が運搬しているものと考えられる。また、日最低気温については、年平均で松山と0.8℃の差異があり、1月に関しては1.3℃低くなっている。これは盆地や内陸地域の特性を示したものであり、放射冷却の進みやすさが気温の低下に現れていると考えられる。寒候期には近隣の山域からの冷気流と冷気湖の形成が気温の低下につながっていることも考えられる。このように松山と比べると僅かではあるが、夏の日中は暑く、冬は冷え込みが厳しく、寒冷であるといえよう。ちなみに2001年8月には最高気温39.6℃の記録がある。同年8月の最高気温が松山では35.9℃であることを考えれば、内陸の気温特性を示しているといえる。観測記録が得られるならば、さらなる考察も可能である。ちなみに毎年夏季に最高気温を観測し全国的に報道される地点に静岡県浜松市天竜区天竜がある。天竜は天竜川が形成した扇状地の扇頂にあたり、スケールは違うものの重信川扇状地に位置する横河原と地理的状況がよく似ていることから、夏の高温についてメカニズムを考える場合、とても興味深い。

気温については2007年までの12年間平均であるが、松山の気温について平年値（1971～2000年）と比べると、年平均気温で0.7℃、最高気温で0.8℃、最低気温で0.8℃高くなっている。これも、近年の温暖化傾向を反映したものと考えられる。

一方、地形や標高差による気候環境の相違も顕著である。皿ヶ嶺山麓の斜面帯に位置する上林（かみはやし）（300m～400m）と麓にあたる平野部に位置する野田、牛淵（100m未満）とでは当然ながら気温差は大きい（写真15）。拝志村郷土誌（明治44年刊）には「上林は高地なるが故に盛夏の際といえども90度（摂氏32.2度）に上がらず、冬季は積雪深く氷点を下ることあり。下林、上村とさがるに従い暖気を増し、積雪は極めて少なくて氷点を下ることなく、夏季は90度に上がることあり。」[4] と記載されている。

写真15　上林から見奈良方面（中央に愛媛大学医学部）
注）平成20年8月　谷口治義撮影

久万高原町に至る国道は冬季積雪に見舞われる。白猪ノ滝では結氷することもしばしばで、冬の風物詩としてよく紹介される。山間部では夏季は涼しく、冬季は寒さが厳しい。

(イ)　**降水量**

表4は、横河原、上林、松山における降水量の経年変化を示したものである。平野部の横河原では1,270㎜となり、瀬戸内海沿岸と同様少雨である。しかしながら直線距離にして約7㎞ほど離れ、標高が460mの上林では1,713mを示している。一般的に四国山地以南では南海気候区に区分され、降水量は2,000㎜以上となることから、上林は瀬戸内気候区と南海気候区の

表4　観測地点における降水量経年変化

（単位：㎜）

年	横河原	上　林	松　山
1996	1,106	1,589	1,131
1997	1,321	1,592	1,440
1998	1,305	1,671	1,381
1999	1,606	2,034	1,503
2000	1,078	＊＊＊	1,150
2001	1,373	1,627	1,501
2002	793	＊＊＊	930
2003	1,335	1,830	1,400
2004	1,796	2,525	1,786
2005	1,173	1,518	1,179
2006	1,387	1,943	1,469
2007	968	1,498	1,051
平均	1,270	1,713	1,327

注1）＊＊＊は欠測期間があることを示す
注2）谷口治義作成

漸移地帯にあるといえる。

図６には気温と併せて月毎の降水量の変化を示している。この図から横河原、上林とも７月と９月に降水量のピークを迎えていることがわかる。ただし松山は６月が降水量のピークである。前者は梅雨前線に伴う降水、後者は台風期の降水と考えられるが、量的には梅雨期の降水が多いことがわかる。これは西に開けた地形特性により、梅雨期には西よりの気流が収束しやすく降水量が増すためである。梅雨明け後は熱帯性の小笠原高気圧に支配され高温少雨となることから、梅雨期の降水は、農業用水や地下水の涵養のためにも極めて重要である。しかしその一方で、梅雨期、台風期の豪雨は土砂災害の危険性を高めることになる。流域の北側は領家帯の花崗岩・和泉層群が分布し、水源山地から流失した土砂は、河床勾配が非常に大きく全国でも有数の急流河川となっている重信川を下る。河道にはこれまでの土砂が多く堆積しており、大出水時には流域に大きな被害をもたらす危険性が高い。それゆえに治水対策は重要な課題であり、重信川上流域では建設省（現国土交通省）直轄で昭和23年度より砂防工事が実施されている。

降水量の年変化も見逃せない。1994年は西日本が記録的な少雨により、夏の降水量が極めて少なく石手川ダムの水が底をついた年である。松山では年降水量が史上最少の696㎜であった。2002年は930㎜と観測史上６番目に少ない年であり、横河原になるとさらに少ない793㎜であった。年変動の大きさはその影響が多方面に及ぶことが考えられ、干ばつの危険性は農業にとって深刻な問題となる。市域に分布するため池や灌漑・飲用のため開発された湧泉はこの地域の水事情を象徴しており、その使用の実態は水利慣行にも反映している。限られた水資源を活用していくためにも、湧泉の保全や有効利用は重要である。

㈦　風

図７は横河原の月別平均風向を12年間分集計したものである。観測地点である東温市消防本部においては圧倒的に東成分が卓越しており、東の風向が48%、東南東の風向が37%となっている。頻度は低いが西北西の風向が12%であり、東西成分で風向が決まっているとみてよい。これは地形的に松山平野が東西方向に開けていることが、風向を限定させていると考えられる。

冬季には西北西の頻度が高まることから、冬型が強まり季節風の吹き出しが及んでいることが推察される。事実、季節風の吹走時には南部の皿ヶ峰連峰は冠雪し、麓の平野部とは対照的な景観を示すことから、西成分の風は頻度的には高いと考えられる。

しかし東成分が最多を占めることは何を意味するのだろうか。周桑平野と松山平野の地形的狭隘地である桜三里から吹く東風が松山平野に向かい発散しやすい地理的位置にあるためなのか、詳細は不明である。風は海陸風循環のように大気の熱的差異によって１日を周期として生ずる風から、季節風のように季節によって変化する卓越風など、時間･空間スケールの尺度が変わればその要因も様々である。隣接する山域からの山谷風の影響なのか、内陸ではあるが海陸風の影響が及んでのことなのか、または通称「石鎚おろし」と呼ばれる山越え気流がもたらしているのか興味は尽きない。詳細については再考が必要である。

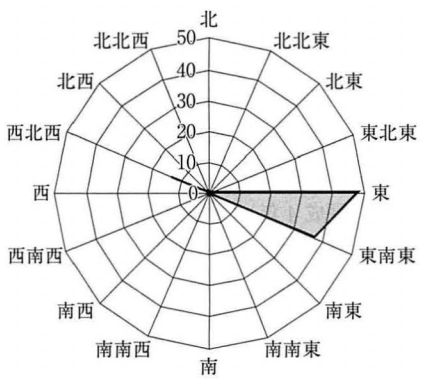


図７　横河原における風向頻度（%）

注）東温市消防本部観測記録（月別平均風向）より谷口治義作成

４　おわりに

東温市は県都松山市へのアクセスにも恵まれ、生活基盤が充実した自然豊かで潤いのある都市である。地域の魅力は、重信川が育んだ水環境や田園風景、そして山域の豊かさである。何よりも四季折々に変化を見せる流域の景勝地が極めて身近に存在しており、癒しと憩いの空間を提供してくれる。東温市の自然景観の美しさは、井内地区の棚田や市内に点在する湧泉をはじめとして、生活する人々の営みと自然が密接に結びついていることであり、大きな魅力である。その一方

で、土砂災害や南海地震対策など取り組むべき課題が残されていることも忘れてはならない。自然環境に対する理解を深めることは、多くの示唆が得られるとともに、地域防災の観点からも極めて重要である。

（谷口　治義）

注および参考文献

1）後藤秀昭・中田高・奥村晃史・池内啓・熊原康博・高田圭太（平成11年）：中央構造線活断層系・重信断層の変位地形と活動履歴、地理学評論、72、267－279

2）愛媛県（平成13年）：愛媛県活断層調査報告書概要集－中央構造線断層帯に関する調査－

3）愛媛県統計協会（平成20年）：統計からみた市町のすがた

4）重信町（昭和63年）：重信町誌

○愛媛県（昭和46年）：縮尺20万分の１　土地分類図付属資料（愛媛県）

○愛媛県（昭和58年）：愛媛県史地誌Ⅰ（総論）

○愛媛県（昭和59年）：愛媛県史地誌Ⅱ（中予）

○桜井齋・鹿島愛彦・高橋治郎（平成３年）：愛媛県地質図（1/20万）

○川内町（平成４年）：川内町新誌

○深石一夫（平成４年）：愛媛の気候

○松山地学会（平成７年）：松山市付近の地質図（1/5万）

○貝塚爽平ほか（平成７年）：日本の自然　地域編６「中国四国」

○国土地理院（平成10年）：1:25000都市圏活断層図「松山」

○佐藤晃一編著（平成11年）：新流域論

○愛媛県教育委員会（平成15年）：「愛媛県の地質鉱物」天然記念物緊急調査（地質鉱物）報告書

○愛媛県（平成16年）：河川調書

○太田陽子ほか（平成16年）：日本の地形６「近畿・中国・四国」

○愛媛県文化振興財団（平成20年）：文化愛媛第59号　特集　重信川ものがたり

松山北高校　谷口　治義

松山東雲高校　越智　学

Ⅱ 農業・林業

1 概要

東温市は、松山平野の東部、県都松山市から約12㎞のところに位置し、東に石鎚山脈、南に皿ケ嶺連峰、北に高縄山地と三方を山に囲まれている。高縄山地に源を発する一級河川重信川が市の中央部を流れており、重信川の形成した扇状地を中心に、その流域に開けた水と緑豊かなところである。

古くから農林業がさかんな地域であるが、産業別就業者数の推移（図１）をみると、第１次産業人口の就業者数は、昭和50年（1975）に4,111人（31.6％）であったものが、平成17年（2005）には1,778人（11.2％）と割合ではほぼ３分の１になっている。平成17年の日本全体の第１次産業就業者数の割合が4.8％、愛媛県のそれが9.4％と比べると、第１次産業の就業者数はやや多い。また、その中で農業の就業者数は1,756人、林業の就業者数は20人、漁業の就業者数は２人であり、ほとんどが農業就業者である。

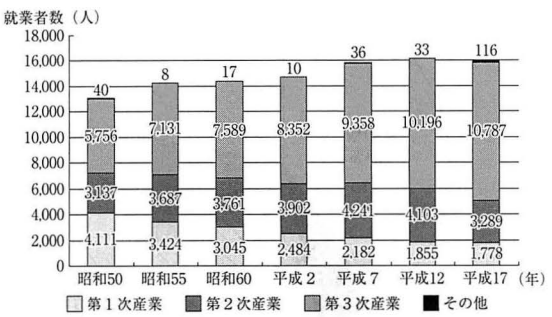


図１ 産業別就業者数の推移

注）「東温市統計書 平成18年度版」より米澤俊二作成

つぎに専兼業別農家数及び農家人口の推移（図２）をみると、昭和55年には総農家数3,038戸、農家人口12,938人であったものが、平成17年には1,385戸、5,315人と農家戸数では約46％、農家人口では約41％まで減少している。その中を詳しくみてみると、兼業農家は一貫して減少しており、昭和55年に2,717戸であったものが、平成17年には1,023戸と約38％まで減少している。その反面、専業農家数は横ばい状態あるいはやや増加傾向にある。

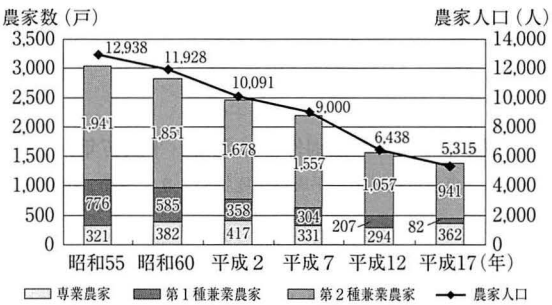


図２ 専兼業別農家数及び農家人口の推移

注）「東温市統計書 平成18年度版」より米澤俊二作成

さらに、年齢別農業経営者数（図３）をみると、60～69歳が全体の28.4％、70歳以上が全体の33.6％と、全体の62.0％が60歳以上の高齢者である。愛媛県の60歳以上の割合69.3％と比べると、若干その比率は低いが、40歳未満の若い年齢層はわずか17名と少なく、東温市においても農業の担い手の高齢化・後継者不足は大きな課題である。

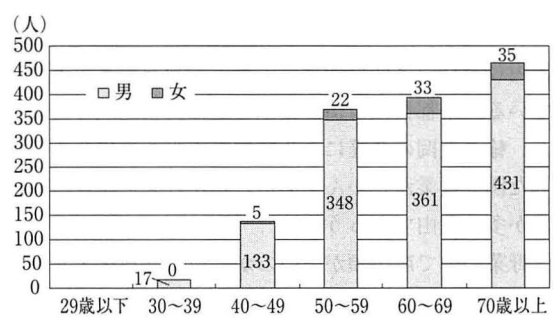


図３ 年齢別農業経営者数

注）「東温市統計書 平成18年度版」より米澤俊二作成

東温市は、古くから米麦を中心とした農業がさかんであり、平成17年の類別作付面積（図４）は、稲が69%、麦類が16%と全体の85%を占めている。作物別農業産出額（図５）においても、米が34%、麦が３%と、全体の約37%である。特に麦については、そのほとんどが東温市の特産品となっているはだか麦である。

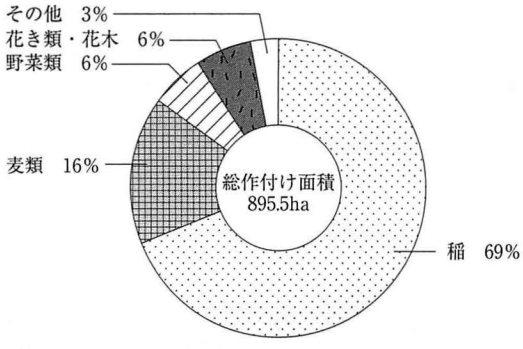


図４　作物の類別作付け面積（平成17年）

注）「東温市統計書　平成18年度版」より米澤俊二作成

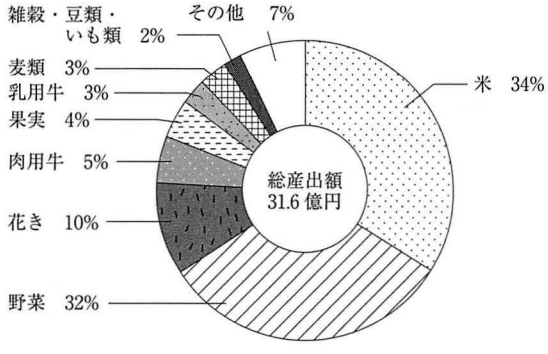


図５　作物別農業産出額（平成17年）

注）「東温市統計書　平成18年度版」より米澤俊二作成

作付面積は少ないが産出額が多いのが野菜と花きである。産出額は、野菜が10.1億円（約32%）、花きは約3.4億円（約11%）と作付面積に占める割合を大きく上回っている。県都松山市に隣接する近郊農業地域であること、輸送機関の発達による京阪神市場への出荷を目指した園芸農業がさかんであることが野菜や花きの産出額が多い理由であろう。

野菜の中で産出額が多いのが、南吉井地区・北吉井地区・拝志地区で栽培がさかんなイチゴ、花きの中で産出額が多いのが、三内地区や上林地区で栽培がさかんなキク・テッポウユリ・シキミなどの生産がさかんであることが理由である。

なお、東温市の特産品として力を入れられているものとして、はだか麦・シイタケ・キク・テッポウユリ・シキミ・イチゴなどがあげられるが、それぞれについては後述する。　（米澤　俊二）

２　稲作

(1)　概要

東温市の稲の作付け面積は、農地全体の69%を占め、作物別農業産出額においては34%を占めている。重信川流域を中心に水田が開けており、米は東温市の主要作物となっている。

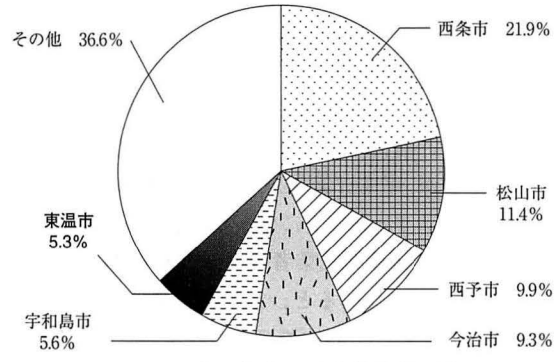


図６　平成18年市町別水稲作付面積

注）「愛媛農林水産統計年報平成18～19年」より安藤計作成

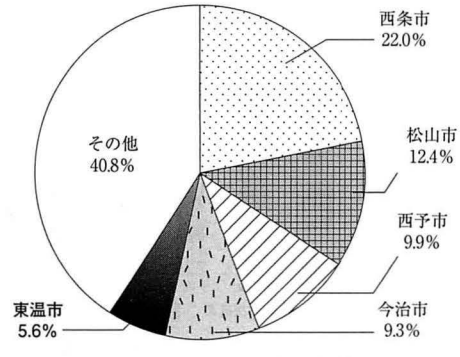


図７　平成18年市町別水稲収穫量

注）「愛媛農林水産統計年報平成18～19年」より安藤計作成

(2)　土地の利用形態

土地利用形態としては、二毛作が中心であるが、裏作として栽培される作物との組み合わせがいくつか見

①	稲	＋	麦（10月中・下旬～５月中・下旬）
②	稲	＋	タマネギ（10月上旬～２月）
③	稲	＋	キャベツ（10月～２月）
④	稲	＋	ブロッコリー（11月～３月）

図８　裏作の作物組み合わせパターン
注）聞き取りより安藤計作成

られる。各農家が工夫しながら土地を有効に使い、生産効率を上げている。

(3)　栽培品種

栽培品種としては、早生種のコシヒカリ、あきたこまち、中生種のヒノヒカリ、愛のゆめなどが栽培されている。近年は、赤米、緑米、黒米なども栽培され、松山市内のレストランやホテルに出荷され、外食・健康食の面と珍しさから注目されている。上記のような付加価値のある米の生産をする農家も見られ、農業の将来を見据えて「差別化」を図る農業経営を行う農家もでてきた。

	田植え期		収穫期
コシヒカリ	6月上旬	→	9月上旬
あきたこまち	6月上旬	→	9月上旬
ヒノヒカリ	6月中下旬	→	10月上旬
愛のゆめ	6月中下旬	→	10月下旬

図９　品種別栽培カレンダー
注）聞き取りより安藤計作成

(4)　カントリーエレベーター

平成２年（1990）に下林地区に完成したカントリーエレベーターには15℃の温度で品種ごとに、また、温度管理では、冬場の結露に細心の注意を払って貯蔵している。各農家が貯蔵施設を持たなくてよく、出荷も円滑・効率的に行える。各農家の自己米も保存している。

荷受け	乾燥	乾燥	仕上げ乾燥
送風により水分19%以上に調節	水分17%以上に調節	注ぎ足し	水分を14.5%に調節

図10　カントリーエレベーターの作業の流れ
注）聞き取りより安藤計作成

写真１　カントリーエレベーター
注）平成20年８月　安藤計撮影

(5)　ほ場整備

重信川左岸の傾斜地が広がる上林地区では、かつて不定形なほ場が点在し、進入路が狭く、作業効率が悪かったが、県営のほ場整備事業によって整然としたほ場へと代わり、生産性が向上した。

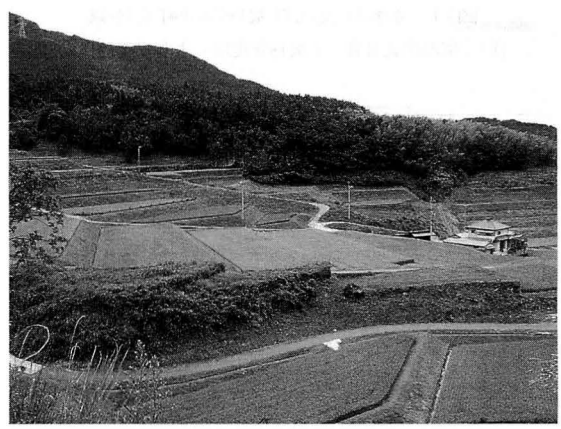


写真２　上林地区の整備されたほ場
注）平成20年８月　安藤計撮影

写真３　ほ場整備事業の看板

注）平成20年８月　安藤計撮影

(6)　現況

稲作農家の高齢化と後継者不足のため、作業を委託する農家数が増えている。また、機械を共同購入して耕作を請け負う組織も立ち上がっている。今後は、研修などを積み重ね、さらなる充実が期待される。

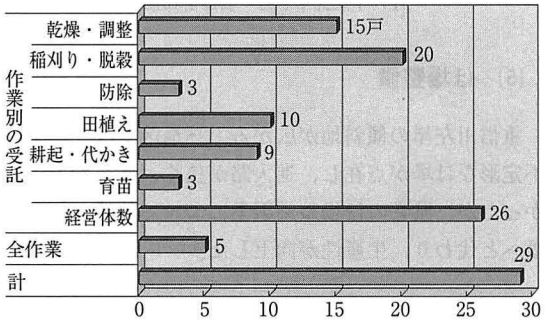


図11　水稲作受託作業種類別経営体数

注）「東温市統計書　平成18年度版」より安藤計作成

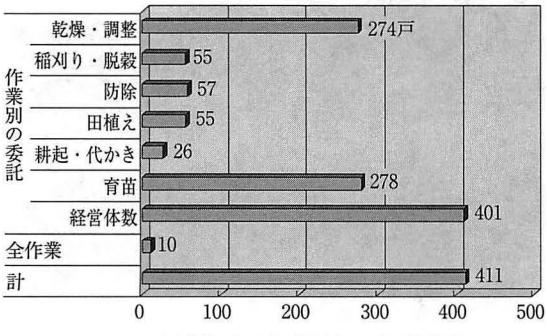


図12　水稲作委託作業種類別経営体数

注）「東温市統計書　平成18年度版」より安藤計作成

3　麦作

(1)　概要

東温市の麦の作付け面積は農地の16％を占め、作物別農業産出額においては３％を占めている。特に大麦の中でもはだか麦の生産に特色がある。

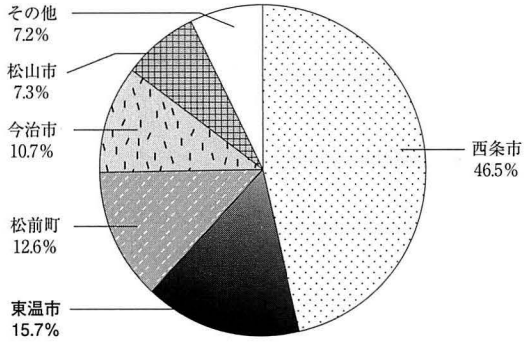


図13　平成18年市町別はだか麦作付面積

注）「愛媛農林水産統計年報平成18～19年」より安藤計作成

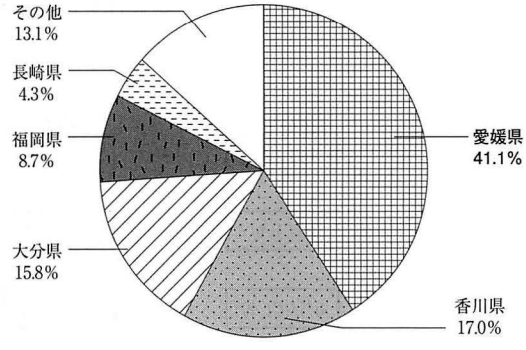


図14　平成19年度都道府県別はだか麦収穫量

注）農林水産省「平成19年度４麦収穫量」より安藤計作成

(2)　栽培品種

愛媛県の推奨品種の「マンネンボシ」の栽培が７割程度を占めている。倒伏しにくく、大粒で、粒ぞろいが良い優れた品種である。穀類の中でも食物繊維を多く含むため、最近機能性食品として見直されつつある。血中コレストロールを下げる働きや、大腸がん予防に効果のある食物繊維も含まれている。はだか麦は大麦が突然変異してできたもので稀少である。

(3) 栽培条件

はだか麦の栽培は気候条件に98%左右される作物であり、当地は最適地といわれている。温暖な瀬戸内式気候で花崗岩帯のミネラルを含む土壌を好む。あとの２%は農業技術面といわれている。

(4) 利用

はだか麦は、かつては「麦ごはん」として主食用であったが、現在では焼酎、発泡酒、パン、クッキー、ケーキ、麦味噌などに利用されている。味噌はかつては地元のJAで加工していたが、現在は伊予郡松前町の業者が行っている。麦文化圏である瀬戸内沿岸や九州地方への販路を拡大している。　　（安藤　　計）

4 野菜栽培

(1) 概要

野菜は、米麦･花きとともに農業生産の中心である。平成18年（2006）における東温市の野菜作付面積は、愛媛農林水産統計年報によると302haあり、耕地全体の約18%を占めている（図15)。また、愛媛県の他市と比較すると野菜の作付面積は少なく、さらに果樹栽培も少ないことが分かる（表１・図16)。しかし、農業産出額に占める野菜の割合にすると、野菜栽培が他地域に比べ多数を占めていることがわかる。

東温市では、水稲と組み合わせた農業経営をしている農家が少なく、野菜を単独で栽培しているため安定

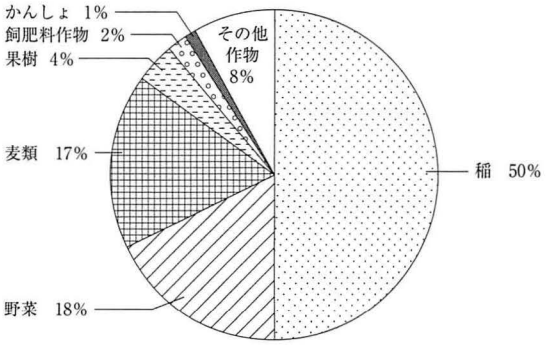


図15 東温市における農作物作付面積別耕地利用率（平成18年）

注)「愛媛農林水産統計年報」より清川的作成

表１ 県内11市の農作物作付(栽培)延べ面積(平成18年)

（単位：ha)

	米・麦類	野　菜	果　樹	飼肥料作物	その他	耕地計
松　山　市	1,951	781	4,200	31	107	7,070
今　治　市	1,695	728	2,820	166	231	5,640
宇和島市	897	385	3,240	75	83	4,680
八幡浜市	20	56	2,740	－	14	2,830
新居浜市	488	240	80	4	49	861
西　条　市	4,376	875	667	215	187	6,320
大　洲　市	796	453	1,280	166	125	2,820
伊　予　市	777	572	1,350	5	86	2,790
四国中央市	923	577	317	6	207	2,030
西　予　市	1,696	446	1,590	1,060	168	4,960
東　温　市	**1,134**	**302**	**68**	**40**	**156**	**1,700**

注)「愛媛農林水産統計年報」より清川的作成

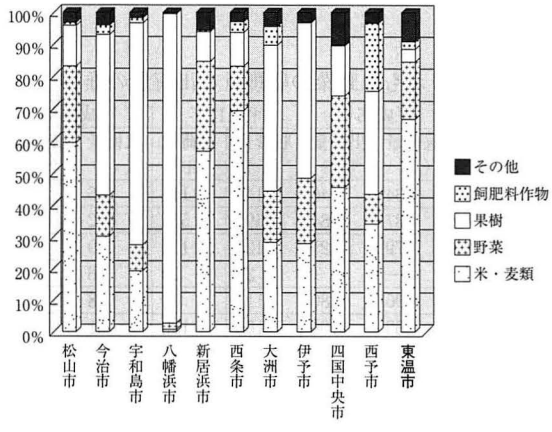


図16 農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地に占める各作物種の割合

注)「愛媛農林水産統計年報」より清川的作成

供給がなされている。そして松山近郊に位置していることから生産物の多くは、松山市や京阪神方面に出荷されている。主要な作物は、旧重信町南吉井地区のイチゴをはじめ、タマネギ、トマト、ナス、オクラ、豆類など多様である（表２・３)。

(2) 南吉井地区のイチゴ栽培

(ア) 栽培方法の推移

南吉井地区にイチゴ栽培が導入されたのは、昭和29年（1954）のことである。当初は、10～11月上旬に定植し、５～６月中旬に収穫する露地栽培であった。その後、栽培方法も次第に研究され、石垣イチゴ栽培やトンネル栽培の導入で、露地栽培より早い３～５月中旬の収穫が可能になった。

ビニールハウスによる栽培が普及したのは、昭和43年以降である。イチゴの芽は、一度低温の状態になら

表2　県内11市の農業産出額（平成18年）

（単位：千万円）

	米	麦類	野菜	果実	花き	農業産出額
松山市	213	5	281	917	43	1,831
今治市	152	9	188	433	54	1,256
宇和島市	91	0	73	654	4	1,298
八幡浜市	2	－	13	1,055	－	1,196
新居浜市	40	1	68	10	3	144
西条市	320	30	390	126	89	1,500
大洲市	70	1	134	74	31	669
伊予市	75	4	176	281	19	657
四国中央市	77	1	164	34	24	695
西予市	160	4	120	226	14	1,283
東温市	**97**	**10**	**93**	**13**	**32**	**291**

注）中国四国農政局愛媛農政事務所編集　愛媛農林水産統計協会発行　愛媛農林水産統計年報（平成18～19年）より清川的作成

表3　おもな野菜の収穫量と出荷量の推移

	平成16年		平成17年		平成18年	
	収穫量（t）	出荷量（t）	収穫量（t）	出荷量（t）	収穫量（t）	出荷量（t）
はくさい	134	46	144	111	166	132
キャベツ	437	284	597	534	632	580
ほうれん草	179	125	125	104	119	99
しゅんぎく	－	－	27	20	26	19
ブロッコリー	96	80	111	97	128	115
ね　ぎ	153	106	165	133	161	130
たまねぎ	1,780	1,550	1,600	1,470	1,750	1,630
きゅうり	134	81	180	148	183	153
かぼちゃ	36	4	20	8	16	4
な　す	206	113	216	157	167	109
トマト	176	121	195	154	178	141
だいこん	403	179	249	160	238	156
ばれいしょ	245	63	194	46	164	49
さといも	148	32	116	39	100	42
いちご	298	263	297	279	－	－
すいか	115	64	127	116	129	119

注）　農林水産省「農林水産関係市町村データ」より清川的作成

ないと発芽しない。そこで、この頃から短期株冷[1)]や無冷促成[2)]といった栽培方法も開始され、イチゴ栽培面積が急上昇した。それは、栽培期間が長くなり、多くの労力が必要な収穫時期が分散化されたことに要因がある。

昭和55年（1980）頃からは、山あげ促成栽培[3)]が開始された。これは、８月下旬から苗を涼しい高原地域で約１か月間仮植し、９月下旬頃にハウス内に定植する栽培方法である。山あげが開始された当初は、大野ヶ原や五段高原へ苗を運んでいたが、のちに黒森峠や石鎚山の土小屋付近で行うようになった。しかし現在では、予冷庫の技術が向上したため、苗の山あげは行われていない。

表4　イチゴ栽培の流れ

月	時　期	作　業　内　容
4月	育苗	前年より仮植していた親株（無病株）から育苗する。親株から伸びるつるの先端をポットにさすと苗になる。育苗した苗と新たに購入した苗で定植の準備を行う。
5月		
6月		
7月		
8月		
9月	定植	しっかりと活着するまでの灌水がポイント。炭そ病などの感染予防対策が必要。
10月		
11月	開花・着果	自然界や営利栽培では受粉はミツバチなどが、温室では人工受粉をさせる。
12月	収穫	受粉して約１か月、大きくなって白い実が先の方から赤く色付く。イチゴの生育を促進するため、「地中暖房」を使用する。赤くなって2～3日、よい香りがするころが採り頃である。つぎつぎと花芽分化がつづくのでゴミ汁液肥を薄めて定期的に与える。収穫も終わりに近づくと「子苗（ランナー）」が出る。
1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月	次年度準備	生育状態のいい「子苗」を抜粋して苗にする。

注）　聞き取りより清川的作成

写真4　高設栽培のハウス内①

注）平成20年８月　清川的撮影

露地栽培では、腰を曲げての作業や鍬を使う畝たてが重労働である。そのため、近年の栽培農家の高齢化にともない、作業姿勢の改善が図れる高設栽培が導入されつつある（写真４・５）。

イチゴ栽培農家は、異なる作型のうち、二つから三つを組み合わせて栽培を行っている。イチゴの価格は、11～12月頃がもっとも高値で取引される。この時期に出荷を合わせるためには、定植の時期や灌水のタイミング、暖房による温度管理を適切にコントロールし

写真５　高設栽培のハウス内②
注）平成20年８月　清川的撮影

写真７　ハウス内のスプリンクラー
注）平成20年８月　清川的撮影

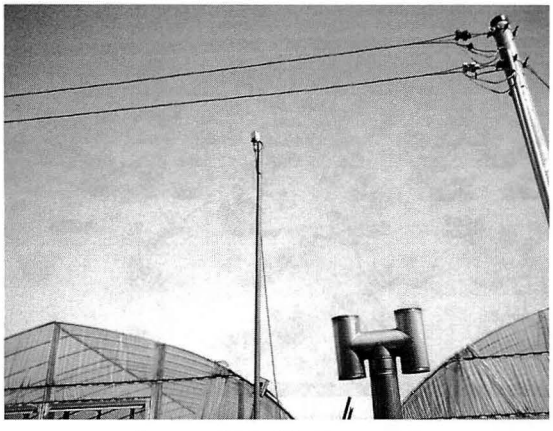


写真６　日射を感知するセンサー
注）平成20年８月　清川的撮影

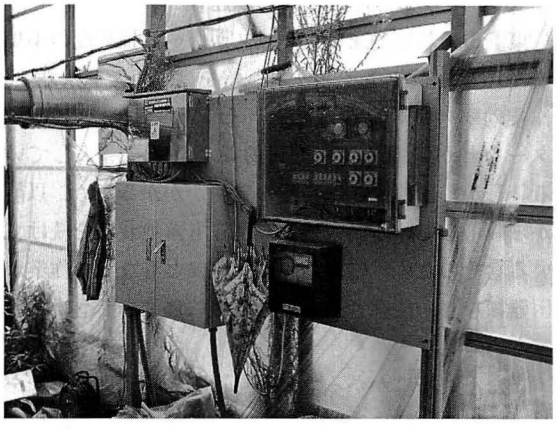


写真８　ハウス内を管理するコンピューター
注）平成20年８月　清川的撮影

なければならない。そのため、現在ではセンサーが日射を感知して灌水する設備（写真６・７）や、ハウス内の温度をコンピューターで調整する設備（写真８・９）などが完備されたハウスも増えている。

(イ)　出荷先や栽培品種の推移

農家で栽培されたイチゴは、JAが引き取り、松山市場へのみ出荷されていた。しかし、生産量の増加にともない、京阪神方面や広島など市場が開拓され、多いときには約８割を県外市場に出荷していた。現在では、松山市場と京阪神へ約５割ずつ出荷されている。このような出荷先の決定はJAが主導で行っている。これは、農家単独での出荷では数量が少ないため、他府県との競争に負けてしまう。そこで、各市場からの需要量にあわせて栽培計画を立て、各農家に対して作

写真９　ハウス内の温度を調節する暖房装置
注）平成20年８月　清川的撮影

付面積や出荷量を指導し、栽培されたイチゴをJAが一括して引き受けている。そのため、東温市の農家では、安心してイチゴ栽培をしていくことができる。

栽培されているイチゴの品種は、５、６年前までは酸味が少なく大粒の「とよのか」であった。当時の主流は、西の「とよのか」と東の「女峰」の２品種であった。近年は、品種改良やブランド化が進み、多くの品種が流通している。また消費者も、より大きくて甘い品種を好むようになり、東温市の栽培農家もJA主導のもとで「とよのか」より大玉で収量が多くなる「紅ほっぺ」に移行した。そのため、県内市場では単価を維持することができているが、県外市場では福岡や栃木など大量収穫できる地域におされているのが現状である。

㈣　イチゴ栽培の今後の課題

東温市の栽培農家は、ハウスが２～３棟程度の小規模経営である。新しくイチゴ栽培をはじめた農家では、作業効率の良い高設栽培と、センサーやコンピューターなどが完備された近代的なハウスを導入している。しかし、導入には高額の費用がかかるため、以前から栽培している農家では、現在も露地栽培を続けている。そのため、生産者の高齢化にともなって作業が困難になり、後継者もいないために農業を断念する農家もある。

また、栽培にかかるコストも近年の物価高の影響を受けている。特に、原油高による影響で肥料や段ボール、カップは約６割値段が高騰し、経費の負担が増えた。さらに、ハウスの暖房に使用する重油や灯油も値上がり、今年は設定温度を約２℃下げなければならない（写真10）。また、高設栽培で使用するベッド（写真11）も耐久年数が６～７年と言われていたが、実際には２～３年しかもたず、買い換えが必要であるなど出費は増大する一方である。しかし、売値は現状維持であるため栽培農家は経済的に苦しい。

最近では、インターネット販売や産直市場、観光農園などによって個人で販売ルートを開拓している農家もみられる。しかし、「インターネット販売などをするには、個人経営の農家では人手や農地が足りない。」とか、「質の良いイチゴは売れるが、商品にできない劣悪品は処分するしかないため採算がとれない。」という声もある。

これら多くの問題を解決するために、さまざまな取り組みが行われている。その一つは、地元企業と提携して、イチゴを使ったケーキや和洋菓子などの加工品の商品開発・販売である。東温産のイチゴのPRや商品のブランド化をはかり、安定した需要による生産量の確保と栽培農家の経営維持・増加の効果が期待されている。

写真10　重油と灯油の貯蔵タンク

注）平成20年８月　清川的撮影

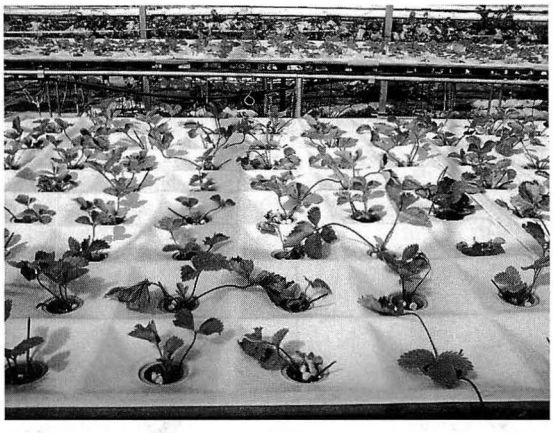


写真11　高設栽培で使用するベッドに仮植されている苗

注）平成20年８月　清川的撮影

表５　東温市産のイチゴを使用した商品

企業名	商　品　例
㈱母恵夢	シュークリーム・オムレット・紅ほっぺシャーベット・母の日限定「マーマン」
shiffon	イチゴシフォンケーキ
門田商店	イチゴアイスクリーム

注）聞き取りより清川的作成

(3) ケール栽培と商品ブランド化

近年の東温市の農家では、ブロッコリーからケール栽培に変える農家が増加してきている。ケールは、地中海沿岸原産のアブラナ科の緑黄色野菜である。非常に栄養価が高く、病害虫や雪にも強いため一年中栽培できるという特色がある。ヨーロッパでは、古くからケールをロールキャベツ風に料理して食べられている。日本では、江戸時代に入ってきており、健康食品飲料の青汁として親しまれている。そのため、スーパーなどで野菜として販売されているのはあまり見かけない。

このケール栽培が、東温市で増加している背景には、則之内に本社をかまえる遠赤青汁株式会社の存在がある。同社は、自社でケールを育て、加工し、百貨店や電話、インターネットなどを通じて直接販売をする農工商一貫会社である。また、地域の農家と栽培契約を結び、愛媛県産、有機栽培100％の無添加にこだわりをもった商品作りを行っている。さらに、安心した商品作りのためには、まず土作りからと考え、県内でも深刻化している放置農園に目を付けた。そして、土地を開墾し、石を取り除き、堆肥を入れて有機圃場の整備から始める徹底ぶりである。同社のこのような取組に、これからの農業のあり方のヒントがあると考え、同社長に話を聞いた。

きっかけは、社長自らが大病を経験し、薬の副作用に苦しんだことをもとに「医食同源」の考えを実践していくことに始まった。また、農業従事者の高齢化にともない、放置され荒廃した農地を再生させ、元気な地域作りに貢献したいと考え、現在のような土作りから始める会社経営に至った。さらに、いずれは世界に進出して他国と競争したいという壮大な構想を掲げての起業であった。

そのために必要であったのが、「どこにもない独自のアイデアと本物志向」に基づいたブランド化戦略である。まず商品に「徹底した有機栽培、東温市特産品マーク、有機JAS認定、製法特許、大学との共同研究したデータ」という５つの付加価値を与え、百貨店で地道に「安心・安全・栄養価を追求した有機栽培青汁」として商品PRを行った。しかし、この徹底した取り組みでは、生産量に限界があるため、スーパーやドラッグストアなど量販店での販売を一切行えない。そこで、インターネットによる宣伝・販売を最大限に活用した。会社のHPには、荒れ地の開墾から石拾い、施肥などの土作りをしている写真を掲載し、「どこにもない」特色を全面に押し出している。

その宣伝・販売方法の成果として、愛媛県では初めて２年連続して経済産業省から「IT経営百選」の表彰を受けている。また、５年後、10年後を見据えて、いち早く日本のみならず、中国やアメリカ、カナダなど海外も含めて商標登録もしている。

これらの取組も、すぐには成果として現れなかったが、近年の食品偽装や農薬汚染など食の安全性が深刻な問題となったことで、現在一躍脚光を浴びるようになった。ここに至るまでは、いくつもの高いハードルを乗り越え、また契約農家や地域、自治体との信頼を築きあげながらの挑戦であった。同社では、現在も行政からの支援を受けながら、新たな取組に着手しているそうである。

今後の農業経営においては、農家と地元企業、農協・行政などが、それぞれの視点から計画や意見を協議して、東温市に適した農作物から「ここにしかない商品」というブランド化が求められる。それには、まだだれもが目をつけていない、地域の財産の発掘であるように思われる。

5　花き・花木

(1) 概要

東温市は、県内最大の市場である松山市に近いという地理的条件に恵まれ、小規模な経営ではあるが、古くから花き・花木の栽培が行われてきた。品目としては、キク、バラ、カーネーション、ユリなど多岐にわたっている。

近年、その需要はさらに多彩な種類と時期を問わず求められるようになった。そのような要望に対応するために、多種多様な切り花や苗物の導入が進んできた。現在のおもな品目は、テッポウユリ、キク、シキミなどである。

また東温市には、愛媛県農林水産研究所農業研究部花き研究指導室（旧花き総合指導センター）や愛媛県林業技術センター緑化センター（旧愛媛県緑化センター）があり、生産者や指導者に対する生産、流通、

経営、消費等に関する研修や実習、相談などが容易であることも特徴の一つである。

(2) 品目別花き・花木生産の推移

(ア) キク

東温市のキク栽培の歴史は古く、戦後の食糧危機が回避されて間もない昭和25年（1950）頃から始まった。南吉井地区では、花の将来性に着目をし、水田に露地菊を栽培するようになった。当初は、まだまだ花き栽培への関心は低かったが、生活の安定にともない需要が増えてくるようになった。需要の増大にともない、産地の育成と品質の向上が図られ、ビニールハウス栽培や電照菊などが次々と導入されるようになった。こうしてキク栽培は、県下有数の生産量を出荷するようになり、旧重信町では町花として指定された（表6）。

しかし花き栽培は、高度な技術と管理体制が求められ、他の地域との競争に勝つために、さまざまな設備投資が必要で多額の費用がかかる。栽培当初は、キクも高値で取り引きがされていたが、近年消費の低迷や大産地との競合、外国からの輸入により、小規模経営で栽培している東温市では、生産の縮小が見られる。

(イ) シキミ

シキミは、日本では本州の関東以西、四国、九州、沖縄などに自生していた。東温市でのシキミの栽培は、旧川内町の山間部で林業を営んでいた人々が、高知県の吾川や西土佐から栽培方法を学んできたことから始まった。愛媛県では、墓前や仏前に生花ではなく、シキミの枝葉を添えたり、葉で末期の水を取るのに用いられたりしている。

シキミは、日当たりが良い緩やかな斜面地（写真12）か、水はけの良い平坦地（写真13）が栽培に適している。そのため、東温市の山間部における換金作物として、普及するようになった（表7）。

植え付け時期は、表8のように4月の生長開始頃がもっとも適しており、秋頃でも可能である。通常は6～7年で最初の採取ができるが、低台仕立て（写真14）にすると早いものは5年で採取が可能になる。価格は、「盆前、彼岸前に出荷すると価格がよい」といわれているが、需要にともなって供給量も増えるため、1年を通じて安定傾向である。またシキミは、仏事に風習として用いられるため、今後も安定した需要が見込まれる。また、大市場に近いため、栽培面積を増や

表6　東温市（旧重信町および旧川内町）のキク栽培作付面積および出荷量

	作付面積（a）	生産数量（千本）	出荷数量（千本）	生産額（千円）	栽培農家戸数（戸）
1989年	870	3,380		79,500	75
	358	1,308		56,122	25
1990年	830	3,040		93,500	75
	358	1,308		56,122	25
1991年	635	2,290		93,500	75
	358	1,308		56,122	25
1992年	640	2,295		60,050	70
	605	1,630		55,980	24
1993年	650	2,088		67,700	65
	560	1,600		55,000	27
1994年	660	2,030		66,400	66
	540	4,550		60,000	20
1995年	660	2,030		75,520	66
	550	1,925		55,000	20
1996年	620	2,100		72,000	66
	450	1,350		53,000	15
1997年	150	500	480	17,400	20
	150	403	403	17,000	15
1998年	270	1,080	1,080	24,300	17
	400	1,230	1,230	43,000	13
1999年	270	1,080	1,080	24,752	17
	500	1,300	1,300	45,000	13
2000年	270	1,080	1,080	24,752	17
	350	1,380	1,000	36,000	11
2001年	265	707	707	18,300	17
	350	1,050	1,050	33,100	6
2002年	265	707	707	18,300	17
	275	4,378	4,378	29,312	8
2003年	265	707	707	18,300	17
	250	702	702	20,122	17
2004年	595	1,409	1,409	38,422	25
2005年	595	1,409	1,409	38,422	25
2006年	395	775	389	26,600	13

注1）1989年～2003年　上段：旧重信町　下段：旧川内町
　　2004年　市町村合併により東温市となる
注2）愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸部「花き類生産統計」より清川的作成

表7　東温市のシキミ作付面積と生産量の変化

	作付面積（a）	生産数量（千本）	出荷数量（千本）	生産額（千円）	栽培農家戸数（戸）
2001年	5,000	190	190	56,075	90
2002年	7,000	208	208	56,928	94
2003年	7,000	244	244	65,309	74
2004年	7,000	244	244	65,309	74
2005年	7,000	244	244	65,309	74
2006年	7,000	300	256	71,801	80

注）愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸部「花き類生産統計」より清川的作成

写真12　斜面に見られるシキミ栽培（河之内地区）

注）平成21年１月　清川的撮影

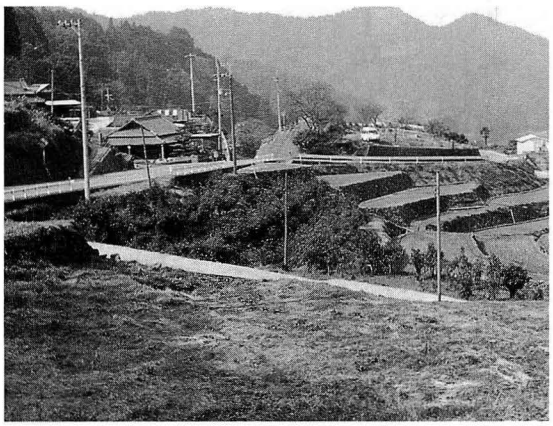


写真13　平坦地でのシキミ栽培（河之内地区）

注）平成21年１月　清川的撮影

写真14　低台仕立てで栽培されているシキミ（河之内地区）

注）平成21年１月　清川的撮影

表８　シキミ栽培作業カレンダー

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
開花期			■	■								
剪定	■	■				■	■					
植え付け				■					■			

注）京都けえ園芸企画舎「ヤサシイエンゲイ」ホームページより清川的作成

して経営を拡大することも可能である。

しかし、栽培面積の拡大にともなってクスアナアキゾウムシなど害虫による被害が増大する問題や、困難な作業のため生産者が高齢化し、後継者がいないのが今後の課題である。

㈦　シンテッポウユリ

愛媛県のユリ栽培は、切り花の中ではバラに次ぐ第２位の品目である。その中で、シンテッポウユリは種子から１年で開花するユリである。これは、琉球原産のテッポウユリと台湾原産のタカサゴユリとを交配してできた品種である。

東温市の旧川内町川上地区では、20年近く前からテッポウユリ栽培を行っており、県内有数の産地である（表９）。これは、水田転作作目であることに加え、農業従事者の女性化や高齢化対策の一つとして栽培が増加したことによる。また他のユリ栽培は、種が取れても開花まで３、４年かかってしまうが、シンテッポウユリは自家受粉で一株から種が取れ、１年で開花させることができるという特性も普及の要因の一つとなった。

シンテッポウユリの開花時期は、７～10月頃である。

表９　東温市のシンテッポウユリ栽培の推移

	作付面積（ａ）	生産数量（千本）	出荷数量（千本）	生産額（千円）	栽培農家戸数（戸）
1996年	160	365	－	26,000	30
1997年	170	360	360	32,000	27
1998年	－	－	－	－	－
1999年	240	446	446	32,360	25
2000年	200	370	370	28,900	24
2001年	200	350	338	31,700	21
2002年	200	330	330	31,236	21
2003年	250	400	400	38,874	21
2004年	250	600	597	38,100	26
2005年	250	600	597	38,100	26
2006年	350	1,000	853	77,323	30

注１）2003年以前のデータは、旧川内町におけるものである。
注２）愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸部「花き類生産統計」より清川的作成

表10　東温市内の農産物直売所の状況（平成19年度）

	ふるさと交流館さくら市場	JAグリーンフレッシュ市	ふれあい市みうち	松山生協川上マーケット
経営主体	東温市	JA全農えひめ	JAえひめ中央	松山生協
出荷者数（人）	133	419	約100	約150
売り上げ（千円）	52,670	345,970	約20,000	22,000
年間来客数（人）	——	447,824	約17,000	約46,000
特　　徴	市営温泉施設「さくらの湯」に併設された直売所。市内産の新鮮な農産物や花き類・手づくり惣菜・パン・手工芸品などを即売している。市営であり、東温市内の農家のみ出荷できる。	生産者が部会を組織し、旬の野菜や果物、漬物や加工食品などを常時委託販売している。東温市を中心に、松山市・砥部町などの生産者約400名が出荷。	山里の野菜・果物、おふくろの味の手作り加工品、工芸品や有機野菜、また三内米も販売しており、地域色豊かな直売所。河之内・則之内・井内地区の生産者が出荷。	地元農家産の新鮮な野菜や花苗、素朴な漬物類、ばら寿司など加工品が盛りだくさん。また、その他食料品や鮮魚も販売。

注）東温市役所提供の資料及びJAグリーンえひめ提供の資料より米澤俊二作成

切り花は仏前のお供えとしても利用されることから、イチゴのハウスで夏作物として、出荷時期を７～12月頃まで拡大する出荷調整を行っている。また、種子から球根を育苗して出荷するケースも見られる。

近年は、花の色が白色のみで用途が限られることから、有色系の品種育成が愛媛県内の研究機関で進められている。（清川　的）

６　農産物直売所

近年の「地産地消」の高まりとともに、東温市内には現在あわせて４か所の農産物直売所がある（表10）。その中には年間販売額が３億円を超える直売所もある。４か所の直売所の総売上額は4.4億円であり、東温市の農業総産出額31.6億円と比較しても、農業及び農家の所得に占める直売所のウエイトはかなりの割合を占めるようになってきている。経営主体は、東温市の直営、JA全農えひめ、JAえひめ中央、松山生協と別々であり、売上額も約2,000万円から約３億5,000万円とさまざまであるが、近年の「地産地消」ブームとともに、消費者の“低価格、新鮮、安全”志向によりどの直売所も売り上げを伸ばしてきている。販売品目や売上金額等の資料が得られた「さくら市」と「JAグリーンえひめフレッシュ市」の２カ所の農産物直売所を中心に報告する。

(1)　さくら市

川内地区北方に平成10年（1998）にオープンした東温市営のふるさと交流館「さくらの湯」に平成15年に併設された直売所である。市営ということもあり、出荷者は東温市内の農家に限られており、平成19年度の出荷者数は133名となっている。平成19年の年間売上額は5,267万円である。売り上げ上位ベスト10（表11）では、農産物加工品が最も多く、次いで農産物、手工芸品・その他となっている。農産物加工品はお弁当や惣菜、巻き寿司、いなり寿司などが多く、農産物とし

写真15　買い物客でにぎわう「さくら市」

注）平成20年８月　米澤俊二撮影

表11　さくら市売り上げベスト10
（平成19年７月１日～平成20年６月15日）

	農産物		農産物加工品		手工芸品・その他	
	商品	金額（円）	商品	金額（円）	商品	金額（円）
1	イチゴ	3,646,360	お弁当	3,391,680	布小物	288,450
2	シキミ	2,194,530	惣菜	3,176,000	布袋	160,910
3	米	1,800,660	巻き寿司	2,512,530	竹炭	110,200
4	花の苗	1,644,970	パン	1,772,170	炭	81,400
5	ミカン	846,090	つき餅	1,265,010	EM石けん	74,610
6	ほうれん草	715,700	いなり寿司	987,340	温泉の素	72,750
7	たまご	701,960	ひき餅	982,000	帽子	46,800
8	タマネギ	671,762	ちらし寿司	886,410	ボカシ	45,500
9	トマト	644,100	炊き込み	726,370	竹酢液	39,000
10	タケノコ	638,670	おにぎり	562,300	かご	38,150
	合　計	13,504,802	合　計	16,261,810	合　計	957,770

注）さくら市の提供資料より

ては南吉井地区・北吉井地区・拝志地区で栽培がさかんなイチゴ、三内地区で栽培が多いシキミなどが上位にきている。その他に東温市内で収穫されるみかんや野菜類が上位を占めている。購買客は地域住民とともに温泉に併設されているということで、温泉客も多い。

(2) JAグリーンえひめフレッシュ市

都市近郊農村地帯における「営農資材店舗」と「農産物直売所」を併設した店舗として東温市北野田に平成11年（1999）12月にオープンした。出荷者数・売上金額ともに東温市内の農産物直売所では最大である。商品別売上額をみると、加工品が最も多く、次いでキュウリやトマトの果菜類やキャベツやほうれん草などの葉菜類、切り花類と続く（表12）。聞き取りによれば、加工品の中で評判がよいものとして、巻き寿司などのご飯もの、お餅、おはぎ、「いちご大福」、東温産の玉ねぎを原料とした「玉ねぎドレッシング」、さらには東温市が推進している「農産物等ブランド化事業」で力が入れられているはだか麦を原料とした「はだかんぼう麦茶」などがあげられる。

「フレッシュ市」の特徴として、参加する農家が部会を作り、JAグリーンえひめの開催する各種野菜の

表12 JAグリーンえひめフレッシュ市商品別売り上げ表
（平成19年４月１日～平成20年３月31日）

商品・分類名	売上金額（円）
加　工　品	92,598,570
果　菜　類	39,419,683
葉　菜　類	33,164,875
切り花類	29,938,009
根　菜　類	22,757,480
シキビ・サカキ類	19,120,036
果菜果実類	18,043,510
落葉果樹類	17,451,010
種　苗　類	13,419,620
温州ミカン類	10,196,930
い　も　類	9,609,090
中晩柑類	7,668,400
きのこ類	4,788,028
漬　物　類	3,836,460
米　麦　類	2,622,140
鉢　物　類	2,220,530
豆　　類	2,073,360
卵　　類	1,396,140
農産乾物計	614,610
工　芸　品	388,740
枝　物　類	201,220
乾　物　類	1,650
合　　計	331,530,091

注）JAグリーンえひめ提供資料より

写真16 JAグリーンえひめ
注）平成20年８月　米澤俊二撮影

栽培講習会や加工品・漬け物等の衛生表示研修会、農薬安全使用講習会などの講習会に積極的に参加している点があげられる。消費者に新鮮かつ安全・安心さらには低価格の商品を提供するために各会員が熱心である。また、当番制で会員が店に来て、客の意見を聞いて商品開発に活かすなどの取組もしている。さらに、れんげ祭り、ジャガイモ掘りやサツマイモ掘り、フレッシュ市祭りなどのイベントを開催し、地域との交流も大切にしている。以上のような取組の結果、開店以来10年を経て「フレッシュ市」が評判を呼び、東温市内の直売所では最大の売り上げをあげるまでになっている。

聞き取りによると、将来的には加工施設を作る構想があるそうである。そこで会員が加工品を作り、付加価値を高めたものをさらに増やしたと考えている。また、加工施設は技術の伝承という意味においても重要であり、会員の高齢化が進む中で、若い会員への加工品作りの技術の伝承を進めたいとも考えているようである。

(3) 農産物直売所の現状と課題

東温市内の４つの農産物直売所ともに、運営は自主運営に頼っている部分が大きい。出荷農家が各自商品を袋詰めし、出荷、陳列、売れ残った商品の引き取りまで行うという方式である。JAグリーンえひめ提供の資料（図17）によれば、流通コストが大幅に削減でき、消費者価格の引き下げ及び生産者価格の上昇がかなり期待できる。生産者にとっては所得の上昇となり、

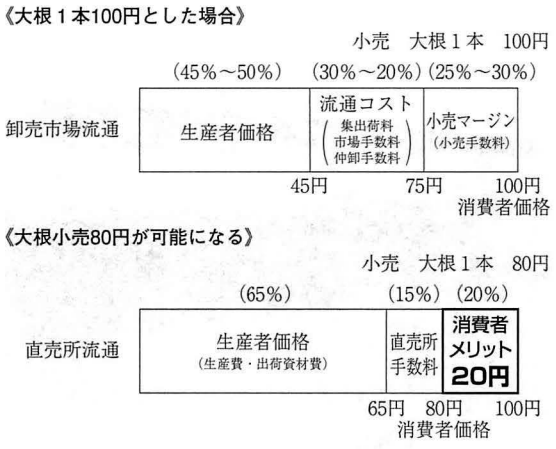


図17　卸売市場流通と直売所流通の比較

注）JAグリーンえひめ提供資料より

消費者にとっては低価格で購入できるというメリットが、近年の直売所の盛況ぶりにつながっている。

また、近年は平成20年（2008）の中国製冷凍ギョーザ中毒事件など食品をめぐる事件・事故が相次ぎ、消費者の農産物をはじめとする食品への安全・安心志向が強くなっている。このような状況の中、「地産地消の拠点」として位置づけられる農産物直売所の役割はきわめて大きい。商品の包装袋には生産者の名前や写真が記載されるなど、生産者と消費者の「顔が見え、話ができる」関係を基本とした直売所は、“新鮮で安全な”商品を提供する場として大変重要となってきており、今後も重要な存在である。

消費者・生産者にとっても上記のようなメリットがあり、近年の「地産地消」ブームも手伝って直売所は活気を呈しているが、いくつかの課題をあげてみる。

まず第１に、農産物は時期・季節により生産品目・出荷量が変化するものである。「地産地消」とは、流域、平野・盆地といった比較的狭い地域内での流通を基本としているため、時期によっては量や品揃えに過不足が生じる。安定した商品の供給という点では県域レベルでの直売所同士の連携なども必要であろう。その点については、JA全農えひめは平成18年11月に「JAファーマーズ・マーケットネットワーク協議会」を設立し、連携を強化していく構想を持っている。また、品揃えについては１日の中でも商品がある時間帯とない時間がはっきりと分かれている。午後に訪れた購入客はあまり商品が無く、残り物を買って帰るという現状がある。近年、直売所の多くは、コンピュータの導入により、携帯電話やパソコンを利用して出荷者が出荷した商品の販売状況をリアルタイムで把握することができるようになっている。出荷者は自分の出荷した商品が品薄となり、“売れそうだ”と判断したときは、さらに出荷をすることもできる。そのようなシステムがあるにもかかわらず、午後の品不足は続いている。午後の出荷者・商品の確保が急務であり、今後の直売所のさらなる発展のためには解決すべき大きな課題であろう。

第２に、高齢化に伴う問題がある。現在の出荷者の多くが60歳以上の高齢者である。今後直売所への商品の出荷量が維持できるかどうかも課題である。また、直売所の売り上げの中で加工品の占める割合が高い。加工品は付加価値を付けているため高収益をあげることができる商品であり各直売所とも力を入れているが、高齢化により加工品づくりの技術が失われていくことも懸念される。技術の伝承のための方策、例えば勉強会や講習会なども必要であろう。

最後に、JAグリーンえひめが平成16年に行った消費者へのアンケート調査の要望事項のおもなものをあげ、今後の直売所の方向性を探ってみたい。

《消費者の要望事項》
- ○土･日の人の多い時間帯はレジを増やして欲しい。
- ○開店時間の早期化、閉店時間の延長をして欲しい。
- ○時間帯により品物がなくなる。特に午後は品物を選べない。品切れを起こさないよう工夫をして欲しい。
- ○カレー粉など食料品などを揃えてもらいたい。さらにスーパーに買い物に行かなくて良いように「ワンストップショッピング」のできる店にしてもらいたい。
- ○品物がバラバラに並べられている（生産者ごと）。買いやすいように商品ごとに並べて欲しい。
- ○農薬等の使用状況をもっとわかりやすく告知して欲しい。
- ○「ポイントカードシステム」はできないか。店に来る楽しみが増える。
- ○駐車場を拡大して欲しい。

アンケートにみられる消費者の要望はかなり個人的であるが具体的でもある。今後の直売所のさらなる発

展は、消費者ニーズにどれだけ対応していけるかに大きくかかっている。

7　農産物等のブランド化について

平成18年度より東温市は、消費者に信頼され・支持・評価される「東温ブランド」をめざして、意欲ある生産者や製造者を重点的に支援し、ブランド化を推進していく取り組みを実施している。ブランド化の核となる農産物は東温市で生産の多い「はだか麦」・「もち麦」やその加工品である。東温市内の業者等の商品開発の支援を行い、現在はもち麦を原料としたパンやクッキーやせんべい、はだか麦を原料としたとら巻きや饅頭や味噌などを製造するまでにいたっている。販売は市営のふるさと交流館「さくらの湯」などで販売し、PRも行っている。平成20年（2008）４月には「とうおんブランドまるごとパック」としてフジグラン重信で限定300パックであるが、販売をするまでになった。また、平成20年４月に県独自の規制緩和で地域活性化を支援するえひめ夢特区に認定された「とうおんブランド“どぶろく特区”」ではとうおんブランドの“どぶろく”が平成21年の１月に完成した[4]。さらに平成21年の２月末には、いよてつ高島屋で「とうおんブランドフェア」も開催され、市のプライベートブランドとして大々的にPRするなど、ブランド化に向けた取組が始まっている。　（米澤　俊二）

8　林業

(1)　東温市の林業

(ア)　概要

平成16年の東温市の林野率は76.3％で、愛媛県の70.6％に比べ少し高い。しかし、平成14年の経済活動別市町村内生産額の林業の割合は、東温市では0.2％であり、平成17年の産業別就業者数における林業の割合は、市全体の0.1％である。平成16年の産業別事業所数及び従業者数では、林業の事業所はない。林野率は高いが産業としての林業はあまり盛んとは言えない。（表13・14）

平成15年のシイタケ生産量は、乾シイタケ340kg、生シイタケ200kgで愛媛県全体のそれぞれ0.2％・0.04％で生産量は少ない。

表13　保有山林面積規模別経営体数

（単位：経営体）

保有山林なし	3ha～5ha	5ha～10ha	10ha～20ha	20ha～30ha	30ha～50ha	50ha～100ha	100ha～500ha	計
1	67	54	25	6	5	3	1	162

注）東温市統計書　平成18年度版より

表14　林業事業収入規模別経営体数

（単位：経営体）

収入なし	50万円未満	50万円～100万円	100万円～200万円	200万円以上	計
152	3	3	3	1	162

注）東温市統計書　平成18年度版より

(イ)　規模別経営体数

100～500ha所有者は東温市以外のK産業であり、50～100haの所有者３人は東温市在住である。75％は３～５haの所有者である（表13）。

平成15年の素材生産量は13,000㎥で愛媛県全体の3.1％であるが、平成20年に素材を生産しているのは東温市以外のK産業だけである。94％の経営体は収入なしである（表14）。

(ウ)　東温市在住F氏の林業経営

1.5haの農地を所有し農業中心の経営である。

所有森林面積は150haあるが80haは高知県宿毛市にある。緑資源公団から購入したが現在は作業をしていない。東温市にある70haには40～60年生のスギ・ヒノキを植えているが最近は作業をしていない。平成20年に林業作業をした日はない。

平成20年に東温市内で森林作業をしているのはK産業だけである。

(エ)　松山流域森林組合

松山流域森林組合の作業班約15名が東温市の山林で作業をしているが、切り捨て間伐であり素材生産はしていない。東温市在住の作業員が約10名いる。

(2)　東温市におけるK産業の施行

(ア)　東温市内の山林所有面積約300ha

立木を売るとき土地も一緒に売却する山林所有者が多いので所有面積が広くなった。

(イ)　機械化

K産業は３グループの作業班が県内等で活動してお

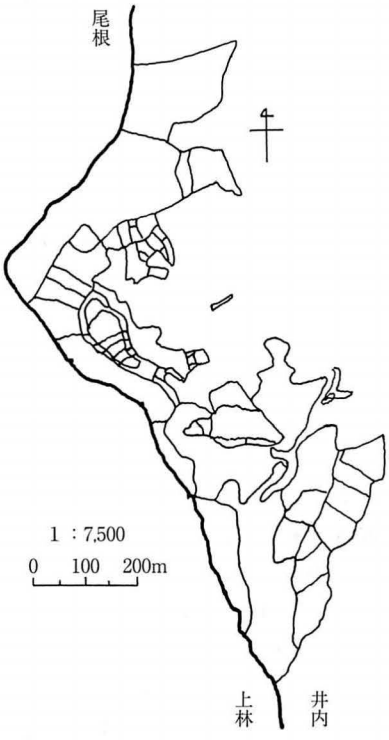


図18 K産業の施行範囲見取り図
注）国土基本図より安藤哲次作成

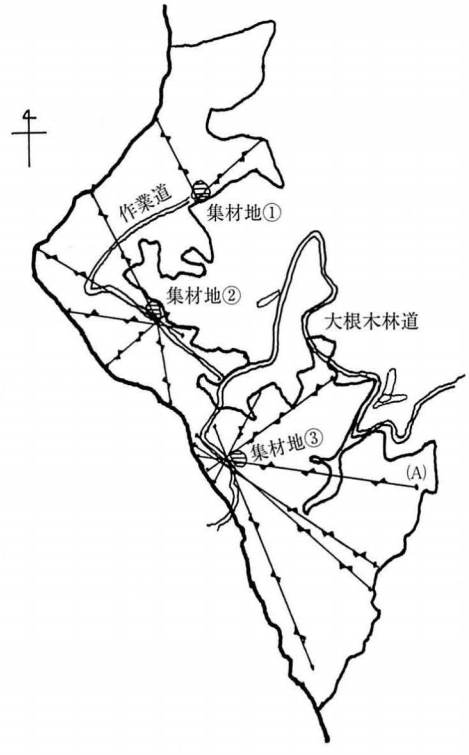


図19 架線集材変遷図
注）聞き取りより安藤哲次作成

り、東温市では1グループが作業している。1グループ4人で構成し、機械化を進め少人数で作業している。〔平成20年12月に使用していた機械〕

伐　　採 － チェーンソー
集　　材 － 架線集材
製　　材 － プロセッサー
　　（枝払いと玉切りを同時に行う）
積み込み － クラップル
　　（丸太をつかんでトラックに積む）
搬　　出 － トラック（6トン）

(ウ) 東温市大根木事業所

東温市上林と井内の間にある塩が森の南方の井内側の山である。

施行面積は約20haであるが，図18のように1筆の面積が小規模で74筆ある。所有者も15人である。大部分は立木と土地をまとめてK産業が購入しているのでこの範囲の大部分はK産業の山林である。元の所有者が立木を売る時、土地も一緒に売ることを求めてくるのでまとめて購入している。一部、立木だけを売り土地は売らない所有者もいる。

このような小規模所有者の山林は個人で施行するには機械化が進まず採算がとれない。結果として手入れのできていない放置森林が増えている。

この施行地の樹種は40～50年生のスギが中心で建築材や集成材として出している。出荷先は松山原木市場である。市場へ出荷される価格は1㎥あたり（約40年生の木2本）スギ9,000～1万円、ヒノキ（平均）18,000円である。

伐採・集材作業は平成19年～21年、植林は平成20年～22年の予定である。

伐採・集材作業は4人で行っている。架線1スパンで最初に4人で伐採し、途中から集材･搬出を始める。集材・搬出は、玉がけ（倒した丸太を枝の付いたままワイヤーにかける）1人、ウインチ操作1人、プロセッサーのオペレーター1人、チェーンソーで残っている木の伐採1人、クラップルでトラックに積み市場へ運ぶ1人（4人の内の1人が行うか増員する）。平成20年12月に取材した時は5人で作業していた。トラック

は１日４～５回搬出している。５人の連携がとれていて作業はスムーズに行われていた。玉がけをした枝の付いたままの丸太をワイヤーで集材所に運び、プロセッサーで枝を落とし玉切りをする。玉切りされた丸太をクラップルでトラックに積み市場へ運ぶ。１人は残っている木を伐採している。この一連の作業が効率よく流れているので、ムダが少なく集材地に丸太はあまり残されない。伐採地で枝を落とさないのでその作業がなく伐採地に枝などが残されていない。後の植林の時、地ごしらえ（植林の時の整地）の手間が少なくて済む。

伐採・集材はＫ産業の作業員が行っており東温市の人はいない。地ごしらえ、植林、下刈り（５年間くらい行う）は地元東温市の人を雇っている。２～３の班があり１班３～４人で構成されている。Ｋ産業の方針で地域の活性化のため地元の人を雇っている。

前述の統計で東温市の山林所有者が素材生産をしていないのに生産量があるのは東温市以外のＫ産業が生産しているから。東温市の山林所有者がほとんど山林作業をしていないのに、産業別就業者で林業就業者がいるのは、Ｋ産業の地元作業員と松山流域森林組合の地元作業員がいるからである。

図19は集材地①、②、③の順に作業が進み、平成20年12月現在は③である。現在、架線は集材地③と㋐の間だけが架けられている。トラックによる搬出は大根木林道と、集材地①、②へＫ産業が開設した作業道である。土地も購入しているから作業道開設もスムーズである（写真17～22）。

現場を見ると全伐しているので、全伐を好まない人からみると疑問に思うかもしれないが、伐採地にすぐに植林し下刈りなどの手入れを続けている。植林は生産材としてスギ・ヒノキの針葉樹を70%、環境材としてケヤキなど広葉樹を30%植えている。今後の木材の生産と環境を考えた森林の育成に取り組んでいる。間伐で集材する方法もあるが、間伐では架線集材が難しく経費も倍以上かかる。特に、大根木のように所有形態が小規模で細分化している山林は取組が難しい。現在の安い材価では採算がとれなく山林は放置され荒れていく。山林所有者が個人で自分の山から間伐材を搬出し、自分の人件費を計上しなければできるかもしれない。

広い山林を入手し、機械化を進め少人数で効率よく

写真17　図19の㋐より集材地③を望む

注１）右上が集材地③、左上が伐採している所
注２）平成20年12月　安藤哲次撮影

写真18　架線集材

注１）枝を付けたまま集材している
注２）平成20年12月　安藤哲次撮影

写真19　集材地③

注１）左よりトラック、グラップル、ウインチ、プロセッサー
注２）平成20年12月　安藤哲次撮影

写真20　プロセッサー

注１）枝払いと玉切りを同時に行う
注２）平成20年12月　安藤哲次撮影

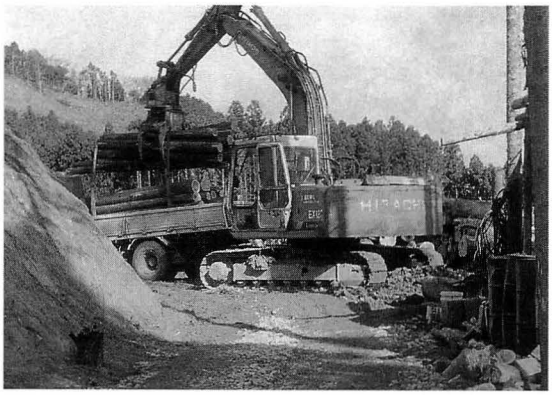


写真21　グラップル

注１）トラックに積み込む
注２）平成20年12月　安藤哲次撮影

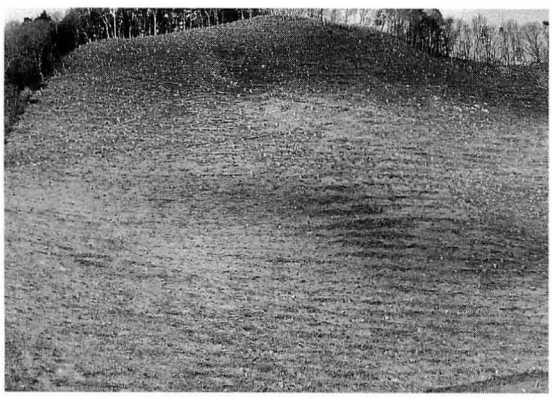


写真22　植林地

注１）図19の集材地①付近
注２）平成20年12月　安藤哲次撮影

作業をするから施行ができている。経営上採算は赤字ギリギリの状態らしいが、現在の材価で従業員に日当13,000円を支払いながら経営できているのは、機械化で合理的に作業をしているからである。（安藤　哲次）

注および参考文献

1）低温（15℃程度）暗黒条件に終日おき、花芽分化を促進するための作型である。

2）黒寒冷紗で被覆すると遮光され、昇温抑制効果が得られる。その結果、葉温が低くなり花芽分化を促進する作型である。

3）標高1,000m～1,400mの高冷地で、低温暗黒状態にし、花芽分化を促進する作型である。

イチゴの花は、普通の露地栽培であると10月に植え付け、冬の気温下降により苗が休眠状態となり、根に養分を蓄え、４月に花が咲いて５～６月に実る。イチゴにはこの休眠期間が必ず必要である。それをクリスマスのデコレーション用に間に合わせるための促成栽培の処理方法である。

4）愛媛新聞（平成21年１月30日）より

○愛媛県　（昭和60年）：愛媛県史　地誌Ⅰ・Ⅱ
○川内町　（昭和36年）：川内町誌
○重信町　（昭和63年）：重信町誌
○東温市　（平成18年）：東温市統計書
○JA全農えひめ（平成17年）：平成17年度「フレッシュ市部会」総会資料　JAグリーンえひめ「フレッシュ市」の現状と課題
○愛媛県統計協会（平成17年）：統計からみた市町村のすがた
○遠赤青汁株式会社：商品資料

松山西中等教育学校　安藤　計
東　温　高　校　清川　的
伊　予　高　校　米澤　俊二
済　美　高　校　安藤　哲次

Ⅲ　工　　業

1　東温市の工業の概況

(1)　県内工業における位置づけと産業構造

県内工業における東温市の位置を表１でみると、中予の松山市や伊予市、東予の諸市に比べて低位にあるが、南予地域の市町よりは上位にあり、中予の松前町とほぼ同位置にあるといえる。

表１　愛媛県内市町別事業所数、従業者数及び製造品出荷額等

（単位：事業所、人、万円）

市　町	事業所数	従業者数	製造品出荷額等
県　計	3,069	84,189	342,832,527
松山市	536	14,857	39,193,512
今治市	546	11,287	69,670,355
宇和島市	154	2,427	3,560,189
八幡浜市	85	2,193	3,413,954
新居浜市	247	8,836	57,522,993
西条市	306	10,936	67,757,896
大洲市	105	3,141	5,575,313
伊予市	95	3,174	10,252,460
四国中央市	430	13,923	58,664,966
西予市	118	1,953	2,202,167
東温市	**77**	**2,828**	**8,164,582**
越智郡			
上島町	23	468	3,569,602
上浮穴郡			
久万高原町	29	410	592,546
伊予郡			
松前町	83	3,252	8,137,087
砥部町	63	1,516	1,417,927
喜多郡			
内子町	69	1,189	1,554,676
西宇和郡			
伊方町	16	211	216,861
北宇和郡			
松野町	8	216	222,510
鬼北町	28	563	629,754
南宇和郡			
愛南町	51	809	513,177

注１）平成17年12月31日現在
注２）工業統計調査速報結果より

次に、産業構造を図１でみると、第２次産業は昭和50年代以後、就業人口の1/4のほぼ同じ割合で推移している。これに対し、第１次産業の割合の減少、第３次産業の割合の増加傾向が強くなっている。松山市に隣接する都市化の影響が読みとれる。第２次産業、特に製造業を分析する場合も、松山市との関係を注視する必要がある。さらに、２町の合併（平成16年９月）前の旧２町の産業構造を見ると（表２）、第２次産業の総生産は旧川内町の方が高い。

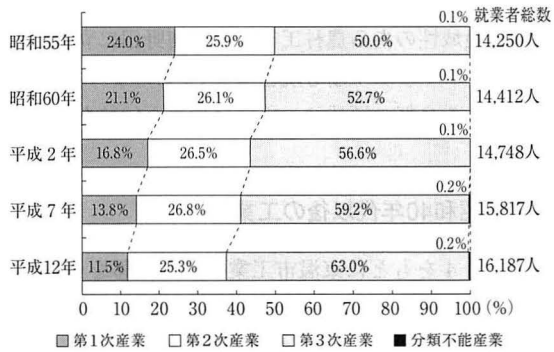


図１　東温市産業別就業人口の推移

注）「新市建設計画」重信町川内町合併協議会より

表2　平成15年度の総生産額（所得）

（単位：百万円）

分　類	旧重信町	旧川内町	計（%）
第１次産業	1,428	1,179	2,607（　2.1）
第２次産業	17,586	31,593	49,179（ 39.3）
第３次産業	52,929	20,472	73,401（ 58.6）
総　生　産	71,943	53,244	125,187（100.0）

注）愛媛県統計課資料より渡部文也作成

(2)　東温市工業の発展－昭和30年代まで

東温市の市域は、旧重信町で約７割、旧川内町では約８割を山間部が占め、昭和30年代までは純然たる農山村として工業にはほとんど見るべきものがなかっ

た。藩政期の製造業関係の資料は少ないが、両町の「町誌」などによると、重信町では、文化年間（1804～1818）に西岡で始まった焼物、天保年間（1830～1844）に始まった酒造業（志津川、田窪）、瓦製造（下林）などが、わずかに讃岐街道沿線や金毘羅街道（大洲街道）沿線にあった。同様に川内でも旧金毘羅街道沿いに焼物（松瀬川）があり、嘉永年間（1848～1854）以前の起源といわれている。また、水と米に恵まれたことから、河之内や川上などに藩政末期から戦前にかけ多くの酒造業が立地し、南方や北方にも広がったが、昭和17年（1942）ごろの戦争による業界再編成で廃業した。その他、明治初期から農村婦女子の唯一の現金収入として広がった伊予絣の賃織は、戦争中に消滅した。菊間町の製瓦技術者が南方に地元の土を使って工場をつくったが、昭和30年代（1950）からのコンクリートブロックやスレートの普及で衰退した。現在は、重信側に２軒（見奈良、下林）残るのみである。野鍛冶も両町とも消滅している。戦後、昭和32年に地域性のある農村工業として南野田に立地したトマトケチャップ工場も現在はない。このような中で、重信にある２軒の酒造メーカーは貴重な伝統を伝えている。

(3) 昭和40年代以後の工業化

表３・４をもとに東温市工業発展の推移を見ると、

表３　東温市工業の立地関連事項の編年史

年　次	工業の発展関連事項
昭和38年(1963)	(重信) 山之内に砂利砕石工場落成
昭和42年(1967)	(川内) ・工場誘致条例制定、第一次の工場誘致始まる
同　上	・寿録音機㈱設立・立地（川内）
同　上	(重信) 伊予鉄道横河原線全線電化
昭和44年(1969)	(川内) ・関連３社の合併で、松下寿電子工業㈱誕生 関連企業の立地始まる
昭和56年(1981)	(川内) 工場誘致条例改正、第二次の工場誘致
昭和57年(1982)	(重信) 国道11号バイパス(志津川～松山)開通
昭和60年(1985)	(川内) 松山自動車道　西条～川内間中心杭打式
平成４年(1992)	(両町) 国道11号バイパス(志津川～川内)開通
平成６年(1994)	(重信) 重信工業団地竣工
平成９年(1997)	(両町) 松山自動車道（川内～伊予市）開通
平成17年(2005)	松下寿電子工業、社名変更し、生産品目の変更など事業再編始まる
平成20年(2008)	・国の構造改善特区として「とうおんブランド・どぶろく特区」の指定を受ける
同　上	・民間企業による「エコの森・工業団地」（下林）の造成始まる

注)「重信町誌」「川内町新誌」などより渡部文也作成

表４　東温市製造業の年次別推移

年　次	事業所数	従業者数（人）	製造品出荷額（百万円）
昭和48年（1973）	66	2,138	16,401
〃 53年（1978）	85	2,438	36,771
〃 58年（1983）	72	2,789	77,020
〃 63年（1988）	76	2,968	91,859
平成５年（1993）	92	3,538	118,149
〃 10年（1998）	102	4,331	188,058
〃 15年（2003）	84	3,224	99,876
〃 19年（2007）	69	2,800	92,706

注)「愛媛県統計年鑑」「東温市統計書」より渡部文也作成

昭和42年（1967）の伊予鉄道横河原線の電化を契機に、松山市のベッドタウンとして注目されるようになり、松山市の都市圏の経済力強化を背景に工業化が進むことになる。人口減少が続いてきた川内町も、昭和42年の工場誘致条例の制定など積極的な企業誘致により、製造業の躍進がはじまる。昭和52年には製造品出荷額は約180億円にまで成長し、松山周辺では松前町に次ぐ規模になった。その発展の中心が旧松下寿電子工業（現「パナソニック四国エレクトロニクス株式会社」以下パナソニック四国と呼ぶ）の誘致成功に始まる。この立地に伴い、多くの関連企業も両町に立地するようになる。さらに、昭和50年代に入って国道11号バイパス開通により、北吉井、南吉井地区（重信）北方、南方地区（川内）の国道バイパス沿線に企業立地が進んだ。また、重信川沿岸の整備で両町の工業団地（写真１・２）の整備も進んだ。

経済発展による公共工事の拡大で骨材としての砂利需要増で重信川での砂利採取も中流域から上流部へ及

写真１　重信工業団地の入口

注）平成20年８月　渡部文也撮影

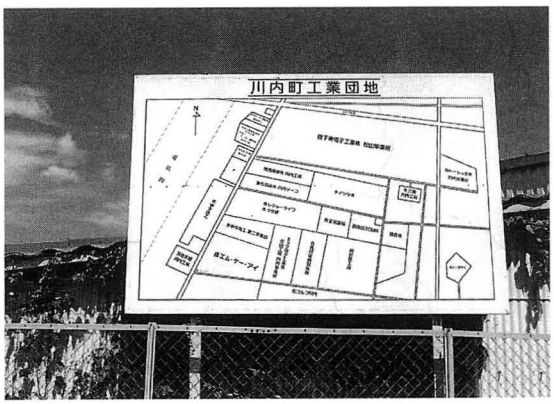


写真２　川内工業団地の案内板

注）平成20年８月　渡部文也撮影

んだ。昭和38年に山之内に初めて砕石工場が生まれ、関連の生コン、コンクリート製品製造工場などが重信川沿いや国道バイパス沿いに立地するに至る。さらに、食品や農業機械などで松山市内にあった企業が、都市化の進行に伴う環境・立地条件の変化で用地・交通・労働力などよりよい条件を求めて移転立地する企業が増えてきた。国道11号およびそのバイパス沿線、高速道路の川内IC周辺への立地が多い。

２　工業の現況

(1)　主要工業の分布と特色

東温市工業化の契機は、前述の通り、昭和42年のパナソニック四国の立地に始まる。電機は自動車などと並んで、多くの下請け企業の上に成り立つピラミッド型の産業で、精密金型や各種部品製造の中小機械・電気機械やプラスチック加工・金属製品製造から製品の輸送まで幅広い業種が関連している。表５をみるとパナソニック四国の関連する製造業のすそ野の広さが読みとれる。代表的企業については、後段で紹介する。

一方、昭和40年代から60年初頭にかけて経済構造の変化で安い労働力を求めて立地した縫製業を中心とした繊維加工業は岡山や関西地方から進出したものが多く、両町で合わせて昭和60年代初めには10社以上を数え、中には従業員100名近い企業もあったが、現在はほぼ撤退した。中国や東南アジアへ進出したものもある。これらの企業は家庭内職を抱えていたものが多かったが、それらは後にパナソニック四国の初期の操業段階では、二次・三次の内職に従事するものが多かった。また近年になり、パナソニック四国のみならず、関連企業においても生産拠点を海外におく企業が多いのも特色のひとつといえる。その進出先も中国や東南アジア（インドネシア、シンガポール、タイ、マレーシア）を中心に、アメリカ（サンディエゴ）やヨーロッパ（チェコ）にまで拡大している（表６）。

森林資源の豊富な本市における大正から昭和30年代末にかけての工業の主流は製材業で、川内の南方や重信の横河原、田窪、堀池（ほりけ）などに製材所が立地し、箱材、建築材を鉄道で主に松山に出荷していた。現在は、外材に押されて衰退し、重信川沿いに移転拡張した松末商店１社のみが、製材部門と集成材部門を生産する複合経営で残っている。

近年、東温市へ進出する企業で多いのは食料品製造業であるが、大部分は中小の地元資本で松山市内からの製造加工部門のみの移転が多い。本市の食料品製造最大の企業は四国乳業（らくれん）（図２－⑤）であるが、平成７年まで重信町に工場があったものを、社内の工場再編に伴い原料乳や製品輸送の利便性から川内ICに近接し、表川（おもて）（重信川支流）の豊富な地下水

表５　東温市の工業構成（平成19年）

（単位：万円）

区　分	事業所数	従業者数	製造品出荷額
食料品製造業	11	307	1,192,728
飲料・たばこ・飼料製造業	2	20	×
衣服・その他の繊維製品製造業	2	16	×
木材・木製品製造業	3	41	47,280
家具・装備品製造業	1	113	×
パルプ・紙・紙加工品製造業	1	30	×
印刷・同関連業	1	6	×
石油製品・石炭製品製造業	1	5	×
プラスチック製品製造業	5	224	845,389
窯業・土石製品製造業	11	221	×
金属製品製造業	2	15	×
一般機械器具製造業	21	929	2,635,495
電気機械器具製造業	1	38	×
情報通信機械器具製造業	1	710	×
電子部品・デバイス製造業	2	81	×
輸送機械器具製造業	2	31	×
精密機械器具製造業	1	7	×
その他の製造業	1	6	×
合　計	69	2,800	9,270,600

注）愛媛県統計年鑑（平成20年刊）より渡部文也作成

A＝重信工業団地
B＝川内工業団地
C＝川内ウェアハウス団地
--- ＝旧重信、川内町界

図２　東温市の工場立地

注１）図中の番号は表６と対応
注２）加藤伸弥作成

もあって重信町から移転した。他にも食品加工の部門では主に松山から移転立地した例が多い。中華食材加工の「助六食品工業」（旧重信町西岡）や伝統のある「五色そうめん森川」（図２－B）もともに店舗部門は松山市内に残し、加工部門のみを移転したものである。菓子の「母恵夢」も鷹ノ子工場を則之内（図２－⑭）へ移した。魚の干物加工の「キシモト」の則之内への移転は、一見すると魚類加工場の内陸部への移転で異例とも思えるが、「中骨のない魚の干物」という特殊な加工技術を生かした商品開発で、県外市場への対応には川内ICの地の利と、用地、用水の好条件から移転したという。

電機や機械の中にも、用地や騒音などの環境面の他、労働コストの面からも移転した例がある。松山市内にある機械メーカーの井関農機や三浦工業の関連企業は、親企業の拡大再編に対応する形で重信川沿いの工業団地や川内の丘陵地（則之内）に立地したものが多い。これらの企業の中には、移転を契機にメカトロや医療、福祉機器など技術を生かした独自の分野を開拓する企業も育っている。

これらの集まる川内や重信の工業団地には、交通アクセスの条件を生かして、物流の拠点（倉庫、集配センター）や小規模な企業単体のトラックターミナルも立地するようになってきた。現在、重信の団地に日本ハム、四国コカコーラの営業所が、川内にもフジおよびメディコ21の集配センターがある。これは、松山への市場距離と川内ICなど道路条件を合わせた立地と考えられ、今後も増加の可能性がある。

表6　東温市製造業の主要企業

（平成20年8月末現在）

所在地		企業名	業種	資本金	従業員数	特色	海外進出
旧川内	川内ウェアハウス団地	アスカ食品	食品加工卸		18	松山市→東温市松瀬川より移転、おもに焼魚を生産	
〃	川内ウェアハウス団地	有末ステンレス	ステンレス加工		4	伊予市上野から移転　ステンレス製サッシ製作	
〃	川内ウェアハウス団地	コスモ精機	金型製作	2,700万円	26	キヤノン等デジカメの金型製作　旧重信町下林より移転	
〃	川内ウェアハウス団地	平工業	各種自動化省力化機械設計・製作	1,000万円	10	平成9年10月に拡張	
〃	川内ウェアハウス団地	メタルコーティング四国	塗装		23	山本製作所等の製品の塗装	
〃	川内工業団地	五色そうめん森川	めん類加工	1,500万円	55（全社）	370年の歴史 松山市和泉より移転	
〃	川内工業団地	サカワ	黒板、集成材、特殊建材等の製造施工販売	3,000万円		黒板製作から、大型物件の集成材及び、木工事まで手がける	
〃	川内工業団地	中予精工	超精密金型	3,000万円	130	超精密金型・超精密樹脂型・金型パーツの設計・製造　販売先…パナソニック	
〃	川内工業団地	西川電機製作所	省力化部品		20	配電盤や電力制御装置など省力化機械の部品製造、南野田で創業	
〃	川内工業団地	パナソニック四国エレクトロニクス	電気機械器具	79億円	3000（全体）	パナソニック㈱の子会社、本社旧川内 ヘルスケア、デバイス、ビジュアルの3事業中心	インドネシア シンガポール
〃	川内工業団地	ミックエンタープライズ	電子部品	2,700万円	23	パソコン・ビデオ・自動車部品などのスイッチ設計・製造	タイ
〃	川内工業団地	ラムサ・ABE（阿部鉄工所）	化学機械・装置		30	松山市北井門より移転　生ゴミ減容設備・トンネル土砂の排出ベルトコンベア・廃プラスチックの再油化の新方式開発	
〃	①	遠赤青汁	健康食品製造	4,500万円	20	青汁の製造販売、愛媛県産有機栽培の青汁として販路拡大	
〃	②	キシホ工業	産業用機械・装置	1,000万円	20	FAの電気制御　松山市星岡より移転	
〃	③	キシモト	食品加工	2,310万円	15	魚の干物加工に独自技術 松山市より移転	
〃	④	サンケミ	ボイラー関連機器	5,000万円	54	三浦工業子会社　軟水装置製造　北条へ移転予定	
〃	⑤	四国乳業	牛乳・乳製品の製造・販売	21億2,051万円	320	「らくれん」ブランド乳製品加工 平成7年旧重信町より移転	
〃	⑥	四国明治乳業	牛乳・乳製品の製造・販売	4億8,000万円	147（全社）	松山市萱町から移転　現在は物流機能のみ	
〃	⑦	スターテック	金属工作機械		5	自動車部品工場へ製造のためのロボット等を製作・販売	
〃	⑧	早映工業	ステンレス加工		4	松山から移転　家族経営	
〃	⑨	第一讃陽ビニール	園芸資材卸売	4,500万円	20	本社高松市　松山市溝辺町より移転	
〃	⑩	ダイキアクシス	浄化槽製造	16億2,150万円	568（全社）	丹原町より移転	中国 ベトナム
〃	⑪	東予産業（セルコジャパングループ）	電子機器部品	1,000万円	522（全社）	中予電器㈱とグループ　パナソニック四国関連 プラズマテレビ・液晶テレビ・携帯電話などの民生用電子機器の受託生産	中国　タイ チェコ アメリカ
〃	⑫	西本精工	産業用機械・装置		4	エンジン部品・建機部品　丹原のテラマチとの関係が強い	
〃	⑬	日景生コン	生コンクリート製造及び販売	1,000万円	40	オオノ開発㈱関連会社 高強度コンクリート認定工場	
〃	⑭	母恵夢	和洋菓子製造販売	3,000万円	180（全社）	平成21年5月中旬から東温工場が本稼働開始	
〃	⑮	三浦精機	溶接・機械加工	4,000万円	63	ボイラー缶体・ボイラー用給水ポンプ製造	
〃	⑯	渡部工作所	工場設備製作 金属加工		14	松山市森松から移転　工業団地にはいると工場拡張ができないため、現在地に移る　工場設備の製作　溶接・機械加工	
旧重信	重信工業団地	いうら	福祉介護機器製造販売	7,000万円	123	松山市空港通から移転	
〃	重信工業団地	チグサ	モノレール・各種運搬機販売	1,000万円	10	ちぐさ技研工業の販売会社	
〃	重信工業団地	ちぐさ技研工業	モノレール・各種運搬機製造卸	7,200万円	20	松山市小坂から移転	
〃	重信工業団地	ヒカリ	合理化省力化自動機械の設計製造販売	9,900万円	314（全社）	FA機械の設計・製造がメイン　松山市和気から移転 創業時は井関農機の下請けを行う　農業機械部品製造なども行う	中国　タイ
〃	重信工業団地	横崎製作所	食品加工機 重量別選別機	2,000万円	29	松山市空港通から移転　東京以北での売上げが70%	
〃	⑰	相原組	砕石	2,016万円	50	山砂及び各種砂利採取、販売	
〃	⑱	井関邦栄製造所重信工場	農業機械開発製造	3億円	290（全社）	井関農機関連　重信工場は7人 農機具全般の部品製造	
〃	⑲	愛媛砕石	砕石	5,000万円	48	山砂及び各種砂利採取、販売	
〃	⑳	シムラ産業	電子部品	1,000万円	37	市内上村に第2工場、プリント配線基板設計・製造　創業時はパナソニック四国中心	
〃	㉑	新日本紙工	紙製品加工	300万円	30	クリーニング紙資材（タック・ホルダー・伝票など）製造卸	
〃	㉒	土佐電子工業	電子部品		130（全社）	四万十市より進出　子会社ツウテック・ホワイトシステムも同地に立地 電子部品製造、FA機器の設計・組立、携帯電話の販売	
〃	㉓	日本コンクリート工業	セメント製品	3,000万円	40	各種コンクリート製品製造販売	
〃	㉔	ハタダ	和洋菓子製造販売	9,600万円	310（全社）	国道11号バイパスの開通にあわせて「愛媛お菓子館」を開店	
〃	㉕	不二精機	精密プラスチック金型・成型システム	9.2億円	147（全社）	大阪よりパナソニック四国関連で進出　精密金型・成形システム・自動加工システム及び精密成形品の製造・販売	中国　タイ
〃	㉖	松末商店	製材・木材加工	1,000万円	20	国産材製材と集成材加工	
〃	㉗	山本製作所重信事業部	農機・建機設計製造　プレス金型	5,000万円	342（全社）	井関農機関連　重信工場は171人　本社は松山市小栗 農業機械・建設機械設計・製造・販売	アメリカ モンゴル

注）「愛媛年鑑」（愛媛新聞社）「会社年鑑」（愛媛経済レポート）その他、聞き取り調査により工業班作成

以下、主要立地工業について表６に基づいて業種別に述べる。　（渡部　文也）

(2)　電機及び電子機械工業

(ア)　パナソニック四国エレクトロニクス株式会社の立地と変容

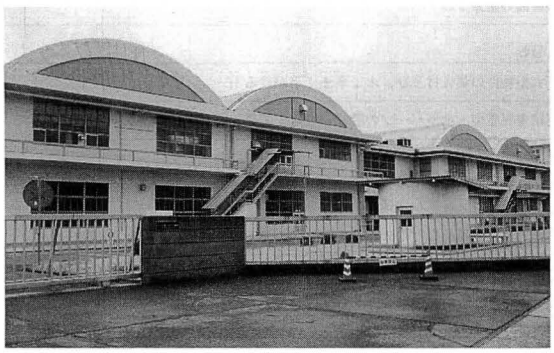


写真３　パナソニック四国松山本社工場

注）平成20年８月　國田誠司撮影

パナソニック四国エレクトロニクス株式会社（以下パナソニック四国と呼ぶ）の前身は、創業者である稲井隆義にゆかりの深い香川県を中心に事業が展開され、いくつかの会社名を経て昭和35年（1960）に「寿電工株式会社」として、電球や赤外線コタツを主力商品として発展した（表７、写真３）。昭和39年に松下電器産業(現パナソニック四国)よりテープレコーダーの生産を依頼されると、新たな工場建設地として、当時新産業都市の指定を受けた愛媛県東予地区のうちの西条市に「寿電機株式会社」が設立された（社長・稲井隆義、資本金２億円)。その後、昭和41年に北米向けのカラーテレビ生産が本格化したために、それぞれ商品の専門化をはかる必要性が生じた。そこで、テープレコーダー部門を分離独立させ、新たな工場として、労働力の確保が見込められ、積極的な誘致のあった温泉郡川内町に、昭和43年「寿録音機株式会社」が設立された（社長・稲井隆義、資本金２億5,000万円)。『松下寿電子工業25年のあゆみ』によれば、「従業員は寿電機でテープレコーダーに従事していた30名の男子社員に加え、川内町周辺から男女150名が採用された」とある。操業期には、中予一円の高校新卒者を中心とした女子従業員を乗せた同社の多数の通勤専用バスが朝夕走り、その風景は新しい東温地区の風物詩ともいわれた。

表７　パナソニック四国エレクトロニクス㈱の略史

1960年12月	寿電工株式会社設立（香川県宇多津町）
1964年８月	寿電機株式会社設立（西条市）
1967年10月	寿録音機株式会社設立（旧川内町）
1969年３月	寿電機株式会社脇町工場を建設
1969年11月	寿電工㈱、寿電機㈱、寿録音機㈱の三社対等合併により松下寿電子工業株式会社を創立
1970年３月	登記上、大阪府門真市にあった本社を高松市に移転
1972年９月	西条事業部、須崎工場を建設
1972年10月	松山事業部、大洲工場を建設
1973年10月	大阪証券取引所、東京証券取引所市場第一部へ株式上場
1985年１月	一本松事業部創設（現愛南町）
1987年５月	シンガポールに現、パナソニック四国エレクトロニクスシンガポール㈱を設立
1991年５月	インドネシアに現、パナソニック四国エレクトロニクスインドネシア㈱を設立
1992年10月	パナソニック補聴器株式会社設立
1997年４月	松下グループの医療機器販売組織として、FA営業本部傘下にME営業所発足（ヘルスケア社前身）
1998年12月	インドネシアバタム島に現、パナソニック四国エレクトロニクスバタム㈱を設立
2001年４月	松下電器ヘルスケアメディカル事業センター発足（ヘルスケア社前身）
2001年12月	高知県須崎工場閉鎖
2002年４月	香川松下寿電子工業㈱を合併
2002年４月	パナソニックデンタル株式会社設立
2002年７月	愛媛県東温市に本社を移転
2002年９月	大阪証券取引所、東京証券取引所市場への株式上場廃止
2002年10月	松下電器産業㈱（現パナソニック㈱）の100％子会社に移行
2003年１月	松下電器社内分社、ヘルスケア社設立
2003年10月	松下電器モータ社より流体軸受モータ事業を当社へ移管
2005年３月	愛南町一本松工場閉鎖
2005年４月	パナソニック四国エレクトロニクス株式会社に社名変更
2007年４月	松下電器ヘルスケア社（横浜市）を当社へ移管
2007年７月	パナソニックAVCメディカル株式会社を当社へ移管
2008年７月	パナソニックAVCメディカル株式会社がパナソニック メディカルソリューションズ株式会社に社名変更

注）『松下寿電子工業25年のあゆみ』及びパナソニック四国提供資料より國田誠司作成
なお香川県内の事業所の詳細な統廃合については割愛した

昭和44年に前述の３社が対等合併して誕生したのが松下寿電子工業株式会社（以下松下寿と呼ぶ、現パナソニック四国）である。昭和48年に東京証券取引所市場第一部へ株式上場をはたし、事業所も昭和47年に大洲市（現大洲事業部)、高知県須崎市に進出、昭和60年には南宇和郡一本松町にも工場が増え、生産商品も

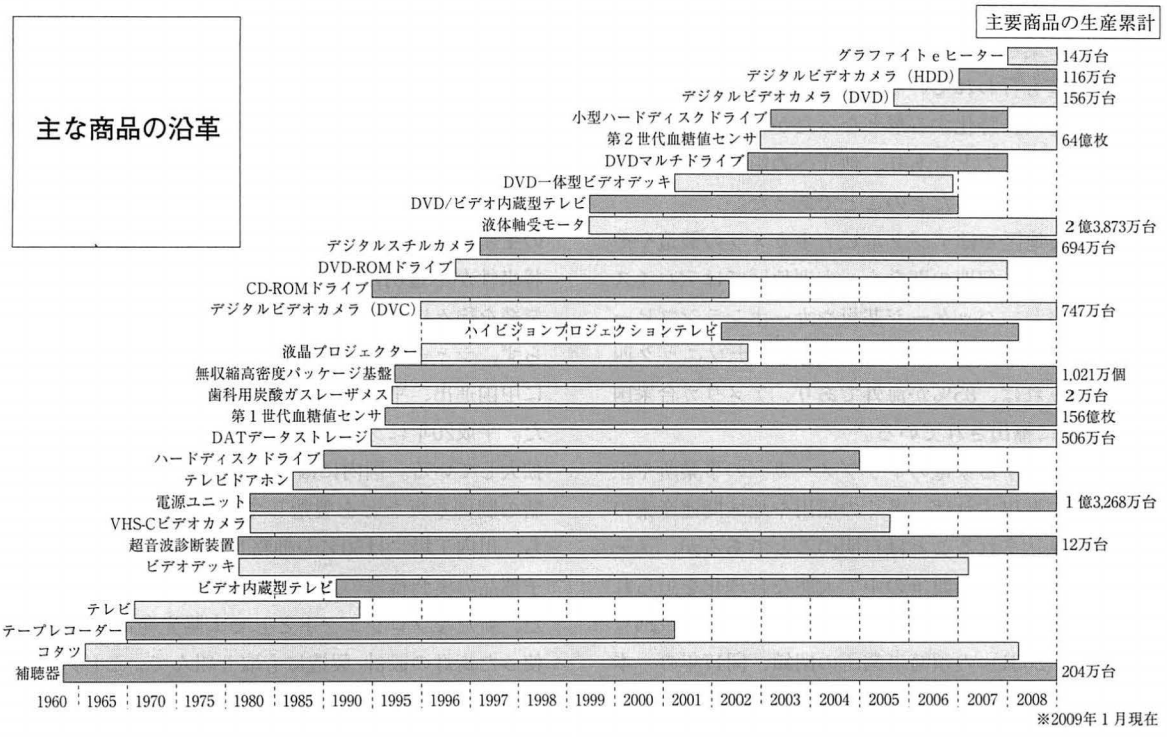


図３　パナソニック四国の主な商品の沿革

注）パナソニック四国HPより転載

ビデオデッキ、ビデオカメラ、様々なパソコンのデバイス機器など多岐にわたり製造し、発展してきた（表７・図３）。各地に部品や金型などを受注する企業が多く点在し、地域への関連性も強かったが、昭和62年（1987）にシンガポール、平成３年（1991）にインドネシアへ海外進出をはたし、多くの製造部門を移転したために、地元の企業は大きく方向転換をすることになったのだが、その点は後述する。

平成14年に松下電器産業の大規模な事業の再編により、松下寿も株式上場を廃止し、100％の子会社に移行した。それと同時に、本社を高松より現在の東温市に移転した。その経緯について、担当者からは「現在の主力工場が、松山・西条・大洲に展開され、事業の中心は愛媛県になっており、工場をまわるにもロスが生じるため、スピーディな事業判断ができるように、現場（開発部門・工場）に近いところに本社を移転した」とのことであった。

現在、本社工場の従業員数は平成20年７月現在で研究・事務部門492名、製造部門171名の計663名で、189名（全体の28.5％）が東温市居住であり、むしろ松山

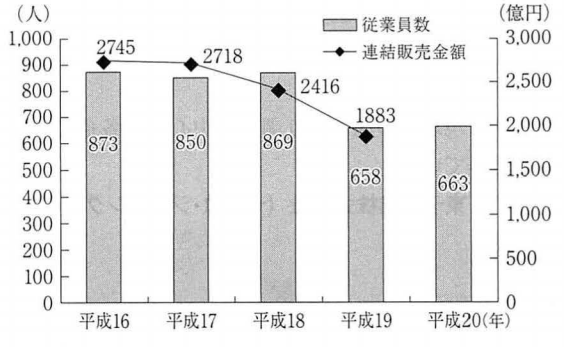


図４　パナソニック四国の川内工場の従業者数とグループ連結販売額の推移

注）パナソニック四国提供資料により國田誠司作成

市から通勤する者が主である。グループの連結販売金額は平成19年度で1,883億円となっている。図４からは平成19年からの大きな変化がみてとれるが、これは松山事業所で中心事業であった「PC用光ディスクドライブ」がグループ全体の事業再編によりパナソニックコミュニケーションズ（福岡市）に移管したためである。そのため本社工場では、1990年代前半より生産、

販売していた血糖値測定システム[1]をはじめとするヘルスケア事業を中心に行っているが、磁気テープドライブの生産も行われている。結果的に松山事業所はヘルスケア部門に特化する形となったが、すでに海外展開が進んでいることもあり、地元への影響については大きな変化はなかったとのことであった。

現在西条地区ではデジタルビデオカメラの製造やその他ビジュアル部門の開発を、大洲地区ではデバイス事業を担当し、パッケージ基板やカーボンランプヒータを製造している[2]。製品の出荷先をパナソニック四国全体でみれば、85%が海外であり、アメリカ合衆国やEU各国に輸出されている。

日本を代表する家電のトップメーカーの事業所や工場が地方に進出すれば、多くの雇用や地域関連産業の活性化が見込まれることは自明のことであるが、メーカー側も激しい国際競争の中で大胆な合理化を迫られることもあり、事業所の撤退・縮小化は避けられない。平成13年（2001）の須崎事業所の閉鎖、同17年の一本松事業所の閉鎖などによる各地域の地場産業へ与える影響は否定できないだろう。本社が立地する東温市も例外ではないが、東温市の企業には、パナソニック四国とともに発展し、その後の拠点の統廃合の影響を受けながらも、独自の経営戦略を持った企業が多く存在している。今後も同社の動向は地元として注視する必要がある。

以下は現地での聞き取り調査を中心に、各企業の概要を述べていく。

㈠ 東予産業株式会社（セルコ・ジャパングループ）

写真４　東予産業川内工場
注）平成20年８月　國田誠司撮影

創業は昭和39年（1964）で、松下寿の西条進出に合わせ、西条市でコタツの脚製造から始まった（表６－⑪、写真４）。前身は「宮嶋組」といって、土建業からの転身とされる。昭和43年の松下寿の川内進出に合わせ事業展開し、松下寿の部品製造を請け負う形で、テープレコーダーやテレビ、ビデオの制御基板などを製造し、業績を伸ばしていった。しかし、平成12年の松下電器の事業見直しにより、受注先からの電子部品の生産量が激減した。そこで新たな活路を、当時まだ将来性が不透明だった薄型テレビの制御基板に求め、業績を徐々に回復させた。現在はパナソニックのみならず、シャープや三菱電機とも取引がある。平成15年に中国進出、平成18年にはチェコに工場進出をはたした。平成20年にタイ、アメリカ、メキシコにも拠点を拡大している。国内には他にも３工場があり、携帯電話の制御基板などを製造している。従業員330名のうち、川内工場には50名が勤務し、回路・基板設計や電子部品の実装機器の設計、製造などを行っている。また、新たなプロジェクトとして太陽光発電のパネルを使った街灯の設計、製造にも取り組んでいる（写真５）。平成19年の売上高は58億3,700万円である。

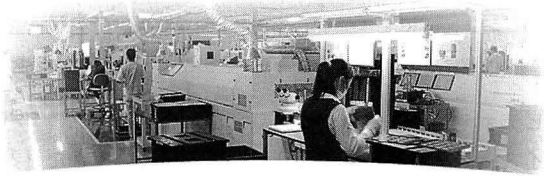


写真５　プリント基板の実装・組立・検査風景
注）東予産業HPより転載

㈡ シムラ産業株式会社

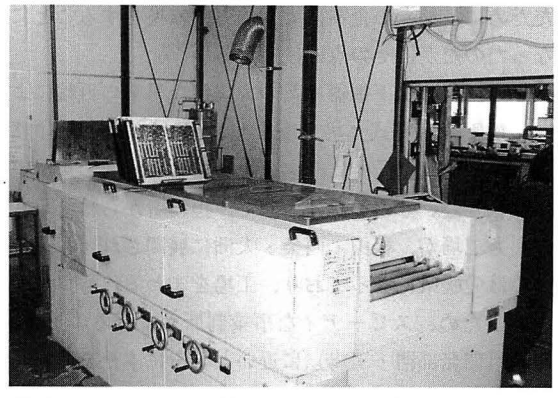


写真６　プリント配線基板製造機械（シムラ産業内）
注）平成20年８月　國田誠司撮影

昭和51年創業で、当初は東予産業の下請けとして

テープレコーダーのヘッドの加工を行っていた（表６－⑳、写真６）。その後、自社でできることを模索していきながら、昭和61年（1986）にプリント配線基板の製造を開始した。新製品の試作のための配線基板製作を手がけており、先端技術として県の補助を受ける県内唯一の業種である。従業員は現在37名で、そのうち東温市からの従業員は20名である。常時100社くらいとの取引があり、平成19年度の工業出荷額は５億円である。

(エ) ミック・エンタープライズ株式会社

東京創業の当社は、昭和54年砥部町に進出、その後昭和63年に川内町工業団地に移転した（図２）。現在は松下寿との取引は一部である。パソコンや自動車、プリンター、オーディオ機器など多くのスイッチ類の設計、製造を手がけている。平成元年（1989）にタイのナワナコーンに大規模な製造工場を建設しており、当工場でプレス加工した部品を関西国際空港や神戸港からタイに送り、現地で組み立て製造している。川内工場には従業員は23名であるが、タイでは現地から従業員を1,400人ほど雇い（９割が女性）、24時間操業を行っている。３年前に本社から独立し社名を変え、現在は独自の資本で経営を行っている。平成19年度の工業出荷額は４億円、タイで40億円である。

(オ) 西川電機製作所

もともと昭和45年に南野田で創業、同59年に川内町工業団地に移転した（表６）。かつては松下寿との取引で売り上げの半分以上をあげていたが、平成12年頃より取引はほとんどない。ピーク時から比べれば、売り上げは３割ほど減っているが、顧客を松山中心に絞り、ニーズに合わせた省力化機械の部品を製造し、多品種少量生産を手がける。従業員は技術系中心に20名である。

(カ) 土佐電子工業株式会社

昭和55年に高知県の四万十市（旧中村町）で創業、同63年に松下寿の業務がしやすい場所ということで、現在地（下林）に松山工場が建設された（表６－㉒、写真７）。やや主要道路からは奥まったところに立地しているが、担当者によれば、「トラックが入れる程度の道路であれば、主要道路に面している必要はなく、地価の安いところを求めて」とのことであった。四万十市にある本社も松下寿の一本松町工場との取引が中心であったが、ともに現在は松下寿との取引はほとんどない。電子部品関連の組立のみならず、FA[3]機器の設計、組立、調整も行い、携帯電話の販売も手がけている。今後は太陽電池事業への参加も積極的である。「ツウテック株式会社」と「ホワイトシステムズ株式会社」という２つの関連会社も松山工場に隣接しており、平成18年度の３社でのグループ連結売り上げは年間32億円である。（國田　誠司）

写真７　土佐電子工業

注）平成20年８月　國田誠司撮影

(3) 一般機械工業

(ア) 重信工業団地に立地する企業

重信工業団地（図２－A）に立地する機械工業関連の企業は、いうら、ヒカリ、横崎製作所がある（表６）。いうらは、介護福祉器具・製造において全国有数のシェアを持ち、段差解消機、ストレッチャー、車いす、入浴機、介護用ベッドなど幅広い商品を開発している。重信には、平成７年に松山市空港通から移転してきた。

ヒカリは、FA関連の開発・製造を手がけている。創業当時は光鉄工所として本社を松山市和気におき、井関農機の下請けとして板金加工等を行っていた。重信には、平成６年に移転している。当時は本社機能は和気、工場は南吉田にあったため、効率が悪く、事業所集約のタイミングと工業用地売り出しのタイミングがうまく一致しての移転であった。FAに取り組むきっかけとなったのは、パナソニック四国のビデオデッキライン自動化を受注したことで、それ以降、次第にFAの割合が高まっていった。現在はパナソニック四国も含め、四国内に取引先はなく、売上げの５～６割が国内、４～５割が海外と海外での受注のウェイトが高い。そのため、タイ・バンコクに工場を、中国・大

連に設計部をおいている。

横崎製作所は重量別選別機の開発・販売で有名である。平成７年（1995）より現地に移転したが、それまでは、松山市古川→松山市空港通と移っている。取引先は全国に広がり、東京以北での売上げが70％をこえている。また、カナダをはじめ26か国へ販売した実績を持っている。選別機の開発は真珠母貝からスタートし、その後、農産物・水産物へと拡大した。農産物は農家単位での受注が中心であるのに対し、水産関係は会社単位での受注が多い。

３社に共通していえることは、重信に移転した理由として会社の拡大時期と工業用地売り出しの時期がタイミングよく重なったこと、当時まとまった面積が松山市内では手に入れにくくなっていたこと、さらに、土地価格が松山は坪単価が約20万円程度していたが、重信では約15万円と割安であったことがある。工業用地販売の最初の説明会が平成４年に行われ、バブルピーク時ということもあり、140社が希望したそうである。ここの特徴としては、行政による税制の優遇策はなかったものの、道路・緑地・水道等の施設は全て用意されていて、企業側は工場を建てるだけの負担ですんだということがある。このことは、進出する企業にとってとても助かるものとなった。

また、立地条件のメリットとして、前が重信川、後ろが高速道路高架であるため、騒音等の苦情の心配がないというのも大きな理由としてあげられた。デメリットとしては、空港・港湾・JR駅いずれにも遠く、また、３社とも従業員の大多数が松山に居住しているため、通勤にも遠いということである。主要な取引先が東温市や松山南部地域にあるわけではなく、日本全国や海外にまで販路が伸びている各企業にとってこの距離という点では、とても遠くて不便というわけではないが、もう少し近い方が便利というのが本音のようである。

(イ) 川内工業団地に立地する企業

川内工業団地（図２－B）に立地する企業としては、ラムサ・ABE（旧阿部鉄工所）、中予精工がある（表６）。阿部鉄工所は松山市古川→松山市北井門と移転し、昭和59年（1984）５月から川内で操業している。この移転の理由は近隣への騒音と振動である。自社で開発した水処理機・生ゴミ減容設備、トンネル土砂のベルトコンベア等が売上げの主力である。川内工業団地への移転は昭和53年頃から川内町が誘致を始め、それに乗った形となった。移転当初は周辺に住宅もなく、少々の騒音を出しても大丈夫であったが、最近はすぐ近くまで住宅が建築されるようになり、音がうるさいとの苦情を言われる回数が増えたとのことであった。

販売先は、ほぼ県外で、原料の鋼材は松山・今治・香川から仕入れている。最近、廃プラスチックの再油化に成功し、新聞にも紹介されたが、まだ開発途中で販売にはいたっていない。また、この２年で原料である鉄は30％高、ステンレスは２倍にまで高騰し、経営は決して楽ではない。しかし、約30人、平均年齢30歳の若い力で乗り切る意欲が強く感じられた。

中予精工は、現社長が松下寿の松山事業部に10年以上勤務し、昭和52年に旧川内町松瀬川で精密金型の設計・製作を開始した。その後昭和58年に川内町工業団地に進出し、昭和60年に道路を挟んで西部に本社を移転（元の場所は現在は第二事業部）した。当初は松下寿中心の取引であったが、現在はパナソニックの岡山工場や、車部品のデンソーなどへの取引に変わってきており、他にも40社以上との取引がある。マレーシアに拠点を構えていた時期もあったが、撤退し北海道の苫小牧に工場を構えた。従業員は本社に99名、北海道工場に38名、平成19年度の工業出荷額は12億円である。

(ウ) 川内ウェアハウス団地に立地する企業

写真８ 川内ウェアハウス団地入口

注）平成21年２月　加藤伸弥撮影

この工業団地は旧川内町則之内の国道11号から少しあがったところにある（図２－C、写真８）。平成に入った頃に森田住宅が造成し、当初から工業用地として売りに出されたとのことである。当時の販売価格は坪10万円ほどであった。まだ空いているところもあり、森

田住宅によると、まだ販売は継続中であるとのことであった。ここに入っている機械工業関連の企業は、有末ステンレス・平工業・メタルコーティング四国・コスモ精機がある。

有末ステンレスは平成４年（1992）に伊予市上野から移転してきた。創業は平成元年である。主に商業施設入口に設置する大型のステンレス製サッシを製作しており、取引相手は県外が多い。また、ステンレスだけでなく、アルミ・スチールも扱い、注文数は多い。

平工業はFAの設計組み立てを行っている。価格が安かったため、平成９年にここに土地を購入した。創業当初はKOA企画という社名で松下寿に納入するものをつくっていたが、その後はヒカリとの取引も増え、現在は全国各地に出荷している。

メタルコーティング四国は平成５年に松山市森松から移転してきた。移転動機は工場拡大のためである。取引相手は松山市内が主であり、現在登録されている会社が250社ある。東温市内の山本製作所が作った建機のキャビン塗装も行っている。また、松前町のダイワエンジニアリングも大口の顧客である。現在地に移転してからは、東予地方の顧客が増加したそうである。

コスモ精機は平成17年６月から現地に移転した。それまでは、平成３年２月の創業以来、旧重信町下林で操業していた。移転理由は事業拡大のためで、大きな土地を探していたが旧重信町内にはなかったため現在地になった。創業者は不二精機で勤めていた後に独立した。東温市内には、このように不二精機を経験して独立している人は多いとのことである。業種は金型製作で、取引相手としてはキャノン（デジタルカメラの金型）・日亜化学・セーラー万年筆等がある。以前はパナソニック四国の金型を作っていたが、現在は全くない。県内企業との取引は少なく、主に県外企業を取引先としている。この場所は平成19年までISDNしかなく、大変不便であったそうである。19年の途中から愛媛CATVの光通信が使用できるようになり、通信スピードが改善され、便利になったということである。

(エ)　その他の場所に立地する企業

サンケミ・三浦精機は東温市則之内の小高い丘の上に立地する（表６－④⑮）。両社とも三浦工業の子会社であるが、サンケミは軟水装置・ろ過装置・薬注装置の製作を主に行い、三浦精機は簡易ボイラーの缶体（溶接加工）、ボイラー用給水ポンプ（機械加工）製作を行っている。両者は同一敷地に立地し、昭和57年（1982）の創業年も同じである。この敷地はもともと工場が建っていたが、廃業したためそこを買い取って建設された。この地に立地した動機は、三浦工業上場時に旧川内町の労働力を求めてのことだった。しかし当時は人集めに苦労し、人数が集まらなかったそうである。サンケミは平成21年に松山市の北条地区へ移転することが決定しており、社員は北条へ通勤するものの、近所から来ているパート勤務の人はおそらくやめるのではないかということだった。また、三浦精機の従業員63人のうち、約４割が地元東温市の人である。

サンケミ・三浦精機とも最終製品は作っておらず、製品の納入先は三浦マニュファクチュアリング（松山市）である。原材料のほとんどは両社で手配しており、手配先は三浦本社の発注先が多い。人事異動は子会社間で課長以上に限り実施されている。FAは三浦本社がやるため子会社が行うことはない。

不二精機株式会社は、昭和30年に大阪市で精密プラスチック金型の製造及び販売を始めた（表６－㉕、写真９）。昭和47年に松下寿の業務を行うため、かつて隣接していた会社とともに、大阪から現在地に事業展開した。昭和58年にVHSビデオカセットテープの精密金型を開発するなど、松下寿との関係も深かった。プラスチック金型での大手というのはあまりないために、当社の資本金９億2,400万円という規模は西日本最大である。平成12年に株式上場をはたし、現在は松下寿との取引はほとんどない。CDやDVDのプラスチックケースのうち、厚手タイプの世界の７割、薄手

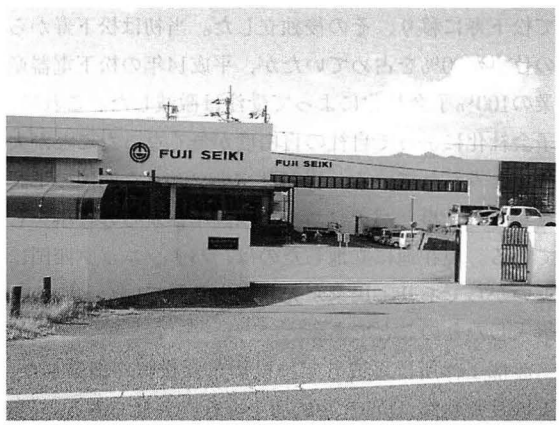


写真９　不二精機工業
注）平成20年８月　國田誠司撮影

タイプの世界の９割は当社の金型からうまれたものである。中国やタイにも子会社があり、台湾やインドへ輸出も行っている。松山工場の従業員140名のうち松山から通勤するものが約４分の１、東温市から通勤するものが約４分の１であり、大阪本社は20名ほどである。平成19年度の工業出荷額は成型品で40億円、金型で35億円ほどである。

山本製作所重信事業部は、大正14年（1925）６月に松山で創業し、井関農機との取引で大きくなった（表６－㉗）。現在は自社で金型を製作する金型部門を持ち、農機をはじめ建機の生産も行っている。重信川河畔の現在地に重信事業部ができたのは昭和48年(1973)８月で、みかん畑であったところを自社で造成し、工場の設計も自社で行って作られた。全社で342人の従業員数であるが、ちょうど半分の171人が重信事業部で働いている。製作しているのはトラクター用ロータリーやコンバイン・トラック用クレーン・建機用キャビンなどである。農機は井関との取引が主であるが、建機では、タダノやコベルコ・川崎重工といった会社のものを作っている。アメリカにも工場を持ち、設計の一部はモンゴルでも行うなど、海外への進出もみられる。

松山市小栗の本社工場では、騒音等の苦情もあるが、重信では、工場の生産に対しての周囲とのトラブルは無いそうである。

キシホ工業は平成５年（1993）に松山市星岡から川内町北方（表６－②）に移ってきた、FAの電気制御を専門とする会社である。創業者は最初、石井工業に勤務していたが、松下寿が電気制御をするようになって松下寿に移り、その後独立した。当初は松下寿からの仕事が90％を占めていたが、平成14年の松下電器産業の100％子会社化によって受注は激減した。これは、子会社化によって自社の自由度が無くなったことが大きいとみられている。現在はパナソニック四国の下請けからの仕事とパナソニック四国本体からの仕事をしている。現在地に立地したのは、パナソニック四国に近いからであり、民家が売りに出されていたところを購入したとのことである。

渡部工作所は平成６年に松山市森松町で創業した、工場設備製作（FA)、金属加工を行う会社である。（表６－⑯）主に、松下電子部品・キャノン・オムロン等の工場設備を手がけている。松山の設計会社が設計したものを作るという経営形態で、２年先までの仕事は確保されている。以前は松山市森松町に工場があったが、周りに民家が多かったので、現在地の東温市松瀬川に移転した。溶接と機械加工が一緒にできるというのが特徴で、この２つができる企業というのはあまりないそうである。工業団地でなく現在地を選んだのは、工業団地に一度入ると拡張できないからである。一度に大きな工場を建設するのは不可能なので、業績に伴って徐々に拡張する必要があり、それが工業団地ではできないということである。現在地は周囲に山林や田畑があり、それを購入あるいは借地することで拡大は可能ということであった。現に最近になって、今の建屋を拡大するために隣地を借地した。（加藤　伸弥）

(4)　食品工業

(ｱ)　ハタダ　お菓子館

平成元年11月、株式会社ハタダ（本社・新居浜市）は11号バイパスの開通に合わせて、牛渕に工場を併設した四国最大の菓子店舗『愛媛お菓子館』を開店させた（表６－㉔、写真10)。工場では、タルトのみを生産しており、その他の商品は、本社の工場より供給を受けている。立地の理由は、松山の販売店舗の拠点と新居浜への交通の便利さ、十分な広さの用地が確保できた点である。現在、30名の従業員が工場で、15名が販売関係の要員として働いている。

平成10年７月には、喫茶・菓子工房併設店『アルドールはただ』を新設し、業態変化のチャレンジを行っている。

写真10　愛媛お菓子館

注）平成21年８月　加藤伸弥撮影

㈠ 母恵夢東温工場

株式会社母恵夢は昭和31年（1956）に創業されたお菓子メーカーである。商品は、愛媛県内の直営13店舗や百貨店等で販売されている。

写真11　移転直前の母恵夢鷹ノ子工場
注）平成21年３月　三好哲司撮影

昭和41年より操業してきた鷹ノ子工場（松山市）（写真11）の狭隘・老朽化により移転した。鷹ノ子工場は一般住宅地にあり、法規制により建て替えによる拡張が不可能であったことが、移転決意の大きな理由である。候補地としては、伊予市でも砥部町でも移転可能であったが、十分な用地の確保と交通の便利さを考えて東温市に決定した。本社（松山市天山）と統合し、平成21年（2009）５月に130名の勤務者で操業を開始した。（表６－⑭、写真12）

写真12　母恵夢東温工場
注）平成21年８月　加藤伸弥撮影

全生産量の７～８割を松山で、残りを四国全域・中国地方・京阪神・東京で販売する。最近の消費動向として、かつて見られたように旅行者がおみやげとして10箱～20箱も買うといった形態は影をひそめ、せいぜい一人が１～２箱の購入に限定されることが多くなった。同社では、新商品の開発・直売店での販売・消費者が自家用車で立ち寄ることのできる店舗の確保・百貨店よりスーパーマーケットでの販売・宅配便やネット商品としての販売に力を入れている。

㈡ 五色そうめん株式会社森川

昭和58年、松山市和泉にあった工場の建て替えが建築基準法上出来ないために、現在地に移転開設した（表６、写真13）。平成10年に本社業務・配送業務を移転。平成18年には、砥部工場を新設し、手延べそうめんの生産機能を移転させたため、本社工場では機械によるそうめんの生産を行っている。

写真13　現在の五色そうめん森川本社工場
注）平成21年８月　加藤伸弥撮影

現在の立地は、営業上は高速道路の利用が便利な反面、松山市内への交通は不便である。水の利用は、絶対条件ではないが、東温市に本社工場があるために、平成６年に発生した松山市での渇水のような事態を心配しないでよい。

手延べそうめんは、10月から翌年の３月にかけてが生産期間であり、備蓄した商品を夏に集中して売るといった特性をもつ１年に１回のワンサイクル商品である。

商品は、全国各地のデパート・スーパー・問屋（業務用）に販売している。流通業界の最近の変化に応じて、スーパーでの売り上げが拡大している。

『小豆島そうめん』や『揖保そうめん』は産地ブラ

ンドであるのに対して、『五色そうめん』は会社名ブランドである。その特性を生かして、販売時期の６～７か月前にマーケティングを行い、東温市本社で新商品（例えば、そうめんにゆずや梅を入れる）の開発等も行っている。

(エ) 遠赤青汁株式会社

平成４年（1992）、健康食品製造会社として設立された（表６－①）。地域で農業従事者の高齢化の進展で放置されたまま荒廃していく農地を再生し、有機栽培認定圃場としてケールの栽培を行い、ケール100％の無添加青汁の生産をしている。川内工場では通年生産、西条工場では年間のうち一定の間に生産を実施している。全国有名百貨店での販売のほか、直販（通信販売）、インターネットによるネット販売を行っている。従業員は20名である。

(オ) 有限会社アスカ食品

平成２年12月に創業され、営業内容は焼魚・水産加工品輸入・総菜製造である（表６）。元々、創業者は松山市内でカタログ販売業を営んで焼き機を売っていた。そこで、自身で大型焼き機を導入し焼き物の専門業者としてスタートした。平成４年11月に東温市松瀬川に工場を移転、平成７年６月に東温市則之内に本社及び工場を新築移転した。工場には遠赤外線焼機・真空冷却機・真空包装機・自動包装機を備え、18名の従業員で主に焼魚を生産している。水産原料は県外の商社から仕入れている。主要販売先としては、フジなどの量販店や居酒屋・仕出し店・デパートなど多岐にわたる。

(カ) 四国乳業株式会社本社工場

四国乳業株式会社は、昭和43年（1968）に設立された。当初はメーカー機能だけを有し、販売は愛媛県酪農業協同組合連合会が行っていた。平成８年に販売部門を編入し、生産者団体（県酪連等）より生乳（県内全域の牛乳・高知県の一部の牛乳）を一元集荷し加工後、メーカー・小売店に多元販売を行っている。

平成７年に旧川内町の企業誘致を受け、現在地に本社工場を建設した（表６）。これにより、松山工場・今治工場・高知工場は本社工場に集約し廃止された。本社工場立地の理由には、交通の利便性・水の供給・用地の確保などがあげられる。立地当初は、各工場の集約によるスケールメリットを狙ったが、市場の変化により、小ロットの多品種生産に対応するために工場の小回り性が要求されている。同工場は、一日150ｔの生乳処理能力がある。約20ｔを高知県からの供給を受けている。

四国乳業株式会社の全社員340名中、同工場には約160名の従業員が勤務している。従業員の出身地は、過去に今治工場等を集約した影響や会社内での転勤を伴うために、県下全域にわたる。

(キ) 四国明治乳業株式会社愛媛支店

平成11年、四国明治乳業株式会社のチルドセンターとして竣工した（表６－⑥）。翌年、松山市の萱町で操業していた愛媛工場等での牛乳生産を中止し、香川県財田町にある四国工場へ、香川工場・高知工場ともに機能を集約した。平成13年には、松山支店を旧川内町の現在地へ移転、名称を愛媛支店と改称した。そのため、同支店は、生産機能を有さず、牛乳・ヨーグルトなど乳製品の物流機能と別会社によるスーパーマーケット向けのチルドセンターを持つのみである。

乳製品の物流は松山地域及び愛媛県南予地域を配送地域とする。四国明治乳業社は、三豊市財田町での生産を四国全域への供給をカバーするための基本と考えている。そのために、川内ICに近い現在地が支店の立地場所として選定された。（三好　哲司）

(5) 窯業・土石製品製造業

表５によると、東温市の平成19年度における窯業・土石製造業は企業数11、従業者数221と５番目に多いが、製造業出荷額が表示されていないので、平成16年度の表示された497,053万円を参考に考える。主要な業種は砕石が中心であるが、近年の公共工事の減少で、生産量は年々減少している。これに、生コン及びコンクリート製品製造が加わっている。砕石業は戦後の国土復興の資材として重信川の砂利が利用されてきたが、河川管理の立場から山之内地区上流部で保安林利用の限定的許可を得て、河川の砂利砕石から流域に接する山の岩石の砕石へと変わった。昭和38年に山之内地区に愛媛砕石（表６－⑲）の採石工場が操業を始め、続いて相原組（表６－⑰）、瀬戸内採石工業などが昭和43年に生産を始めた。生産工程は原石の破砕から砕石した砂利の水洗い、その汚染の水処理まで機械化した一貫体制をとっている（写真14）。現在、生産量は高度成長時の最盛期に比べ半減に近いともいわれ、各社とも年産20万～50万ｔ程度と見られる。これに伴い、

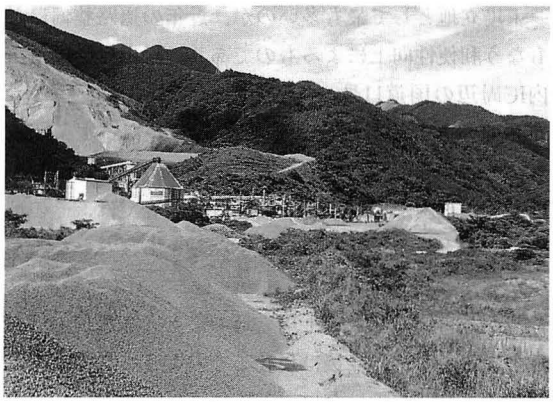


写真14　山之内の砕石場

注）平成20年８月　渡部文也撮影

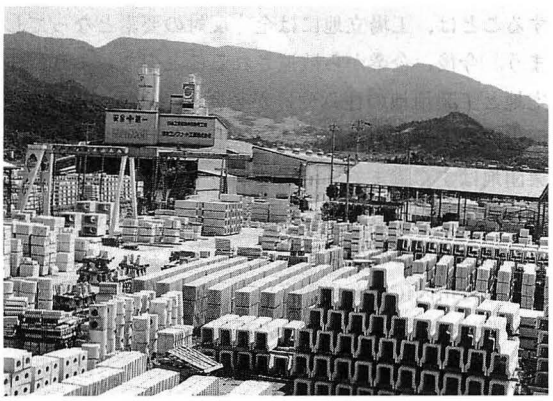


写真15　コンクリート製品の置き場

注）平成20年８月　渡部文也撮影

従業員も大幅に減少している。また、商品の販売価格も砂の場合で１ｔあたり1,000円程度でその運賃が同程度のコストのため、きわめて厳しい経営を強いられている。そのため運輸部分を廃止したり、舗装事業など新しい事業へ進出したり、各社とも合理化に努めている。

砕石以外の関連産業として生コンやコンクリート加工があるが、その代表例が重信川と表川の合流点に近い見奈良の氾濫原に昭和43年（1968）に立地した日本コンクリート工業である（写真15、表６－㉓）。従業員40名で約300種類の製品を生産している。重信川の地下水や循環水を利用し、原料砂も市内にあるオオノ開發の山砂を利用するなど、立地条件には恵まれているといえる。同社以外にも、重信川に面した北方に川内コンクリート工業もある。

平成５年（1993）から、重信川支流の表川上流部の河之内地区に民間（オオノ開發）が開発した産業廃棄物処理場に併設して、砕石業の陶石麻照（とうせきましょう）と日景生コン（表６－⑬）が立地している。２社ともオオノ開發の関連企業で砕石業は立地現場で得られる陶石系の岩石を特殊な再処理で利用しているユニークさが有り、社名もこれに由来しているという。いずれにしても本市の窯業・土石製品製造業は重信川の恵みをえた製造業である。　（渡部　文也）

(6)　その他の工業

いままで列挙してきた以外にも、特色ある産業が東温市には立地している。

(ア)　株式会社サカワ

同社は、木工事・構造用大中小断面集成材・熱吸ボウチュガラス・サイン・モクスミー黒板・家具・スクリーン・テレビ台の製造を行うメーカーである（表６）。戦前からあった会社を、昭和32年に合資会社「サカワ黒板製作所」に社名変更。昭和61年に第一工場川内事業所を完成させた。平成12年より集成材及び木工事部門を拡大。愛媛県武道館・製紙試験場など大型物件の集成材及び、木工事を手がけた。平成15年には本社を東温市とした。

平成17年には、岡本太郎巨大壁画「明日の神話」解体・梱包のメキシコボランティアに参加した。さらに第２工場での修復を行い、そのことがテレビなどのマスメディアにも多く取り上げられたのが記憶に新しい。

(イ)　新日本紙工

同社は、衣類のクリーニング用タグの印刷・加工に特化した会社である（表６－㉑）。同業者は日本全国で３社しか存在しない。クリーニング用タグは、水や油で洗浄しても溶けない特殊な用紙やインクを利用した製造が要求される。特殊な用紙は大王製紙と全量買い取りの契約して供給をうけている。製品は色やサイズで700種類余りあり、多品種少量生産される。商品の特質上、営業は不要と考えて商品のカタログを取引先に送付している。経営上のポイントとして、在庫管理を徹底し、欠品を出さないことがあげられる。

経営者は、かつて松山市内の印刷会社に勤務後、昭和44年に久米の自宅で創業した。昭和57年にクリーニング用タグの印刷を開始し、平成３年からは、同タグ専業となった。

東京での展示会がきっかけとなって、平成12年くら

いから香港・上海にも輸出をするようになった。輸出には日通を利用して４日程度かかる。また、労務コストが低い松山刑務所内で仕上げ前の中間加工を一部実施している。同社の社長によると、ここ７～８年で出荷のための物流のスピードが10倍ほど早くなったと実感しているそうである。午後２時に印刷を完了して翌日に東京に到着するといった具合である。輸送がきわめて良好になったため、愛媛県のような地方に工場があることが不利な条件でなくなりつつある。平成９年ごろの最盛期には45名が働いていたが、現在は30名が従事している。

(ウ) 株式会社ダイキアクシス

昭和39年（1964）に丹原工場で家庭用浄化槽の組立製造工場をスタートさせたが、手狭になったため昭和43年に川内町の斡旋により、現在地に川内工場が建設された（表６－⑩）。グループ全体の従業員568名（平成19年）のうち、当工場に22名（東温市12名、松山市６名）が勤務している。西日本での家庭用浄化槽のシェア５％を占め、細かな部品製造はベトナムで生産し、長野での部品生産を経て、ここで組立を行う。１台組み立てるのに３時間弱かかる。

(エ) 第一讃陽ビニール株式会社

本社は高松市にあり、今年で53年目をむかえる。昭和45年に松山市溝辺に営業所を構え、業務拡張のため現在地に昭和56年に移転した（表６－⑨）。農業用ビニールハウスのビニールフィルムやパイプの加工、オーダーメイドによる組立を行う。平成４年（1992）に国の農業振興政策が大きかったときがピークで売り上げが12億円あったが、現在は３～４割ほど減である。グループ全体で75名の従業員のうち、本営業所に20名が勤める。（國田　誠司）

３　工業生産の今後の課題

以上のように東温市は、電機及び電子機械工業、一般機械工業をはじめとして、多種多様な工業が立地している。電機及び電子機械工業立地のきっかけはパナソニック四国の操業開始であり、金型やFA関連の企業が多く創業または移転し、発展してきた。しかし、現在では各企業のオリジナリティを生かした事業展開がなされており、パナソニック四国への依存度はむしろ低い。

工場立地として最も多いのが、近年の道路整備にともなう利便性向上によるものであり、松山自動車道川内IC周辺の国道11号や旧11号沿線におもな工場が分布していることがわかる（図２）。３つある工業団地も、その幹線道路沿いに位置している。移転に際しては、松山市内からが多く、聞き取り調査では、その理由として土地の安さと民家の少なさをあげたところが多かった。

しかし、この２点が工場立地の最も大きな理由であるとするならば、今後は現在までのような数の立地は期待できないのではないだろうか。東温市は松山市のベッドタウンとして、住宅地造成が続いており土地価格が上昇傾向である。住宅が増加し、土地価格が上昇することは、工場立地には全く反対の要素となってしまう。今後、企業から敬遠されることのないよう、住宅地と工業用地の住み分けが必要とされる。旧重信・旧川内の工業団地は既に満杯状態で、特に旧川内の工業団地はすぐ隣まで、住宅地が造成されている。土地価格と住宅数からであろうか、最近は、川内ウェアハウス団地や母恵夢の新工場に代表されるように、新たな立地は川内ICより奥が多い。

消費地松山を間近に控えた東温市に、分野にこだわらないあらゆる産業が立地できるということは、現在進出している企業をみても明らかである。東温市が持っている地の利をこれからどう生かすか、行政の方向性が問われている。（加藤　伸弥）

注及び参考文献

1）パナソニック四国で製造されている血糖値センサーは国内では65％強のシェアを占め、世界でも第３位の18％のシェアを占める。市場全体でも今後の伸びが期待される分野である。

2）パナソニック四国の現在の拠点については、愛媛県の３拠点以外は、徳島県の脇町においてバイオ診断の測定器を製造しており、香川県の拠点については整理された。また、横浜市では、画像診断機器や補聴器等を製造している。その他海外拠点は、前述のシンガポールやインドネシアジャワ島において、HD用流体軸受モーターの開発・製造・営業をおこなっている。また、平成10年にインドネシア・バタム島にも進出し、デジタルビデオカメラや大型テレビの電源などを製造している。

3）Factory Automation の略。工場の生産機構を自動化・機械化すること。

○松下寿電子工業株式会社25周年社史編纂委員会（平成７）：松下寿電子工業25年のあゆみ

○川内町（昭和43）：川内町誌

○愛媛経済レポート（平成19）：2008年版会社年鑑・出先年鑑

松山東高校　加藤　伸弥
川之江高校　國田　誠司
松山工業高校　三好　哲司
東　温　市　渡部　文也

Ⅳ 商　　業

1　東温市の商業活動の現況

東温市の中心商店街は、伊予鉄道横河原線の終点横河原駅を中心に集積する横河原商店街と牛渕団地駅周辺に集積する牛渕団地商店街の２つの商店街であり、いずれも駅前立地型の商店街としての性格を有している。

東温市は、従来から松山市への商業依存度が高く、松山市への顧客流失が顕著であった。平成６年(1994)11月の松山自動車道川内ICの完成や周辺道路網の整備は、市内幹線道路を通行する車客を飛躍的に増大させることとなり、市内において大型店やロードサイド店の出店・増床を活発化させた。その結果、地元商店街での買い物の機会が減少し、ますます消費者離れが進行している。

平成19年における東温市の卸・小売業の概要をみると、商店数は335店、うち卸売業57店（17.0％）、小売業278店（83.0％）となっている。年間商品販売額は781.5億円で、その内訳は卸売業475.6億円（60.9％）、小売業305.9億円（39.1％）となっている（表１）。卸売業のなかでは、飲食料品の割合が高いが、商品販売額に占める卸売業のウエイトは、愛媛県内市部の平均値61.5％と比較すると同様の状況にある。小売業では飲食料品店が83店あり、小売商店数の29.9％、小売商品販売額の22.5％を占め、多くの市町村と同様に最も多い業種である（表２）。

東温市の商業規模を県全体に占める構成比でみると、商店数は1.7％、従業員数は2.0％、商品販売額は2.2％となっている。愛媛県全体に占める東温市の人口の構成比は2.4％（11市中最少）で、商店数・従業員数は人口規模にほぼ比例しているが、商品販売額で

表１　愛媛県11市の商業概要（平成19年）

	人　口		商店数			人口千人当たり商店数(店)	従業者数(人)	１店舗当たり従業者数(人)	年間商品販売額		
	人口数(人)	構成比(％)	卸売業(店)	小売業(店)	合　計(店)				卸売業(億円)	小売業(億円)	合　計(億円)
県計	1,467,815	100.0	4,119	15,454	19,573	13.3	119,530	6.1	21,336.9	13,588.9	34,925.8
市計	1,320,310	89.9	3,874	13,617	17,491	13.2	110,367	6.3	20,298.0	12,728.2	33,026.2
郡計	147,505	10.1	245	1,837	2,082	14.1	9,163	4.4	1,038.9	860.7	1,899.6
松山市	514,937	35.1	1,530	4,241	5,771	11.2	46,123	8.0	9,195.0	5,450.5	14,645.4
今治市	173,983	11.9	586	2,052	2,638	15.2	14,982	5.7	3,178.9	1,599.0	4,777.8
新居浜市	123,952	8.4	337	1,200	1,537	12.4	10,303	6.7	1,693.3	1,249.3	2,942.6
西条市	113,371	7.8	226	1,138	1,364	12.0	7,516	5.5	662.8	945.5	1,608.3
四国中央市	92,854	6.3	266	1,025	1,291	13.9	7,501	5.8	1,772.9	870.9	2,643.8
宇和島市	89,444	6.1	337	1,299	1,636	18.3	8,382	5.1	2,008.0	847.0	2,854.9
大洲市	50,786	3.5	159	742	901	17.7	4,310	4.8	345.4	511.1	856.5
西予市	44,948	3.1	103	614	717	16.0	2,929	4.1	170.6	338.0	508.6
八幡浜市	41,264	2.8	177	620	797	19.3	3,450	4.3	344.3	345.2	689.5
伊予市	39,493	2.7	96	408	504	12.8	2,527	5.0	451.3	265.9	717.2
東温市	**35,278**	**2.4**	**57**	**278**	**335**	**9.5**	**2,344**	**7.0**	**475.6**	**305.9**	**781.5**

注１）商業統計の中には飲食店は含まれていない。
注２）「統計からみた市町村のすがた（平成20年）」より山本清文作成

表２　東温市の産業分類別商店数・従業者数・年間商品販売額（平成19年）

産業分類		平成19年		
		商店数	従業者数	商品販売額（百万円）
総　数		335《100%》	2,344《100%》	78,149《100%》
卸売業	卸売業計	57《17.0》	581《24.8》	47,561《60.9》
	各種商品	1（1.2）	8（1.4）	X
	繊維・衣料等	1（1.2）	1（0.2）	X
	飲食料品	21（36.8）	269（46.3）	27,907（58.7）
	建築材料、鉱物・金属材料等	9（15.8）	29（5.0）	X
	機械器具	11（19.3）	47（8.1）	X
	その他	14（24.6）	227（39.1）	13,349（28.1）
小売業	小売業計	278《83.0》	1,763《75.2》	30,589《39.1》
	各種商品	3（1.1）	219（12.4）	6,605（21.6）
	織物・衣服・身のまわり品	52（18.7）	204（11.6）	2,630（8.6）
	飲食料品	83（29.9）	601（34.1）	6,896（22.5）
	自動車・自転車	23（8.3）	90（5.1）	X
	家具・じゅう器家庭用機械器具	17（6.1）	67（3.8）	X
	その他	100（36.0）	582（33.0）	12,574（41.1）

注１）飲食店を除く。
注２）《　》内は卸・小売業の割合（%）
（　）内はそれぞれ卸・小売業の内訳（%）
Xは非公開を示す。
注３）「愛媛県統計年鑑（平成20年）」より山本清文作成

は東温市より人口の多い伊予市、八幡浜市、西予市を上回っている。また、人口千人当たり商店数は9.5店と県平均13.3店を大きく下回り、松山市の第一次商圏内（時間距離で30分圏内）に組み込まれていることが影響していると考えられる。しかし一方で、１店舗当たり従業員数は7.0人で松山市の8.0人に次いで多く、相次ぐ大型店の出店によると推測できる（表１・２）。

東温市の商業規模を昭和63年（1988）と比較してみると、商店数は卸売業が67.6％増加したのに対し、小売業は平成14年（2002）の343店をピークとして16.0％減少し、全体では30店、8.2％の減少となっている（表３）。卸売業が大幅に増加した背景には、各業種の物流拠点として、トラック・ターミナルの立地がすすんだことが挙げられる。商店を規模別にみると、従業者１人～２人零細経営の店舗が昭和63年当時230店と全商店の63.0％を占めていたが、平成19年には40.3％に漸減する一方、従業者20人以上の中規模商店は８店舗から20店舗に漸増している。商店の規模拡大の状況は、小売業の１店舗当たりの従業者数の増加や売場面積の拡大にも明瞭に示されている。また、東温市の小売業の１店舗当たりの従業者数と売場面積の推移を県平均と比較してみると、平成６年の資料で県平均を上回ってから、その状態で現在に至っている（表３）。

表３　東温市における店舗数等の推移

		S63年	H３年	H６年	H９年	H14年	H19年
商店数	卸売業	34	36	37	50	52	57
	小売業	331	333	327	310	343	278
	計	365	369	364	360	395	335
規模別商店数	１～２	230	221	190	176	154	135
	３～４	69	79	71	67	80	71
	５～６	42	43	65	67	91	73
	10～19	16	16	22	34	45	36
	20～49	8	9	12	10	18	15
	50以上	0	1	4	6	7	5
１店当たりの従業者数	県平均	3.6	3.7	4.1	4.4	5.1	5.6
	東温市	**3.3**	**3.4**	**4.8**	**5.0**	**6.1**	**6.3**
１店当たりの売場面積	県平均	57.5	65.6	77.4	88.9	100.7	130.3
	東温市	**47.2**	**58.9**	**82.6**	**95.1**	**154.5**	**219.0**

注１）飲食店を除く。１店舗あたりの従業者数・売り場面積は小売業を対象としたものである。
平成14年以前については、旧重信町と旧川内町の統計から算出している。
注２）「統計からみた市町村のすがた（平成１・５・８・11・16・20年）」より山本清文作成

これらの統計から東温市の商業活動をまとめてみると、松山市に隣接し、その商圏内にありながら、県全体では人口規模以上の商業機能を果たしているといえる。　（山本　清文）

２　商店街の推移

(1)　横河原地区

横河原は、元来、重信川の渡津集落であったとされ

る。金刀比羅宮への参拝客や石鎚への登山客が、川上（旧川内町）で宿泊する予定のところ、重信川の川止めで宿泊を余儀なくされた場合の簡易宿泊地であったようだ。明治23年（1890）頃までは14戸の寒村であったと、『愛媛県史』に記載されている。

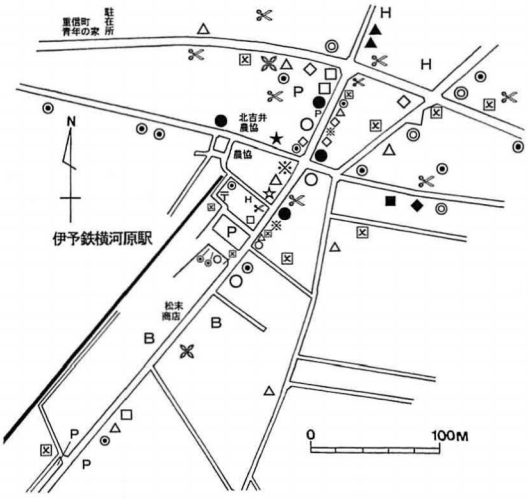
明治32年になると、伊予鉄道の路線が平井河原駅（明治35年から平井駅）から延伸されて、終着駅として横河原駅が開業した。この駅の開通によって、新たに集落拠点が生まれ、国鉄（現在のJR）予讃本線が開通するまでは、川上・三内地区（後の川内町の一部）や東予地域への窓口にもなっていたようだ。鉄道の影響力は相当なもので、貨物積み込みの引き込み支線が引かれ、駅前には運送店もあったという。人・物の流通が変化して、それに伴い、明治後半になって周辺環境が整備されていったといえる。

『横河原区誌』によると、昭和５年（1930）に、横河原協議組合長から北吉井村長あてに報告した商業別調では、「女髪結１・理髪３・洗濯業１・自転車商２・銭湯１・鮮魚売１・売薬商１・飲食10・表具師２・時計修理業２・人力車２・商業25・新聞１・材木商２・牛馬商１・鶏商１・牛肉商２・裁縫師１・苗木商２・散宿所１」の記載がある（商業に関係があると考えられるもののみ抜粋）。数字を合計しただけでも62件の商店が存在しており、大規模商店街といえる。更に、駅前の旭館では、地方巡業の芝居や映画なども上演されていたようだ。娯楽施設を伴う、中心商店街の様相がみてとれる。

その後、伊予鉄道横河原駅の利用者は、順調に推移したが、戦後の高度経済成長期に入ると、モータリゼーションの進展に伴って影をひそめることとなる。事実、横河原駅の利用も昭和50年代前半を境に減少する。伊予鉄道横河原駅の１日あたりの乗降客数は昭和47年が1,243人であったのが、昭和51年には1,879人に増加するが、昭和60年では1,299人となっている。物流の拠点として栄えた横河原の変貌に沿うように、商店街の活気は徐々に失われていったと考えられる。

今から約30年前の昭和52年の商店街の様子を住宅地図をもとに再現すると、図１のようになる。ちょうど横河原駅利用の過渡期にあたる。

駅前を中心に、北側の東西に延びる２本の道路沿いに多数の商店が確認できた。生鮮食料品や日用品などの他にも、一通りの品物が揃い、商店街を行き来することにより、十分な生活ができたようである。



● 生鮮食料品　◎ 米、酒、たばこ
○ その他の食料品　⊙ 飲食店、旅館・ホテル
☆ よろず屋、コンビニ　★ 娯楽・レジャー
□ 薬・化粧品　■ クリーニング　✂ 理美容
◇ 衣類・服飾・靴　◆ 金物・日用雑貨
△ 電気・カメラ・時計・眼鏡　⌘ 家具・寝具
▲ 書籍・文具・音楽　〒 郵便局　B 銀行
P 駐車場　H 病院、鍼灸院
⊠ その他（塾・自転車など）　※ 業種不明

図１　昭和52年の横河原商店街の状況

注）当時の住宅地図をもとに渡邉豊作成

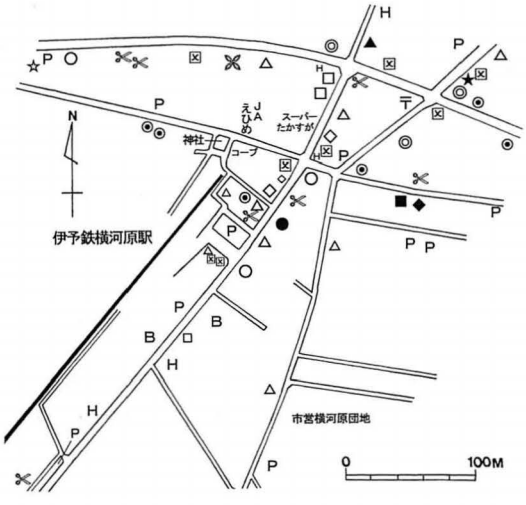


図２　平成20年の横河原商店街の状況

注１）住宅地図と現地調査をもとに渡邉豊・河本潤也作成
注２）凡例は図１と同じ

比較して、現在の横河原駅付近の商店街の様子を図２で示す。理美容室が比較的密集している特徴を持つ

が、駐車場となった所が駅以南に目立つ。理美容店の増加は、美容店の増加によるもので、カット以外の様々なケアを担当することで、若年層の顧客を取り込んだためだと考えられる。昭和52年（1977）の地図でも開業している店舗が現在まで存続（一部改築・名称変更なども含む）しているのは、病院や農協などを除き、十数店舗にとどまる。時代の大きな流れの中で、商店街も大きく変貌を遂げているようである。老舗の経営論に学ぶことも必要になってくるのではないか。

昭和59年に刊行された『重信町商工業の将来を求めて（重信町商工会）』では、商業の課題として、「商店街の再開発を促進し、商業地域としての環境整備が緊要の課題」と記され、いかに松山に流れる消費購買力を取り戻すかが議論されている。アンケート結果より、この頃には既に、旧重信町全体の６割弱が松山での購買となっていることを踏まえ、商店街の再開発についても、「共同店舗化」や「中小企業の共同・協同化」、「店舗の近代化」を求めている。

また、平成５年度には、旧重信町内に建設・開業が決まった、大規模商業施設であるフジグラン重信に対して、横河原商店街の活性化基本政策がまとめられた。本当に手厳しい現状分析に、商店街の危機感がにじみ出ている。振興策として、平成６年（1994）に開通した川内ICと国道11号バイパスの有効活用や、横河原駅をシンボルとしたリニューアル（再構築）の必要を求めている。さらに、緑をテーマとした景観整備を基盤とし、商店街全般の雰囲気の一体化を提案している。平成11年度・13年度と先進地視察、整備計画案や現状分析を繰り返し、商店街活性化の問題点は地元や行政・商工会などの意識として極めて高いといえる。これらの商店街振興策は、いつの時代も東温市の大きな課題のひとつに挙げられ、平成18年度の東温市総合計画の中にも「商店街の環境・景観整備」として盛り込まれた。しかし、現在、任意団体が振興活動で精力的に努力するも、地元と行政が一体となった、予算があまりかからず即効性を持った（魔法のような）整備案は見いだされていない。他商店街で実施しているスタンプカードや商店街クーポンのようなものも、過去に取り組み、十分な成果を得なかったようだ。

横河原商店街で買い物客に話を聞くと、「車の交通が激しく、落ち着いて買い物ができない」「簡単な買い物を子どもに頼もうとしても、危険だから頼めない」「駐車場がないので、車では買い物に行けない」「品揃えが悪い」という意見が多い。これは、同地区の活性化を検討する資料には必ず掲載されている周知の問題点と重複する。しかし、商店街の中に買い物客用の駐車場を確保するのは難しく、主要道路となっているこれらの道路の交通規制も難しいと感じた。横河原商店街が、久しく主催してきた夏の観月祭についても、現在では、市民一丸となった夏祭りを行うという趣旨から東温市や横河原商店街などが作る実行委員会が主体となって開催しており、ここにも（別の見方をすれば）商店街の体力の脆弱性が露呈しているといえる。ある店主は、「ここ十年間で、物販店は十件以上が閉店した。このままだと商店街とはいえなくなる」と指摘した。隣接する大型駐車場を備えた大規模店舗で買い物をすませる市民の割合も高くなり、地元商業者は苦しい経営を迫られているのも事実である。

そんな中で、独自に努力している店もある。通称「かどみせ」で有名な門田商店は、レトロアイスで人気を博している（写真１）。地元のマスコミに取り上げられ、客足が途切れない盛況ぶりだ。また、野間商店のとら巻きは、昔ながらの素朴な味わいが絶品の和菓子である。フジグラン重信で数量限定で販売された、地元の名品を集めた商品も好評であった。

大量生産では真似できない素朴さに惹かれている人は、案外多いのではないか。もちろん、近年においてマスメディアとのコラボレーションは欠くことができない。テレビで取り上げられたら、一度は足を運びたいと思う。実際、調査中に買い物に来た人からは「有名でしょう」「人気だから」といった意見があった。

写真１　横河原駅前通り（左手前が門田商店）
注）平成20年８月　渡邉豊撮影

しかし、それが、リピーターになるか否かは、その商品次第である。安くて目当てにできるものがあるのなら、人は遠方からでも通ってくる。「一商店一品の絶品」をみつけ、うまく消費者にアピールできれば面白い。「そこに行けば何でもある」商店街から、「そこに絶品を求めに行く」商店街へと活路を見いだすことも求められるのではなかろうか。

商店街の品揃えについては、ある高齢者が「私はこのくらいの品揃えでいい。あまり多いと、何を見ていいのか分からない。若い人は多くの中からお気に入りを選ぶだろうが、私はこの中で、一番好きなのを選ぶ。結果的には、そう変わらない。」と話した。大規模店舗の品揃えを多すぎると感じ、きさくに店主と会話を楽しみながら店内の商品を選ぶことを楽しみにしている人がいることも現実である。それよりもむしろ、「客が来ても誰も出て来ないのよね」と話した人の言葉の方が気になる。

また、レトロと汚いは異なる。やはり、看板がサビついているような商店へは、常連客でない限り、敬遠したい。商店街全体の景観を、あるテーマに沿って統一すれば、美しさも栄えるだろうが、多大な経費を伴う。難しいテーマだとは思うが、統一性を示して成功した熊本の黒川温泉街などの例をとっても、検討するに十分値する。

さらに、月並みではあるが、空き店舗などをコミュニティスペースとして開放し、お茶コーナー・休憩所として活用してはどうだろうか。「一商店一品の絶品」の紹介や販売、高校生のアンテナショップなど、校外体験学習の場としても利用できるものと考える。商店街のシンボルキャラクターを作成することも意外に効果は大きい。「商店街経営者のためのIT講座」や「市民向けIT講座」、「マーケティングに関する講座」などを開催することにより、商店街自体のスキルアップや意欲あるまちづくりの担い手の育成が図られる。手軽に賑わいが創出できるようなアイディアは、案外地道な努力と結びついているのかも知れない。

(2) 川内支所周辺地区

旧川内町は平成６年（1994）の松山自動車道川内ICや国道11号バイパスの開通によって、松山平野の東の入り口となった。国道11号沿いに位置する２つの大型スーパーが地元商業の中心となっているが、松山市内やフジグラン重信などに流れる購買層も多く、商業密度は低い。

天神商店街は、旧川内町で最も規模の大きな商店街で、現在では、川内支所や川上神社などを持つ旧街道沿いに全長数百ｍ以上に商店が連なる。この道路は、金毘羅街道と石鎚参拝道の宿場町として栄えたもので、交通の要所として存在した歴史を持つ。『愛媛県史』によると、明治初期には川上大宮五柱大明神（現在の川上神社）を中心にして、500ｍの街道沿いに宿泊施設や商店が建ち並んでいた。現在でも、昔ながらの街道沿いに商店が並ぶ景色は、風情や厳かさ、落ち着いた統一感がある。しかし、道路幅も５ｍもなく狭い状況で、歩道や専用の駐車場の確保が難しい。商店街の中には一般民家も数多く存在している。川内支所など地域の行政の中心があるにしては、閑散としている印象を受けた。

図３は、昭和52年（1977）の天神商店街の状況である。当時から、一般民家と共存し、最寄りの店が集まって商店街を形成していることが分かる。これは、図４にある現在の商店街の状況と比較しても、理美容店の増加が目立つ程度で、大きく変化しない。

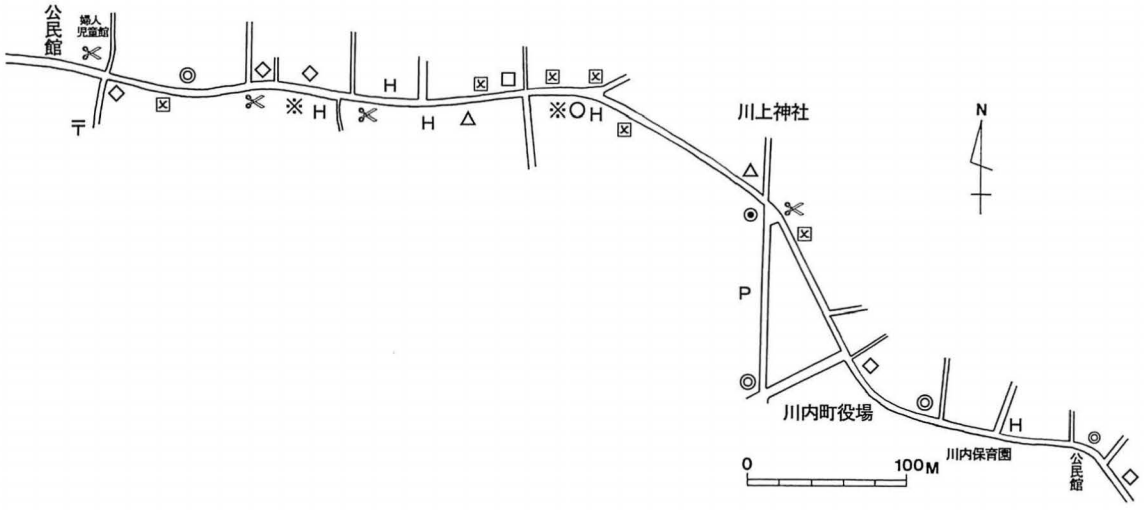
南側に位置する国道11号が基幹道路となっているため、自動車の往来は少ないが、調査中に買い物客に出会うことは稀であった。旧街道や川上神社古墳などの歴史的な遺産を持っている商店街だけに、趣のある街づくりを期待したい。のんびりと散策できる状況が演出できれば、更なる発展につながるのではないだろうか。なお、特筆すべきは、真新しい飲食店が商店街の中にオープンしていたことである。外観からは、裏通りにあたる静かさや落ち着きを活かしたものとなっていた。川内町商工会が発行する資料には、飲食業界について「小規模であり、充実がのぞまれている」と記されていて、飲食店舗数の少なさは、以前から旧川内町の問題点のひとつであった。

(3) その他の地区

(ｱ) 伊予鉄道横河原線の駅周辺

牛渕地区は、牛渕駅（昭和42年までは田窪駅と称した）や昭和45年に新設された牛渕団地前駅周辺域が中心となる。

図５は、牛渕駅前の商店の変遷を示している。平日の昼間ということもあってか、人通りは少なく、駅前



● 生鮮食料品　◎ 米、酒、たばこ　○ その他の食料品　⊙ 飲食店、旅館・ホテル　□ 薬・化粧品　✂ 理美容
◇ 衣類・服飾・靴　◆ 金物・日用雑貨　△ 電気・カメラ・時計・眼鏡　〒 郵便局　B 銀行　P 駐車場　H 病院、鍼灸院
⊠ その他（塾・自転車など）　※ 業種不明

図３　昭和52（1977）年の天神商店街の状況

注）住宅地図から渡邉豊作成

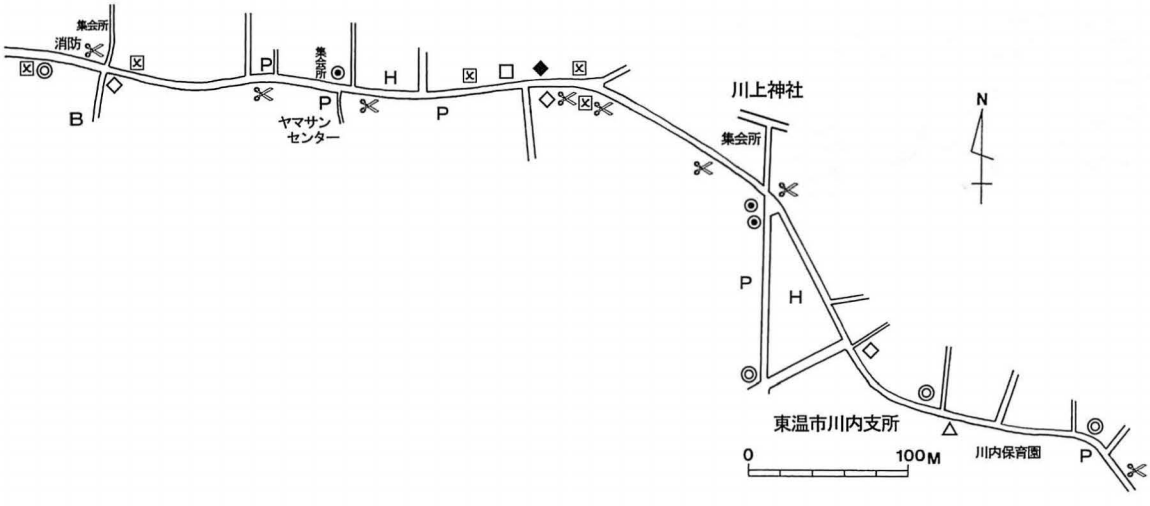


図４　平成20（2008）年の天神商店街の状況

注１）住宅地図と現地調査をもとに渡邉豊・河本潤也作成
注２）凡例は図３と同じ

にかつてあった商店は影をひそめている。商店でも店先に清涼飲料水の自動販売機が並び、全体に重い影がかかった感じである（写真２）。平成20年（2008）から導入された、タバコの自動販売機での成人識別導入によって、痛手を受けた所も多いと聞く。地域の人は、「かつては、通勤や通学で朝と夕方は賑わっていた。」と話した。現在でも、朝夕は通学する高校生などが通行するが、「駅前に商店がある良さは何も感じないのではないか。むしろ、袋小路のような感じがして、悪いともいえる。」のだそうだ。また、ある店員は、「今でも、この地で商売ができているのは、すべて、常連客のおかげ。彼らは、この店を目当てに来てくれる。

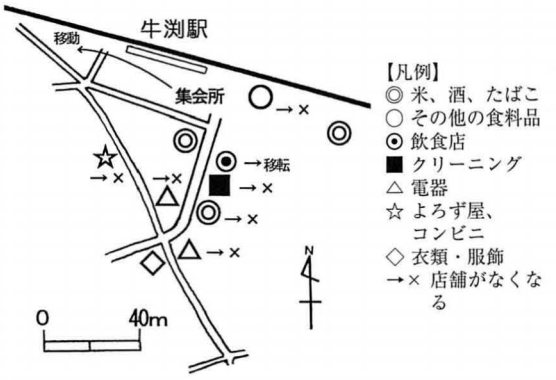


図5　牛渕駅前の変化（昭和52年から平成20年）

注）住宅地図と現地調査をもとに渡邉豊作成

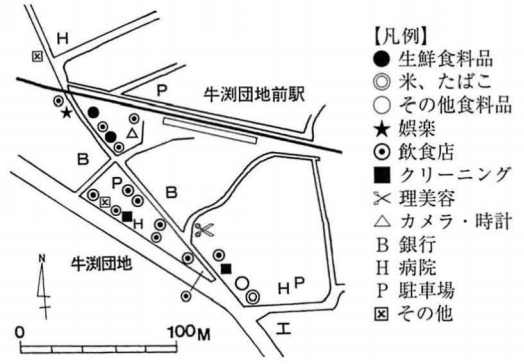


図6　牛渕団地前駅周辺の現状（平成20年）

注）住宅地図と現地調査をもとに渡邉豊作成

写真2　古いたたずまいを残す牛渕駅前の酒店

注）平成20年8月　渡邉豊撮影

常連客がもし来てくれなくなったら商売として成り立たない。」と話し、「見てご覧なさい。外に人はいますか。こんな状況で、どうして飛び込みの客が来てくれるでしょうか。」とまとめた。この店舗は、いかに常連客に魅力ある店舗にするかが、生き残りのカギであると教えてくれた。

この傾向は、田窪駅前や田窪交差点付近、見奈良駅周辺域にもみえる現象である。見奈良の商店街は、東温高校の生徒の通学路にもなっているため、活性化が期待されるものの、現実にはなかなか厳しいようである。商店街からはやや外れるが、古くから見奈良でスーパーを営む店主は、「以前は十分スーパーの売り上げで過ごせたが、自動車の普及と大型スーパーマーケットの進出が本格化した20～30年ほど前から、徐々に経営が苦しくなった。現在では、（他の施設などへの）納品による収入の割合が高くなり、スーパーだけでは生計がたたない。」と話した。生鮮食料品や加工品などの食品を中心に、店内には商品が所狭しとひしめいている。気さくな人柄から、彼女と会話を楽しみに来る人も多く、地元の中では存在の大きい店舗になっている。

反対に、牛渕団地前の駅前は、松山市との境界に位置し、牛渕団地を抱えていることからも、他とは状況が異なる。最寄り品を中心に取り扱う通常の商店街ではなく、居酒屋などの飲食店を中心に、２つの銀行がある。駅の乗降客数も多く、団地と駅とが結びついて発達している様子がうかがえる。通行客の話によっても、利便性は高いとのことである。松山に近いという地理的条件を備え、今後の発展も見込める地区となっている。近くに、複数の大型スーパーマーケットが存在しているため、食料品や日用品はこれらの施設に任せて、ある程度、特化した形での展開といえる（図６）。

（渡邉　豊）

(イ)　愛大病院前地区

愛媛大学医学部および同附属病院などの設置によって、旧重信町の都市化の牽引力となった地域である。伊予鉄道も、昭和56年に愛大医学部南口駅を新設して営業を開始している。この地域では、通常の日常生活に加えて、ビジネスホテルや進物店などの入退院に関わる施設が目につき、明らかに通院・入院などの患者や付き添い人を対象とした商店も多い。店の軒先で生花を販売している店舗も見られた。

また、すぐ近くには大型スーパーも出店しており、愛大病院の利用者にとって、十分に必要な物が購入で

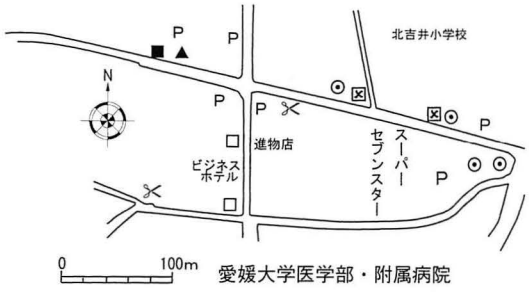


図7　愛媛大学医学部前の現状（平成20年）

注1）住宅地図と現地調査をもとに河本潤也作成
注2）凡例は図6と同じ

きるような状況になっている。このスーパーは、近隣の横河原を含んだ地域の多くを商圏としており、地元の人々にとっても利便性の高いものとなっている。店舗も多く、空きスペースはあまり見あたらない。愛大病院などからの収益を考えての出店となるであろうが、小規模店舗は生き残りに必死の状態となっている（図7）。　（河本　潤也）

(4)　コンビニエンスストアの展開

東温市内に出店するコンビニエンスストア（以下コンビニと略す）は、平成20年（2008）で、タウンページなどから10店舗を確認することができる（図8）。ほとんどが、全国展開をしている大手のチェーン店である。その内訳として、3社が市内に2店舗を、4社が1店舗を構えている（同じ親会社で店舗名の違う店を展開している大手もあるが、今回は店舗名ごとに区分した）。東温市は約35,000人の人口を有していることから、コンビニ1店当たりの人口は約3,500人となる。これは、通常、大手コンビニチェーンが出店する目安である「人口3,000人につき1店舗」よりやや少ない数字である。しかし、平成18年度では12店舗あったようで、利用者減などによって減少傾向にある。

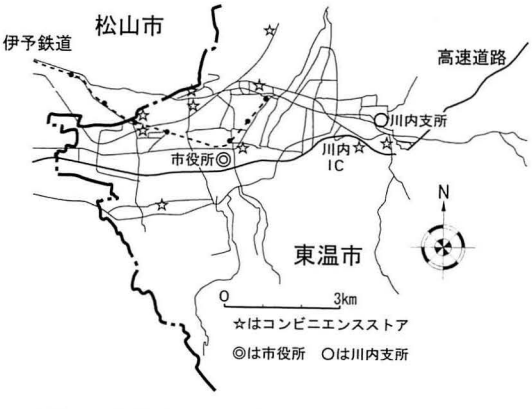


図8　東温市のコンビニエンスストアの分布

注）一部は平成20年8月に現場調査を実施し、それ以外はタウンページなどにて位置を確認して渡邉豊作成。

出店位置については、大部分が旧重信町に位置し、国道11号バイパス沿いなどの幹線道路に面した出店が多い。これらの店舗のほとんどが、トラック等の大型車用駐車場を有している。ドライバーの獲得を狙うという、郊外型コンビニの代表的例であると考えられる。また、フジグラン重信や四国がんセンターに近く、需要が見込める地域に新たに出店した店もある。浮沈の激しい業界だけに、より厳しい生き残り競争がみられる。あるコンビニの店員に話を聞くと、出店場所は、本部が人口や交通量などから試算して決めるが、好立地とみなされた場所には複数のチェーンが出店するためにコンビニが集中するのだそうだ。いわゆるコンビニ同士の足の引っ張り合いが起き、新規のコンビニが周辺域に出店した後では、売り上げが1割近くも減少することもあるという。

かつては、愛大病院付近にも3店舗が集中していた。ターゲットは、地域住人もさることながら、病院関係者や患者の家族などを見越した出店であったであろう。県内外からの需要が見込める場所に出店することによって、より多くの利益を獲得できるとした結果である。しかし、大型スーパーなどの進出によって、それぞれの店舗を維持することは難しかったようである。

このようなコンビニの展開が増加すればするだけ、中心商店街の意義は薄れていくというジレンマに陥る。東温市でも愛大病院付近へのコンビニ出店の影響が、徒歩・自転車圏内の横河原商店街にも現れていたという。ある店主は「コンビニばかりが原因とはいえないが、売上高は数年前の半分程度である。未来への期待もなく、単なる金儲けだけなら、とうに店をたたんでいる」と話す。一時期は、若者を地域へ呼び込むことができ、地元の活性化に十分活用できる戦力だとコンビニの出店を歓迎した時もあったが、そこに行けば生活に必要なものが何でもあるという小型店舗の集合は、地元商店街の各商店（特に食品関連業）にとって脅威となっている。　（渡邉　豊）

3　大規模小売店舗の展開

(1)　東温市の商業環境について

前述のとおり、東温市内には既存の商店街があるが、モータリーゼーションの進展や区画整理事業などにより、地元以外の大型店舗が進出し、図９及び表４にみられるように大型店の進出が顕著になった。大型店とは、大規模小売店舗法に基づく大型店（店舗面積が1,000㎡を超える店舗）をさす。出店する大型店の規模は、年々大きくなっている傾向にある。表４の大型店の売場面積総数は48,084㎡にもなり、小売業全体における大型店占有率は、平成14年（2002）時点で約84％にものぼっている（表５）。これは、全国にあっても例をみないほどの出店状況となっている。

東温市は立地上、従来から松山市への商業依存度が高い地域であったが、松山自動車道川内ICの完成や、それに伴う周辺道路網などのインフラ整備により、これらの店舗の出店や増床を活発化させる結果となった。平成５年に出店したフジグラン重信などは、区画整理事業に呼応して出店した例である。出店の理由としては、周辺環境への規制が通常出店に比較して緩和

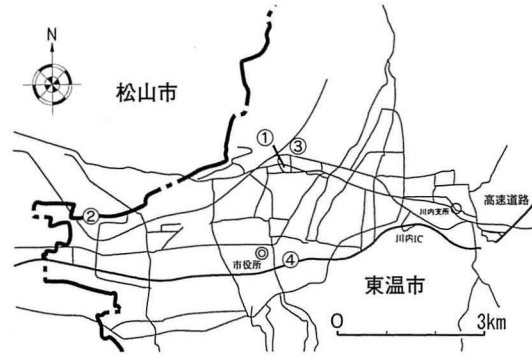


図９　東温市における大型店の進出状況

注）住宅地図と現地調査より兵頭俊二作成

される点や、周辺域での競争他店舗が少なく、新たな顧客を獲得しやすい点などが考えられる。事業の推進母体は、地方公共団体であり、公共性の高い事業によって商業の郊外化を促進していく結果となった。商店街の衰退は、周知のとおりである。

大型店舗の進出に伴う東温市の環境としては、表６より地元購買率は119.7％で流入傾向にあり、流入の大きさは平成14年度データによると、松山市に次いで県下２番目の大きさにあることが分かる。その結果、小規模小売店は年々売り上げを落としており、商店街

表４　東温市における大型店の店舗一覧

	店舗名	出店年・増床年	売場面積	備　　考
①	セブンスター	平成４年増床 （昭和58年出店）	1,260㎡	
②	フジグラン重信	平成５年６月出店 平成７年６月増床	19,648㎡	平成14年フジショッピングスクエア重信店から、フジグラン重信に名称変更
		平成14年３月増床		
②	ダイキEX重信	平成12年12月増床	10,000㎡	出店時の店舗名はディックEX重信
③	しまむら	平成11年６月出店	998㎡	
④	レスパスシティー	平成12年10月出店	16,178㎡	レスパスシティーはパルティフジ見奈良ショッピングセンター、メディコ、ディック、アウトレットモールの合計となる

注１）東温市商工会議所資料より井上浩作成

表５　小売業統計データの推移（重信町）

	平成３年	平成６年	平成９年	平成11年	平成14年
商店数	199店	202店	198店	202店	205店
従業員数	681人	1,065人	1,082人	1,199人	×
年間商品販売額	10,469	17,332	20,334	21,021	28,683
売り場面積	12,366㎡	18,638㎡	23,789㎡	21,284㎡	57,004㎡

注１）東温市商工会議所資料より井上浩作成
注２）年間商品販売の単位は百万円、×は非公開を示す

表６　近隣市町村の地元購買率の推移

（単位：％）

	昭和63年	平成３年	平成６年	平成14年
重信町	**45.5**	**51.0**	**78.9**	**119.7**
川内町	**63.0**	**69.0**	**68.3**	**54.9**
久万町	72.9	72.6	73.9	67.7
砥部町	71.9	76.3	96.6	89.2
松山市	134.6	132.4	125.4	120.2

注）東温市商工会議所資料より井上浩作成

での買い物の機会が減少し、ますます消費者の商店街離れが進んでいる。これらは、国道・県道の主要幹線道路が整備されており、伊予鉄道横河原線の乗降客数は減少傾向にあること、県平均と比較すると第３次産業の就業人口が高くて核家族化が進行していることなどが要因として挙げられる。

大型店舗の進出に伴う更なる問題点は、地元の卸売業者との取引である。生鮮食品については地元業者の営業努力によって取引が発生する可能性があるかもしれない。しかし、運搬や流通に関しては、全国の大手が配送を担当しており、地元業者の参入する余地は少ない。消耗品等や備品については全国展開している店舗の子会社などが納品しているケースが多く、地元企業のプラスになることは少ない。松山などにメーカーの営業所がある場合には、地元に還元されることも期待できるが、地域の活性化は難しい。特に、平成20年（2008）に始まった世界的な金融危機に端を発した不況の中で、個人消費の急速な冷え込みなどで、大型店はこれまでの規模拡大から効率化重視に視点を変える方向となるであろう。

写真３　レスパスシティー

注）平成20年８月　兵頭俊二撮影

このような中で平成19年に改正された都市計画法が全面施行され、中心市街地活性化法などと合わせたまちづくり三法が改正された。10,000㎡を超える大型商業施設の郊外立地が難しくなって、大型店の出店に歯止めがかかる内容である。そうなれば、大型店舗は、既存の施設を利用して、いかに魅力ある空間を演出するのかが浮沈のカギとなるであろう。新鮮野菜や魚などの朝市のような形で地元生産者と交流している店舗は多いが、今まであまり協力関係になかった、地元商店街とのコラボレーションも今後は選択肢のひとつに入るものと考えている。　（井上　浩）

(2)　フジグラン重信

フジグラン重信は平成５年６月、当時の重信町大字北野田に第40号店として開店した。当初の名称は「フジショッピングスクェア重信店」で、その後同７年に増床、さらに12年に、隣接する㈱NTT西日本の総合グラウンドであった敷地をダイキ㈱と共に借地することになり、13年６月には愛媛県に大規模小売店舗立地法に基づく変更事項を届け出た。そして翌14年３月に「フジグラン重信」としてリニューアルオープンした（写真４）。

写真４　フジグラン重信（商品搬入口より）

注）平成20年８月　兵頭俊二撮影

フジグラン重信の開設は、重信町が進めていた土地区画整理事業との関わりが深い。同町は平成元年10月から、「鎮守の森の　緑ゆたかな　まちづくり」をテーマに掲げて、野田地区の土地区画整理事業に着手していた。

野田地区は同町の最西端に位置する平野部で、松山市に隣接し、国道11号や県道森松・重信線などの主要道路と、伊予鉄道横河原線が通っている。重信町西部は松山市への至近な通勤圏のため、横河原線沿線には県営牛渕団地などの新興住宅団地が開発されるなど、農村的な景観からの変貌が著しい地域であった。

この土地区画整理事業は松山広域都市計画事業の一環として策定されたもので、区画内には都市計画道路や区画道路を整備し、商業施設や公園などを配備して良好な住環境を創設するものであった。フジグラン重信の開店は、こうした野田地区土地区画整理事業に参画したものであった（図10）。

出店当初の概要は表７のとおりで、投資総額は45億円、年商48億円を見込んでおり、従業者は100人であった。

平成７年（1995）６月に行われた増床により延床面積が17,270㎡に増加し、店舗面積も8,194㎡になった。このときの投資資金は1.5億円で、これにより従業者数が８時間換算で140人となり、駐車台数も1,000台に増加した。また、年商は74億円を見込んでいた。

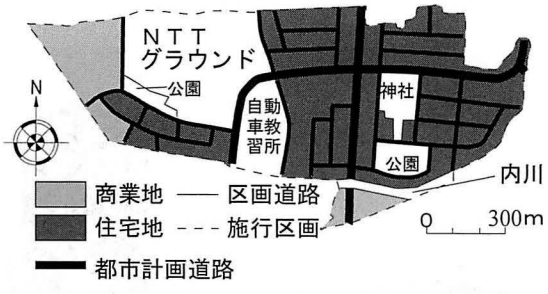


図10　野田土地区画整理事業における土地利用計画

注）「土地区画整理事業による野田地区のまちづくり事業完成記念誌」をもとに門田邦彦作成

表７　フジグラン重信の概要

	平成５年	平成14年
敷地面積	26,382㎡	64,195㎡
延床面積	16,992㎡	31,175㎡
店舗面積	6,000㎡	19,648㎡
直営店	4,000㎡	13,668㎡
テナント	2,000㎡	5,980㎡
駐車台数	800台	1,600台

注）「『ショッピングスクェア重信店』オープンのお知らせ」等により門田邦彦作成

平成13年に着手したリニューアルは、東隣のNTT西日本の敷地のうち約25,000㎡を借地して実施したもので、そこには食料品や家庭用品等を扱うグランヴェスタ重信店と各種専門店が入居するグランモール並びに別棟の専門店棟を平成14年３月１日に新設した。また、従来の店舗は２月末に一時閉店して改装し、３月下旬に衣料品等を扱うグランフジ重信店としてオープンした。

このフジグラン重信は、平成元年12月に松山市宮西に開店したフジグラン松山、平成20年４月に松前町に開店したエミフル松前とともに、松山エリアの３大拠点として位置づけられている。隣接地には平成12年に「ディックEX重信（現「ダイキEX重信」）」が開店し、松山平野東部における総合商業施設を構成している。

（門田　邦彦）

４　周辺地域での商業活動

(1)　聞き取り調査を実施した２商店

河之内の音田に位置する高須賀商店（写真５）の前には松尾山金毘羅寺と惣河内神社が隣接している。おばあちゃんが一人で切り盛りしているよろず屋で、かつては、服と鮮魚を取り扱わないだけで、たいていのものは置いていたという。また、店前にあった金毘羅前のバス停は、松山方面の始発にあたり、「いつも大勢の人がバスを待っていて、ここで満員になった。」と懐かしく話をしていただいた。

写真５　高須賀商店

注）平成20年８月　田口昭彦撮影

「金毘羅さん」として親しまれている松尾山金毘羅寺は長寛年間（1163～1165）の創立で称明寺と称されていたが、慶長年間（1596～1615）、加藤嘉明公によって「金毘羅寺」と改められた。寺の本堂の前には嘉明公の手植えといわれる４本の杉がそびえ、現在、市指定の天然記念物となっている。かつて金毘羅寺の春祭りは大変賑わっており、高須賀商店では食事をとることもできないくらいお客さんへの応対に追われていたそうである。

河之内には黒森峠へと通じる道が通っている。黒森峠はかつて面河と通じる重要な街道の一つであった。そのため、河之内周辺には問屋が多数あり、面河の産物が一日に馬20頭ほどによって運ばれてきていた。

しかし、昭和42年（1967）に三坂峠が開通すると状況は大きく変化する。交通量の激減にあわせ、周辺の問屋や商店は衰退し、今では音田周辺には高須賀商店を残すのみになっている。「周りが寂しくなって心細いときもあるが、地元の皆さんがよく来てくれるから、それが生きがいになって続けられる。いつ終わりになるか分からないが、店をすることは楽しみ。」と笑顔をみせてくれた。地域の中で、重要な役割を担っている。

また、白猪ノ滝の入り口には白猪屋がある（写真６）。食品から衣類まで扱う地域のよろず屋である。中心商店街まで遠いこの地域の人々にとっては欠かすことのできないお店であると同時に、白猪ノ滝を訪れる観光客を対象としたみやげ物店としての性格も持つ。「白猪ノ滝がなければ、ここで店はできない。」と女主人は話され、観光に根づいた店舗であることを強調された。客も休日や祝祭日が多いという。そのため、日頃から観光資源である白猪ノ滝には強い関心を示し、観光客に少しでも良い雰囲気でいて欲しいと、店主は白猪ノ滝の駐車場周辺のアジサイの管理を自主的にしており、愛媛新聞にもその取り組みが紹介されていた（平成20年６月20日付け）。

白猪屋の主力商品は、地元でとれるはちみつや手作りこんにゃくなどである。毎年11月３日に開催され、紅葉を楽しむ大勢の人々で賑わう「白猪ノ滝まつり」の時期には、店先でこんにゃく作りを実演するため、店頭には大量の薪が山積みされていた。地元の人は「地域にとってはなくてはならない存在」と評価している。

白猪ノ滝は皿ヶ嶺連峰県立自然公園の中にある高さ96mの滝である。重信川の上流、表川白猪越の渓にかかり、その落下する姿は四季それぞれに美しい景色を見せる。秋の紅葉も華やかであるが、特に冬の風景は幻想的である。厳しい寒さが数日続くと、滝の水が凍りついて滝全体がまるで氷の彫刻のような姿を見せる。周辺域の観光資源を取り込んだ店舗として、重要な役割を担っている。（田口　昭彦）

写真６　白猪屋

注１）平成20年８月　田口昭彦撮影
注２）店舗前のマキは、こんにゃく作りに使用する。

(2)　周辺域を支える商業

(ア)　生活協同組合の共同購入

周辺地域の住民の一つの購買行動は生協の共同購入を利用する場合である。東温市では、奥松瀬川（おくまつせがわ）、鳥ノ子（とりのこ）、滑川（なめがわ）、上林（かみはやし）、河之内、大平（おおひら）の６地区で生活協同組合コープえひめの共同購入を利用している（図11）。

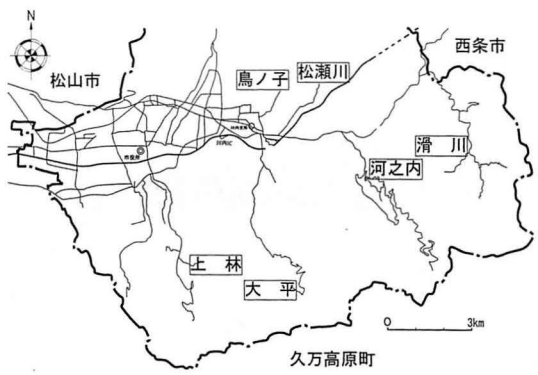


図11　東温市周辺地域におけるコープえひめの配送先

注）聞き取り調査により門田邦彦作成

コープえひめの共同購入事業は、複数の組合員で構成する「班」を単位として、組合員が注文した商品を週に一度配達するもので、決められた曜日・時間にコープのトラックで届けられる。組合員は商品のカタログを見て１週間前に注文し、配達時に翌週の商品の注文書を提出するという仕組みになっている。

東温市におけるコープえひめの組合員は、平成20年（2008）３月末現在4,704人で、世帯数に占める比率は35.3％である。この比率は松山市の34.6％、伊予市の30.3％とほぼ類似しているが、周辺部における利用者は表８のとおりきわめて少数である。

このうち滑川は１グループと１人で構成されている。コープえひめでは平成８年度より個人への配達を組合員に委託する制度を始めたが、平成11年度からはコープのトラックによる個人別宅配事業を導入した。近年の暮らしの多様化に伴って消費者のライフスタイルやニーズが変化し、従来の「班」によらない利用者が増加しているという。

東温市や松山市東部への商品の配達はコープえひめ松山東支所が担当しており、松山市鷹子町の県道松山川内線沿いに配送センターがある（写真７）。

表８　東温市周辺地域における共同購入者数

地 域 名	利用者数	配達曜日
奥松瀬川	24人	水
鳥ノ子・滑川	11人	金
上林	23人	月
河之内	23人	木
大平	32人	金

注１）コープえひめ松山東支所での聞き取り調査により門田邦彦作成
注２）鳥ノ子と滑川は異なる地域であるが同一のトラックが配達している。

写真７　コープえひめ松山東支所配送センター
注）平成20年８月　門田邦彦撮影

図11はこれらの地域の位置を示したものであるが、これらの地域はいずれも人口減少の著しい過疎地域で、人口の高齢化も進んでいる。コープえひめの共同購入や個別宅配事業は、こうした周辺地域の高齢化した市民にとり貴重な購買の機会となっている。

（門田　邦彦）

(イ)　行商車での行商活動

聞き取りによると、東温市では周辺地域に行商活動を実施している例が、現在も存在している。東温市の商業を支えているのは、フジグラン重信などの大規模店舗と地元商店街が中心である。しかし、過去に行商など地域に根ざした地道な取組について取りあげた例が少ないことから、今回は、できるだけ行商活動の実態を調査することとした。

東温市は、それぞれの谷筋に小規模集落が相当数形成されている。そのうち、日浦・狩場・海上（かいしょ）・九騎（くき）・藤之内などの地区で聞き取り調査を実施した。その結果、東温市には、数件の行商例があり、その大部分は軽四トラックで定期的（一部不定期）に行商活動を行っているものであった。商品は、例えば、もんぺ、塩鯖など単体の主力商品を持ち、それ以外の日用品を車に積める限り持つ場合が多い。利用者は、ほとんどが高齢者であり、車やバイクの免許を持っていない女性が中心である。利用者の話では、行商活動がなくなれば生活がままならない場合が多く、特に路線バスなどの公共の交通手段から遠い地区では切実であるようだった。海上地区での聞き取り調査では、路線バスは運行されているが、休日など学校が休みの時は運休となるため、集落に孤立するとのことである。「車がないとどこにも行けない。」と話をされる方が意外に多く存在した。また、どことなく行商車を楽しみに待っている様子がうかがえ、変化の乏しい日々の生活の中で、行商業者との会話を楽しみ、それを生きがいのひとつにしている人も多いと感じた。

聞き取り調査の中で、どこの集落でも名前が出てくる行商業者がいた。彼は、２ｔ車で月曜日から土曜日まで毎日、定期的に東温市のほぼすべての周辺集落に出向いている。月・木曜日には上林地区を中心にまわり、火曜日は山之内と井内、水・土曜日は河之内、金曜日は滑川を巡回している（図12）。巡回コースは、地区の主要道路のほとんどすべてを通り、お得意さん

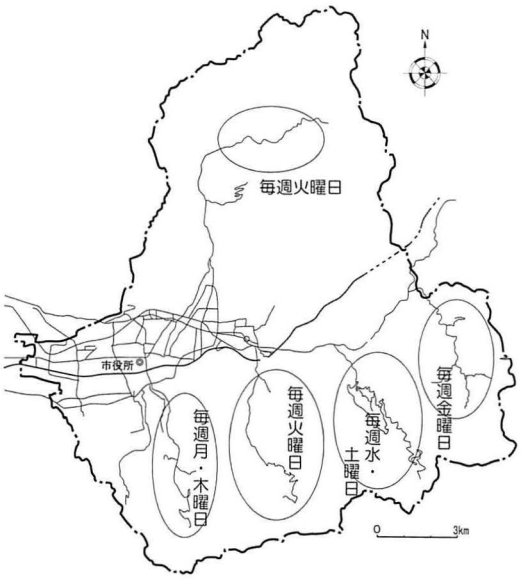


図12　行商業者の巡回地域と曜日

注）行商業者や地域住人の聞き取り調査より渡邉豊作成

の家の前や、車が止まるスペースがある所に停車して、マイクで来訪を告げる。時間もほぼ正確で、それぞれの場所の来訪時間は利用者には周知されており、やきもきしながら待つこともない。必要な住人が、出向いて、商品を購入することになる。周囲に、個人商店などの小売販売店がある周囲では停車しない。取り扱っている商品は、多岐にわたり、衣類を置いていない程度で、パン・菓子・肉・味噌・インスタント食品・日用品・線香・塩漬け魚・タオル・雑誌類などほとんどの食料品や日用雑貨が所狭しとひしめいていた（写真9・10)。値段はやや高めのようで、購入者の大部分は1,000円以下の買い物をしていた。私が話をうかがった時には、4人の人が出てきて、3人の人が購入した。パン・ゴム紐・ローソク・缶詰などを購入していたようである。

行商業者に話を聞くと、行商を開始したのは昭和60年頃で、その頃は、いわゆる行商のライバルが沢山いたそうである。それが、現在、これだけの品揃えを持つ業者は少なくなったという。「毎日、朝4時30分に起き、松山市中央卸売市場で仕入れて、昼頃から各集落を巡回する。」と話す姿からは、誇りのようなものを感じた。「これだけ車が多くなると、利益はほとんどない。人が減ってきているのは、年々、肌で感じる。」

写真8　田園地域を駆け巡る行商車（日浦地区）

注）平成20年8月　渡邉豊撮影

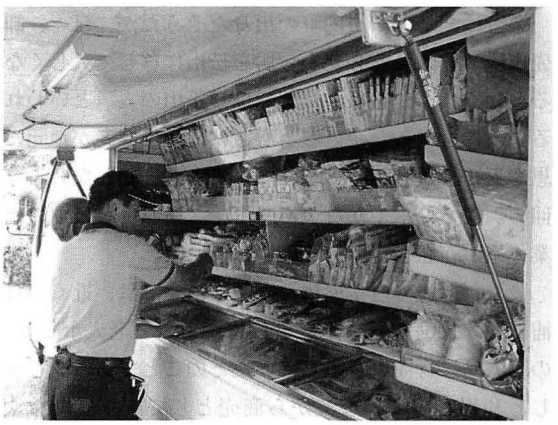


写真9　商品を満載した行商車

注）平成20年8月　渡邉豊撮影

写真10　商品を満載した行商車

注）平成20年8月　渡邉豊撮影

「私が一人で車に乗って行商活動をしている。現在は60歳だが、あと10年できるかどうか。後継者は必要ない。私が行商をできなくなったら、この商売は終わりになるだろう。」「これだけ車が普及したら、行商車などは必要ないという気持ちになる時もある。」「定期的に集落を巡回しているから、私をあてにしてくれている人がいる。あてにされたら、行かない訳にはいかない。しんどいのに無理してまわった時もある。」と忙しい時間を割いて話してくれた。各集落のお得意さんには、連絡先の入った名刺を渡しておき、普段は持ち運ばない物でも、事前に電話連絡を受けたら仕入れておいて、定期の行商活動で配達するとのこと。「今のままでは、衰退は免れないので、少しでも長く生きられるようにアイディアを出さなければならない。」とまとめた。

業者は、地元旧川内町の出身だそうだが、日々、卸売市場で仕入れる必要から居を松山に移して久しくなるという。いつしか、一部では“松山の人”といわれるようにもなったが、もともとは地元出身者が地元に恩を返そうとして活動されているのかも知れない。今回の調査で、華やかなデパートやスーパーとは別の商業体系が存在していることを痛感した。

また、前述の白猪屋は、十数年前までは、近くの日浦地区、面河の笠方地区、三恵ホーム（老人ホーム）の三方向に行商車を出していたとのことである。しかし、利用者の大幅な減から商売として成り立たなくなったり、ご主人を病気で失ったことを契機に中止し、現在は、他の方にお願いして面河の笠方地区へは週1回の行商を行っているとのことである。

行商活動は、高齢者を中心に支えられ、根付いており、私たちの予想をはるかに超える活気があった。しかし、行商業者の高齢化と後継者の不足（商売として成り立たないという考えのもとで、後継者を養成しようという意識のない現実）など、今後の課題も多い。地域集落を陰から支える活動について、私たちはその重要性を認識し直す必要があるのではないか。

（渡邉　豊）

参考文献

○窪田重治（平成12年）：横河原駅前集落の立地と変貌『伊予史談』316号
○愛媛県（昭和59年）：愛媛県史地誌Ⅱ（中予）
○東温市横河原区（平成18年）：横河原区誌
○重信町商工会（平成14年）：平成13年度地域商業振興推進事業報告書　好きです　このまち　安心・あったか地元のお店
○重信町商工会（昭和59年）：重信町商工業の将来を求めて
○重信町商工会（平成12年）：横河原商店街活性化先進事業報告書－横河原YOUステーション－
○重信町商工会（平成11年）：重信町横河原商店街CI策定事業報告書－笑顔・真心・あったか横河原－
○重信町商工会（平成５年）：重信町横河原商店街活性化基本計画－21世紀への町づくり、ルネッサンス・重信－
○重信町商工会（平成16年）：重信町の商業環境について
○川内町商工会（平成８年）：川内町商工会小規模事業活性化ビジョン報告書
○愛媛県（平成９年）：重信町商業地域中小企業診断指導指針作成調査報告書
○財団法人えひめ産業振興財団（平成16年）：平成15年度中小小売商業商圏等調査事業報告書（中予編）
○重信町（平成元年）：重信町誌改訂版
○東温市（平成18年）：東温市総合計画あなたが創るとうおん未来プラン
○重信町川内町合併協議会（平成15年）：新市建設計画

松山中央高校　渡邉　豊
八幡浜高校　山本清文
松山中央高校　井上　浩
松山中央高校　田口昭彦
松山中央高校　兵頭俊二
松山中央高校　河本潤也
済美平成中等教育学校　門田邦彦

V 人　　口

1 概要

東温市は、昭和31年（1956）に町制を施行した重信町と川内町の両町が合併して、平成16年９月21日に誕生した。東温市は愛媛県のほぼ中央に位置するとともに県都松山市に隣接し、東西が23.1㎞、南北が25.5㎞からなり、合併によって市域は211.45㎢と大幅に拡大した。

人口規模を県内の他市部と比較すると（表１）、東温市は県内11市の中で最小である。昭和60年と平成17年（2005）の人口動態を指数でみると、県内のほとんどの市が減少を示しているのに対し、東温市は松山市とともに増加を示している。

東温市の人口動態を概観すると（表２）、昭和45年から平成５年にかけては、昭和50年を除いて人口増加が続いている。また、平成８年以降、自然減少が頻繁にみられるようになってからも、社会増加に支えられ、平成14年を除いて、人口の増加傾向は続いている。特に同７年には、昭和54年以降最大の635人の社会増加を記録している。これは平成元年に事業計画認可がおりた野田土地区画整理事業（27.3ha）の換地処分が８年から始まり、５年間で80％の宅地化率を達成し多くの企業が進出したほか、平成13年に組合設立許可のおりた田窪土地区画整理事業（5.0ha）の換地処分が同16年から始まり、４年間で70％の宅地化率を達成し、多くの団地などが建設されたことも一因である。また、大型ホームセンターディックEX重信のオープン、南方には平成７年の四国乳業の本社の移転やパナソニック四国エレクトロニクス株式会社の本社移転などもみられ、多くの雇用確保がなされたことも社会増加の一因である。東温市の世帯数は昭和40年5,370世帯であったが、同59年には9,000世帯を、平成４年には10,000世帯の大台を超え、世帯数はその後も毎年増加を続け、同19年には過去最高の13,391世帯（昭和40年を100とした指数は249.4）となっている。１世帯当たりの構成人数は昭和40年4.5人から平成19年2.6人と減少し、核家族化の進行が顕著である。

表１　愛媛県内11市の人口概要（平成17年）

市　名	総人口(人)	人口動態(人)	指数
四国中央市	92,854	△4,150	95.7
新居浜市	123,952	△8,596	93.5
西条市	113,371	△2,613	97.7
今治市	173,983	△23,792	88.0
松山市	514,937	48,596	110.4
東温市	**35,278**	**3,973**	**112.7**
伊予市	39,493	△2,814	93.3
大洲市	50,786	△6,476	88.7
八幡浜市	41,264	△12,359	77.0
西予市	44,948	△9,856	82.0
宇和島市	89,444	△20,748	81.2

注１）人口動態は昭和60年と平成17年の増減
注２）指数は昭和60年を100とした平成17年の指数
注３）△印はマイナスを示す
注４）国勢調査より二神弘明作成

2 昼間人口比率

松山市に隣接した東温市の昼間人口比率（表３）は昭和40年以降増加傾向にあり、平成17年には最高の101.6％を示し、製紙業の盛んな四国中央市に並んでいる。東温市の昼間人口比率の上昇は、それまでの松山市のベッドタウンとしての機能に加えて松山自動車道の整備や伊予鉄道横河原線などの交通アクセスの便利さ、土地区画整理事業による工業団地の形成や郊外型の大規模な駐車場を完備した大型ショッピングセンターの進出、住宅団地の建設などが一因といえる。さらに近年は、北野田に隣接する松山市の南梅本に四国がんセンターが松山市堀之内から移転するなど、さらなる発展が期待されるところである。

次に東温市の通勤・通学状況をみると（表４）、他市町からの通勤・通学者数では、昭和40年（1965）1,015

表2　東温市の人口動態

（単位：人）

調査年	世帯数	人口	旧重信町	旧川内町	出生数	死亡数	自然増減	転入者数	転出者数	社会増減	人口増減
昭和40	5,370	24,109	14,041	10,068							
41	5,392	24,199	13,880	10,319							△ 152
42	5,439	24,047	13,941	10,106							△ 56
43	5,506	23,991	13,972	10,019							△ 83
44	5,649	23,908	14,088	9,820							△ 539
45	5,727	23,369	14,056	9,313							261
46	5,914	23,630	14,128	9,502							968
47	6,293	24,598	15,068	9,530							736
48	6,589	25,334	15,932	9,402							412
49	6,799	25,746	16,300	9,446							883
50	6,987	26,629	17,624	9,005							△ 310
51	7,187	26,319	16,923	9,396							501
52	7,445	26,820	17,464	9,356							317
53	7,613	27,137	17,787	9,350							219
54	7,907	27,356	17,968	9,388	363	194	169	2,120	1,816	304	473
55	8,284	29,274	20,070	9,204	353	199	154	1,814	1,727	87	241
56	8,341	28,273	18,888	9,385	356	200	156	2,042	1,676	366	522
57	8,588	28,644	19,143	9,501	340	188	152	2,280	1,850	430	582
58	8,882	29,317	19,526	9,791	431	191	240	2,076	1,803	273	513
59	9,066	29,674	19,722	9,952	389	210	179	1,363	1,201	162	341
60	9,248	31,306	21,380	9,926	402	227	175	2,071	1,850	221	396
61	9,415	30,373	20,331	10,042	373	217	156	1,753	1,881	△ 128	28
62	9,478	30,527	20,416	10,111	329	210	119	1,898	1,759	139	258
63	9,564	30,582	20,465	10,117	342	233	109	1,951	1,863	88	197
平成元年	9,685	30,587	20,574	10,283	281	216	65	1,950	1,797	153	218
2	9,779	31,712	21,514	10,198	295	252	43	1,868	1,777	91	134
3	9,953	31,186	20,765	10,421	277	256	21	1,867	1,836	31	52
4	10,051	31,245	20,812	10,433	272	211	61	1,811	1,805	6	67
5	10,237	31,459	20,909	10,550	261	222	39	1,959	1,712	247	286
6	10,427	31,749	21,130	10,619	263	237	26	2,104	2,160	△ 56	△ 30
7	10,801	33,058	22,517	10,541	294	228	66	2,209	1,574	635	701
8	11,049	32,856	22,066	10,790	289	291	△ 2	2,087	1,672	415	413
9	11,376	33,284	22,361	10,923	308	274	34	2,043	1,732	311	345
10	11,579	33,511	22,523	10,988	247	238	9	1,713	1,647	66	75
11	11,769	33,691	22,565	11,126	276	279	△ 3	1,877	1,712	165	162
12	11,921	34,693	23,658	11,035	277	265	12	1,864	1,600	264	276
13	12,189	34,073	22,793	11,280	260	287	△ 27	1,811	1,659	152	125
14	12,345	34,104	22,816	11,288	229	288	△ 59	1,736	1,704	32	△ 27
15	12,541	34,105	22,770	11,355	272	274	△ 2	1,860	1,730	130	128
16	12,708	34,280	22,970	11,310	259	122	137	1,734	1,615	119	256
17	12,861	35,196			254	293	△ 39	1,682	1,487	195	156
18	13,153	34,464	23,136	11,328	259	306	△ 47	1,810	1,677	133	86
19	13,391	34,641	23,290	11,351	282	324	△ 42	1,703	1,642	61	19

注1）△印はマイナスを示す。昭和53年以前は世帯数、人口のみを示している。
注2）国勢調査（10月1日現在）、住民基本台帳（各年の4月1日現在）より二神弘明作成

表3　愛媛県内11市の昼間人口率の推移［上段：常住人口、中段：昼間人口、下段：昼間人口率（%）］

市　名	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成２年	平成７年	平成12年	平成17年
四国中央市	96,886	93,622	93,966	95,561	97,361	97,475	95,977	94,600	92,797
	95,720	92,447	93,525	95,699	97,913	99,306	97,209	95,792	94,297
	98.8	98.7	99.5	100.1	100.6	101.9	101.3	101.3	101.6
新居浜市	125,155	126,033	131,712	132,283	132,183	129,145	127,917	125,507	123,621
	128,628	129,720	134,529	134,079	132,537	129,881	128,328	125,747	124,982
	102.8	102.9	102.1	101.4	100.3	100.6	100.3	100.2	101.1
西条市	112,034	120,897	110,545	112,946	115,980	115,194	114,694	114,419	113,358
	108,357	91,523	106,998	110,102	114,355	112,789	112,802	113,032	111,221
	96.7	75.7	96.8	97.5	98.6	97.9	98.4	98.8	98.1
今治市	188,814	189,918	196,817	197,809	197,774	191,504	185,428	180,625	173,970
	189,981	191,791	199,382	199,704	200,719	194,016	187,510	181,970	175,237
	100.6	101.0	101.3	101.0	101.5	101.3	101.1	100.7	100.7
松山市	332,343	362,998	407,237	442,037	466,352	480,137	497,171	508,066	514,688
	344,048	378,308	424,711	460,699	481,626	496,057	511,622	519,667	525,208
	103.5	104.2	104.3	104.2	103.3	103.3	102.9	102.3	102.0
東温市	**24,109**	**23,369**	**26,629**	**29,274**	**31,306**	**31,712**	**33,058**	**34,693**	**35,196**
	21,645	**20,623**	**23,198**	**26,692**	**29,663**	**29,811**	**32,196**	**34,243**	**35,758**
	89.8	**88.2**	**87.1**	**91.2**	**94.8**	**94.0**	**97.4**	**98.7**	**101.6**
伊予市	45,526	42,612	41,537	42,839	42,306	41,513	41,064	40,491	39,493
	41,440	37,548	36,545	37,634	37,768	37,036	36,940	36,923	35,810
	91.0	88.1	88.0	87.8	89.3	89.2	90.0	91.2	90.7
大洲市	65,390	58,755	56,996	57,011	57,262	55,764	53,850	52,757	50,728
	64,933	58,184	56,615	56,931	57,340	55,951	54,321	54,225	51,665
	99.3	99.0	99.3	99.9	100.1	100.3	100.9	102.8	101.8
八幡浜市	62,715	58,545	56,964	55,745	53,622	50,267	47,410	44,188	41,263
	63,608	59,636	58,127	57,004	54,862	51,494	48,414	44,701	42,110
	101.4	101.9	102.0	102.3	102.3	102.4	102.1	101.2	102.1
西予市	69,278	61,009	57,528	56,175	54,804	51,893	49,022	47,206	44,948
	68,337	60,098	56,556	55,114	53,472	50,265	47,188	45,475	43,277
	98.6	98.5	98.3	98.1	97.6	96.9	96.3	96.3	96.3
宇和島市	113,399	105,180	109,479	110,898	110,191	104,946	100,776	95,641	89,444
	114,663	106,202	110,896	112,599	111,704	106,547	102,758	97,234	90,797
	101.1	101.0	101.3	101.5	101.4	101.5	102.0	101.7	101.5

注１）昼間人口比率（昼間人口÷夜間人口×100）
注２）各市は合併前の市町村を組み替えて合算処理している。
注３）国勢調査報告より高山利典作成

表4　東温市の通勤・通学状況

（単位：人）

	昭和40年		昭和45年		昭和50年		昭和55年		昭和60年		平成２年		平成７年		平成12年		平成17年	
旧町名	旧重信町	旧川内町	旧重信町	旧川内町	旧重信町	旧川内町	旧重信町	旧川内町	旧重信町	旧川内町	旧重信町	旧川内町	旧重信町	旧川内町	旧重信町	旧川内町	旧重信町	旧川内町
常住人口	24,109		23,369		26,629		29,274		31,306		31,712		33,058		34,693		35,196	
	14,041	10,068	14,056	9,313	17,624	9,005	20,070	9,204	21,380	9,926	21,514	10,918	22,517	10,541	23,658	11,035		
従業地・通学地人口（昼間人口）	21,645		20,623		23,198		26,692		29,963		29,811		32,196		34,243		35,758	
	12,846	8,799	12,136	8,487	15,404	7,794	18,633	8,059	20,138	9,525	20,228	9,583	21,501	10,695	23,007	11,236		
他市町からの通勤・通学者数（流入）	1,015		1,676		2,405		3,886		5,447		6,246		7,910		9,101		8,343	
	810	205	954	722	1,699	706	2,991	895	3,728	1,719	4,313	1,933	5,118	2,792	5,920	3,181		
通勤者数のみ					1,141	699	1,996	888	2,424	1,594	2,948	1,868	3,849	2,697	4,839	3,095	7,345	
他市町への通勤・通学者数（流出）	3,479		4,422		5,836		6,468		7,090		8,147		8,862		9,627		7,845	
	2,005	1,474	2,874	1,548	3,919	1,917	4,428	2,040	4,970	2,120	5,599	2,548	6,236	2,626	6,651	2,976		
通勤者数のみ					3,243	1,392	3,773	1,564	4,169	1,644	4,634	1,975	5,349	2,106	5,721	2,412	6,749	

注）国勢調査より高山利典作成

人（4.2％）から同60年5,447人（17.4％）へ、平成17年（2005）8,343人（23.7％）と大幅に増加している。また、他市町への通勤・通学者数では、昭和40年3,479人（14.4％）から増加を続け平成12年9,627人（27.7％）とピークを迎えたあとは、平成17年7,845人（22.3％）に減少傾向を示している。（二神　弘明）

3　人口構成

東温市の年齢別・性別人口構成を昭和40年と平成17年で比較すると、15歳未満の年少人口の割合は27.0％から13.5％に半減するほど減少が著しい。15歳～64歳の生産年齢人口の割合は64.3％から64.8％とほとんど差はないが、35歳未満の若年労働者と35歳以上の中高年労働者を比較すると、前者は30.3％から24.9％と減少し、後者は34.0％から39.8％と増加している。65歳以上の老年人口の割合は8.7％から21.7％へと大幅に増加している。老年人口比率が県平均（21.4％）よりは下回ってはいるものの、年少人口の減少や、生産年齢人口の中での若年労働者の減少、老年人口の増加により、東温市においても少子高齢化が進行していることがわかる。

産業別人口構成の推移をみると（図２）、第１次産業人口は昭和40年の54.4％から平成17年には11.2％と大幅に減少し、第２次産業人口は同年間に12.5％から20.7％に、第３次産業人口は30.5％から68.0％に増加し、産業構造の高度化が進んでいることがわかる。

第１次産業人口では農業従事者の割合が、昭和40年の56.0％から平成17年の11.0％に大幅に減少しているものの、その割合はやや高い。これは旧川内町を中心に農山村地域が存在しているためと考えられる。昭和40年から同50年の間に農業においては、15歳以上の就業者が6,538人から3,991人となり、2,547人減少している。その後も10年間ごとに約300～500人ずつ減少を続けている。また林業従事者は130人から20人へ減少した。

第２次産業人口の昭和40年から平成17年の変化をみると、鉱業就業者が58人から11人へ減少、建設業が75人から1,379人へ増加、製造業が617人から1,899人に増加した。第２次産業全体では昭和40年（1965）の12.5％から平成17年（2005）の20.7％へ8.2ポイントの増加をしている。

第３次産業人口では医療・福祉従事者の割合が平成７年で15.0％と高い数値を示しているが、これは東温市に愛媛大学医学部及び同附属病院、国立病院機構愛媛病院が存在していることが影響していると考えられる。そのほか、卸売業は1,136人から2,479人に増加、運輸・通信業が486人から1,147人に増加するなど、これらが第３次産業人口の比率を高める要因となっている。

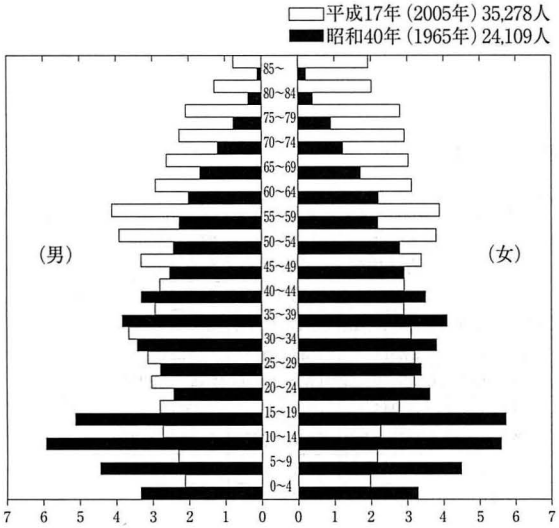


図１　東温市の年齢別・性別人口構成

注）国勢調査資料より山本篤志作成

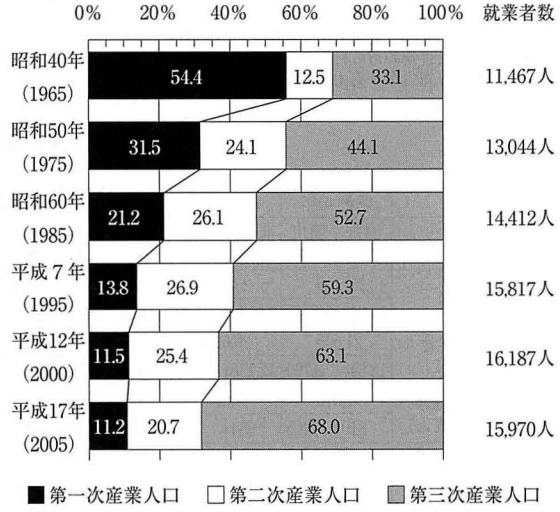


図２　東温市の産業別人口構成の推移

注）国勢調査資料より山本篤志作成

以上のように、東温市の人口構成は年少人口が減少し、老年人口が増加する少子高齢化が進行しており、少子化対策と老人福祉という人口構成における両面からの行政の対応が必要となっている。また、産業別人口構成のうえからは、特に第３次産業の比率が年々高まってきており、産業構造の高度化が進んでいるといえる。（山本　篤志）

４　人口動態

(1)　転出と転入

平成19年度の東温市の人口の社会的増減をみてみると、転出が1,642人、転入は1,703人で、61人の社会増加となっている。これを県内外別にみると、県内への転出が1,002人（61.0％）、県内からの転入が1,210人（71.1％）であり、県外への転出は640人（39.0％）、県外からの転入が493人（28.9％）となっている。県外への転出をみると（図３）、東京都71人（11.1％）、香川県の58人（9.1％）、大阪府54人（8.4％）が多くなっている。その他にも上位に広島県45人（7.0％）、福岡県45人（7.0％）が続くように、地方の中核となる都府県で多くなっている。また、香川県の58人（9.1％）、徳島県の36人（5.6％）、高知県の27人（4.2％）と四国内への転出が121人（18.9％）と多いことも特徴的である。

県内への転出をみると（図４）、県都松山市の681人（68.0％）が圧倒的に多く、次いで西条市の47人（4.7％）、今治市の45人（4.5％）と松前町の45人（4.5％）が多くなっている。県外からの転入をみると（図３）、広島県の58人（11.8％）、香川県の50人（10.1％）、高知県の46人（9.3％）といった近隣県が多くなっている。県内からの転入では（図４）、転出と同様に松山市の769人（63.6％）が圧倒的に多く、その後に続いて多い西条市の70人（5.8％）、今治市の58人である。また、南予地方（内子町以南）は宇和島市の44人（3.6％）を筆頭に大洲市、八幡浜市、西予市などがそれぞれ20人を超え、合計で151人（12.5％）を数えるほどである。このように、転出、転入ともに松山市との関係が非常に強いことがわかる。

(2)　地域別人口の推移

昭和50年以後に経済安定成長期に入るとともに、松山市の人口が県全体の28％を占めるようになった。その頃から、松山市の南部から東部にかけて及び旧重信町で人口増加が著しく、昭和60年代には砥部町とともに旧川内町の増加率が松山市のベッドタウンとして転入が著しく、県下最高となった。東温市の人口動態（表２）を見ると、昭和45年まで前年度比マイナスを続けていたが、昭和46年度以降にプラスに転じる。特に、旧川内町の人口が昭和56年度より前年度比マイナスが止まり、その後プラスに転じていった。そこで、地域別の人口推移について、昭和52年度を基準として平成19年度に至る人口増加率を見てみる。この30年間で、東温市全体で29.3％、旧重信町で33.1％、旧川内町で22.0％の人口増加率を示す。表５や図５に、東温市各地区別の人口増減率を示した。

(ア)　人口減少地区

表５や図５をみると、30％を超える大幅な人口減少をしている地区に、滑川（－70.6％）、土谷（－54.1％）、山之内（－48.0％）、井内（－32.7％）がある。いずれも山間地に位置しており、就業場所が近隣にないことや国道11号や県道23号・同193号から離れ、伊予鉄道横河原線からも遠く、松山市のベッドタウンとして人口増加を見せる他の地区に比べて、松山市への通勤・通学に不便なため、新築住居数も少ない。昭和30年代以降の全国的傾向による過疎現象と同様であると考えられる。

(イ)　人口増加地区

表５や図５をみると、40％を超える大幅な人口増加をしている地区に、野田・北野田（155.7％）、松瀬川（154.0％）、南方東（97.6％）、志津川（88.1％）、則之内西（57.8％）、田窪（40.3％）がある。

志津川は、北部を国道11号が東西に走る。昭和51年（1976）に開設された愛媛大学医学部、東温高校、重信中学校、北吉井小学校などの文教地区を形成、旧重信町役場もあって住宅化が著しい。力石団地30戸、志津川団地145戸などが昭和45年から同48年にかけて着工した。その後も、昭和53年から同56年には151軒の新築数を最高として、５年単位でみたとき100軒を優に超える住宅が新しく造られてきている。

田窪は、横河原線が東西に走り、その南を県道193

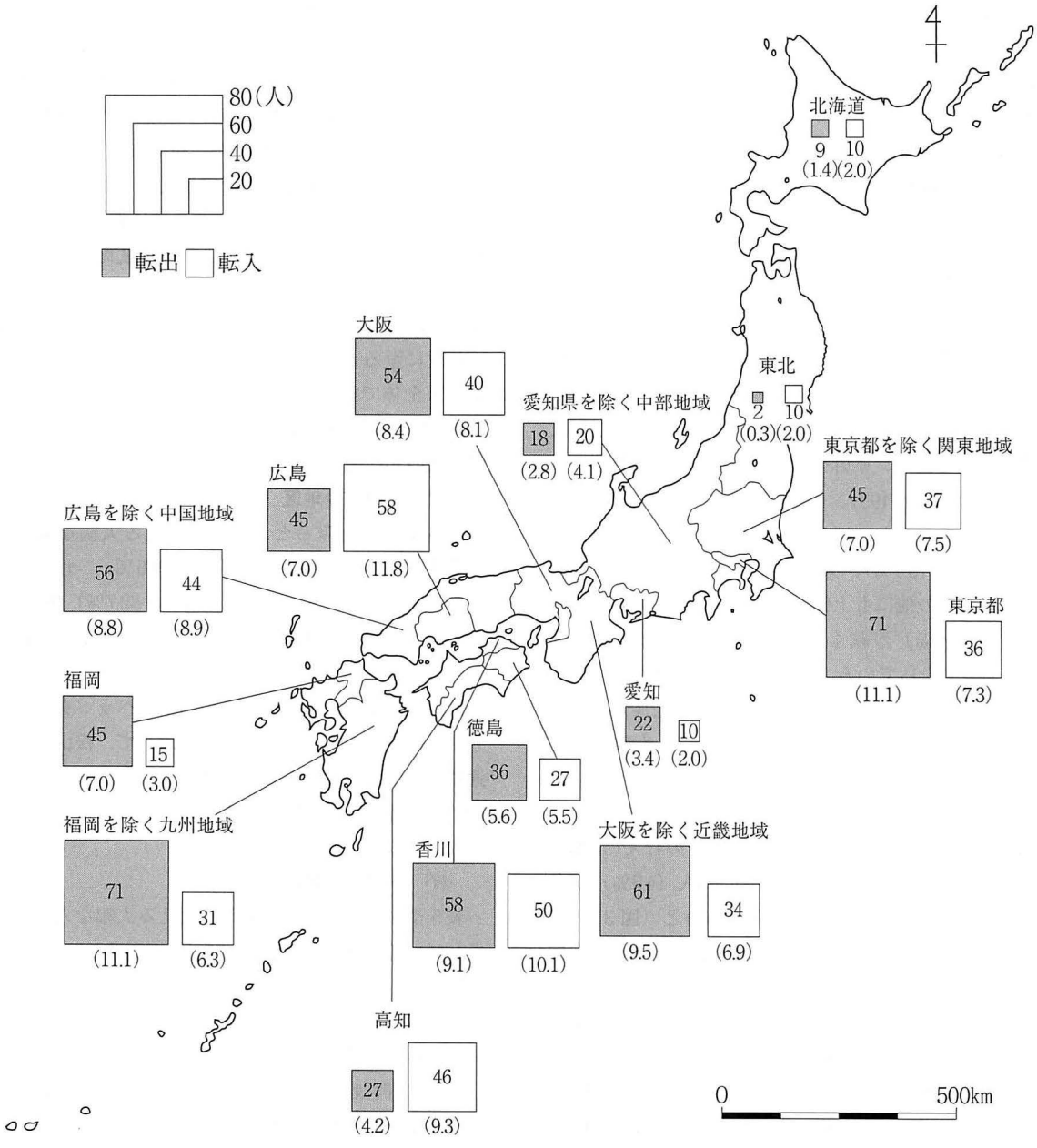


図3　東温市の県外転出入人口（平成19年度）

注1）（　）内は県外総数に対する割合（%）。
注2）東温市役所資料より松本賢太郎作成

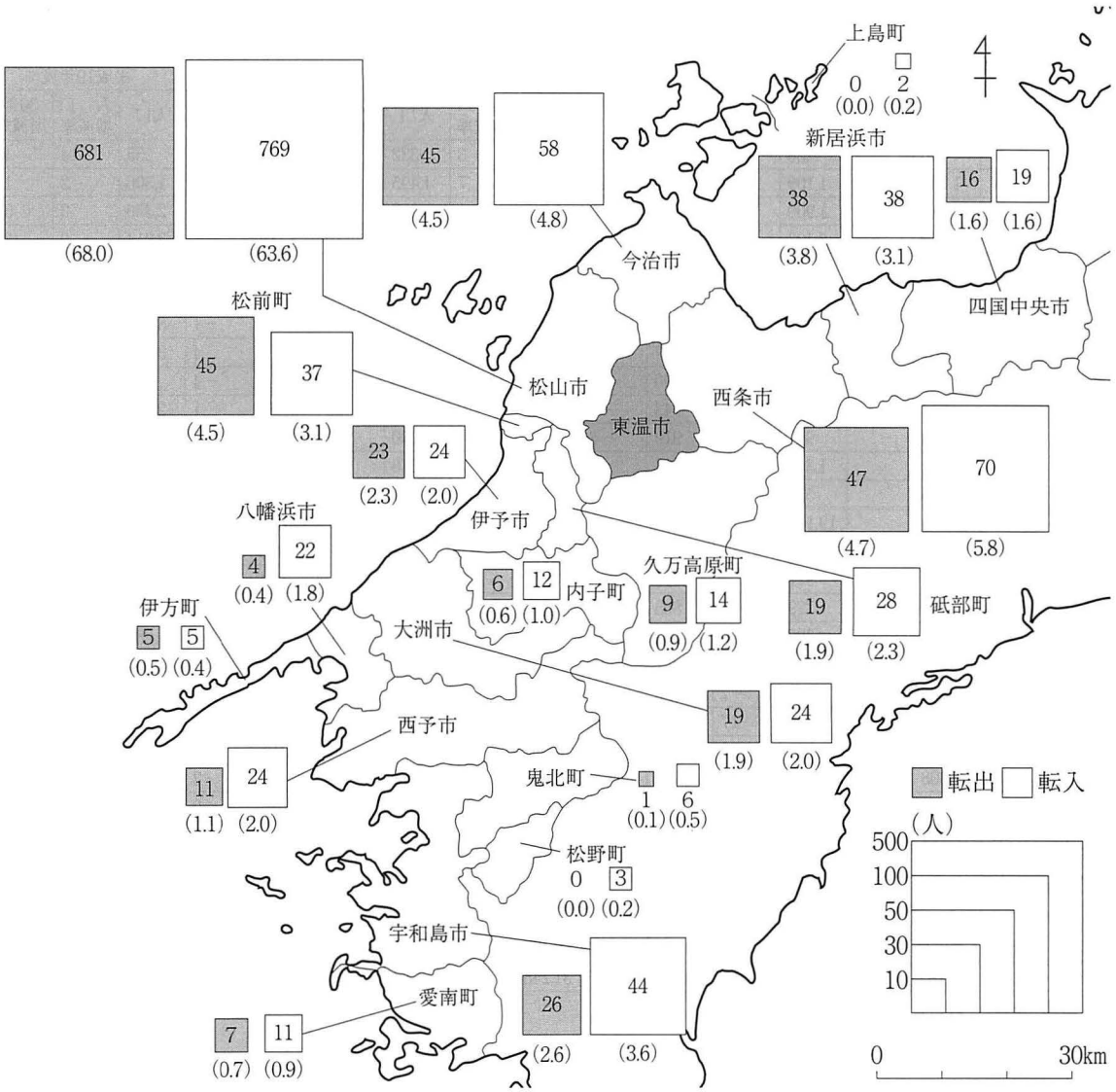


図4　東温市の県内転出入人口（平成19年度）

注1）（　）内は県内総数に対する割合（%）。
注2）東温市役所資料より松本賢太郎作成

号が並行する。昭和42年（1967）に新設された田窪駅北部には田窪外分団地130戸、富士団地29戸、富屋団地34戸、重信ファミリータウン30戸などが昭和45年から同48年にかけて着工した。その後も、昭和53年から同56年には194軒の新築数を最高として、5年単位でみたとき100軒を優に超える住宅が新しく造られてきている。

野田・北野田は、昭和45年前後の北野台団地50戸の建設に始まり、その後の土地区画整理事業により、平成4年（1992）から同8年にかけて野田1～3丁目では218軒、さらに平成9年から同13年にかけても104軒もの新築が見られ、30年間の人口増加は155.7%と東温市内で最高である。

旧川内町役場や官公庁の出先機関が集中していた南方は、昭和30年代後半から国道11号が整備され宅地化が進んだ。また、松瀬川地区に365戸分の住宅団地「グリーンタウン」を昭和55年より分譲をスタートした。昭和48年ころから徐々に、川内ニュータウン68戸、第

表５　東温市地区別人口・人口増加率の推移

（単位：人、％）

	昭和52年度		昭和57年度		昭和62年度		平成４年度		平成９年度		平成14年度		平成19年度		
	人口	人口増減率	人口	人口増減率	人口	人口増減率	人口	人口増減率	人口	人口増減率	人口	人口増減率	人口	人口増減率	30年増減率
山之内	490		436	−11	369	−15	357	−3	332	−7	298	−10	255	−14	−48
樋口	1,109		1,109	0	1,381	25	1,472	7	1,495	2	1,286	−14	1,306	2	18
横河原	1,818		1,900	5	1,837	−3	1,812	−1	1,802	−1	2,292	27	2,356	3	30
志津川	1,762		2,493	42	2,887	16	3,106	8	3,412	10	3,316	−3	3,314	0	88
西岡	1,123		1,130	1	1,138	1	1,128	−1	1,211	7	1,263	4	1,175	−7	5
見奈良	1,452		1,683	16	1,763	5	1,698	−4	1,539	−9	1,533	0	1,638	7	13
田窪	2,677		2,965	11	3,239	9	3,492	8	3,497	0	3,466	−1	3,755	8	40
牛渕	2,561		3,010	18	3,307	10	3,230	−2	3,138	−3	3,272	4	3,378	3	32
南野田	669		633	−5	690	9	700	1	639	−9	615	−4	631	3	−6
野田・北野田	914		950	4	943	−1	965	2	2,239	132	2,260	1	2,337	3	156
上林	973		947	−3	919	−3	884	−4	1,000	13	927	−7	916	−1	−6
下林	1,401		1,348	−4	1,396	4	1,428	2	1,516	6	1,567	3	1,499	−4	7
上村	515		539	5	548	2	540	−2	541	0	539	0	531	−2	3
小計	17,464		19,143	10	20,416	7	20,812	2	22,361	7	22,816	2	23,252	2	33
河之内	727		679	−7	637	−6	581	−9	528	−9	493	−7	703	43	−3
則之内東	895		917	3	910	−1	907	0	995	10	984	−1	694	−30	−23
則之内西	680		779	15	865	11	894	3	907	2	1,024	13	1,073	5	58
井内	416		392	−6	367	−6	345	−6	324	−6	311	−4	280	−10	−33
滑川	337		266	−21	222	−17	192	−14	164	−15	142	−13	99	−30	−71
土谷	296		276	−7	256	−7	213	−17	171	−20	156	−9	136	−13	−54
奥松瀬川	406		337	−17	310	−8	282	−9	334	18	347	4	337	−3	−17
前松瀬川	465		641	38	840	31	1,092	30	1,160	6	1,198	3	1,181	−1	154
北方東	808		828	3	807	−3	764	−5	778	2	762	−2	742	−3	−8
北方西	619		619	0	629	2	624	−1	694	11	697	0	785	13	27
町東	933		966	4	1,029	7	1,039	1	1,087	5	1,061	−2	1,112	5	19
町西	968		1,013	5	1,148	13	1,133	−1	1,127	−1	1,173	4	1,241	6	28
南方東	1,112		1,119	1	1,370	22	1,616	18	1,862	15	2,146	15	2,197	2	98
南方西	694		669	−4	721	8	751	4	792	6	794	0	835	5	20
小計	9,356		9,501	2	10,111	6	10,433	3	10,923	5	11,288	3	11,415	1	22
合計	26,820		28,644	7	30,527	7	31,245	2	33,284	7	34,104	3	34,667	2	29

注）東温市役所資料より松本賢太郎作成

２フジハイツ50戸、山田団地42戸などの開発が行われてきた。

これらの住宅の新築数の増加にあわせて、各地区を通学区域とする各小学校で児童数も増加した。昭和40年代までは減少していたが田窪・牛渕・野田などの南吉井小学校は昭和56年（1981）まで増加に転じた。昭和40年代までは減少していたが志津川・横河原などの北吉井小学校は平成６年（1994）まで増加し続けた。西岡・見奈良は北吉井及び南吉井小学校にまたがる。それによって昭和52年まで減少していたが松瀬川・北方・南方が通学区域の川上小学校は平成３年まで増加し続けた。

松山市とつながる道路・鉄道網と土地区画整理事業による新たな住宅地の拡大の影響が大きい。広大な田畑が宅地に変わり、また、松山市に接する志津川・田窪・野田では、昭和50年代以降年平均20戸を上回る新築が見られて人口増加率も高い。特に、志津川・田窪・野田ではマンションなどの集合住宅も相次いで建設されてきたのも人口を増加させた理由である。

今後も増加していくと予想される人口に対応すべく東温市は志津川・南方・北方・田窪西・下林・見奈良駅東西地区等において、土地区画整理事業や地区計画等を進めて住居系市街地を提供していく計画である。また、市が保有する14住宅61棟284戸（平成20年４月現在）に対しても、改築・改善を進めて公的住環境も安定して提供していく計画もある。　（松本賢太郎）

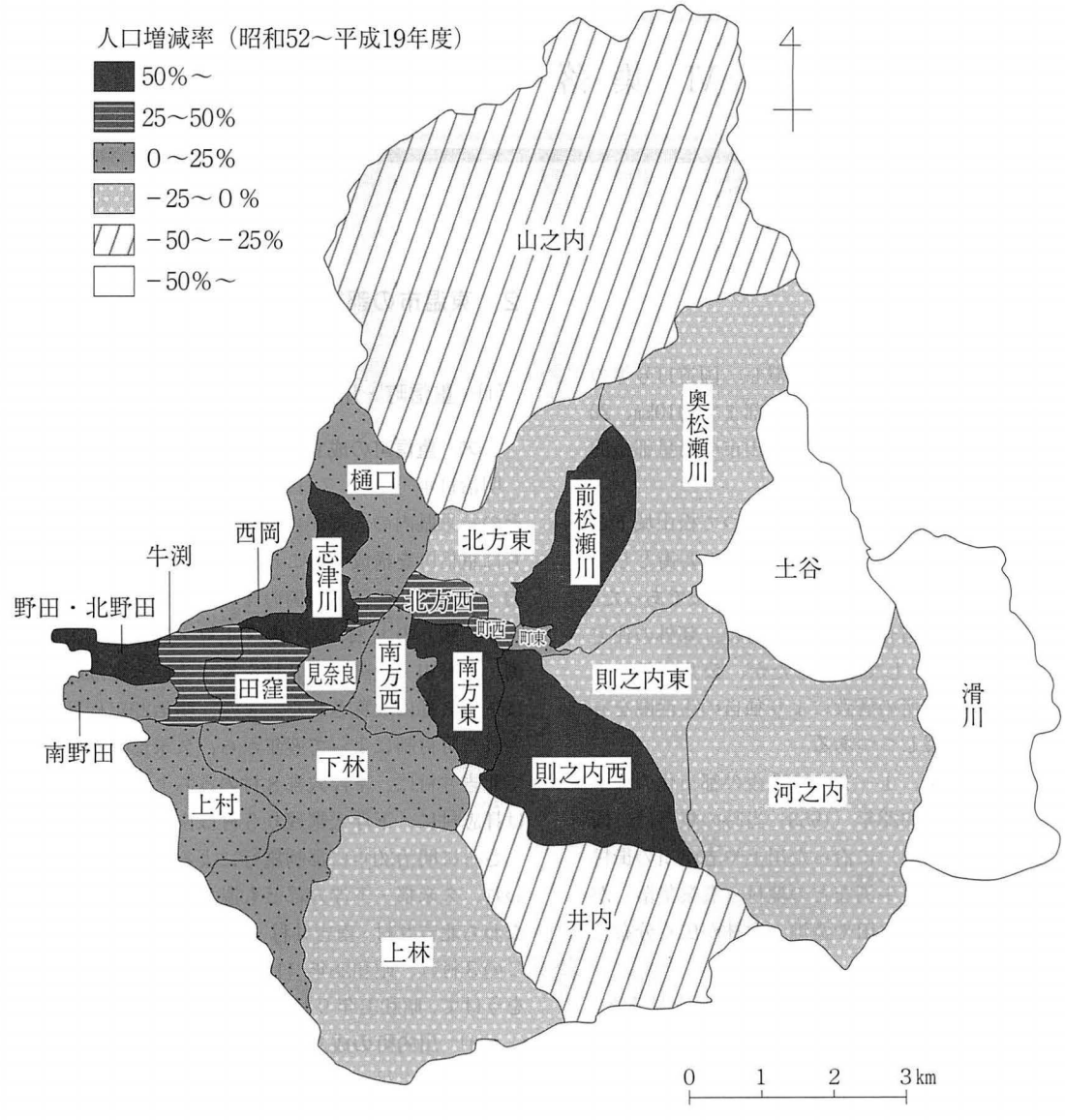


図５　東温市地区別人口増減率

注）東温市役所資料より松本賢太郎作成

参考文献

○愛媛県（昭和59年）：愛媛県史　地誌Ⅱ（中予）（愛媛県）

○愛媛県（各年）：愛媛県統計年鑑

○東温市統計書

○東温市市勢要覧2006

○東温市ホームページ

○伊予鉄道（昭和62年）：伊予鉄道百年史

松山南高校　二神　弘明

高校教育課　松本賢太郎

済美高校　高山　利典

済美平成中等教育学校　山本　篤志

Ⅵ 集落・都市

1 概要

東温市は県都松山市の東隣に位置し、国道11号等の道路や伊予鉄道横河原線で松山中心部まで約10㎞、20～30分程度で結ばれているため、松山市の衛星都市的な要素が強い。

東温市のうち川上の集落などは、かつて松山城下と東予地域・讃岐を結ぶ金毘羅街道の交通の要衝として発達していたが、他のほとんどは農山村地域であった。

戦後、松山市の都市化の進展とともに、郊外の住宅地域・近郊農業地域として発達したが、公共施設や大型の商業施設、事業所の誘致により独自の生活圏を有する都市として発展しつつある。

地形図（図１－１、１－２）で戦後の都市化の様子を概観してみる。昭和28年（1953）当時の集落は、国道11号（現松山川内線）に沿った川上や志津川の街村以外は見奈良や田窪、牛渕などの塊村（農業集落）が点在している程度で、水田や桑畑、樹林が広く分布していた。

しかし53年後の平成18年（2006）の地図を見ると、牛渕から田窪、見奈良、横河原に至る地域の宅地化が顕著である。このあたりには愛媛大学医学部をはじめとする学校施設や住宅団地が多く立地した。国道11号が整備され、松山自動車道も開通し、東西の交通網が整ってきている。一方、南北の交通も上村大橋等の建設や道路整備により、格段によくなっている。また、伊予鉄道横河原線の駅も、牛渕団地前、田窪（旧田窪駅は現在の牛渕駅にあたる）、愛大医学部南口が新設され、利便性が増している。さらに、南野田や田窪、見奈良、茶堂の重信川沿岸には工場が多く立地している。

戦後、50年余りの間の都市化により、東温市は大きく変貌したのである。（立石　淳）

2 東温市の都市計画

(1) 重信町・川内町の形成と発達

(ア) 重信町の成立

明治11年（1878）７月に郡区町村編成法が施行され、その結果県内の各郡が再編成された。それに伴い、のちに重信町を構成することになる12カ村のうち、山之内・志津川・樋口・西岡の４村は久米郡のままであったが、残りの上林・下林・上村・見奈良・田窪・牛渕・南野田・北野田の８村を擁する浮穴郡は明治13年に下浮穴郡に改称された。また、明治22年12月に施行された町村制によって翌年から、久米郡の４村は併せて北吉井村に、下浮穴郡８村のうち上林・下林・上村は拝志村に、下浮穴郡残り５村は南吉井村となった。

さらに明治30年に郡制施行による郡の廃置分合が行われ、久米郡・下浮穴郡とも温泉郡に編入された。すなわち北吉井村・南吉井村・拝志村とも温泉郡となり、この３村は、昭和28年（1953）町村合併促進法の公布をうけて、昭和31年９月１日合併し、重信町となった。

(イ) 川内町の成立

久米郡川上村の町並みは川上駅と称され、讃岐街道の要衝として、桜三里を抜ける旅の際になくてはならない宿場として発展した。川上村は明治30年、上浮穴郡三内村とともに温泉郡に編入され、昭和28年町村合併促進法の施行をうけて、昭和30年４月に両村は合併し温泉郡川内村となった。温泉郡川内村は昭和31年８月周桑郡中川村滑川地区を編入し、さらに翌９月には温泉郡川内町となった。同月末、周桑郡丹原町（旧中川村）より大字明河字塩嶽を川内町に編入し、その後平成の大合併を迎えるまで、町域は変化していない。

当初川内町は、松山市中心部から東におよそ15㎞の距離があり、松山平野のなかでは開発が遅れたが、住宅ブームに伴って地価の安さが注目され、昭和40年代

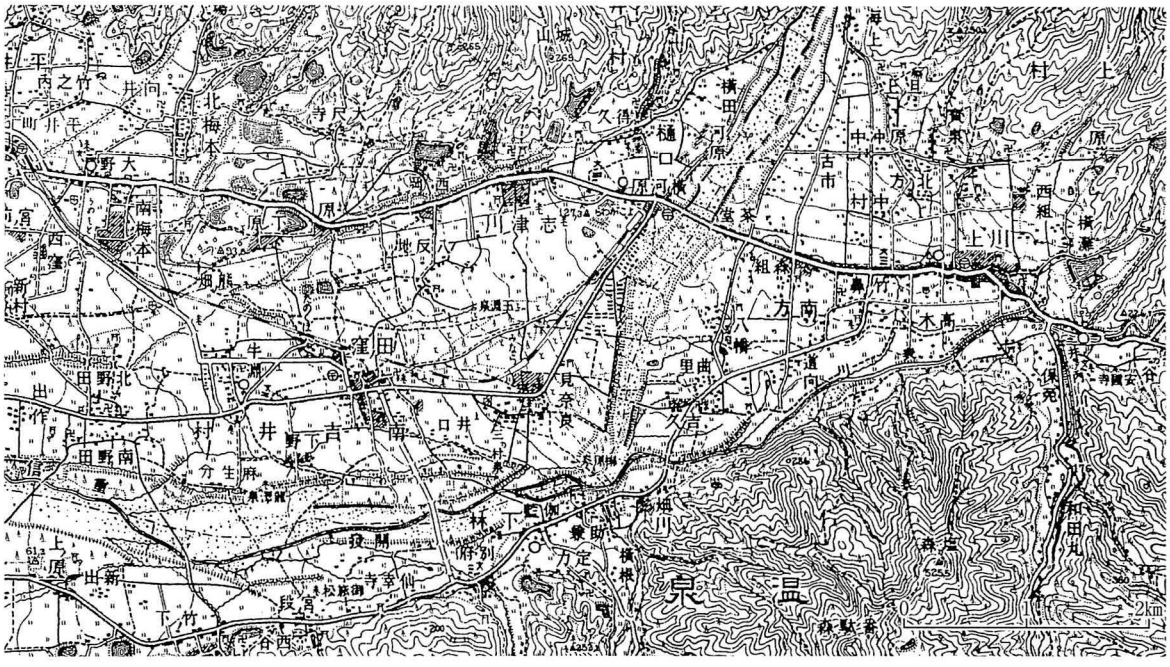


図１－１　昭和28年

注）国土地理院発行５万分の１地形図「松山南部」昭和28年応急修正（縮小）より

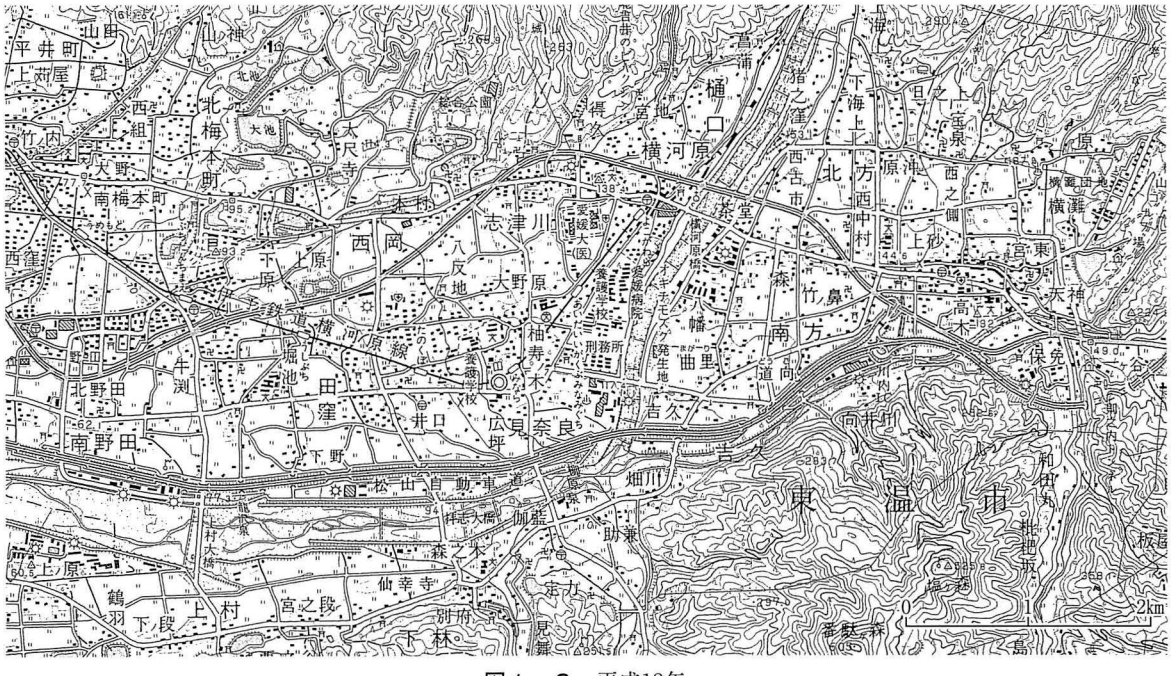


図１－２　平成18年

注）国土地理院発行５万分の１地形図「松山南部」平成18年要部修正（縮小）より

後半から開発が始まり、昭和55年（1980）から大規模な新興住宅地の開発が展開された。

この時期の川内町では、その長期総合計画のなかで「住みよい田園住宅」・「秀麗な景観」・「高速道路および国道11号の整備」・「都市型近郊農業」・「流通サービス団地」・「福祉および医療行政」・「隣人愛と教育文化」など今日の行政方針に直結する構想があげられており、現在のベッドタウン的役割としての萌芽がうかがえる。

(ウ) 伊予鉄道横河原線の影響

伊予鉄道横河原線の終点となっている横河原駅周辺は、かつては重信川の金毘羅街道における小規模な渡津集落であった。しかし、明治32年（1899）に伊予鉄道平井河原駅（現平井駅）から横河原駅までおよそ13.2kmの延長がなされると、人の往来の終着駅として、また物資の集散地として急速な発展を遂げた。この鉄道延長は、それまでの終着駅であった平井駅前の集落や川上宿場町（川上駅）から、宿泊客や物産流通拠点としての機能が横河原駅前集落に移される契機となった。その後、横河原駅周辺は、駅以東の旧川内町方面や旧周桑郡への玄関口としての役割を果たすこととなる。

伊予鉄道横河原線は昭和42年に全線電化を果たし、さらにその沿線を団地として大規模に開発することで乗降客の増加を図った。特に牛渕・田窪両駅周辺は伊予鉄不動産の積極的な開発によって大規模な住宅地となり、終着駅横河原、公共施設群が立地する見奈良とともに沿線の発展を象徴している。

昭和48年には愛媛大学医学部とその附属病院が建設され、さらに昭和56年高浜線と直結されて運行間隔も短くなると、松山市に対するベッドタウン化がますます顕著となった。現在でも沿線には、愛大医学部と附属病院、愛媛病院（旧国立病院・療養所）および国立病院機構である四国がんセンター（松山市）など、大規模な基幹病院や中小の医療機関が立地し、それらは大規模団地をはじめ広範な住宅地域と合わせて、今日の東温市の特色をよく物語っている。

(2) 東温市にみる都市計画の変遷

(ア) 東温市の誕生と市域の拡大

温泉郡重信町と温泉郡川内町は、いわゆる平成の大合併のなかで平成16年（2004）９月21日に合併し、東温市となった。これによって松山平野東部地域を中心として、北は今治市、東は西条市、南は上浮穴郡久万高原町、そして西は松山市に隣接する都市近郊型田園都市が誕生した。その新市域は南北約25.5km、東西約23.1kmにわたり、総面積は県下11市では９番目の211.45㎢となっている。

伊予鉄道横河原線や国道11号、松山自動車道などの整備・発達にともなって、ベッドタウンとしての役割に加えて、交通の結節点としての機能も増し、中予・東予を繋ぐ役割を担うだけでなく、県都松山市と四国他県とを結ぶ拠点としても位置づけられている。

(イ) 市街地の分布と特徴

現在の東温市は、重信町・川内町の合併により誕生したため、その市街地も単一地域に面的な広がりをもつものではなく、概ね３つに分かれている。それらが伊予鉄道横河原線および国道11号など基幹交通路線によって、線的に結び付けられていることに東温市の市街地の特徴があり、東温市では次のように位置づけている。

- A－西部市街地：松山への通勤に便利な近郊市街地（松山市街地の延長）
- B－中央市街地：松山への通勤が可能な郊外核市街地（東温市の中心市街地）
- C－東部市街地：松山への通勤者も住む遠郊市街地（東温市の副中心市街地）

Aは牛渕団地前駅周辺から南西に国道11号までであり、住宅地も多く、松山市へも近く、アクセスも容易である。

Bは横河原駅から愛大医学部南口駅を経て見奈良駅、田窪駅付近までの横河原線沿線で、北端は国道11号、南端は東温市役所付近までである。東は重信川までであるが、県道松山川内線の横河原橋を経て左岸地域も含まれる。中央市街地は、住宅地の多さもさることながら、愛大医学部および附属病院・愛媛病院・県立東温高校・県立みなら特別支援学校・県立しげのぶ特別支援学校・東温市立重信中学校・松山刑務所など大規模公的施設が多数立地し、パルティフジやクールスモール、利楽（温泉施設）・坊っちゃん劇場など大型のショッピング・レクリエーション施設も見られ、現在の中心市街地らしい町並みとなっている。

Cは、旧川内町役場を中心とする街村形態の町並みを中心とし、県道松山川内線を挟む南北の地域で、川

上小学校前交差点を西端としている。

実質的な都市地域を定義する指標となるDID[1)]については、先述の中央市街地に概ね一致するかたちでみられ（ただし、重信川左岸はほとんど含まれない）、その面積は昭和55年（1980）から現在に至るまで、微増にとどまるが、DID人口は約1.5倍になっている（図2）。県都に対するベッドタウンとして成長してきた東温市の中でも、特に成長著しい市域が中央市街地であることがうかがえる。

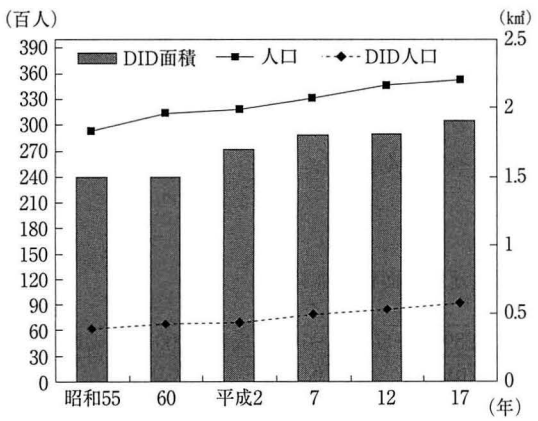


図2　東温市の人口とDID面積の推移

注1）昭和50年以前の国勢調査ではDIDは存在しない。
注2）東温市統計書より平田剛啓作成

これら3つの市街地は、指定されている市街化区域に概ね一致するので、現在のDIDと合わせて後述の用途地域区分（図3）を参照されたい。

(ウ)　東温市の市街化区域と用途地域

昭和46年12月、松山広域都市計画区域が指定され、昭和48年12月に松山広域用途地域が決定、そのなかで当時の重信町・川内町にそれぞれ市街区域の線引きが行われた（表1）。

当初、重信町区域では横河原線田窪駅から横河原駅までの沿線が指定されている。ただし愛大医学部・附属病院とその以北は含まれていなかった。川内町区域では、町役場を中心とする街村地区を中心に、県道松山川内線を挟む南北の地区となっている。ともに県道沿線こそ商業系地域がみられるが、主に住居系用途地域がほとんどを占め、すでにベッドタウンとしての機能が重視されていることがうかがえる。

第1回の変更は昭和55年になされ、愛大医学部・附属病院から北吉井小学校までの地区が重信町市街化区域に加わった。川内町区域では横河原橋の重信川左岸、松下寿電子工業や川内町工業団地を含む地区が加わり、特に工業地域・準工業地域など工業系地域の多さが目を引く。

牛渕団地前駅から南西、国道11号までの地区が平成

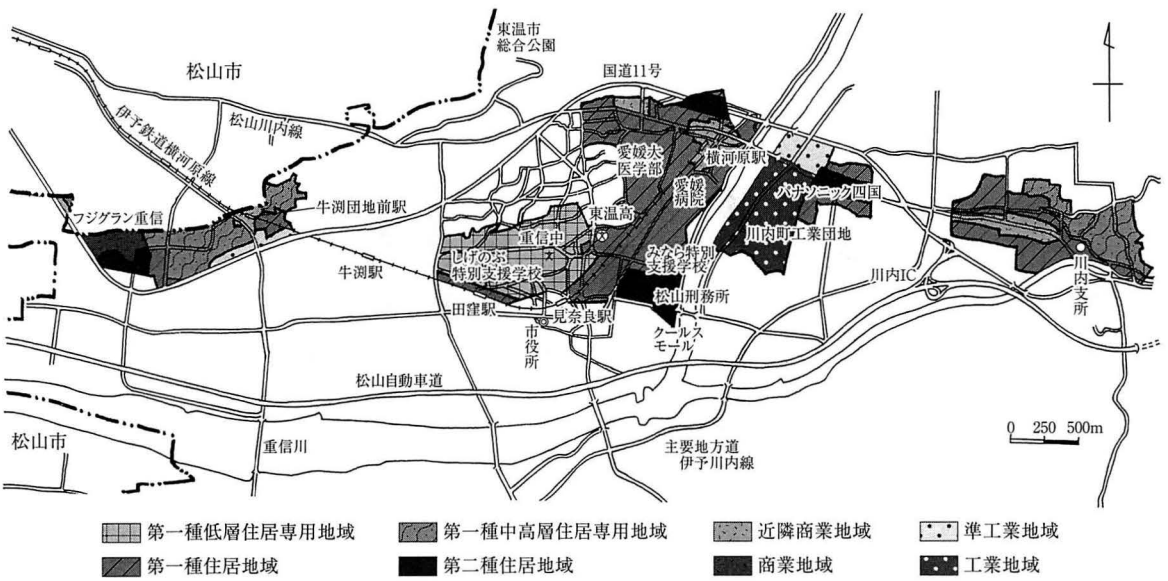


図3　松山広域都市計画区域における東温市の用途地域区分（平成18年）

注）「松山広域都市計画（東温市）総括図」より平田剛啓作成

元年（1989）の第２回変更で重信町区域に追加される。松山市により近く、住居系地域が主体となって構成されている地域である。この後、平成８年に用途地域の種別区分について小変更を受けている。

さらに平成12年に若干の追加地区があり、川内町区域に重信町川左岸国道11号の南手地区（準工業地域）が、重信町区域には国道11号沿線、松山市との市町境の一部（商業系・住居系）が追加された。平成15年にも用途地域種別区分について小変更を受け、まとまった面積の商業地域が初めて設定された。現在、それぞれ大型のショッピングセンター・家電量販店・ホームセンターなどが立地している。

その後平成16年に両町は東温市となり、市街化区域も重信町・川内町のものを合わせた形で今日に至っている（図３）。

市街化区域や用途地域からみる東温市の特徴は、上記その変遷からもある程度読み取ることができるが、県内の東温市以外の10市と２町（松山市にベッドタウン的に隣接する松前町・砥部町）の用途地域の面積割合とを比較すると、なお一層顕著である（図４）。

東温市はじめ11市２町の特色を検証すると、東温市はベッドタウン的な色合いが突出して濃いといえる。東温市の住居系用途地域の面積割合は、同じくベッドタウン機能を有する松前町・砥部町と比較しても、82.9％と、ずば抜けた高率となっており、松山市近郊の住宅田園都市としての生き方が鮮明な結果となっている。必然的に、東温市の商業系（8.0％）・工業系（9.1％）の用途地域の割合は相対的にかなり低い。これらのことが、医療・福祉・自然との調和をはじめとする住環境に重きを置いた街づくりを理念としている要因の一つとなっている。

（平田　剛啓）

表１　東温市市街化区域における用途地域別面積の推移

（単位：ha）

用途種別名	昭和48(1973)	昭和55(1980)	平成元(1989)	平成８(1996)	平成12(2000)	平成15(2003)
第一種低層住居専用地域	76.0	76.0	76.0	76.0	76.0	76.0
第一種中高層住居専用地域			27.9	27.9	27.9	27.9
第一種住居地域	122.0	178.1	197.8	163.5	163.8	163.8
第二種住居地域				31.9	31.9	24.1
近隣商業地域	12.0	15.5	17.4	19.8	20.4	20.4
商業地域						7.8
準工業地域		3.4	8.9	8.9	12.2	12.2
工業地域			20.0	20.0	20.0	20.0
市街化区域計	210.0	273.0	348.0	348.0	352.2	352.2

注）東温市の都市計画に関する基本的な方針より平田剛啓作成

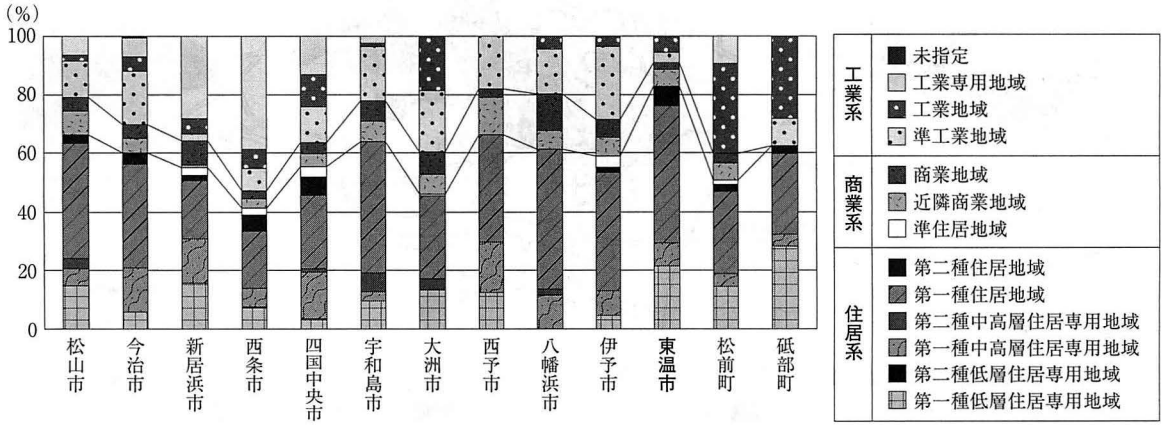


図４　県下11市２町における市街化区域の用途地域別面積の割合

注）「えひめの都市計画07（資料編）」より平田剛啓作成

3　都市構造の変化

(1)　事業所、公共施設の進出

川内町では、昭和43年（1968）に松下寿電子工業（現パナソニック四国）が生産を開始し、昭和56年に愛媛十全医療学院が開校した。さらに昭和50年代後半から町の工場誘致により、川内町工業団地に次々と企業が進出してきた。

重信町では、昭和40年に県立第一養護学校（現しげのぶ特別支援学校）、昭和47年に松山刑務所、県立第二養護学校（現しげのぶ特別支援学校）、昭和48年に第三養護学校（現みなら特別支援学校）、昭和49年愛媛大学医学部、昭和51年附属病院がそれぞれ開設され、交通面でも昭和42年に伊予鉄道横河原線が全線電化、昭和57年に国道11号バイパス（志津川－松山、現在の国道11号）が完成するなど、より便利になった。これに伴い、平成５年（1993）重信工業団地とフジ（後にフジグラン重信）、平成12年レスパスシティーとダイキEX重信が進出した。

最近30年間の事業所等の進出状況を見ると（図５）、重信地域では国道11号沿線、川内地域では県道松山川内線（旧国道11号）沿線に多く分布している。モータリゼーションの進展で道路に依存する商業施設や自動車関係の事業所の進出が目立っている。さらに伊予鉄道の田窪駅から見奈良駅周辺にも多く分布している。ここは市役所などの公共施設や、病院など周囲の住宅地の住民対象の事業所が多く見られる。また、南野田の重信工業団地、南方の川内工業団地に多くの工場が進出している。

これまでは、交通の便の良い重信地区に大型事業所等の進出が目立ったが、平成６年に松山自動車道川内ICが完成し、同９年には川内から松山ICを経て、伊予ICまで開通したことから、今後は川内IC周辺地域が物流の拠点として発展していくことが予想され、都市化のひとつの中心核になってくるものと考えられる。　（立石　淳）

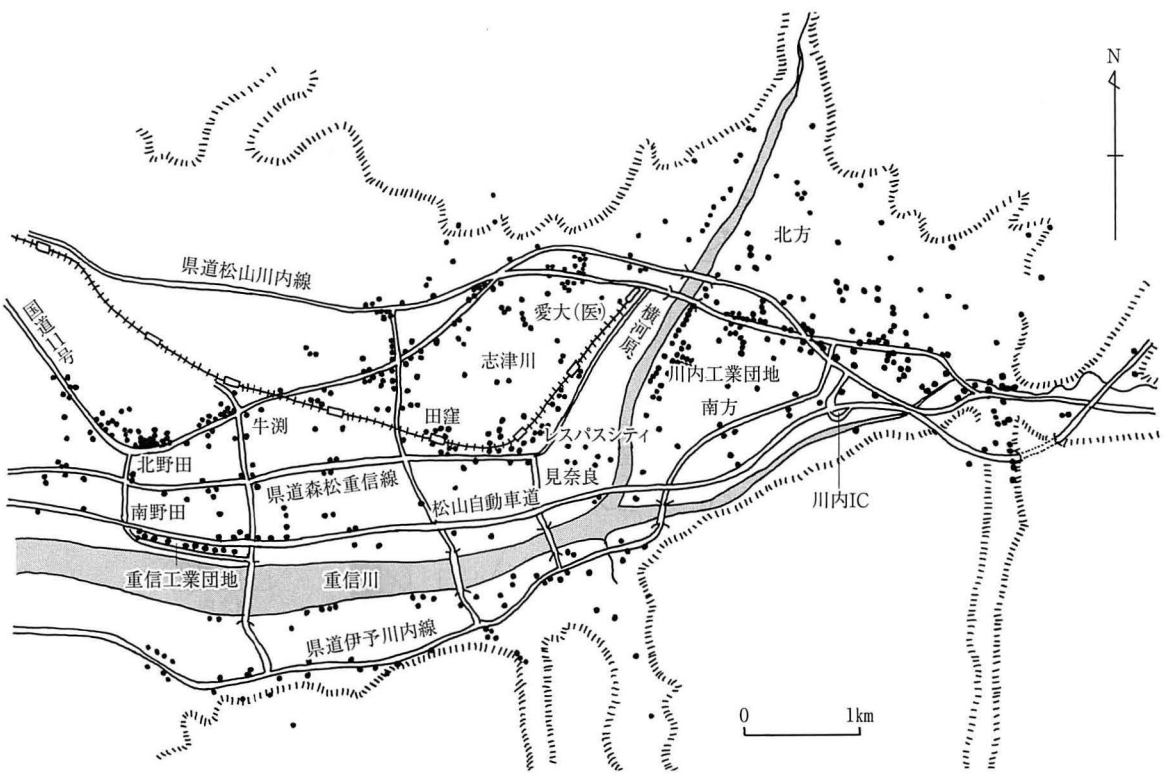


図５　東温市の事業所・公共施設の建設（昭和53年～平成18年）

注）セイコー社「住宅地図」（1978年版・2006年版）より立石淳作成

(2) 戸建て住宅とアパートの建築動向

昭和53年（1978）から平成19年（2007）まで30年間の戸建て住宅の地区別新築・増築数を10年毎に示したのが図６である。総数を10年毎に比較すると、昭和53年から同62年までが2,460棟、昭和63年から平成９年までが3,132棟、平成10年から同19年までが1,911棟と増加傾向にあった新築・増築数も最近10年は減少傾向にある。地区別の総数で比較すると、西部市街地（野田地区）と中央市街地（横河原・見奈良地区）の間に位置し比較的住宅用地を取得しやすい田窪地区（917棟）・志津川地区（760棟）が１・３位、東部市街地の南方地区（896棟）が２位である。また、いずれの地区も最近10年間の戸建て住宅の新築・増築数は減少しており、今後も増加数の逓減傾向は続くと予想される。

昭和53年から平成19年までの30年間のアパートの地

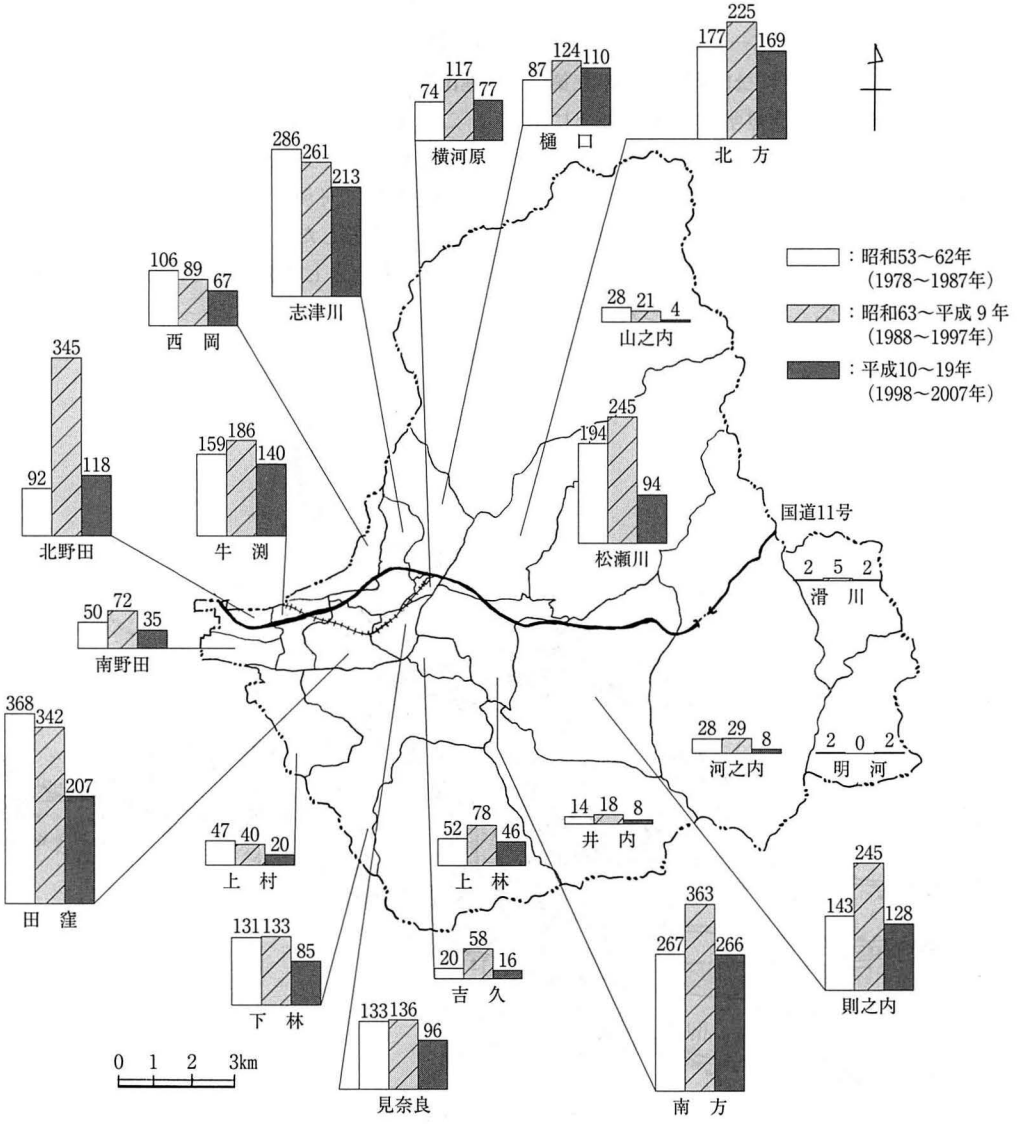


図６　地区（旧大字）別新築・増築数の推移（昭和53年～平成19年）

注１）数字は新築・増築数を示すが、データ上、新築・増築は区別できない。建築後取り壊され家屋課税データにない物件は集計されない。取り壊された家屋のデータも一部含まれている。必ずしも全家屋が現存しているとは限らない。
注２）東温市総務部税務課資料より渡邊洋人作成

区別建築数を10年毎に示したのが図７である。総数を比較すると昭和53年（1978）から同62年までが83棟、昭和63年から平成９年（1997）までが109棟、平成10年から同19年までが121棟である。戸建て住宅の新築・増築数と違い、アパートの建築数は増加傾向にある。地区別の総数で比較すると、40棟以上あるのは志津川地区（60棟）・北野田地区（52棟）・田窪地区（46棟）・横河原地区（41棟）・南方地区（40棟）である。これらの地区は東温市の３つの市街地（西部・中央・東部市街地）及び西部市街地と中央市街地の間に位置し、通勤・通学の利便性の高い地区である。また、地区別の10年毎の変化をみると、３期間連続して増加したのは３つの市街地に隣接する牛渕地区・田窪地区・北方地区の３地区のみである。特に田窪地区の平成10年から同19年に建築された26棟は建築数では市内１位である。また、中央市街地の見奈良・横河原地区とこれに

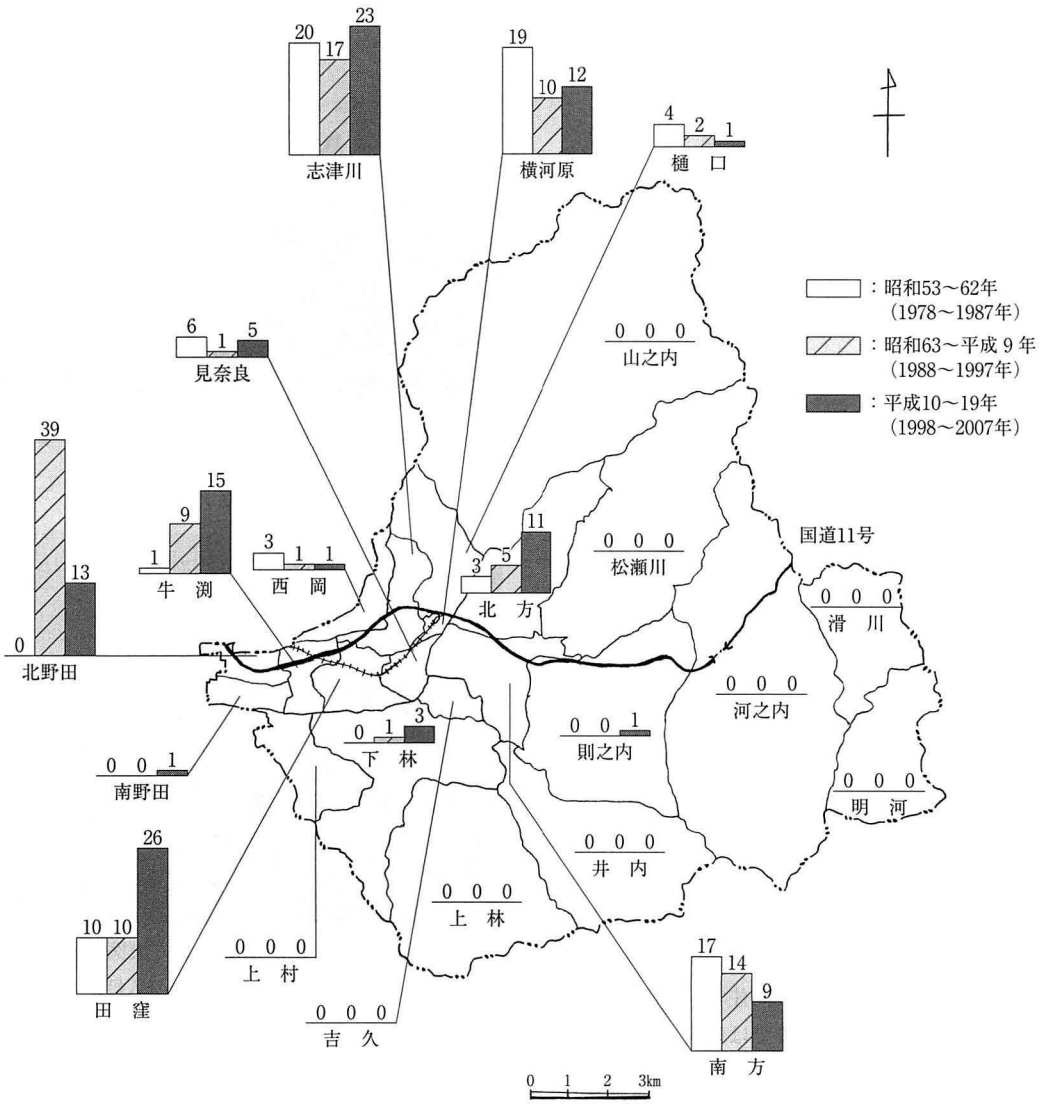


図７　地区（旧大字）別アパート建築数の推移（昭和53年～平成19年）

注１）数字は建築棟数を示す。
注２）東温市総務部税務課資料より渡邊洋人作成

隣接する志津川地区では減少した建築数が最近10年では増加するなど、中央市街地の空閑地の利用も進んでるといえる。アパートの建築数は、今後も３つの市街地（北野田、見奈良・横河原、南方地区）とその間の地区（牛渕、田窪、志津川、北方地区）を中心に、緩やかに増加していくと考えられる。

(3) 農地転用状況

農地転用面積は平成13年（2001）から同17年までの５年間は比較的一定しており、年平均約58,700㎡である。また、件数は年平均88件、年平均住宅件数は46件と年度による大きな変化はみられない（図８）。今後も安定した転用が継続すると予想される。

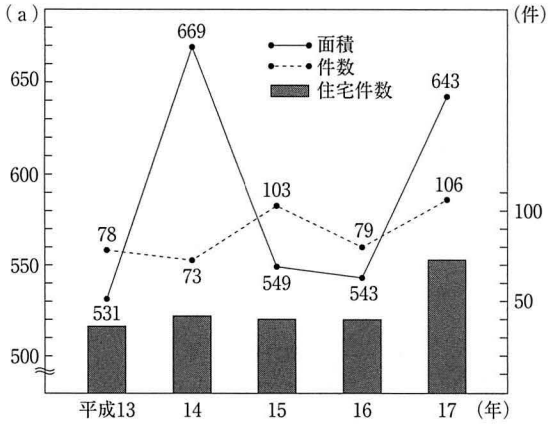


図８　農地転用状況

注）「東温市統計書」より渡邊洋人作成

(4) 建築物の中・高層化

平成20年８月現在、東温市には都市計画法に規定されている３階から５階の中層建築物が228棟、６階以上の高層建築物が41棟ある（表２）。６階以上の共同住宅（マンション・アパート等）は27棟あり、高層建築物の約66％が共同住宅であることが分かる。

６階以上の高層マンション（共同住宅）の分布を示したのが図９である。平成17年までは愛媛大学医学部周辺（写真１・２、図９）に10棟、川内支所西側に１棟の合計11棟であった。その後、平成20年までの３年間で伊予鉄道横河原線牛渕団地前駅の周辺（写真３、図９）に６棟、愛媛大学医学部・横河原駅の周辺に６棟、国道11号「新横河原橋」東側の北方地区に４棟、松山

表２　階数別建築物数

（2008年８月現在）

	1・2階	3階	4階	5階	6階	7階	8階	9階	10階	11階	12階	13階	合計
棟数	716 (109)	144 (52)	55 (34)	29 (24)	17 (11)	8 (4)	8 (7)	3 (1)	3 (2)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	984 (245)

注１）一戸建ては除く。（　）内数字は共同住居（マンション、アパート等）の棟数を示す。
注２）消防署資料より渡邊洋人作成

写真１　中・高層化が進む愛大医学部近隣

注）平成20年８月　渡邊洋人撮影

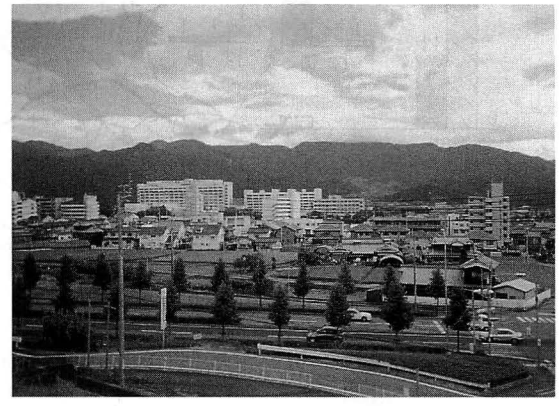


写真２　都市化が進展する愛大医学部周辺

注）平成20年８月　渡邊洋人撮影

自動車道川内IC北側の南方地区に２棟、合計18棟が建築された。この３年間に６階以上の高層マンションは2.6倍増加したことになり、東温市では３つの市街地を中心に建築物の中高層化が進展している。ちなみに、市内最高層マンションは平成20年に完成した牛渕

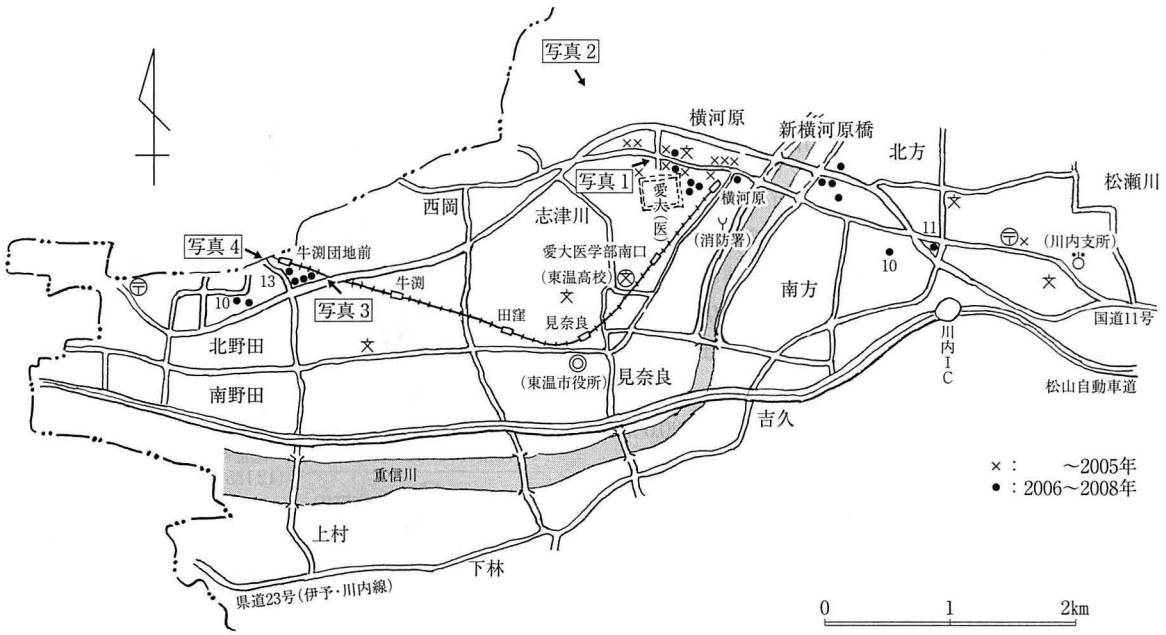


図9　東温市市街地における高層マンションの分布（6階以上）

注1）数字は階数、→は写真の撮影方向を示す。
注2）セイコー社「住宅地図2006年版」、消防署資料、現地調査により渡邊洋人作成

写真3　高層建築物が増加する牛渕団地前駅周辺

注）平成20年8月　渡邊洋人撮影

団地前駅前の14階建てである（写真4・図9）。また、この地域は第1種中高層住居専用地域に指定されており、今後も人口増加とともに中高層建築物が増加すると考えられる。　（渡邊　洋人）

写真4　牛渕団地前駅前近くの市内最高層建築物（マンション、13階）

注）平成20年8月　渡邊洋人撮影

4　都市化の進展

(1)　松山市の影響が大きい都市化

平成の大合併前の松山都市圏各市町住民の通勤・通学先をみると（図10）、重信町や砥部町、松前町が40％以上の高い数値を示し、松山市との結びつきが強いことを示している。これに対し北条市、伊予市、川内町は30％前後の数値となっている。これは松山市中心部との位置関係（距離）が影響していると考えられる。昭和45年（1970）の国勢調査では重信町30.0％、川内町20.1％であったから、この30年間で約10％ずつ松山市への通勤・通学者が増加しており、両町とも松山市との結びつきはますます強くなっていることが分かる。ただ平成12年度と、合併後の同17年度とを比較すると、松山市の占める割合は36.7％（旧重信･川内町合計）から37.5％へやや増加しているものの、東温市内での通勤･通学者が48.7％から56.8％へとかなり増えている。これは松山市のベッドタウン的な機能を有しつつも、地域完結型の独自の生活圏が形成されつつあることを示している。

松山都市圏各市町の人口推移をみると（図11）、昭和40年代後半から同50年代にかけて人口が急増している市町が多い。重信町でも昭和45年から同60年にかけて人口が急増した。この背景には、松山市の人口ドーナツ化現象の影響があげられる。松山市における人口ドーナツ化現象は、昭和30年代に早くも見られ始め、中心部の番町地区や八坂地区で人口が減少し、周辺部の桑原、生石、石井地区などの人口が増えた。周辺部の人口増加が最も著しかったのは昭和40年代で、この10年間に松山市の東端で東温市と接する小野地区の人口は1.6倍、久米地区の人口は約２倍に増加した。この都市化の波は重信町にも波及し、昭和45年から同50年までの５年間に人口が最も増加している。この時期重信町では、県営の牛渕団地や民間による播磨台、志津川、田窪外分団地など100戸を超える大規模な住宅団地が次々と建設された。重信町が松山市に隣接し、伊予鉄道が通り交通の便が良いため、松山市の都市化の影響を強く受けて宅地化が進んだのに対し、川内町は松山市まで距離が遠く、鉄道も通っていないため都市化はなかなか進展しなかった。人口も昭和50年まで

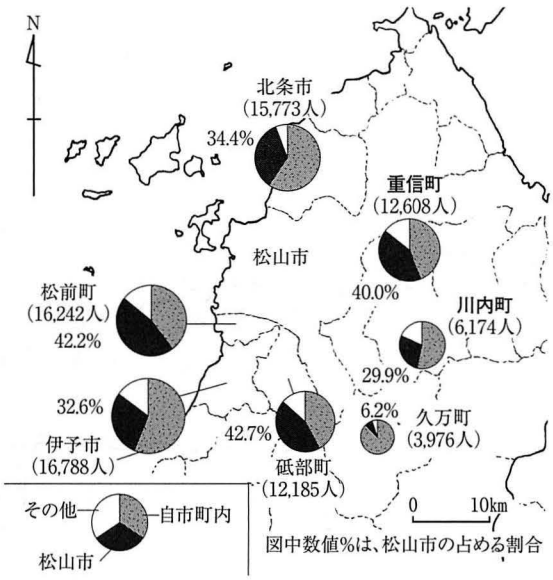


図10　松山都市圏各市町の通勤・通学先

注）平成12年国勢調査結果より立石淳作成

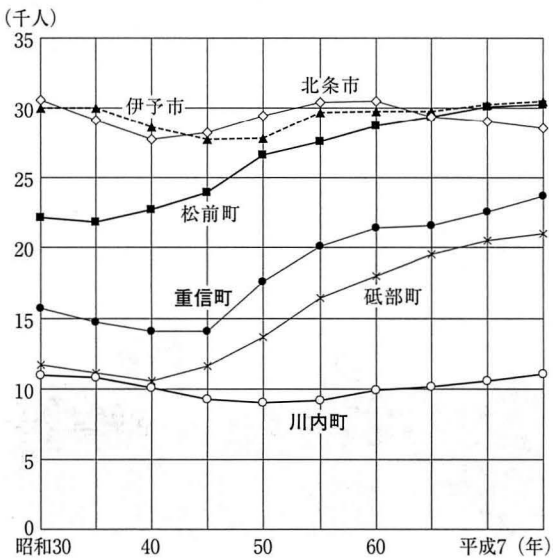


図11　松山都市圏各市町の人口推移

注）国勢調査結果より立石淳作成

減少が続き、それ以降も微増しているだけである。

（立石　　淳）

(2)　行政区別人口増減

東温市の人口は戦後の復興期に一時的に増加するが、昭和20年代半ばより高度経済成長末期の昭和46

年（1971）まで減少傾向にあった。しかし、愛媛県の人口が昭和60年をピークに減少する中、東温市の人口は昭和47年以降一貫して増加することになる。（ただし旧重信町・旧川内町として個別にみれば人口が減少した年もある。）昭和46年の人口は23,630人、平成20年（2008）には34,667人とこの37年間で11,037人増加した。この間の年平均人口増加率は1.26％である。これを旧町別にみると旧重信町の人口増加数は9,124人、年平均人口増加率は1.75％。一方、旧川内町は1,913人・0.54％で松山市に隣接する旧重信町の人口増加数・年平均人口増加率ともに旧川内町を大きく上回っている。特に、旧重信町の人口増加率は昭和47年に6.65％、48年には5.73％と戦後高い増加率を示した。（昭和47年以降3.00％以上の高い人口増加率を示したのは旧重信町では昭和52年の3.20％・同55年の3.22％の２回、旧川内町では昭和58年の3.05％の１回のみである。）この要因として昭和48年９月に愛媛大学に医学部が開設されたこと、同42年に横河原線が全線電化され、同45年に新設された牛渕団地前駅の周辺に県営牛渕団地・播磨台団地などが開発されたことがあげられる。また、昭和42年に新設された田窪駅の北側に志津川団地・田窪外分（とぶん）団地など昭和45年から同48年にかけて開発されるなど、大規模な住宅団地の開発が大きいものと考えられる。一方、旧川内町は旧重信町より松山市から遠距離で、バス路線しか持たなかったため住宅団地の開発が遅れた。昭和48年頃から川内ニュータウン・第２富士ハイツの開発が始まり、昭和55年には川内グリーンタウンが開発された。こうした大規模な住宅開発があった年に一時的に人口は急増するものの、旧重信町に比べて人口増加数は少ない。

東温市は都市計画マスタープランで将来目標人口を、松山広域都市計画区域マスタープランとの整合性をとるため平成27年に37,100人、同37年には38,700人と設定している。（松山広域都市計画区域マスタープランでは、平成27年に38,718人、同37年には39,539人が目標人口に設定されている。）これをもとに年平均人口増加率を推計すると、今後７年間は1.00％、さらにその後の10年間は0.43％と漸減することになる。昭和47年以降一貫して人口は増加してきたが、この37年間の年平均人口増加率1.26％を大きく下回ることになり、今後の人口増加数は逓減していくことが予想される。また、都市計画マスタープランでは現在の市街地を次の３つに捉えている。野田地区周辺の西部市街地は松山への通勤が便利な近郊市街地（松山市街地の延長）。横河原・見奈良地区周辺の中央市街地は松山への通勤が可能な郊外核市街地（東温市の中心市街地）。南方地区周辺の東部市街地は松山への通勤者も住む遠郊市街地（東温市の副中心市街地）。この３つの市街地が分散・独立して立地しているのが東温市の特徴である。

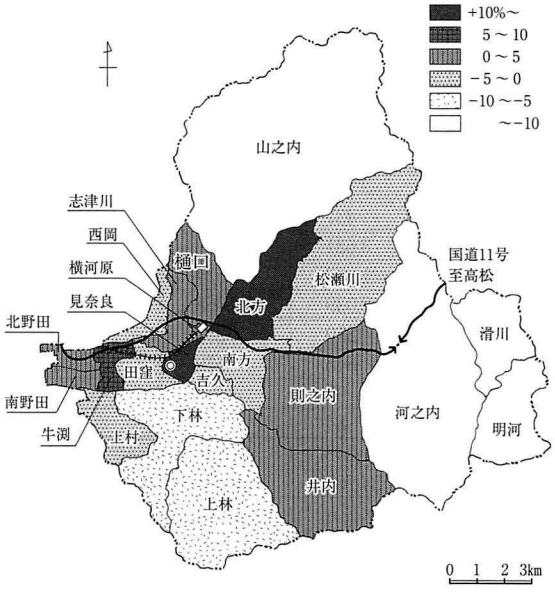


図12　地区別人口増減率（平成12年～平成17年）

注）東温市統計書より渡邊洋人作成

東温市の現在の行政区（図12）は明治21年（1888）の市町村制以前の村とほぼ一致している。平成12年から同17年までの５年間で人口増加率が6.3％（昭和46年～平成20年までの年平均人口増加率1.26％×５年間＝6.3％）を上回ったのは３地区のみで、第１位が中央市街地の見奈良地区（12.1％、279人）、次いで北方地区（10.9％、244人）・牛渕地区（7.5％、226人）となる（図12・表３）。また、平成14年から同19年までの５年間では人口増加率が6.3％を上回ったのは２地区のみで、第１位が田窪地区（8.3％、289人）、次いで中央市街地の見奈良地区（6.8％、105人）である（表４）。東温市の近年の人口増加の中心は横河原線沿線地区であり、人口増加率は逓減傾向にある。

旧重信町の昭和52年から５年毎の人口増減を示したのが表４である。この30年間で人口が増加したのは13

表３　地区別人口と人口増減率

（単位：人、％）

地区名	平成12	平成17	５年間の増減率
山之内	282	248	△ 12.1
樋　口	1,475	1,524	3.3
横河原	2,009	2,016	0.3
志津川	3,930	3,995	1.7
西　岡	1,262	1,258	△ 0.3
見奈良	2,312	2,591	12.1
田　窪	3,373	3,367	△ 0.2
牛　渕	3,006	3,232	7.5
南野田	582	589	1.2
北野田	2,485	2,507	0.9
上　林	923	873	△ 5.4
下　林	1,509	1,426	△ 5.5
上　村	510	506	△ 0.8
旧重信町	23,658	24,132	2.0
北　方	2,233	2,477	10.9
吉　久	437	434	△ 0.7
南　方	3,631	3,613	△ 0.5
松瀬川	1,673	1,624	△ 2.9
則之内	2,039	2,068	1.4
井　内	250	251	0.4
河之内	648	579	△ 10.6
滑　川	98	72	△ 26.5
明　河	34	28	△ 17.6
旧川内町	11,043	11,146	0.9
総　計	34,701	35,278	1.7

注１）△印はマイナスを示す。人口は10月１日現在の数。増減率は５年前の人口と比較した数値。
注２）「東温市統計書」より渡邊洋人作成

地区中９地区で人口増加率・人口増加数ともに最大は牛渕団地前駅周辺を含む西部市街地の北野田地区（173.3％、1,584人）である。以下、志津川地区（88.1％、1,552人）・牛渕地区（43.7％、1,119人）・田窪地区（40.4％、1,078人）・横河原地区（29.6％、538人）と、横河原線沿線地区と愛媛大学医学部周辺地区が顕著である（図９）。これらの地区は隣接する松山市に近く、鉄道・バスなどの交通の便や商業施設にも恵まれた地区である。一方、人口が減少したのは山之内地区（48.0％、235人）・西岡地区（22.3％、250人）・上林地区（5.9％、57人）・南野田地区（5.7％、38人）の４地区で、山間部を含む交通の不便な周辺地区である。

５年毎の人口増加率が最も高い伸びを示したのは平成４年から同９年の北野田地区（132.0％、1,274人）、次いで昭和52年から同57年の志津川地区（41.5％、731人）である（表４）。これらの要因として北野田地区はこの時期、土地区画整理事業による基盤整備が進み戸建て住宅の新築が進んだこと（図６）、また、アパートの建築数も地区別にみて最大であったこと（図７）、志津川地区は、昭和48年９月に愛媛大学に医学部が増設、51年５月に医学部附属病院が開院したことなどが考えられる。

平成13年から同19年までの６年間の地区別人口推移と人口指数を示したのが表５である。旧重信町では昭

表４　旧重信町の地区別人口と人口増減率

（単位：人、％）

地区名	昭和52	昭和57		昭和62		平成４		平成９		平成14		平成19		昭和52～平成19 30年間の増減率
	人口	人口	増減率	人口	増減率	人口	増減率	人口	増減率	人口	増減率	人口	増減率	
山之内	490	436	△11.0	369	△15.4	357	△3.3	332	△7.0	298	△10.2	255	△14.4	△48.0
樋　口	1,109	1,109	0.0	1,381	24.5	1,472	6.6	1,495	1.6	1,286	△14.0	1,306	1.6	17.8
横河原	1,818	1,900	4.5	1,837	△3.3	1,812	△1.4	1,802	△0.6	2,292	27.2	2,356	2.8	29.6
志津川	1,762	2,493	41.5	2,887	15.8	3,106	7.6	3,412	9.9	3,316	△2.8	3,314	△0.1	88.1
西　岡	1,123	1,130	0.6	1,138	0.7	1,128	△0.9	1,211	7.4	929	△23.3	873	△6.0	△22.3
見奈良	1,452	1,683	15.9	1,763	4.8	1,698	△3.7	1,539	△9.4	1,533	△0.4	1,638	6.8	12.8
田　窪	2,677	2,965	10.8	3,239	9.2	3,492	7.8	3,497	0.1	3,466	△0.9	3,755	8.3	40.3
牛　渕	2,561	3,010	17.5	3,307	9.9	3,230	△2.3	3,138	△2.8	3,609	15.0	3,680	2.0	43.7
南野田	669	633	△5.4	690	9.0	700	1.4	639	△8.7	615	△3.8	631	2.6	△5.7
北野田	914	950	3.9	943	△0.7	965	2.3	2,239	132.0	2,439	8.9	2,498	2.4	173.3
上　林	973	947	△2.7	919	△3.0	884	△3.8	1,000	13.1	927	△7.3	916	△1.2	△5.9
下　林	1,401	1,348	△3.8	1,396	3.6	1,428	2.3	1,516	6.2	1,567	3.4	1,499	△4.3	7.0
上　村	515	539	4.7	548	1.7	540	△1.5	541	0.2	539	△0.4	531	△1.5	3.1
合　計（増減率）	17,464	19,143	9.6	20,416	6.6	20,812	1.9	22,361	7.4	22,816	2.0	23,252	1.9	33.1

注１）田窪団地は田窪、牛渕団地・播磨台団地・上樋は牛渕、北野団地・新村は北野田へ合算している。
注２）△印はマイナスを示す。人口は４月１日現在の数。増減率は５年前の人口と比較した数値を示している。
注３）「東温市統計書」、「市民課資料」より渡邊洋人作成

表5　地区別人口推移と人口指数

（単位：人）

	行政区（自治区）	平成13	平成14		平成15		平成16		平成17		平成18		平成19	
		人口	人口	指数	人口	指数	人口	指数	人口	指数	人口	指数	人口	指数
旧重信町	山之内	298	298	100	293	98	281	94	277	93	265	89	255	86
	樋口	1,267	1,286	101	1,297	102	1,326	105	1,306	103	1,330	105	1,306	103
	横河原	2,308	2,292	99	2,307	100	2,369	103	2,369	103	2,367	103	2,356	102
	志津川	3,334	3,316	99	3,340	100	3,366	101	3,415	102	3,391	102	3,314	99
	西岡	907	929	102	925	102	903	100	937	103	938	103	873	96
	見奈良	1,542	1,533	99	1,549	100	1,539	100	1,583	103	1,554	101	1,638	106
	田窪	2,869	2,876	100	2,841	99	2,872	100	2,899	101	2,960	103	3,170	110
	田窪団地	594	590	99	582	98	585	98	576	97	564	95	585	98
	牛渕	1,465	1,457	99	1,455	99	1,508	103	1,563	107	1,620	111	1,727	118
	牛渕団地	1,227	1,375	112	1,352	110	1,311	107	1,328	108	1,311	107	1,230	100
	播磨台団地	335	337	101	339	101	337	101	319	95	318	95	302	90
	上樋	446	440	99	427	96	437	98	416	93	425	95	421	94
	南野田	603	615	102	620	103	620	103	624	103	628	104	631	105
	北野田	1,822	1,800	99	1,782	98	1,780	98	1,814	100	1,831	100	1,819	100
	北野台団地	182	179	98	175	96	168	92	166	91	163	90	161	88
	新村	535	460	86	453	85	493	92	501	94	510	95	518	97
	上林	942	927	98	921	98	916	97	915	97	924	98	916	97
	下林	1,569	1,567	100	1,568	100	1,551	99	1,518	97	1,502	96	1,499	96
	上村	548	539	98	544	99	554	101	544	99	535	98	531	97
	小計	22,793	22,816	100	22,770	100	22,970	101	23,070	101	23,136	102	23,252	102
旧川内町	河之内	499	493	99	487	98	492	99	749	150	741	148	703	141
	則之内東	997	984	99	961	96	965	97	666	67	694	70	694	70
	則之内西	1,016	1,024	101	1,055	104	1,061	104	1,064	105	1,073	106	1,073	106
	井内	312	311	100	307	98	303	97	300	96	291	93	280	90
	滑川	148	142	96	134	91	129	87	126	85	120	81	99	67
	土谷	161	156	97	160	99	153	95	146	91	142	88	136	84
	奥松瀬川	349	347	99	335	96	333	95	334	96	332	95	337	97
	前松瀬川	416	419	101	423	102	412	99	400	96	393	94	403	97
	横灘団地	777	779	100	765	98	779	100	788	101	777	100	778	100
	北方東	780	762	98	761	98	752	96	756	97	752	96	742	95
	北方西	711	697	98	711	100	720	101	748	105	780	110	785	110
	町東	1,069	1,061	99	1,065	100	1,076	101	1,044	98	1,050	98	1,112	104
	町西	1,155	1,173	102	1,202	104	1,184	103	1,208	105	1,192	103	1,241	107
	南方東	2,105	2,146	102	2,161	103	2,159	103	2,184	104	2,199	104	2,197	104
	南方西	785	794	101	808	103	792	101	793	101	792	101	835	106
	小計	11,280	11,288	100	11,335	100	11,310	100	11,306	100	11,328	100	11,415	101
合計		34,073	34,104	100	34,105	100	34,280	101	34,376	101	34,464	101	34,667	102

注1）人口は4月1日現在、指数は平成13年度を基準にしている。
注2）町東は南方に含まれ、町西は北方・南方に分かれる。（吉久は南方西に含まれる）
注3）東温市市民課資料より渡邊洋人作成

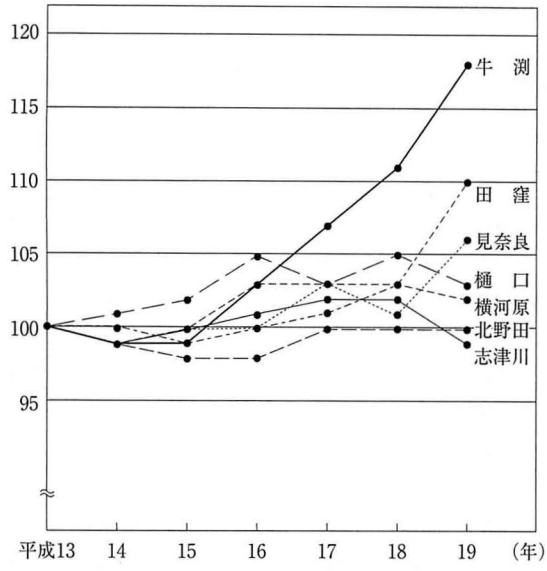


図13　旧重信町の地区別人口指数（増加地区）の推移

注）東温市市民課資料より渡邊洋人作成

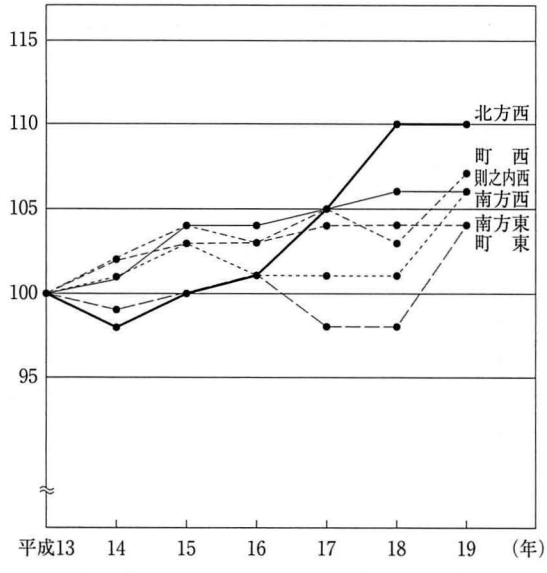


図14　旧川内町の地区別人口指数（増加地区）の推移

注）東温市市民課資料より渡邊洋人作成

和47年以降、人口増加率・人口増加数ともに１・２位であった北野田地区・志津川地区は平成13年以降大きな伸びはみられない。平成15年以降は西部市街地と中央市街地の中間に位置する牛渕地区・田窪地区、また中央市街地の見奈良地区の人口の伸びが大きい（図13）。一方、旧川内町では中央市街地の見奈良地区近隣の北方西地区・町西地区の伸びが顕著である（表５・図14）。

（渡邊　洋人）

(3)　旧重信町の都市化

東温市のうち、都市化が急速に進んだ旧重信町について考察する。

旧重信町の地区別人口の推移を見ると（図15）、田窪や見奈良では昭和35年（1960）、牛渕は同40年から人口が増加し始めているが、多くの地区で同45年からの人口増が著しい。特に牛渕、志津川、見奈良地区の人口は、昭和45年から同55年までの10年間で約２倍に増加した。牛渕では県営牛渕団地（昭和44～46年および同53～56年に582戸）、志津川では伊予鉄不動産の志津川団地（昭和45～48年に145区画）が建設されたほか、志津川に愛媛大学医学部（昭和49年度）、見奈良に松山刑務所（昭和47年度）が建設され、それに付随した官舎等に多くの転入者があった。

昭和55年以降重信町の人口増加は鈍化傾向にあるが、愛媛大学医学部のある志津川地区では人口増加が続いた。医学部周辺に民間のアパートやマンション

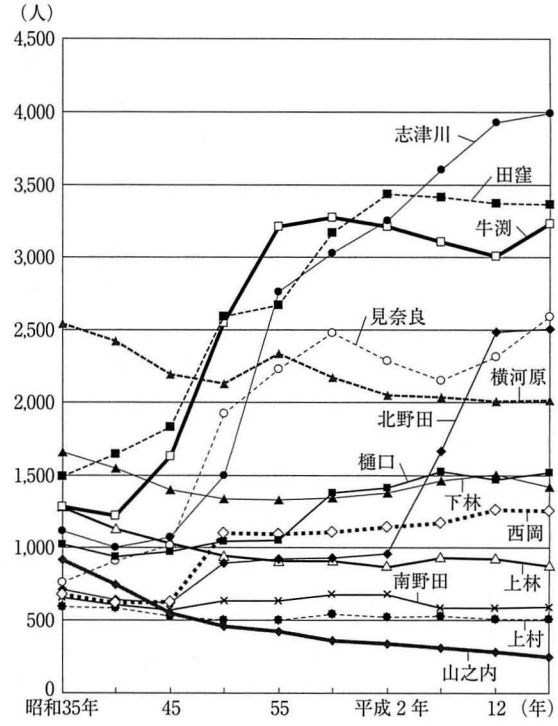


図15　旧重信町の地区別人口推移

注）東温市役所資料より立石淳作成

が多く建設され、転入者が多いためである。平成２年（1990）からは北野田地区で人口が急増した。これは、重信町により平成３年度から土地区画整理事業が進み、431区画の宅地が造成されたことによる。ここには個人住宅のほか集合住宅も多く建設され、平成２年から同12年までの10年間で人口は約2.5倍になり、平成に入ってから重信町で一番人口が増加した地区となった。こうした地域に対し、主要国道や鉄道から離れ、多くを山間部が占めている山之内、上村、上林、下林地区は人口が減少もしくは停滞している。また、平野部に位置する南野田地区も市街化区域になっていないため、人口は停滞している。

昭和35年からトータルで人口増減を見ると（図16）、見奈良、志津川、北野田地区の人口がそれぞれ３倍以上に増加している。中心部と南北周辺部との差が顕著であり、特に山之内地区の人口は４分の１近くにまで減少している。また、人口集中地区である横河原地区の人口も開発する余地が少ないためか、減少している。（立石　淳）

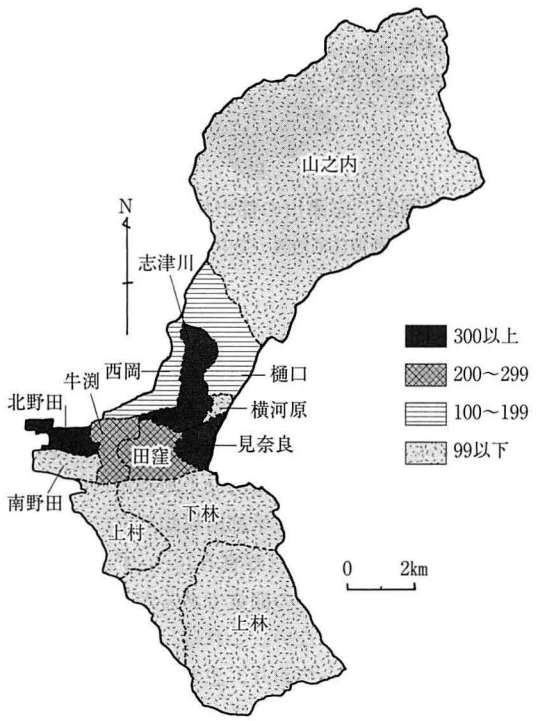


図16　旧重信町の地区別人口増減(昭和35年～平成17年)

注１）昭和35年の人口を100とした場合の平成17年の人口数値を示している。

注２）東温市役所資料より立石淳作成

(4)　都市化が著しい志津川

(ｱ)　志津川と八反地

重信川の扇状地に位置している志津川は、近世においては松山藩領の村であった。明治22年（1889）の町村制施行以降、久米郡北吉井村の大字となり、昭和31年（1956）からは重信町の大字となる。

志津川は北部の中心集落および西部の字（あざ）八反地の二地域に区分することができる。志津川の中心集落は集村形態で、県道松山川内線沿いには商店も多い。その中には、明治28年創業の島田酒造の酒蔵も存在する。一方、八反地は藩政時代の新田集落であり、浮穴郡田窪村の枝郷であったが、天保10年（1839）より久米郡志津川村になった地域である。集落形態は散村に近い状態であった。

志津川の北部と南部には、それぞれ旧街道が通過しており、古くから人々の往来が盛んであったと考えられる。なお、前者は松山からの金毘羅街道であり、後者は南予方面から通じる金毘羅街道である。

(ｲ)　志津川の都市化

昭和32年（1957）10月に伊予鉄道が横河原まで開通し、志津川の東に隣接する横河原が急速に発展する（図17）。そして、志津川が大きく発展する契機となったのが、昭和49年の愛媛大学医学部設置である。昭和48年に松山市内に開設された愛媛大学医学部は、翌年に志津川の前川池を埋め立てて新築移転し、さらに昭和51年には附属病院が開院した。その後、同56年には愛大医学部南口駅が設置され、松山市のベッドタウンと

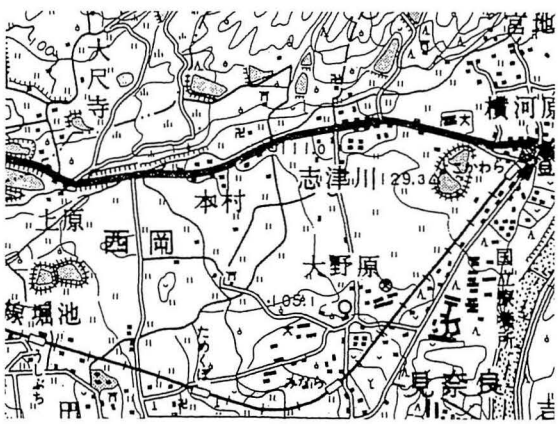


図17　旧重信町志津川地区

注）５万分の１地形図「松山南部」昭和44年編集

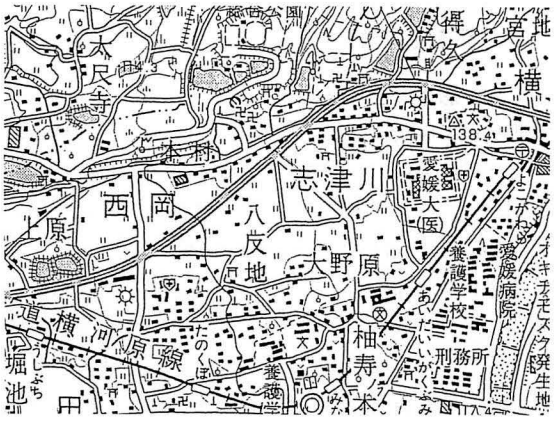


図18　東温市志津川地区

注）５万分の１地形図「松山南部」平成18年要部修正

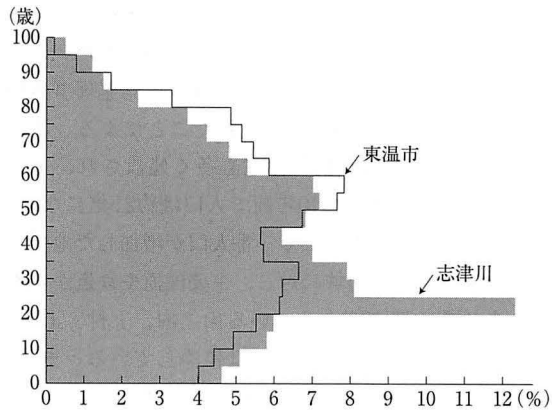


図20　志津川および東温市の人口構成比（平成17年）

注）東温市役所資料より西丸和仁作成

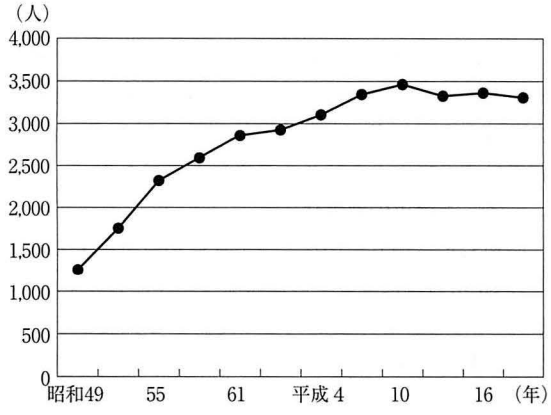


図19　志津川の人口推移

注）東温市役所資料より西丸和仁作成

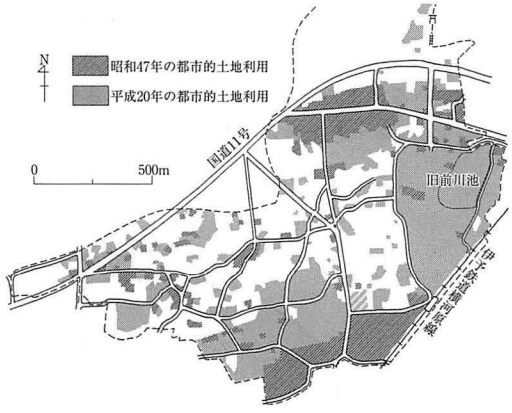


図21　志津川の都市化の進展

注）現地調査・新旧住宅地図・空中写真より西丸和仁作成

しても発展している（図18）。

医学部設置以降、人口は順調に増加している（図19）。愛媛大学の学生が多く居住するため、平均年齢は東温市全体に比べて低く、20歳代前半の人口に占める割合が突出している（図20）。

人口増加に伴い、農地の転用による都市化地域が広がっている（図21）。志津川の用途地域は、中心集落を含む北部が第一種中高層住居専用地域、重信中学校付近の南西部が第一種低層住居専用地域に指定されており、用途地域によって明確に集合住宅の分布特性が見られる。すなわち、北部では６階建て以上の高層マンションが多く、病院関係者や医学部の学生の居住が多い。医学部敷地内に官舎も設置されている。また、南西部では２階建てのコーポタイプの集合住宅が多く見られる（図22）。

なお、市街化区域外である西部では市営八反地団地を除いて集合住宅は見られない。国道11号（重信道路）沿いについても、市街化区域外ということもあり、交通量が多いにも拘らず、商業的な土地利用はそれほど行われていない。また、医学部附属病院前には３軒の調剤薬局が立地している（写真５）。いずれも近年の医薬分業化の流れの中での開業であるが、病院の規模の割には薬局の数は少ない。これは、愛大病院の医療圏が県下全域に広がっており、患者の地元で処方を受けることなどが理由であると考えられる。

(ウ)　今後の課題

志津川では、町内会組織を中心として、地域に根ざした祭礼などの行事が盛んに行われている（写真６）。

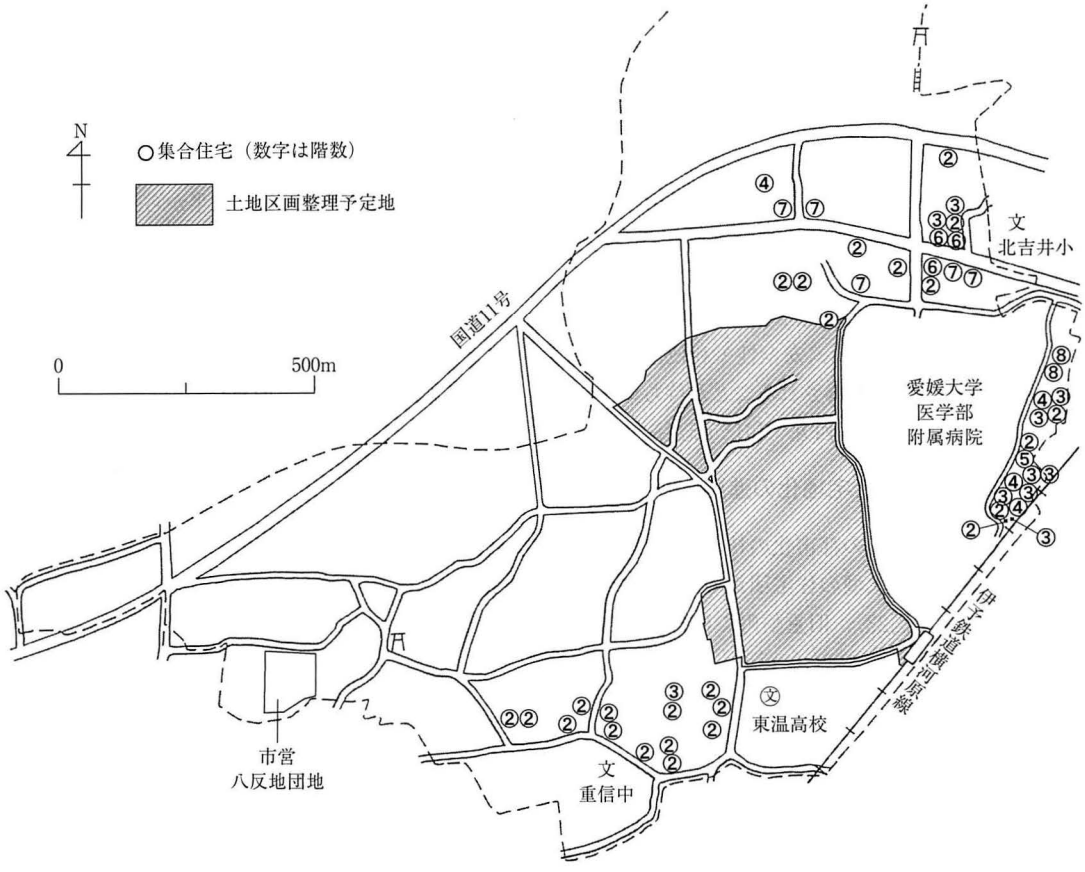


図22　志津川の集合住宅

注）現地調査・住宅地図より西丸和仁作成

写真５　愛媛大学医学部周辺の調剤薬局

注）平成20年８月　惣谷清撮影

写真６　夏祭り（八反地宵祭）

注）平成20年８月　高橋浩司撮影

古くからの住民の中に新住民がとけ込み、町内会の運営が円滑に行われているが、一部では伝統的な行事の運営が難しくなりつつあるという。

景観的にも、都市的要素と旧来の村落的要素が混在しつつ発展している。医学部の西側では、虫食い状に市街地が広がるスプロール現象が一部で発生しており、狭い道路が入り組んだ住宅地も形成されている。今後、この地域は愛大医学部南口駅を起点として市街化区域に編入され、土地区画整理事業の実施が計画されている（図22)。その結果、安全性・利便性・快適性が向上し、生活環境が改善されることが待ち望まれる。　　（西丸　和仁・惣谷　　清）

(5)　住宅団地の分布と宅地化の進展

先述したように東温市の都市化の核となったのは、県や町、民間等による大型の住宅団地の建設である。その分布を見ると（図23)、旧重信町では野田から牛渕にかけての地域、田窪から志津川、見奈良、横河原にかけての地域に多く分布している。いずれも伊予鉄道沿線に位置しており、特に昭和40年代に建設された住宅団地でその傾向が強かった。自家用車がまだ一般的でないこの時代、地域住民の足は伊予鉄道であった。旧川内町では、昭和40年代後半から50年代初頭にかけて山麓の丘陵地を造成して大型の住宅団地が建設された。特に松瀬川の丘陵地を造成して伊予鉄不動産と熊谷組が建設した横灘団地（川内グリーンタウン）は、367区画（当時）もあった（写真７)。

公営住宅の建設は、旧重信·川内両町とも昭和30年代後半から始まる。重信町では、昭和36年度に見奈良（18戸)、同39年度に宮裏（10戸）と田窪第一（10戸）が建設されたが、木造の小規模なもので都市化の核とはならなかった。これらの住宅は耐用年数が経過しており、見奈良団地については昭和62年（1987）に建て替えられた。比較的規模の大きい公営住宅に建設は、

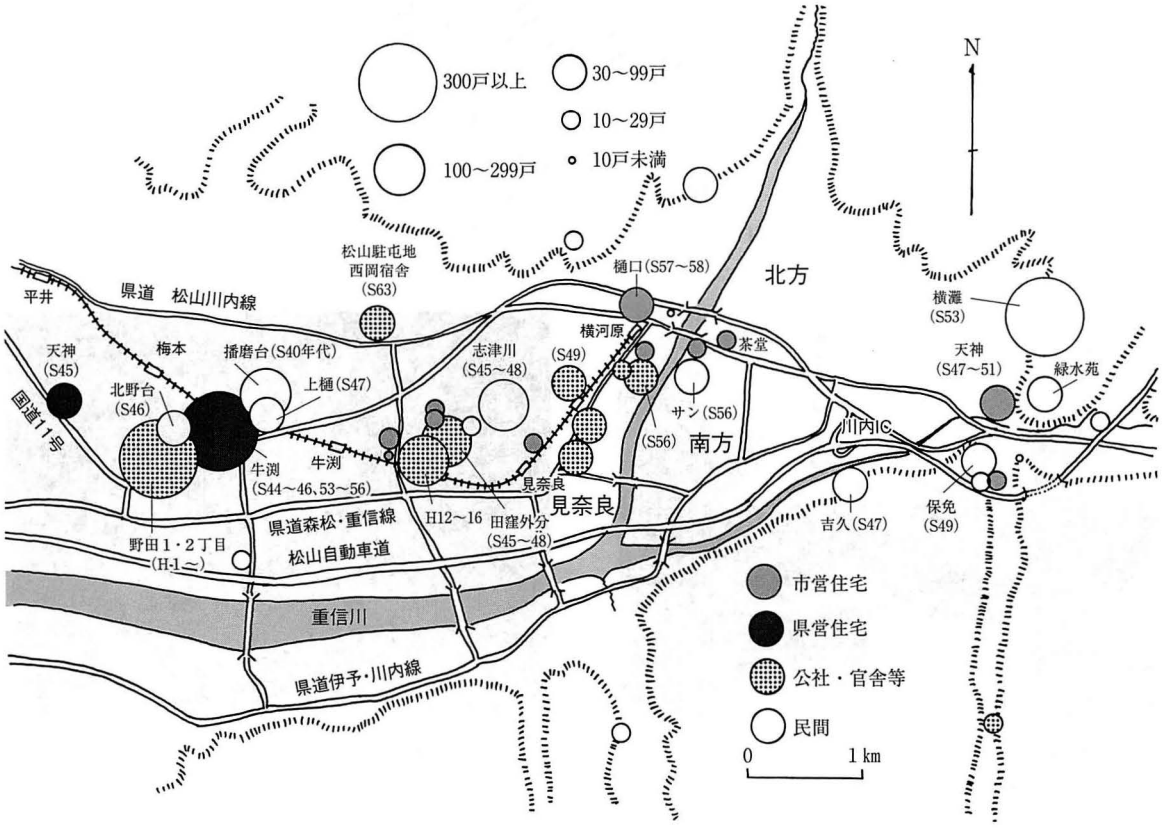


図23　東温市の住宅団地の分布

注）東温市役所資料より立石淳作成

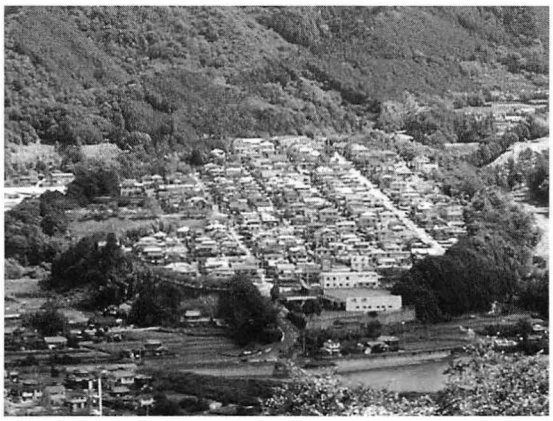


写真７　横灘団地（川内グリーンタウン）
注）平成20年８月　立石淳撮影

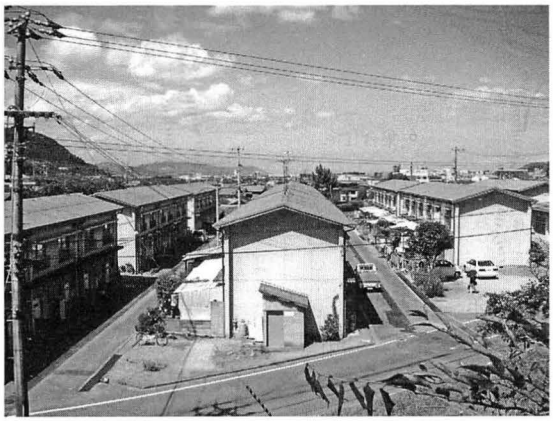


写真８　市営天神団地
注）平成20年８月　立石淳撮影

昭和50年代になってからで、樋口団地（昭和57～58年建設、54戸）は鉄筋コンクリート４階･５階の住宅である。川内町では、昭和37年から同38年にかけて下沖団地（32戸）、茶堂（８戸）が建設されるが、最大のものは、昭和47年から同51年にかけて建設された天神団地（54戸）である（写真８）。重信町の町営住宅は横河原線の駅に近いところに作られたが、川内町で駅に比較的近いのは、横河原に近いところに建設された茶堂および茶堂南団地である。茶堂の集落と横河原は重信川を挟んだ渡津集落であった。

県営住宅の建設は、昭和40年代半ばから牛渕団地(582戸)、天神団地（30戸）が建設された。牛渕団地（写真９、10）は県下最大の公営住宅団地であり、重信町の都市化の大きな中心核となった。昭和45年

写真９　県営牛渕団地
注）平成20年８月　立石淳撮影

写真10　昭和45年当時の牛渕団地
注）「グラフえひめ №45」（1970年）より

（1970）には伊予鉄道牛渕団地前駅が新設され、平成元年（1989）から重信町により野田１丁目、２丁目の造成（431区画）が行われ、フジグラン重信（平成５年出店、平成７年と14年に増床）、ディックEX重信（平成12年出店）をはじめとする複合商業施設の発達を促した。また、旧重信町には愛媛大学医学部･附属病院、県立しげのぶ特別支援学校、県立みなら特別支援学校や松山刑務所など学校や公共施設も多く立地しており、その職員の住む官舎も多い。

図24で昭和53年から平成18年までの約30年間に建設された住宅をみると、住宅団地の分布と一致している部分が多いことが分かる。重信では北野田から牛渕にかけての地区や、田窪、志津川地区、川内では横灘や保免のあたりが該当する。

しかし愛媛大学医学部周辺や、南方の森あたりや川内中学校周辺の宅地化も目立っている。特に愛媛大学医学部周辺は民間のアパートやマンションなどの集合住宅が多く建設された（写真11）。20戸前後のものが多いが、中には40戸を超えるものも見られる。

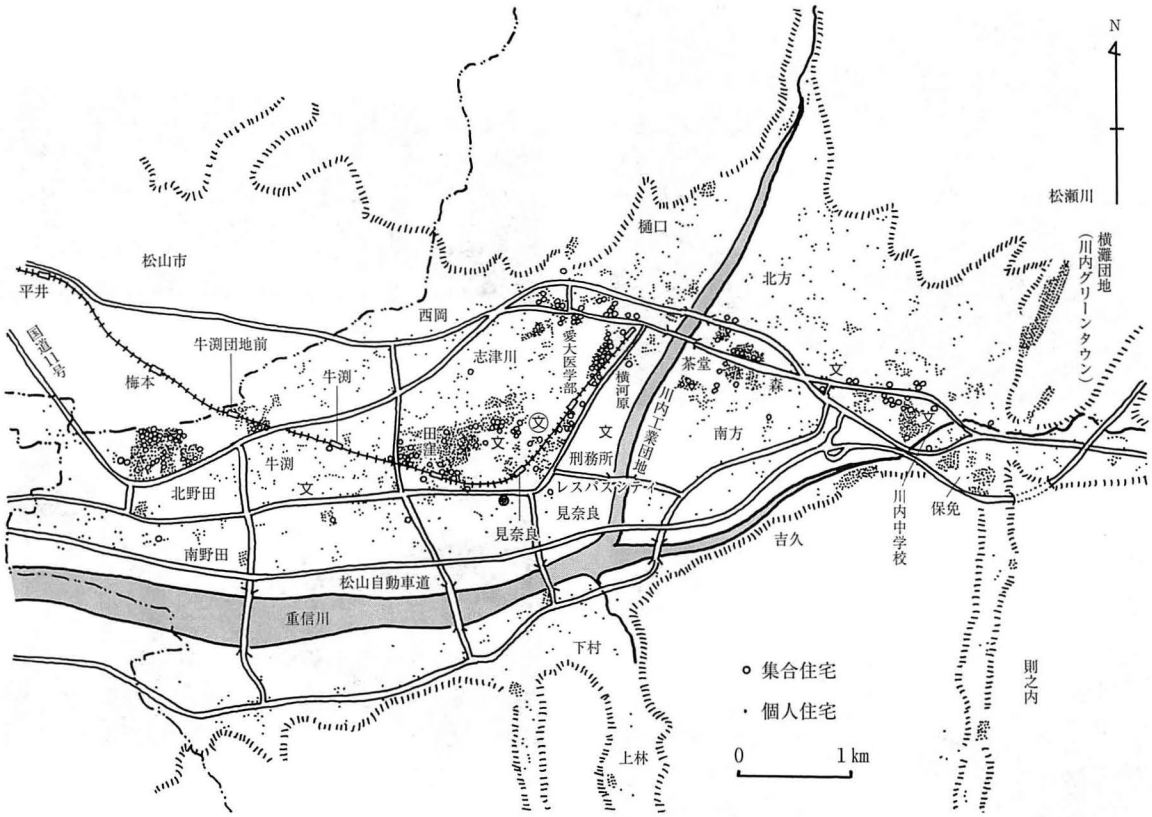


図24　東温市の住宅建設（昭和53年～平成18年）

注）セイコー社「住宅地図」（1978年版・2006年版）より立石淳作成

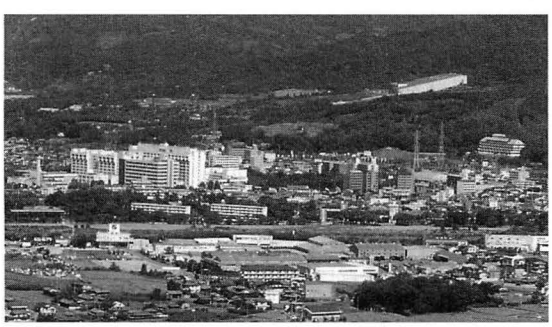


写真11　愛媛大学医学部とその周辺の住宅

注）平成20年８月　立石淳撮影

(6)　都市化のまとめと展望

東温市の都市化は、松山市の影響を大きく受け、昭和40年代は伊予鉄道沿線に建設された住宅団地を核に進んでいった。モータリゼーションが進展してくると、国道11号ほかの幹線道路沿いに住宅団地や大型事業所が建設され、都市化の核となっていく。東温市の中でも特に旧重信町は、鉄道交通、道路交通とも便がよく、松山市にも近いため、都市化は平野部で面的に進んだが、旧川内町は住宅団地だけの島状の都市化にとどまった。しかし川内町でも国道の整備や松山自動車道川内ICの開設に伴い、今後は物流の拠点としての都市化が進むものと考えられる。

東温市は、今後も松山市の衛星都市としての性格を持ちつつ、市内に多くの事業所が進出してきたことにより、市内完結型生活圏の性格がより強まると考えられ、東温市独自の都市構想・都市計画の重要性が増してくるであろう。

松山市の衛星都市として進んだスプロール現象による無秩序な都市化は、東温市の都市としての中心部が欠落する結果をもたらした。田窪から見奈良、志津川、横河原にかけての市街地を東温市の中心として求心力を高めるためには、街路網の整備や駅周辺の再開発の

必要があろう。また、分散している市街地を結びつける道路や、幹線道路と鉄道の連絡道路の整備が東温市の都市としてのまとまりを形成するためには重要であろう。（立石　淳）

5　まちづくりに向けた現状と課題

東温市の市街地は特徴あるシンボル的な市街地はなく、3つの市街地が分散・独立して立地している。特に、牛渕団地前駅を中心とした西部市街地は大規模な商業施設や団地が立地し、戸建て住宅やアパートの建設も増加するなど、松山市街地と連接したコナーベーション的様相を呈している。中央市街地は、道路網が未整備で、病院等の大規模公共施設により市街地としての一体性や中心性が確保できず、都市中心の形成はあまり進んでいない。また、道路網等の都市基盤施設が未整備なまま駅を中心にスプロール化が進行したり、有効な道路がないため利用が進まない空閑地・未利用地を残した地区もみられる。

まちづくりに向けた課題は都市としての一体性と独立性の確保にある。都市計画マスタープランには西部市街地と中央市街地の連携・一体化の促進と中央市街地の求心性の向上。特徴ある商業機能の中心として横河原地区の再生・整備。見奈良地区における公共施設等の集積と空閑地の存在を生かした将来の都市の顔となる拠点地区の形成。横河原地区と見奈良地区の機能分担と連携・連動、道路・交通網整備と併せた市街地の整序による中央市街地の機能性と集積の強化・向上。西部市街地と中央市街地の結びつきを強める拠点的な開発の導入や面的整備の推進。などが掲げられている。

具体的な都市開発の方針では次の㈠～㈢地区が重点整備地区として、また㈤地区も今後市街化区域へ編入される予定である。

㈠　志津川地区（23.0ha）

愛媛大学医学部に隣接する市街化調整区域において、増加する人口を受け入れるため、土地区画整理事業による都市基盤の整備により市街化区域への編入を進める。

㈡　南方地区（16.1ha）

川内ICに隣接する市街化調整区域において、流通業務施設や関連企業立地を推進するための拠点として、土地区画整理事業による都市基盤の整備により市街化区域への編入を進める。

㈢　見奈良駅西地区（16.1ha）

見奈良駅周辺の市街化調整区域において、公共的機能の集積と中核的イメージ形成のため、土地区画整理事業による都市基盤の整備により市街化区域への編入を進める。

㈤　見奈良駅東地区（2.3ha）

見奈良駅東の市街化区域内の空閑地において、都市的土地利用を促進するため、土地区画整理事業、地区計画等の面的整備による都市基盤の整備された市街地の形成を進める。

東温市ではこれら4地区や伊予鉄道横河原線沿線地区を中心に今後も緩やかに都市化が進展していくと予想される。

財政状況を人口規模が同程度の八幡浜市・西予市、また松山近郊に位置する伊予市・松前町・砥部町と比較すると、実質公債比率[2]や将来負担比率[3]が低く財政状況はより健全である。さらに財政力指数[4]がやや高く経常収支比率[5]も低い（表6）。よって、他の市町に比べより大胆な市独自の政策がとれると考えられる。

表6　主要財政指標

（単位：%）

	実質公債費比率	将来負担比率	財政力指数	経常収支比率	起債制限比率
東温市	13.7	105.8	0.550	87.2	10.1
伊予市	14.5	109.2	0.415	87.8	9.5
八幡浜市	15.7	148.5	0.355	89.8	5.9
西予市	14.0	120.6	0.282	90.4	9.6
松前町	13.8	129.6	0.648	84.1	10.5
砥部町	13.3	32.6	0.483	88.6	12.4
県内市町平均	16.4	128.3	0.440	88.7	10.7
愛媛県	16.2	206.9	0.372	89.8	13.8

注1）実質公債費比率・将来負担比率は平成19年度。その他は平成18年度。
注2）総務省・愛媛県のホームページ記載資料より渡邊洋人作成

しかし、愛媛県内では比較的財政状況に恵まれている東温市も、進行中の公共下水道工事は平成19年度から工事完了を10年先に繰り延べる計画に変更を余儀なくされたり、市役所西側に建設予定の保健福祉センターも駐車場のままである。こうした状況下のまちづくりには、安定的な財政運営とマスタープランに基づ

いたより的確な都市基盤整備事業の推進が求められる。また、東温市は県都松山市に隣接し、最近５年間の人口増加率は県内市町で最も高い。（人口が増加しているのは東温市と松山市のみである。）この特徴を生かし、民間とタイアップした子育て世代向けの都市型住宅を供給し、定住人口の増加を図ることもできる。さらに歴史的な町並みの整備、将来の都市の顔となるべき中心市街地「見奈良地区」を、施設が集まり市民が集える「コンパクトシティー」の中心として開発できれば、「小さいながらもキラリと光る東温市」の魅力をさらに高めることができるだろう。

（渡邊　洋人）

注および参考文献

1）DIDとは、原則として、人口密度の高い国勢調査調査区（人口密度１㎢当たり4,000人以上の調査区）が市町村内で互いに隣接して、人口5,000人以上を構成する地区をいう。

DID…Densely Inhabited Destrictsの略

2）実質公債比率とは、普通会計における元利償還金などの標準財政規模に対する割合。早期健全化基準は25％、財政再生基準は35％である。

3）将来負担比率とは、普通会計が将来にわたり負担すべき実質的な負債の標準財政規模に対する割合。早期健全化基準は都道府県400％、市町村350％である。

4）財政力指数とは、基準財政需要額（標準的な水準で行政を行うための必要経費）に対する基準財政収入額（その自治体の標準的な収入）の割合の、過去３年間の平均値。自主財源がどの程度あるかを示し、高いほど財政が豊か。１を超える自治体には普通交付税が配分されない。

5）経常収支比率とは、人件費や公債費など毎年経常的に支出される経費に充てる一般財源が、毎年経常的に入ってくる地方税や地方交付税などの一般財源に占める割合。数値が高いほど一般財源に余裕がなく、自治体独自の事業に使える費用が少ないことを示す。

○ゼンリン（昭和47年）：ゼンリンの住宅地図松山周辺部
○朝倉書店（昭和50年）：日本図誌大系 10 四国
○平凡社（昭和55年）：愛媛県の地名
○角川書店（昭和56年）：角川日本地名大辞典 38 愛媛県
○愛媛県（昭和58年）：愛媛県史　地誌Ⅰ（総論）
○愛媛県（昭和59年）：愛媛県史　地誌Ⅱ（中予）
○重信町（昭和63年）：重信町誌
○篠原重則（平成元年）：愛媛県東温地区の旧街道と人々の生活『東温高校研究紀要』
○川内町（平成４年）：川内町新誌
○東温市（平成18年）：東温市勢要覧2006
○東温市（平成18年）：東温市の都市計画に関する基本的な方針
○東温市（平成18年）：東温市総合計画「あなたが創るとうおん未来プラン」
○セイコー社（平成18年）：はいまっぷ東温市2006
○東温市（平成19年）：東温市統計書 平成18年度版
○YAHOO！JAPAN地図 http://map.yahoo.co.jp/

新　居　浜　西　高　校　渡邊　洋人
今　治　西　高　校　平田　剛啓
愛媛県教育委員会生涯学習課　立石　淳
宇　和　島　東　高　校　西丸　和仁
立　命　館　大　学　学　生　惣谷　清

Ⅶ　交通・生活圏

1　道路交通

(1)　東温市の旧街道

高縄半島の基部で松山平野と道前平野を結ぶルートは中山越と呼ばれていた。近世になると、松山藩が道前平野の物資の輸送路として重視するとともに、民間においては金毘羅さんや石鎚山への参詣道としてにぎわった。東温地区を東西に横断する街道はこうした経緯から、金毘羅街道と呼ばれた。篠原重則は、現存する道標や常夜灯の位置と、古老からの聴取調査により、次の３本の金毘羅街道が存在することを指摘した。

① 旧国道11号に近似し、平井・西岡・横河原を通り川上に至る「讃岐街道」とも呼ばれる街道。

② 重信川の右岸を通り、田窪・見奈良を経て横河原に至る街道（現在の東温高校を東西に横断する）。

③ 重信川の左岸、現在の県道伊予川内線に近いコースをたどり、「宇和島大洲道」とも呼ばれる街道。

これら３本の街道が合流する川上は、交通の結節点として、旅籠や商店はもちろん伝馬屋（街道の往来に必要な馬や労力を提供する）も置かれ、東温地区の中心地として繁栄した（写真１）。

写真１　旧街道と道標（川上地区）
注）平成20年８月　橋本貴登撮影

松瀬川から落合にかけて、檜皮峠を越える街道には、江戸時代に多くの桜が植樹され、通称「桜三里」と呼ばれるようになった。峠を越えた旧街道に位置する土谷の集落は、宿場の佇まいをわずかに残している（写真２）。

写真２　旧街道（土谷付近）
注）平成20年８月　橋本貴登撮影

明治に入っても金毘羅街道の重要性は変わることなく、幹線道路としての役割を果たしたが、明治32年（1899）に伊予鉄道が平井河原から横河原まで延伸されると、横河原が東温地区の物資の集散地として発達し、川上に代わる中心集落となった。さらに昭和２年（1927）、国鉄予讃線が松山まで延伸されると、街道そのものの重要性が相対的に低下することとなった。

(2)　交通網及び交通量

東温市内の交通網を表したのが図１である。グラフは『道路交通センサス』の昭和60年（1985）から平成17年（2005）のデータより、市内のおもな地点における24時間交通量（通行台数）の経年変化を図化したものである。また、表１は近代における東温市の交通の歩みをまとめたものである。主要路線の概要を以下にまとめた。

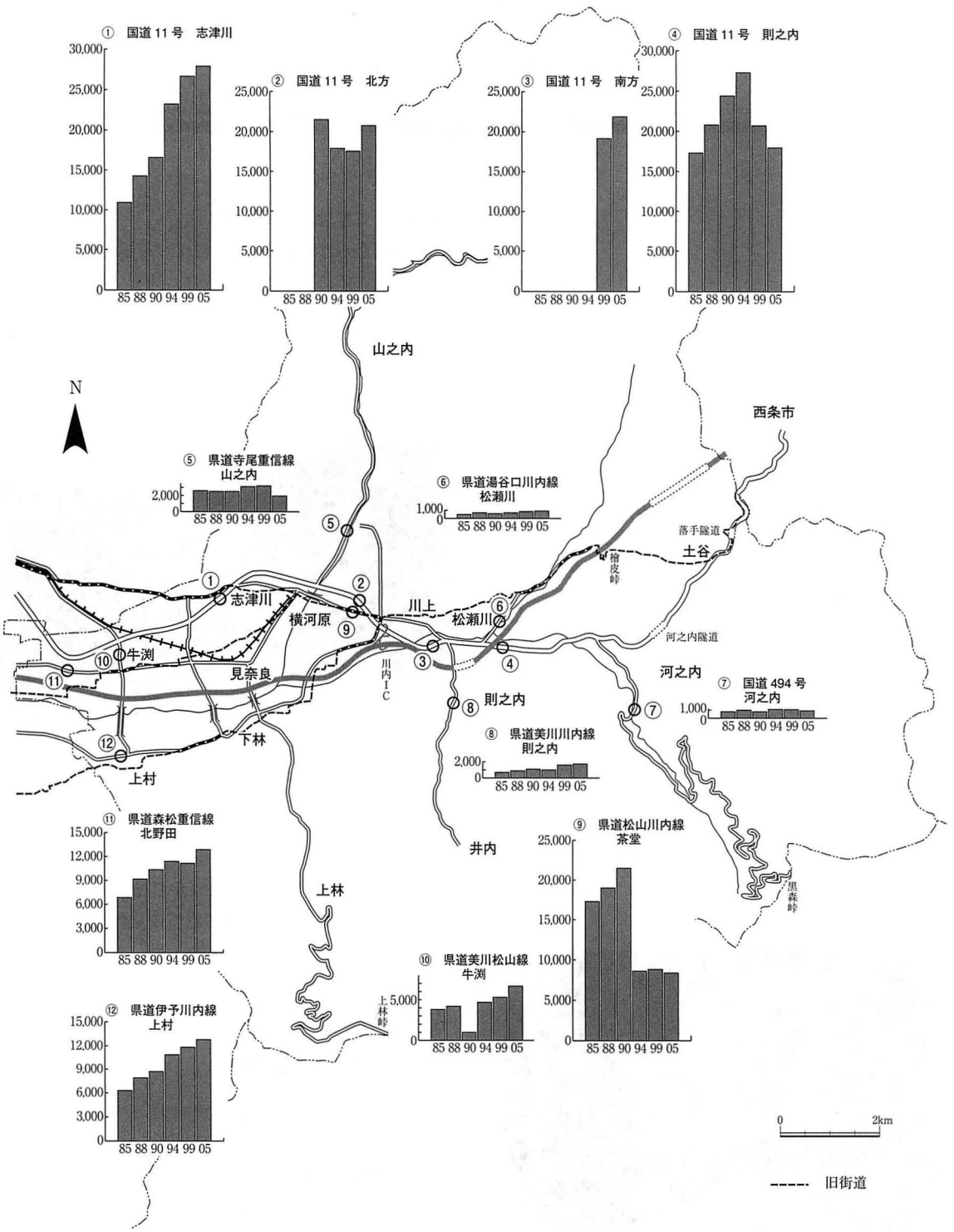


図 1　東温市の交通網および交通量

注）『道路交通センサス』1985年から2005年のデータより橋本貴登作成

㈠ 国道11号

江戸時代まで讃岐街道と呼ばれていた幹線路で、昭和27年（1952）に一級国道11号に指定された。

かつて檜皮峠を越えるルートはカーブが多く、大型車同士では離合しにくい難所であった。このため昭和29年から、根引峠を経由する新ルートに変更すべく、大規模な改修工事が始まった。昭和37年には河之内隧道が完成し、大幅な時間距離の短縮がなされた（写真３）。

さらに交通量の増加に対応して、昭和46年に松山市勝山町から国道11号バイパスの工事が始まった。平成14年（2002）には、旧川内町則之内までの４車線での供用が完了した。東温市内では、野田から新井内川橋までの約9.3㎞の区間が、幅員約25m、片側２車線に整備されている（写真４）。

交通量は松山市に近づく程多くなる傾向が見られ、志津川では、24時間の通行台数が約28,000台と、松山市以外では県内屈指の通行台数である。しかし、則之内では約18,000台で、高速道路が開通した平成６年をピークに漸減傾向にある。

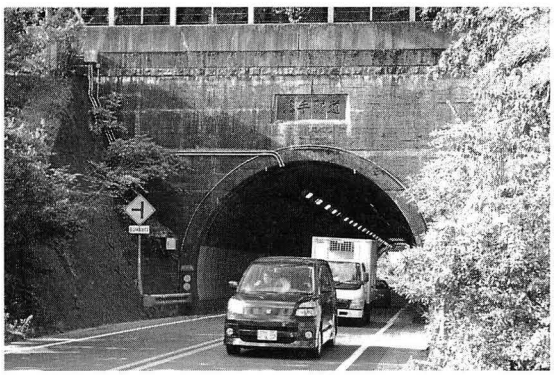


写真３　国道11号　河之内隧道

注）平成20年８月　橋本貴登撮影

写真４　国道11号（樋口付近）

注）平成21年１月　橋本貴登撮影

㈡ 国道494号

市内河之内で国道11号から分かれ、黒森峠（写真５）を越えて久万高原町の笠方を経由し、大味川に至る山間路である。道路の建設に際し、地元河之内出身の県議会議員近藤金四郎は、私財を投じて貢献した。交通量は少ないが、面河・美川地区にとっては非常時のルートとして重要である。

㈢ 主要地方道県道23号伊予川内線

市内南方竹ノ鼻で国道11号から分かれ、重信川の左岸に沿って砥部町拾町で国道33号と交差し、伊予市下吾川で国道56号に合流する幹線道路である。前述のように金毘羅街道（宇和島大洲道）として、松山城下を経由せず南予と東予を結ぶバイパス路であった。

交通量は国道11号の志津川に比べると約半分であるが、年々増加してきている。また、大型車の混入率が高く、南予方面の物流の動脈として機能していることがわかる。

㈣ 県道193号森松重信線

市内横河原で国道11号から分かれ、重信川の右岸を通り松山市森松に至る。北吉井・南吉井・浮穴の３ヵ村が道路組合を設立して大正11年（1922）に改修に着工、同15年に完成した。

沿線は重信川に近い低地で洪水の被害を受けやすかったため、水田が多かった。しかし、平成12年には重信町役場（現東温市役所）が竣工し、沿線の宅地造成が進展するなど、その趣を変えつつある。

写真５　国道494号　黒森峠

注）平成20年８月　橋本貴登撮影

交通量は平成６年（1994）をピークに一旦横ばいとなったが、同17年には再び増加に転じ、県道伊予川内線とほぼ同じ通行台数となっている。

(オ) 県道334号松山川内線

旧国道11号が、バイパスの完成にともなって県に移管された路線である。松山市内の沿線では、宅地化が進展した久米地区、平井地区の生活道路となっており、日中は恒常的に混雑気味である。

(カ) 県道152号寺尾重信線

市内横河原で国道11号から分かれ、山之内に至る。山之内から西条市関屋までは未舗装路が続き、車両の通行が難しく、実際には山之内地区の生活路として整備されてきた。また、沿線で採石業がさかんであるため、大型ダンプカーの通行が多く、『道路交通センサス』によると、大型車の混入率がきわめて高くなっている（国道11号の県内30計測地点の平均が19.6％であるのに対し、寺尾重信線の山之内では53.6％）。

(キ) 県道209号美川松山線

松山市平井で県道334号から分かれ、牛渕を経て重信川を渡り、下林（しもはやし）、上林（かみはやし）を経て上林トンネルを越え、久万高原町下畑野川に至る。おもに上林地区の生活路として機能している。山間部道路の改良が進み通行が容易になったこともあり、夏場は皿ヶ嶺や風穴（かざあな）への観光客が増えている。

(ク) その他の県道

県道210号美川川内線は、井内峠を越えて久万高原町美川地区に至る。井内地区の生活路である。県道302号皿ヶ嶺公園滑川（なめがわ）線は滑川沿いの山間路で、夏場は滑川渓谷への観光客が訪れる。県道327号湯谷口川内線は、松瀬川三軒屋から梅ヶ峠を経て、西条市湯谷口に至る狭小な山間路である。

(3) 重信川の架橋

重信川は松山平野最大の河川であり、この地域において、長年陸上交通の障害となってきた。重信川にまだ橋がなかった頃、金毘羅街道の渡河点は「横河原の渡し」と呼ばれた。通常は徒歩で渡ったが、水量が増えると人夫が人や荷物を背負って渡り、さらに大雨で増水すると川止めとなっていた。このほか下林伽藍（がろ）の渡しには川舟があり、上村（うえむら）では上村大橋ができるまで堰堤上を通行していた。

東温地区で最初に重信川に橋が架かるのは「横河原

表１　東温市の交通の歩み

元号	西暦	出　来　事
明治18	(1885)	讃岐街道（金毘羅街道）が31号国道に指定される。
明治26	(1893)	伊予鉄道平井河原線（松山－平井河原間）が開通する。
明治32	(1899)	平井河原線が横河原まで延長される。
大正６	(1917)	川上村の越智誉六が川上－横河原間の乗合自動車を営業開始。
大正８	(1919)	東予自動車株式会社が西条－横河原間の乗合自動車を営業開始。 横河原の渡しに木橋が架設される。
大正９	(1920)	国道31号が内務省告示により国道24号と改称される。
大正10	(1921)	原町川上線が県道に認定される。
大正15	(1926)	森松横河原線が開通。
昭和２	(1927)	周桑自動車株式会社が西条－横河原間の乗合自動車路線を継承し、松山まで延長。
昭和３	(1928)	北吉井三芳停車場線（山之内）が県道に認定される。
昭和19	(1944)	戦争激化にともなう事業整備統合により、伊予鉄道が乗合自動車路線を継承。
昭和25	(1950)	伊予鉄バス拝志線（原町－上林間）が営業開始。
昭和27	(1952)	国道24号が国道11号と改称され、幅員拡張および舗装工事が行われる。
昭和29	(1954)	横河原線の坊っちゃん列車がディーゼル機関車に更新される。
昭和30	(1955)	伊予鉄バス吉井線（森松－横河原間）が営業開始。 現在の横河原橋が完成する。
昭和32	(1957)	伊予鉄バス山之内線（横河原－山之内間）が営業開始。
昭和34	(1959)	伊予鉄タクシー横河原駅営業所が営業開始（町内初のタクシー）。
昭和34	(1959)	上重信橋が重信町営により完成する。
昭和35	(1960)	伊予鉄バス川内営業所が営業開始。
昭和37	(1962)	国道11号河之内隧道（375m）が開通する。 国道11号落手隧道（107.5m）が開通する。
昭和40	(1965)	拝志大橋が完成する。
昭和42	(1967)	横河原線の電化が完成する。
昭和46	(1971)	国道11号バイパスの工事開始。
昭和57	(1982)	見奈良大橋が完成する。
昭和62	(1987)	新上重信橋が完成する。
平成２	(1990)	上村大橋が完成する。
平成４	(1992)	国道11号バイパスの新横河原橋が完成する。
平成６	(1994)	３月　国道11号バイパス（松山東道路）の４車線供用開始。 11月　松山自動車道のいよ西条IC－川内IC間が開通。
平成９	(1997)	松山自動車道の川内IC－伊予IC間が開通。
平成14	(2002)	国道11号バイパス（重信道路）の４車線供用開始。
平成15	(2003)	松山自動車道のいよ小松IC－川内IC間で４車線供用開始。
平成16	(2004)	松山自動車道の川内IC－松山IC間で４車線供用開始。

注）『重信町誌』・『川内新町誌』・国土交通省松山河川国道事務所『道路概要図』より橋本貴登作成

の渡し」で、大正８年（1919）に木造橋が架設された。昭和５年（1930）にコンクリート橋に改修されたものの、豪雨で流され、現在の横河原橋が昭和30年に架設されている。

その後、昭和31年に重信・川内両町が誕生すると、町内交通の改善のため相次いで橋が建設された。現在、東温市内に架かる主な橋梁としては、下流から上村大橋（写真６）、拝志（はいし）大橋、上重信橋、見奈良大橋、横河原橋、新横河原橋などがある。

写真６　上村大橋

注）平成20年８月　橋本貴登撮影

(4)　高速道路

松山自動車道のいよ西条－川内間が平成６年(1994)に暫定２車線で開通し、東温市南方（当時は川内町）に川内ICが開設された（写真７）。平成９年２月には伊予まで、同12年には大洲まで延伸した。さらに、同15年にはいよ西条－川内間、同16年には川内－松山間の４車線化が完成した。なお、高速バスのバス停は川内ICの外に設置されている。

写真７　川内IC

注）平成21年１月　橋本貴登撮影

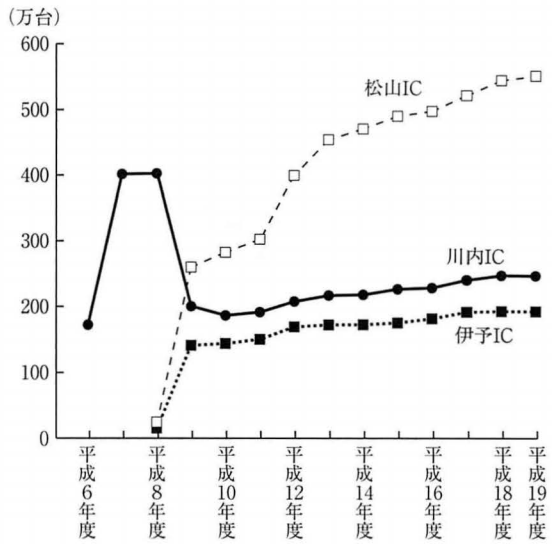


図２　中予地区の各ICにおける出入交通量の変化

注）NEXCO西日本四国支社松山管理事務所提供データより橋本貴登作成

川内ICの開通にともない、周辺には交通立地型の企業進出が見られたが、四国乳業本社工場はその典型である。

川内ICの出入交通量を見ると（図２）、平成19年度は、ピークの平成８年度に比べ約６割にとどまっている。これは、中予の高速道路利用者が川内に集中していたのが、平成９年の松山、伊予両IC開設により、利用者が最寄りのICへ分散したことが原因である。しかし、最も落ち込んだ平成10年度以降は、漸増傾向である。また、伊予ICと比較すると、常に出入台数で上回っている。松山ICのある国道33号や松山市内は混雑しているため、松山東部を中心に一定数の高速道路利用者が川内ICへ流れていることがうかがえる。

(5)　運送業

東温市は幹線道路である国道11号が通り、川内ICがあることや、県道伊予川内線が南予方面へ接続するなど、交通の結節点として運送業にとって優れた立地条件を備えている。ただし、個人経営の中小運送業者については、その実態が把握しにくいため、ここでは、大手運送会社への聞き取り調査を行い考察した。

県道伊予川内線沿いは、混雑が少なく、松山市街へ

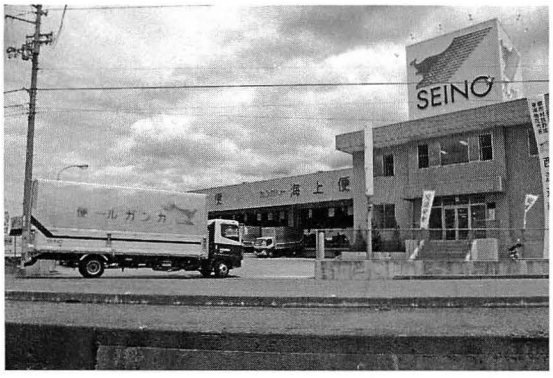


写真８　四国西濃運輸松山支店（東温市上村）
注）平成20年８月　橋本貴登撮影

のアクセスもよいことから、大手運送会社の営業所が多く設置されている。これらのうち最も東寄り、東温市上村に位置するのが、四国西濃運輸松山支店である（写真８）。

西濃運輸は平成15年（2003）８月に現在地に移転した。以前は松山市三津にあったが、敷地が手狭になってきたこと、周辺の宅地化が進み騒音の苦情が増えてきたことにより、移転計画が持ち上がった。たまたま三津地区に出店を希望するスーパーがあったため、敷地を売却し、東温市に新用地を取得した。新支店の敷地面積は23,420㎡で、33m×110mのプラットホームを備える。200名の従業員と160台の自動車を擁し、同社の中予地区の集配ターミナルとしての機能を果たしている。集配地域は松山市内、北条地区、伊予郡、伊予市、上浮穴郡、東温市の全域である。

東温市で営業する利点として西濃運輸では、インターチェンジが近いため、県外への輸送が便利になったこと、松山市の東部、南部への配達や集荷がしやすくなったこと、東予地方や南予地方へのアクセスも、混雑する松山市の中心部を通過する必要がないことなどを挙げている。一方、課題点として、移転により北条地区が遠くなったため、三津時代に比べサービスが低下しないよう配慮しているとの事であった。

東温市にはまだ広大な土地があり、運送業が新たに進出する余地はあるものの、市当局は自然と調和した田園都市としての発展を目指しており、工業団地等を除き、原則として農業地域への大規模誘致はしていない。しかし、松山平野東部が集配地域であったり、東温市内の企業との取引関係が強い運送会社にとっては、魅力的な立地環境であると言えよう。

（橋本　貴登）

２　バス交通

(1)　バス交通の歩み

表２は東温市域におけるバス交通の歩みを示したものである。明治32年（1899）、伊予鉄道平井河原線が横河原駅まで開通し、貨車を利用した農林産物の輸送が次第に増加した。明治から大正前期にかけて、周辺から横河原駅までの貨物は、大八車や牛車・荷馬車、猫車、荷車などであり、旅客は人力車や客馬車による輸送が盛んであった。ここで、大正６年（1917）頃（「川内町新誌」では大正９年としている）に川上村天神町の越智誉六が川上～横河原間で、また大正８年に東予自動車株式会社が西条～横河原間で乗合自動車事業を開始したのが当地域におけるバス交通の始まりである。しかし、乗合自動車は客馬車や人力車と競合しており、運賃も高かった。

昭和２年（1927）４月、国鉄予讃線が松山駅まで開通すると、松山と西条方面をつなぐ桜三里の入り口にある川上村は、峠の麓に位置する宿泊駅としての地位が低下した。当地域のバス路線を買収した周桑自動車株式会社は、西条～横河原線を松山まで延長し、運行回数を増便し、翌年には松山～小松・壬生川線の運行も始めて利用客を増加させた。昭和13年には、横河原バス停留所からは上り松山行・下り周桑行とも１日11本が運行されていた。

太平洋戦争の激化に伴うガソリンなどの消費規制や政府の合理化政策により、県下のバス事業は東予（瀬戸内運輸）・中予（三共自動車→伊予鉄道）・南予（宇和島自動車道）の三地区に整理統合され、当地域のバス路線も昭和17年に東予の瀬戸内運輸株式会社の営業となった。しかし昭和19年、中予の三共自動車を合併して初めてバス事業を経営することになった伊予鉄道株式会社に譲渡された。伊予鉄道は運休路線の再開と延長、新路線の拡張に努め、昭和20年代から30年代にかけて当地域におけるバス路線網がほぼ形成された。平成２年からは松山発着の都市間高速バスの運行が始まったが、川内ICの停留所には無料駐車場が設置され「パーク・アンド・バスライド」の環境が整備された。

表2　東温市域におけるバス交通の歩み

明治32年	1899	10月	伊予鉄道平井河原線が横河原駅まで開通
大正６年頃	1917		川上村の越智誉六、川上～横河原間で乗合自動車事業開始（「重信町誌」）
大正８年	1919		東予自動車、西条～横河原間で乗合自動車の営業開始
大正９年	1920	５月	天神町の越智誉六が川上自動車を創業
			河之内～横河原間で乗合自動車事業開始（「川内町新誌」）
昭和２年	1927	４月	国鉄予讃線が松山まで開通
			周桑自動車が路線を買収し、西条～横河原線を松山まで延長し増便
昭和３年	1928		周桑自動車、松山～小松間、松山～壬生川間の運行開始
昭和13年	1938		横河原から上り松山行11回・下り周桑行11回
昭和17年	1942		（旧川内町域の路線）事業整理統合により瀬戸内運輸の営業となる
昭和19年	1944		瀬戸内運輸、湯谷口～松山間と河之内線・井内線を伊予鉄道に譲渡
			（旧重信町域の路線）事業整理統合により伊予鉄道の営業となる
昭和25年	1950	３月	拝志線（原町麻生～上村～下林～上林：６往復）開通
		４月	井内線（横河原～川内～井内）開通
		12月	新居浜線開通
昭和26年	1951	９月	河之内・白猪線開通
昭和27年	1952	11月	海上滑川線開通
昭和30年	1955	４月	吉井線（森松～野田～牛渕～田窪～見奈良～横河原：２往復）開通
昭和32年	1957	９月	山之内線（横河原～荒木谷：２往復）開通
昭和35年	1960	４月	山之内線延長（横河原～荒木谷～藤之内）
		７月	川内営業所営業開始
昭和37年	1962	９月	急行面河線開通
昭和38年	1963	４月	松瀬川線（横河原～川内～松瀬川）開通
昭和39年	1964	10月	北方海上線（横河原～川内～落出～海上：５往復）開通
			川内松山線：29往復、新居浜線：22往復、壬生川線：２往復
			湯谷口線：２往復、海上滑川線：４往復、松瀬川線：３往復
			急行面河線：５往復、河之内白猪線：12往復
		11月	井内線延長（横河原～川内～井内～北間：８往復）
昭和40年	1965	３月	四国急行高松行（松山～高松：10往復）開通
昭和44年度	1969		伊予鉄道バス事業の輸送実績4,411.6万人（ピーク）
昭和45年	1970	８月	瀬戸内バスと合同で松山～新居浜間特急便運行開始
昭和47年頃	1972		拝志線：10.5往復、吉井線：５往復、山之内線：５往復
昭和60年	1985		上林（旧拝志）線：６往復、藤之内（山之内）線：４往復
			松山～川内間普通便：50往復
			松山～新居浜間特急便：伊予鉄15往復・瀬戸内11往復
平成２年	1990		都市間高速バス（大阪・東京行）運行開始
平成６年	1994		都市間高速バス（岡山・高松行）運行開始
平成12年	2000		都市間高速バス（徳島行）運行開始
平成12年度	2000		伊予鉄道バス事業の輸送実績598.7万人（ピーク時の14％）
平成13～15年度			「サービス向上宣言」を実施、輸送実績が増加傾向に転じる
平成13年	2001	４月	定期券の電車・バス共通利用開始、シルバー定期券導入
		10月	電車・バス運賃を50円刻みに値下げ
		12月	都市間高速バス（高知行）運行開始
平成14年	2002		都市間高速バス（京都・神戸行）運行開始
平成16～20年度			「いきいき交通まちづくり宣言」として、行政と連携した交通施策を実施
平成19年度	2007		伊予鉄道バス事業の輸送実績885.8万人（ピーク時の20％）
平成20年度	2008	６月	都市間高速バス（福岡行）運行開始
平成21年度	2009	１月	都市間高速バス（名古屋行）運行開始

注）「重信町誌」「川内町新誌」及び伊予鉄道資料より一柳保彦作成

(2) バス交通の現状と課題

東温市域におけるバス交通は伊予鉄道が担っているが、松山～新居浜間の特急便では瀬戸内バスと合同で運行している。市域が松山平野東部、重信川水系の中・上流に位置することもあり、市内のバス路線は西方の松山市駅・JR松山駅方面から川内営業所や横河原を分岐点として川内グリーンタウン・湯谷口・木地・松瀬川・井内北間・海上（かいしょ）・白猪滝口など各終点に至るようになっている。この他には森松方面から東温市役所前を経て横河原に至る路線や前述の松山～新居浜特急便がある（表３）。

バス路線網は基本的に松山市を中心とするものであり、運行便数についても、平日30便前後運行される川内線（松山～川内）と平日13便運行の新居浜特急線以外は非常に少なく、休日は更に減少するため、市内の移動や山間部での移動は自家用車に依存せざるを得ない。東温市によるアンケート調査でも市民及び市内に用事のある人のうち、主な交通手段としてバスを利用するのはわずか５%にとどまり、自動車の46%、自転車・バイクの23%との差は大きい。[1)]

JRとの競合路線となる松山自動車道川内ICを利用する都市間高速バス路線としては平成20年（2008）６月運行開始の福岡便を含めて６路線が運行されている。インターチェンジにアクセスできれば、東京（１往復）、名古屋（１往復）、京都（２往復）、大阪（８往復）、神戸（８往復）、岡山（６往復）、福岡（１往復）、高松（15往復）、徳島（７往復）、高知（５往復）方面に行くことができる。

伊予鉄道バス事業の輸送実績は高度成長期の昭和44年度に4,411.6万人のピークを迎えたが、自家用車が普及するモータリゼーションの進展とともに客離れが続き、平成12年度には598.7万人とピーク時の14%にまで落ち込んだ。伊予鉄道は平成13年度から「サービス向上宣言」として電車とバスの共通利用定期券・シルバー定期券導入・運賃の値下げなどの改革を進め、平成16年度からは「いきいき交通まちづくり宣言」として行政と連携した交通施策への取組を始めている。平成19年度の輸送実績は885.8万人とピーク時の20%程度に回復している。

しかし、バス交通は通勤・通学のみではなく、子どもや高齢者など多くの人々の日常の足となる公共交通機関であるという特性を持つ。核家族化は高齢者のみの世帯を増加させることとなり、高齢化は自家用車を運転しない（できない）人口の増加を伴い、自家用車なしでは生活できない地域からは人口が流出することも考えられる。その中で公共交通、特にバス路線網の整備は重要な課題である。東温市は都市計画の中で「車に依存するまちから歩いて暮らせるまちへ」「身近で利用しやすい交通手段（コミュニティ・バス）の確保」「鉄道の延伸またはDMV（デュアル・モード・ビークル）導入の検討」を基本方針としている。また、各集落と公共施設（市役所・支所・公民館・体育館など）・病院（四国がんセンター・愛大附属・愛媛病院など）、

表３　東温市域における伊予鉄バス運行系統

運行系統	平日		土曜		日曜・祝日	
	下り	上り	下り	上り	下り	上り
川内線（松山市駅～川内）	32便	29便	29便	27便	25便	24便
川内グリーンタウン線（川内～川内グリーンタウン口）	４便	５便	４便	５便	４便	５便
湯谷口線（川内～落出～湯谷口）	１便	１便	１便	１便	なし	なし
清水橋線（川内～清水橋）	１便	１便	１便	１便	１便	１便
新居浜特急線（JR松山駅～松山市駅～新居浜駅前）	13便	13便	13便	13便	12便	12便
森松横河原線（森松～横河原～藤之内～木地）	６便	６便	２便	２便	２便	２便
松瀬川線（横河原～川内～松瀬川）	２便	２便	なし	なし	なし	なし
井内線（横河原～川内～井内～井内北間）	４便	４便	４便	４便	なし	なし
海上線（横河原～川内～落出～海上）	４便	５便	３便	４便	なし	なし
白猪滝線（横河原～川内～清水橋～白猪滝口）	３便	４便	３便	４便	※１便	※１便
梅本ループ線（梅本～フジグラン重信SC）	31便	31便	28便	28便	27便	27便

※清水橋～川内～松山直通便
注）上り：各終点→川内→横河原・森松・松山方面行
伊予鉄バス時刻表より一柳保彦作成

商業施設（フジグラン・セブンスターなど）、鉄道駅（横河原・見奈良など）、保養施設（レスパスシティ・さくらの湯など）、川内IC（都市間高速バスへの乗り継ぎ）などを結ぶコミュニティループバスがNPO地域における生涯学習プログラムを考える会から提案されている[1]。近年は公共交通機関が不便なために都市郊外から都心のマンションなどに転居する高齢者もあり、生涯に渡って多くの人が安心して生活できるまちづくりはバス路線網の充実なくしては不可能ではないかと考える。松山中心部へ行くにしても、都市間高速バス利用にしても、「パーク・アンド・バスライド（自家用車＋バス）」から「バス・アンド・バスライド（バス＋バス）」への転換をする必要がある。そのためには行政と企業の連携に加え、利用者としての市民の主体的参加も必要であり、数年後から十数年後の間には実現が求められる課題であるといえる。（一柳　保彦）

3　鉄道交通

(1)　鉄道交通の展開

東温市における鉄道交通は、明治32年（1899）に伊予鉄道平井河原線が延長されたことに始まる。明治21年より営業を開始した伊予鉄道は、東温・久米の住民らの強い要望により、明治26年に外側（現松山市駅）－平井河原（現平井駅）間7.1kmに路線を引き、営業を行っていた。しかし、終点が平井河原駅であったために、平井河原線は営業成績の不振が続いた。そのため、愛媛県東部と松山・三津の中間に位置し、人・物の移動の中継地点であった横河原まで路線を延長すれば営業成績をよくすることができると考えられ、明治32年３月に延長工事が着工し、同年10月に平井河原駅－田窪駅（現牛渕駅）－横河原駅（写真９）の5.7kmが開通した。

写真９　横河原駅

注）平成20年８月　本田めぐみ撮影

大正元年（1912）８月、平井－田窪間（現在の牛渕団地前駅の位置）に貨物駅として播磨塚停留所が設けられた。これは当時播磨塚駅付近（現自衛隊付近）にあった梨園の資材や果樹の積み出しのためであった。昭和13年（1938）には、見奈良に本格的なゴルフ場が建設され、ゴルフ客誘致のため横河原－田窪間に無人の見奈良駅（写真10）が新設された。昭和29年２月には「坊っちゃん列車」の名で親しまれた蒸気機関車の老朽化に伴い、森松線とともに横河原線はディーゼル化された。

その後自動車の普及によって乗客が減少し、営業不振が続いた伊予鉄道は、昭和40年の森松線の廃止に続いて横河原線も廃止・バス路線化する計画を進めていた。しかし、沿線周辺の住民の強い要望と、沿線を中心にした開発を重信町が決定したため、廃線は中止となり、全線が電化されることとなった。昭和42年６月の松山－平井間に続いて、同年10月に平井－横河原間の電化が完成した。

写真10　見奈良駅

注）平成20年８月　本田めぐみ撮影

電化後、沿線には住宅・団地・各種施設が相次いで進出し、通勤・通学のための利用が増加した。田窪団地の造成に対応するため、昭和41年田窪駅（写真11）が新設され、旧田窪駅は牛渕駅（写真12）と改称された。さらに、牛渕県営住宅団地や播磨台団地の誘致・造成に対応して昭和45年牛渕団地駅（写真13）が新設された。重信町志津川に昭和48年から同51年にかけて

写真11　田窪駅
注）平成20年８月　本田めぐみ撮影

写真13　牛渕団地前駅
注）平成20年８月　本田めぐみ撮影

写真12　牛渕駅
注）平成20年８月　本田めぐみ撮影

写真14　愛大医学部南口駅
注）平成20年８月　本田めぐみ撮影

愛媛大学医学部が創設されたことに伴って、伊予鉄道は愛大医学部南口駅（写真14）を開設した。以上のように、東温市における鉄道交通は、旧重信・川内両町の宅地化・商業化・娯楽施設建設・大学進出などとともに進展してきたのである。

(2)　鉄道交通の現状と課題

(ア)　乗客数

横河原線全体の利用者数は、平成６年（1994）よりゆるやかな減少傾向にあったが、同13年以降はやや増加傾向にある（図３）。平成19年度における乗降客数は、牛渕団地前駅337,990人、牛渕駅89,060人、田窪駅280,320人、見奈良駅326,310人、愛大医学部南口駅448,950人、横河原駅443,840人である（図４～図９）。利用者の内訳をみると、多くの駅で定期の利用が半数以上であり、松山市への通勤・通学に利用されている

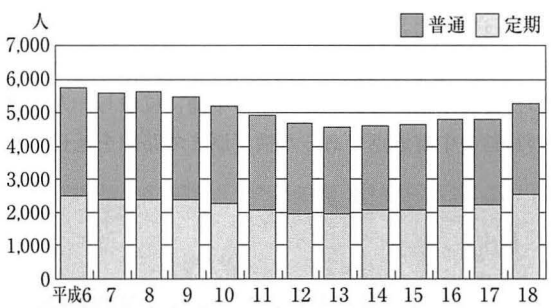


図３　伊予鉄道横河原線の乗客数
注）「松山市統計書」より本田めぐみ作成

割合が高いと考えられる。特に定期の割合が高い見奈良駅・愛大医学部南口駅は、愛媛大学医学部や東温高校への通勤・通学に、横河原駅は旧川内町の住民が通勤・通学にそれぞれ利用されているためであると考えられる。

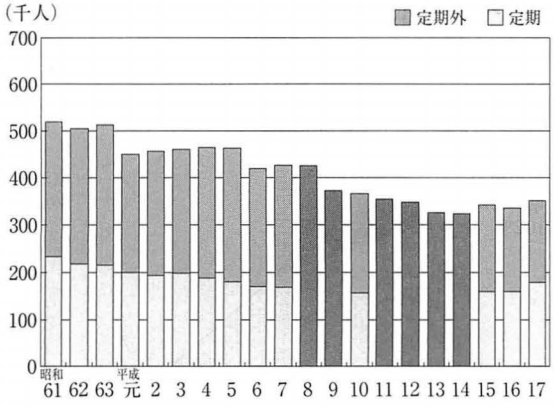


図4　牛渕団地前駅の乗客数

注1）平成8年～9年、11年～14年の内訳は不明
注2）東温市・旧重信町・伊予鉄道運輸課資料により本田めぐみ作成

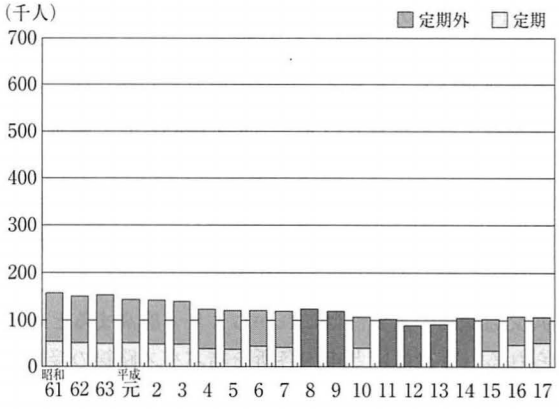


図5　牛渕駅の乗客数

注1）平成8年～9年、11年～14年の内訳は不明
注2）東温市・旧重信町・伊予鉄道運輸課資料により本田めぐみ作成

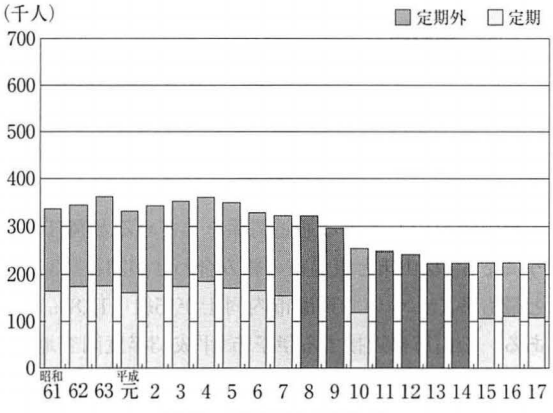


図6　田窪駅の乗客数

注1）平成8年～9年、11年～14年の内訳は不明
注2）東温市・旧重信町・伊予鉄道運輸課資料により本田めぐみ作成

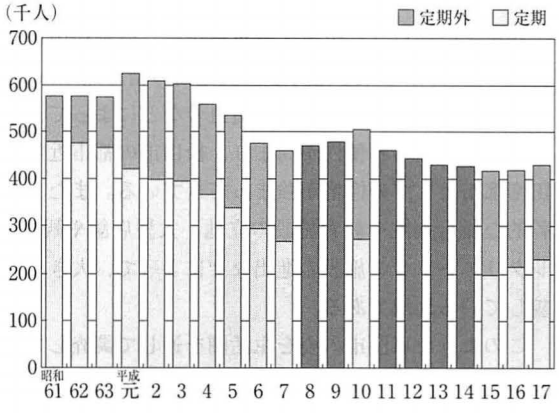


図7　見奈良駅の乗客数

注1）平成8年～9年、11年～14年の内訳は不明
注2）東温市・旧重信町・伊予鉄道運輸課資料により本田めぐみ作成

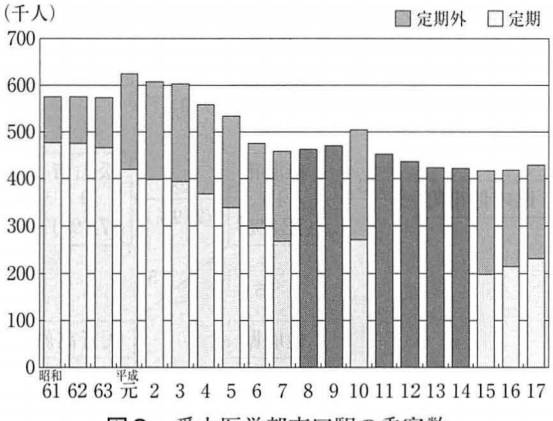


図8　愛大医学部南口駅の乗客数

注1）平成8年～9年、11年～14年の内訳は不明
注2）東温市・旧重信町・伊予鉄道運輸課資料により本田めぐみ作成

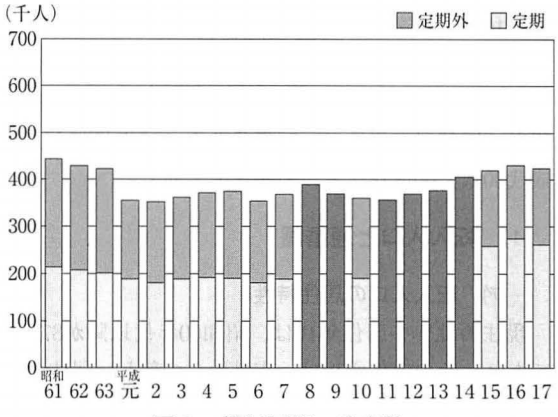


図9　横河原駅の乗客数

注1）平成8年～9年、11年～14年の内訳は不明
注2）東温市・旧重信町・伊予鉄道運輸課資料により本田めぐみ作成

(イ) 今後の課題

平成16年（2004）に東温市が誕生する以前より、この地域ではクールスモール、天然温泉利楽、坊っちゃん劇場を有するレスパスシティを中心として開発・整備されてきた。その他にもアクロス重信をはじめとする魅力ある施設が挙げられるが、これらの施設や市役所・市立図書館などの公共施設はいずれも駅から離れて市内各所に点在しており、また、高齢化により、公共交通機関の重要性はこれからより一層高まると考えられる。今後は駅と市内各所を結ぶバス路線の接続を整備し、より一層利便性を高め、活気あるまちづくりを目指してほしい。（本田めぐみ）

4 生活圏

松山平野南東部に位置する東温市は、県都松山市と隣接し、古くから東予地方との交通上の結節点である。近年、伊予鉄道横河原線や国道11号などによって、松山市との交通の利便性が高まり、松山市の都市近郊型田園都市としての性格が強まってきている。また、基幹的な総合病院や教育施設の立地、大型店舗や観光・レクリエーション施設の進出などによって、大きく変貌している地域である。

このような東温市の姿を生活圏を通して調査してみることにする。東温市の市民が日常生活を営む上で密接な関係を持っているのはどのような地域なのかを、通勤・通学、受療行動、購買行動、余暇活動、通婚等を指標とし、それぞれの圏域を描き重ね合わせることによって考えてみた。主たるデータを得るため、平成20年10月、東温市内居住の東温高校生の保護者に「東温市の生活圏に関する調査」（以後アンケート調査という、項目は項末を参照）を行い、123人から回答を得た。回答者の属性は、30歳代３人、40歳代86人、50歳代30人、60歳代２人、不明２人である。

(1) 転入人口と通婚圏

(ア) 転入人口の居住特性

現住所地への居住年代は、昭和60年代以降が87.0％であり、その前住所地は、市外からの新しい居住者が60％以上を占めている。特に、松山市からの転入者が半数近くに達するのに対して、東温市内での住み替えは３分の１程度にとどまっている（図10）。また、東温市への転勤による転入者は１割に満たなく、Uターン・Jターンの回答はなかった。

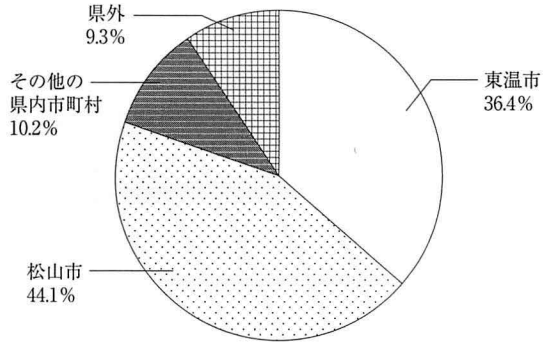


図10 前住所地

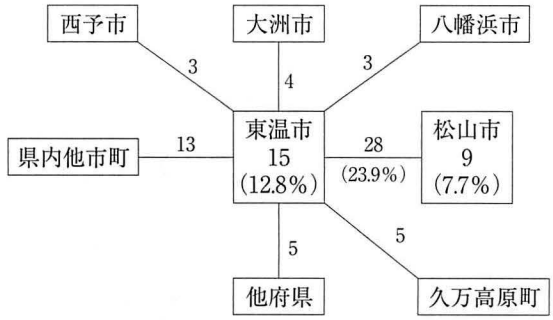
注）アンケート調査より高津富男作成

(イ) 通婚圏

保護者の出身市町では、県内出身者が90％以上に上り、そのうち東温市が36.8％、ついで松山市が23.4％などある。旧重信町では、東温市出身よりも松山市出身の母親の方が多かった。

東温市を中心とする通婚関係をまとめると図11のようになる。松山市と東温市の組み合わせが23組（23.9％）と最も多く、ついで東温市内同士が15組（12.8％）である。松山市に近接する伊予市（平成13年度調査地域）と比べると、婚姻関係の地域が非常に多岐にわたっているのが特徴である。

以上のことから、40歳前後の働き盛りの世帯は、近年に松山市や県内市町などから転入してきた、東温市以外の出身者が半数以上を占めていると言える。それ



上記以外には、県内他市町同士が20、県内他市町と県外が７、県外同士が５である。

図11 通婚圏

注）アンケート調査より高津富男作成

は、宅地開発の盛んな東温市の近年の状況を反映している。また、東温市で職住近接を増加させるために、今後、都会へ流出した頭脳流出をどれだけ還流させることができるか、すなわち還流人口が求める雇用機会の増大と居住環境の整備が東温市にとって大きな課題になっていると考えられる。

(2) 通勤・通学圏

(ア) 通勤圏

アンケート調査結果から東温市民の通勤圏を考察してみた（図12）。保護者の通勤地は、東温市が54.3%（108人）、松山市が32.7%（65人）などとなっている。しかしながら、父親と母親では大きく異なる。父親では松山市が41.3%、東温市が37.5%であるのに対して、母親では東温市が72.6%、松山市が23.2%となっている。また旧重信町は、旧川内町よりも松山市への通勤割合が高くなっている。

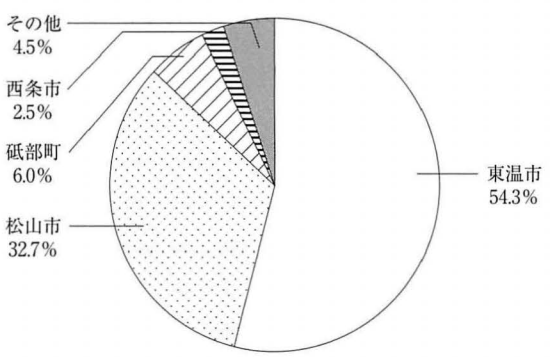


図12　通勤圏

注）アンケート調査より高津富男作成

(イ) 通学圏

東温市に流入する通学者の動向について、東温高校に通学する生徒の通学圏の広がりとその変化を調査してみた。東温高校は愛媛県立東温高等学校定時制課程農業科として、昭和23年（1948）に設立された。昭和24年に定時制課程普通科設置、同25年に家庭技芸コースを併設、同31年に全日制課程に移管された。その後、昭和40年に農業科が廃止され、同43年に商業科、同47年に衛生看護科が設置されたが、平成15年度で衛生看護科は閉科された。現在は普通科６クラス、商業科２クラスである。

昭和29年度以降の地区別通学者は、途中一時期不明であるが、図13のようになる。昭和40年代に東温市内の生徒数は減少し、同60年代をピークとして漸減している。松山市からの生徒数は、昭和40年代以降増加し、同60年代にピークを迎えたが、その全県的な生徒数の減少を反映して、急激に減少している。昭和45年を境として東温市と松山市の生徒数が逆転し、同54年には東温市内の生徒の割合が30%を割り込み、同56年には松山市からの生徒が60%台に達し、それ以降この傾向は変わっていない。平成16年度以降には、伊予市・伊予郡などからの生徒数は10%未満になった。

(3) 医療圏

(ア) 医療施設の立地

「重信町誌」（昭和50年、同63年）、「川内町誌」（昭和43年）、「川内町新誌」（平成４年）によると、旧重

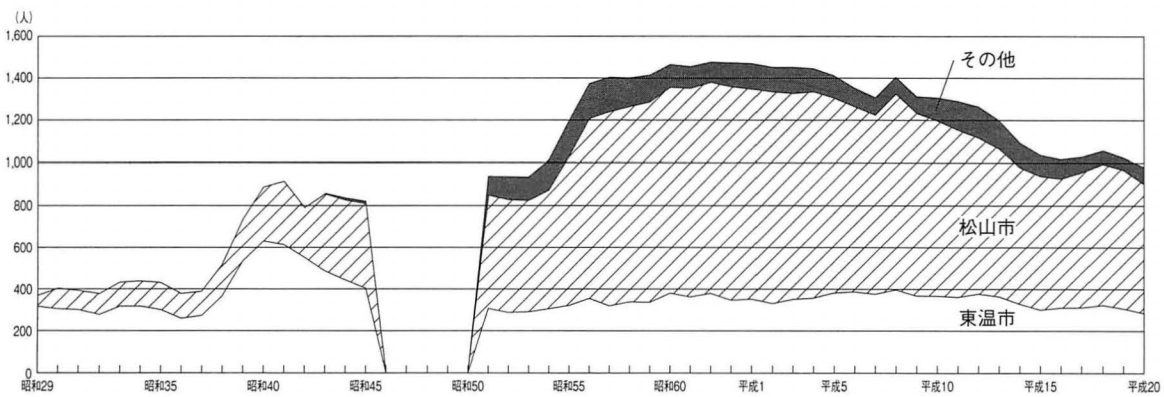


図13　東温高校の地区別生徒数の推移

注）昭和46～50年は資料不明。アンケート調査より高津富男作成。

信町では昭和48年（1973）には病院が１、一般診療所が６、歯科診療所が２、合計９の医療施設が立地していたようである。旧川内町では昭和39年には国保診療所が１、一般診療所が３、歯科診療所が２、合計６の医療施設が立地していたようである。それらは旧重信町では主な集落に分散しているが、旧川内町ではすべて中心集落の川上に集中しており、その分布は異なっていた。

職業別電話帳を基に、現在立地する東温市の医療施設の開設時期を示したのが図14である。平成20年（2008）現在では東温市全体で病院が３、一般診療所が23、歯科診療所が13、合計39の医療施設が立地している。旧重信町では著しく増加しており、眼科、皮膚泌尿科、産婦人科、小児科などの専門科目の医療施設も立地している。近年は交通利便性のよい幹線道路沿いや新興住宅地区に立地する傾向がみられる。特に、野田地区にはメディカルビレッジ東温松山のような、多種の診療科目の医療施設が集積立地するところも出現した。また旧川内町では、歯科診療所が倍増したのに対して、一般診療所は減少している。

このような東温市における医療施設の増加は、松山市に隣接する伊予市、松前町ではみられないことである。その要因としては、松山市との交通利便性の高まりとそれに伴う新興住宅地域の拡大、昭和51年の愛媛大学附属病院の開設、また最近年に隣接する松山市梅本地区に立地した国立がんセンターの開設などが考えられる。それは住民意識にも表れており、アンケート調査でも医療施設への利便性が「とても便利」「どちらかといえば便利」をあわせると、４分の３に達している（図15）。

㈠ 受療行動

アンケート調査結果から、東温市市民の受療行動について示したのが表４である。市内の医療施設への受療行動は、すべての診療科目で80％を超えている。特に、眼科や耳鼻咽喉科などの専門的な分野で高く、松山市への診療流出の高かった伊予市とは対照的である。このように、東温市は市内の山間地域を除いて、非常に恵まれた医療環境にあると言える。

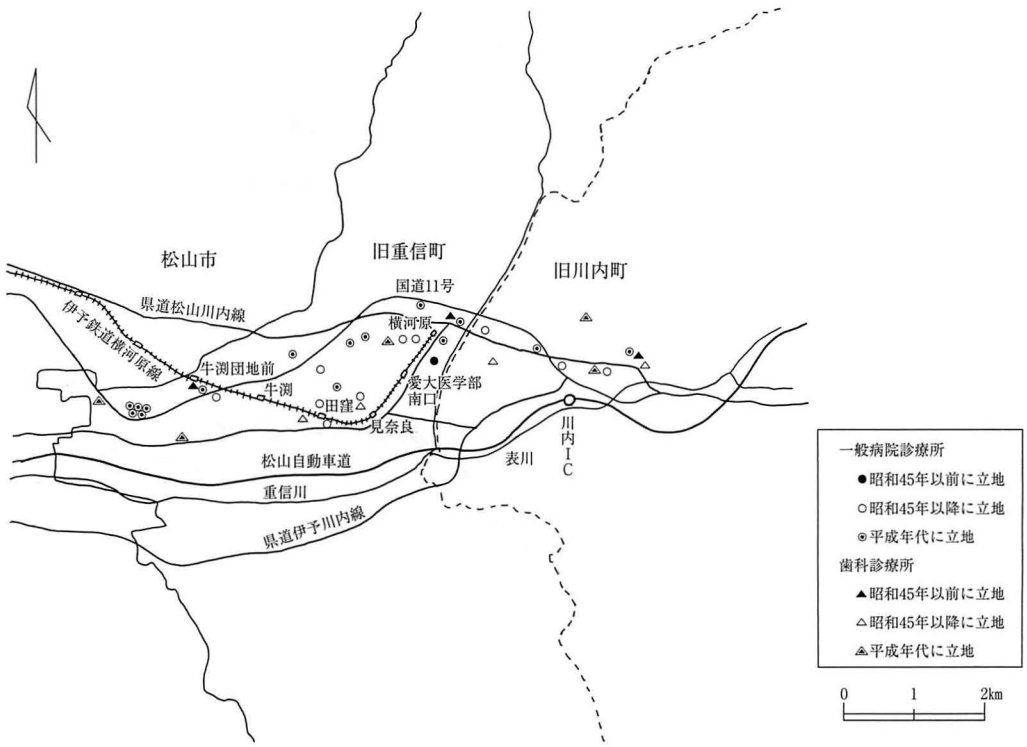


図14　東温市の医療施設の分布

注）職業別タウンページより高津富男作成

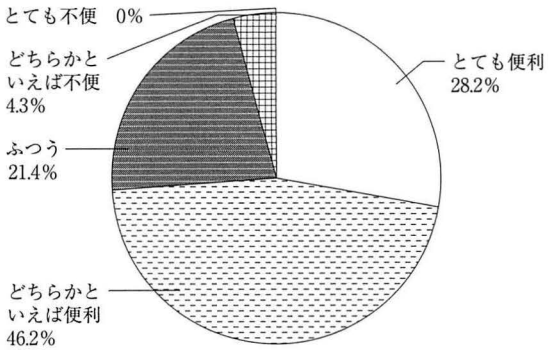


図15　医療施設への利便性

注）アンケート調査より高津富男作成

(4)　購買圏

(ア)　大型店舗の進出

近年旧重信町においては、主要幹線道路沿いに大型店の進出、増床が多くみられる。セブンスター（昭和58年出店、平成４年増床）、フジグラン（当初はフジ、平成５年出店、平成７年増床、平成14年増床）、ダイキEX（平成12年出店、平成14年増床）、しまむら（平成11年出店）、レスパスシティー（平成12年出店、フジ・メディコ・ダイキ・アウトレットモール）などであり、

表４　東温市民の受療行動

	東温市				松山市			その他	回答数
	個人病院	愛大病院	愛媛病院	小計	個人病院	総合病院	小計		
内科	80.0	5.0	4.2	89.2	7.5	3.3	10.8	0.0	120
外科	73.9	9.9	4.5	88.3	9.0	0.9	9.9	1.8	111
眼科	82.8	3.4	0.0	86.2	12.1	0.9	12.9	0.9	116
皮膚泌尿器科	75.0	6.3	0.0	81.3	17.9	0.9	18.8	0.0	112
耳鼻咽喉科	81.4	1.8	0.0	83.2	14.2	2.7	16.8	0.0	113
歯科	85.8	0.0	0.0	85.8	13.3	0.0	13.3	0.8	120
高度な医療	0.0	70.1	12.4	82.5	0.0	15.5	15.5	2.1	97

注）ゴシックは第１指向地。アンケート調査結果より高津富男作成

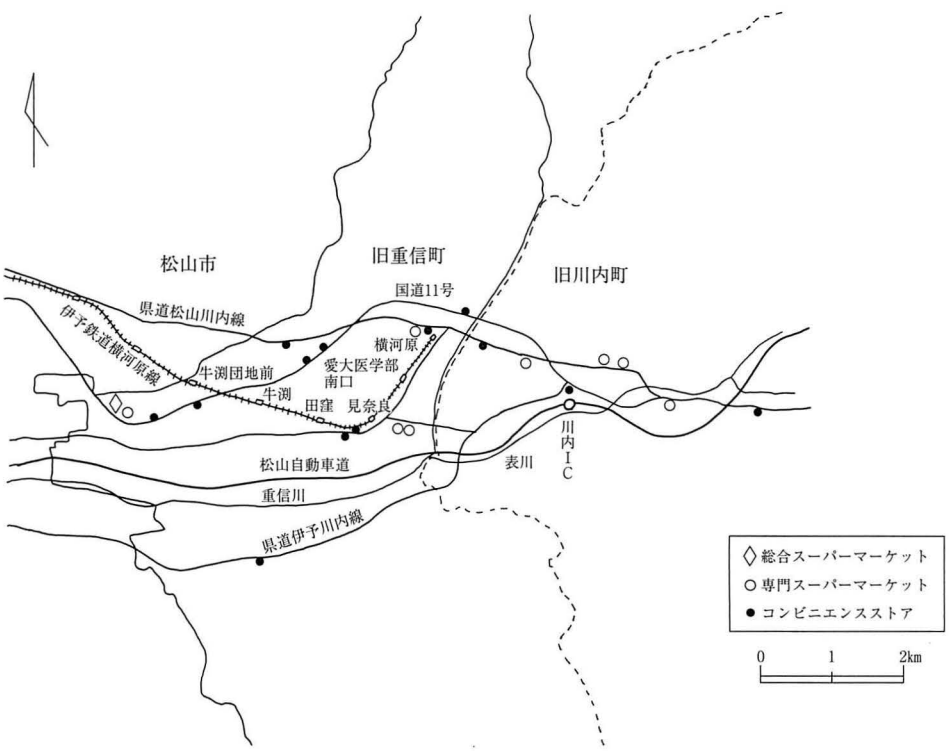


図16　スーパーマーケット・コンビニエンスストアの分布

注）職業別タウンページより高津富男作成

いずれも既存商店街とは離れた交通の便利な場所に立地し、広い駐車場を備えている。特に、フジグラン、ダイキEX、レスパスシティーには、多くのテナント、映画館、温泉などが集積しており、大規模なショッピングセンターを形成している。このような状況は、既存商店街に大きな影響を及ぼしているだけでなく、大型店同士の競争も激化していると思われる（図16）。

(イ) 消費者の購買動向の変化

近年多くの大型店舗の立地がみられる東温市の消費者の購買動向を、平成４年（1992）の買物調査と今回のアンケート調査結果などから考察する（表５・表６）。調査対象者と項目が異なる面があるものの、ある程度の傾向は把握できる。

松山市への消費流出を平成４年と平成20年で比較すると、食料品などの最寄品、理容・美容などのサービスでは変化していないが、衣料品、文化品で激減している。市外への消費流出に歯止めがかかり、市内での消費が増加したと言え、市内での買い物に対する満足度も非常に高くなっている（図17）。また、市内での消費場所が大きく変化しており、既存商店街での消費のほとんどが、市内に立地した新規の大型店舗へ向かうだけでなく、松山市への消費流出も取り込むとともに、松山市からの消費流入もみられる。その傾向は市内での買物理由にもあらわれ、「駐車場が広い」「商品が豊富である」「交通の便がよい」などの割合が高くなっている（図18）。

確かに東温市の地元購買率は表７に示すように、松山市近隣市町の中ではかなり高い92.8％であるが、そのほとんどは大型店舗へのものと考えられ、大型店舗の立地場所が、もう少し既存商店街と共存できるような場所での進出であったらと思われる。

表５　旧重信町民の購買動向（平成４年）

	購入先 / 品物	重信町								松山市					県内その他
		横河原商店街	横河原以外の地元商店街	セブンスター	農協Aコープ	生協	行商	その他	小計	大街道銀天街	そごう三越	ダイエー・フジの量販店	その他	小計	
1	生鮮食品	34.8	7.8	**48.4**	0.4	5.7		0.4	97.5			0.8	0.4	1.2	1.2
2	保存食品	30.9	9.3	**41.5**	0.8	12.7		0.8	96.0			2.1	0.8	2.9	1.2
3	菓子・パン	32.4	10.9	**45.8**		5.9		2.1	97.1			1.3	0.8	2.1	0.8
4	日用雑貨	**44.8**	5.6	15.9	1.7	2.9		3.9	74.8	0.9	0.4	9.9	12.1	23.3	2.2
5	医薬品・化粧品	**33.5**	7.3	10.3		5.2	0.9	7.7	64.9	6.9	4.3	2.1	16.3	29.6	5.6
6	下着・洋品雑貨	19.6	2.6			3.0		3.8	29.0	11.9	14.5	**38.3**	2.1	66.8	4.3
7	紳士服	4.3	0.9					1.7	6.9	20.0	**38.3**	19.1	12.2	89.6	3.5
8	婦人服	7.8	1.3					1.3	10.4	22.4	**34.9**	24.1	3.9	85.3	4.3
9	呉服・反物	7.5	1.0		0.5	0.5		3.5	13.0	**36.8**	21.9	4.0	14.4	77.1	10.0
10	ベビー・子供服	8.4	1.0					2.6	12.0	18.8	25.7	**34.6**	5.2	84.3	3.7
11	寝具	12.8	1.4		0.5	4.1	0.9	4.1	23.8	18.7	10.0	**21.5**	19.2	69.4	6.8
12	靴・はきもの	12.7	1.3	2.5	0.4	0.4		1.3	18.6	**24.2**	19.5	13.6	20.3	77.6	3.8
13	カバン・バッグ	0.9	0.4			1.3		1.3	3.9	31.3	**37.9**	13.8	9.4	92.4	3.6
14	服飾アクセサリー	1.4						2.3	3.7	33.8	**36.6**	11.3	11.3	93.0	3.3
15	時計・めがね	13.2					0.4	3.0	16.6	**41.3**	11.1	5.5	24.7	82.6	0.9
16	スポーツ用品	1.9	19.7					8.2	29.8	**26.9**	8.2	17.3	15.4	67.8	2.4
17	書籍・文具	**35.0**	6.8	1.7	0.4	0.4		3.4	47.7	19.0	3.8	7.2	21.5	51.5	0.8
18	家具・インテリア	3.2	1.9				0.5	2.8	8.4	19.9	7.9	9.3	**48.1**	85.2	6.5
19	家庭電気器具	**34.1**	4.4		0.4		0.4	5.7	45.0	4.8	3.9	10.0	33.2	51.9	3.1
20	外食喫茶	3.3	7.2					8.6	19.1	15.8	7.7	1.4	**46.9**	71.8	9.1
21	理容・美容	**43.6**	17					14.5	75.1	5.4		0.4	14.9	20.7	4.1

注）ゴシックは第１指向地。「横河原商店街活性化基本計画（重信町商工会　平成５年３月」より

表6　東温市民の購買動向（平成20年）

	購入先 / 品物	東温市 フジグラン重信	ダイキEX重信	フジ見奈良	メディコ	しまむら	セブンスター	その他	小計	松山市	通信販売・行商	県内その他	回答数
1	野菜・果物	14.7		14.7			**44.8**	22.4	96.6	1.7		1.7	116
2	精肉	18.0		13.9			**45.9**	16.4	94.3	4.1	0.8	0.8	122
3	鮮魚	15.1		15.1			**47.1**	16.0	93.3	5.0	0.8	0.8	119
4	その他の食料品	23.9		25.6			**31.6**	14.5	95.7	3.4		0.9	117
5	紳士服・洋品	**58.4**		5.3		9.7		3.5	77.0	23.0			113
6	婦人服・洋品	**51.7**		7.8		12.1		5.2	76.7	21.6	0.9	0.9	116
7	子供服・洋品	**52.7**		5.4		14.3		4.5	76.8	20.5	2.7		112
8	呉服	27.6		2.6		1.3		6.6	38.2	**55.3**	2.6	3.9	76
9	肌着・下着	**48.8**		15.7		18.2	0.8	4.1	87.6	5.0	7.4		121
10	化粧品	13.1	1.9	1.9	**44.9**	0.9		11.2	73.8	11.2	15.0		107
11	医薬品	6.1		0.9	**78.1**	0.9	0.9	7.9	94.7	5.3			114
12	書籍・文具	**51.8**	7.1	8.9			1.8	8.9	78.6	20.5	0.9		112
13	家具・インテリア	26.7	21.8	1.0			1.0	5.0	55.4	**38.6**	4.0	2.0	101
14	家庭電器製品	**44.9**	4.2					8.5	57.6	39.8	2.5		118
15	台所用品・日用雑貨	**40.0**	34.8	10.4	2.6		4.3	4.3	96.5	3.5			115
16	スポーツ用品	35.5	0.9					15.5	51.8	**46.4**	0.9	0.9	110
17	時計・宝石・メガネ	37.8						19.8	57.7	**39.6**	1.8	0.9	111
18	贈答品	**41.6**		2.7			0.9	11.5	56.6	36.3	7.1		113
19	外食・喫茶	16.2			1.0			**41.9**	59.0	39.0	1.9		105
20	クリーニング	24.8		11.5			21.2	**38.1**	95.6	4.4			113
21	理容・美容	8.5						**70.8**	79.2	20.8			106

注）ゴシックは第1指向地。アンケート調査結果より高津富男作成

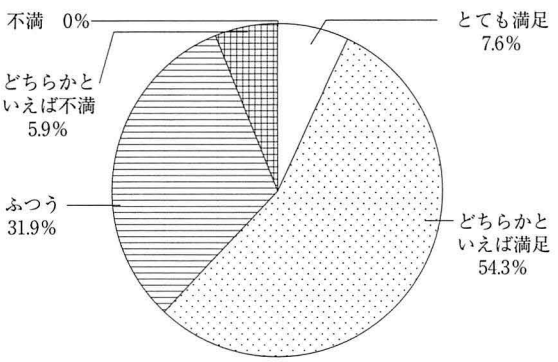


図17　市内での買い物に対する満足度

注）アンケート調査より高津富男作成

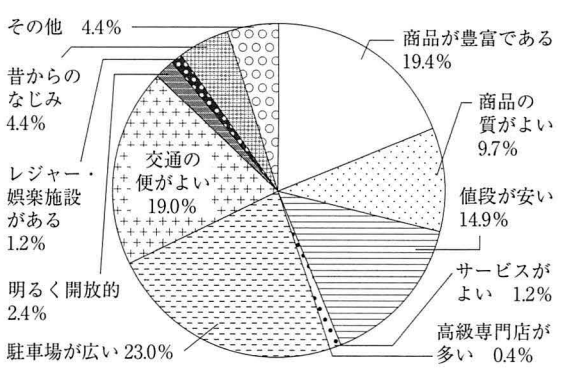


図18　市内で買い物をする理由

注）アンケート調査より高津富男作成

表7　近隣市町の地元購買率の推移

	昭和63年	平成3年	平成6年	平成14年	平成19年
重信町	45.5	51.0	78.9	119.7	92.8
川内町	63.3	69.0	68.3	54.9	
久万高原町	72.9	72.6	73.9	67.7	55.8
砥部町	71.9	76.3	96.6	89.2	78.4
松山市	134.6	132.4	125.4	120.2	113.5

注1）地元購買率＝$\frac{\text{当該地域の住民1人当たりの小売業年間商品販売額}}{\text{県民1人当たりの小売業年間商品販売額}}$

注2）平成14年までは「重信町の商業環境について」（重信町商工会　平成16年7月）、平成19年は愛媛県資料より。

(5) 余暇活動圏

東温市民の余暇活動がどのような地域に及んでいるのかを、ショッピング、スポーツ、マリンレジャー、ウインタースポーツ、ボーリング、スケート、映画、演劇・コンサート、美術・博物館の鑑賞、テーマパークなどの余暇活動についてのアンケート調査結果をもとにして考えてみた（表８）。

東温市は総合公園やスポーツ施設が充実しており、なかでもアクロス重信はスノーボード施設として有名である。また、合併以前からの天然温泉利楽、さくらの湯の２つの温泉施設がある。さらに、坊っちゃん劇場や映画館が商業施設と併設され、相乗効果をねらった立地が展開されている。

余暇活動に利用する交通機関に関するアンケート調査では、高速道路や高速バスの利用は、四国各県へは74.8％、中国地方へは80.3％、関西地方へは61.0％に及んでいる（図19）。高速交通への優位な利便性を生かして、宿泊を伴う余暇活動範囲だけでなく、日帰りの余暇活動範囲も広域に及んでいる。

以上のように、東温市の生活圏は松山市都市圏の中に位置しており、その結びつきは通勤・通学圏で最も強くなっている。それは、東温市が松山市の都市近郊型田園都市であることを示しており、県内外の新しい住民が流入して、新興住宅地域を形成している。購買圏では松山市の圏域にあるものの、近年立地・増床した大型店舗を中心とする２次的圏域を有しており、隣接する松山市東部地域からの消費流入もみられる。医療圏では、愛媛大学医学部附属病院の立地以降多くの

表８　東温市民の余暇活動

	東温市									松山市	今治市	西条市	新居浜市	大洲市	八幡浜市	宇和島市	県内その他	県外	回答数
	総合公園	アクロス重信	塩ヶ森ふるさと公園	天然温泉利楽	さくらの湯	坊っちゃん劇場	滑川渓谷	その他	小計										
スポーツ	**37.1**	5.0	1.4	3.6	5.0			7.9	60.0	25.7	2.1	2.1	1.4	0.7	0.7		0.7	6.4	140
公園散策	**24.4**		17.9	4.1	1.6		9.8	13.8	71.5	16.3	3.3		1.6	4.1		0.8	1.6	0.8	123
マリンレジャー					1.5		3.0	4.5	9.1	**28.8**	16.7	4.5	4.5	4.5	6.1	3.0	16.7	6.1	66
キャンプ・ハイキング	1.3		9.2				10.5	**14.5**	35.5	13.2	6.6	3.9	1.3	3.9	5.3	3.9	11.8	14.5	76
ウィンタースポーツ		23.1	2.6				2.6	12.8	41.0	**28.2**					2.6		20.5	7.7	39
ボウリング								8.8	8.8	**85.3**	1.5		1.5			1.5		1.5	68
ショッピング								27.1	27.1	**52.4**	4.7	3.5	5.9	0.6	0.6	0.6	2.4	2.4	170
映画・演劇・コンサート	0.7					18.4		**44.7**	63.8	30.3							1.3	4.6	152
遊園地・テーマパーク	2.2							9.8	12.0	20.7		1.1					5.4	**60.9**	92
美術館・博物館・資料館・動物園								4.1	4.1	**45.5**	1.6					0.8	13.8	34.1	123
温泉				33.5	**40.2**			4.9	78.7	14.6						0.6	0.6	5.5	164

注）ゴシックは第１指向地（市内その他、県内その他、県外を除く）。アンケート調査より高津富男作成

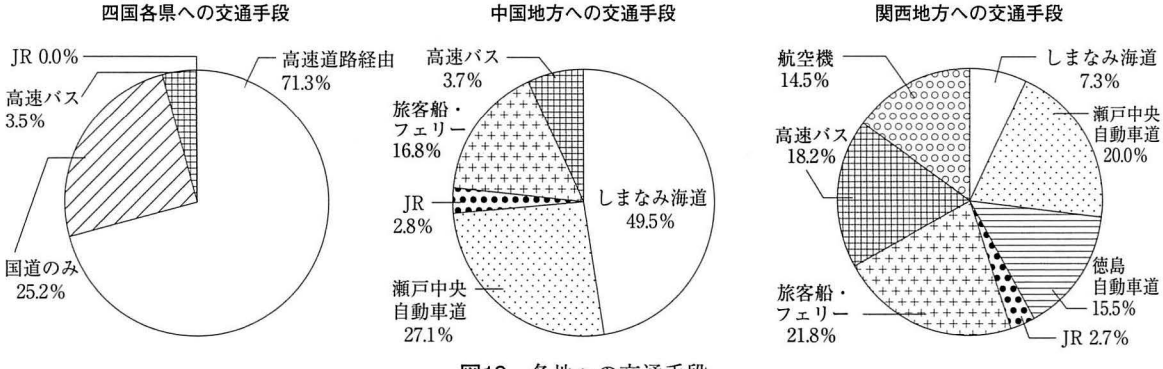


図19　各地への交通手段

注）アンケート調査より高津富男作成

医療施設の開設がみられ、充実した基礎的医療圏が形成されている。また、道路交通の利便性が高く、余暇活動の圏域は広くなっている。

このような状況によって、既存中心集落のもつ都市機能は著しく低下しており、このままでは東温市の核となる地域がますます不明瞭になっていく。それは、東温市の独自性がより一層失われていくことになり、実質的に松山市域の一部に過ぎなくなっていく。そうならないために、古くからの集落のもつ機能をいかに活性化していくか、東温市の最大の課題である。

（髙津　富男）

注および参考文献

1）東温市都市計画課（平成18年）：東温市の都市計画に関する基本的な方針

○篠原重則（平成元年）：愛媛県東温地区の旧街道と人々の生活（東温高校研究紀要第３集）

○建設省四国地方建設局・愛媛県（昭和62～平成13年）：昭和60～平成11年度　道路交通センサス

○国土交通省四国地方建設局・愛媛県（平成19年）：平成17年度　道路交通センサス（愛媛県庁Webページ『えひめの道路』内 http://www.pref.ehime.jp）

○愛媛県（昭和53年）：愛媛県史　地誌Ⅰ（総論）

○愛媛県（昭和63年）：愛媛県史　地誌Ⅱ（中予）

○重信町（昭和50年）：重信町誌

○重信町（昭和63年）：重信町誌

○川内町（昭和36年）：川内町誌

○川内町（昭和43年）：川内町新誌

○川内町（平成４年）：川内町誌 続

○愛媛県（平成９年）：重信町商業地域中小企業診断指導指針作成調査報告書

○東温市（平成18年）：東温市統計書　平成18年版

○東温市（2007）：とうおんまちづくりプラン

○重信町商工会（昭和59年）：重信町商工業の将来を求めて

○重信町商工会（平成４年）：横河原商店街活性化基本計画

○川内町商工会（平成８年）：川内町商工会小規模事業活性化ビジョン報告書

○重信町商工会（平成９年）：重信町小売商業の近代化を求めて

○重信町商工会（平成11年）：横河原商店街CI策定事業報告書

○重信町商工会（平成11年）：横河原商店街活性化先進事業報告書

○重信町商工会（平成11年）：平成13年度地域商業振興推進事業報告書

○えひめ産業振興財団（平成15年）：中小企業商業圏等調査事業報告書（中予編）

○重信町商工会（平成16年）：重信町の商業環境について

松山東高校　髙津　富男

松山北高校　橋本　貴登

松山商業高校　一柳　保彦

松山南高校　本田めぐみ

東温高校保護者各位

平成２０年９月７日

愛媛県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会
地理部門長 米澤　俊二（伊　予高校）
本調査担当者 高津　富男（松山東高校）

東温市の生活圏に関する調査についてのお願い
（通勤圏・購買圏・医療圏・余暇活動圏・など）

私たちの研究会では、東温市当局の御協力のもとに、よりよい郷土づくりのための地理的研究を進めています。つきましては、御多忙のところ恐れ入りますが、下記の調査に御協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、この調査は統計的に処理し、学術調査の目的以外には使用いたしませんので、念のため申し添えておきます。

記

＜Ⅰ　回答者の属性＞

１　この調査にお答えくださる方の属性についておたずねします。次の（１）～（２）について、（　　）内の該当するものにそれぞれ○をつけてください。

（１）性別（男・女）

（２）年齢（20代・30代・40代・50代・60代以上）

＜Ⅱ　居住地＞

１　現住所は次のどの小学校区ですか。該当するものに１つ○をつけてください。

（１）北吉井小学校区　（２）南吉井小学校区　（３）拝志小学校区　（４）上林小学校区
（５）川上小学校区　（６）東谷小学校区　（７）西谷小学校区

２　現住所地に居住したのはいつごろからですか。該当するものに１つ○をつけてください。

（１）戦前から　（２）昭和20・30年代　（３）昭和40・50年代　（４）昭和60年・平成年代

３　上記２で（２）～（４）に○をつけた方は、現住所地の前の住所地を１つ選んでください。

（１）東温市　（２）松山市　（３）松前町　（４）伊予市　（５）砥部町
（６）その他の県内（　　）市町村　（７）県外（　　）都道府県

４　上記３で（２）～（６）に○をつけた方におたずねします。現住所地に住居を移した理由を１つ選んでください。

（１）松山市に居住していたが東温市内に新築または転居した
（２）県内他の市町村に居住していたが東温市内に新築または転居した
（３）他県からＵターンした
（４）他県からＪターンした
（５）県内の他市町村から東温市へ転勤になり東温市へ転居した
（６）県内の他市町村から松山市へ転勤になり東温市へ転居した
（７）県外から東温市へ転勤になり東温市へ転居した
（８）県外から松山市へ転勤になり東温市へ転居した
（９）その他（　　）

５　生徒のお父さんの出身市町村についておたずねします。該当するものに１つ○をつけてください。その他の県内や県外の場合は、県名、市町村名を記入してください。

（１）東温市　（２）松山市　（３）松前町　（４）伊予市　（５）砥部町　（６）西条市
（７）その他の県内（　　）市町村　（８）県外（　　）都道府県

６　生徒のお母さんの出身市町村についておたずねします。該当するものに１つ○をつけてください。その他の県内や県外の場合は、県名、市町村名を記入してください。

（１）東温市　（２）松山市　（３）松前町　（４）伊予市　（５）砥部町　（６）西条市
（７）その他の県内（　　）市町村　（８）県外（　　）都道府県

＜Ⅲ　購買圏＞

1　次の表の１から20の品物を主にどこで購入されますか。1～20の品物それぞれの購入先に１つずつ○をつけてください。なお、その他の場合には県名や市町村名を記入してください。

品物＼購入先	東温市																松山市			通信販売	行商	その他（県名・市町村名を書いて下さい）
	フジグラン重信店	ダイキ重信EX	レスティフジ	レスティメディコ	パーアウトレットモール	しまむら	セブンスタ1重信店	横河原商店街	牛渕団地商店街	バイパス沿いの商店	天神商店街	松山生協川上マ1ケット	そごうマ1ト川内店	ヤマサンセンタ1川内店	JAマ1ケット	その他	郊外大型店	中心部商店街	中心部大型店			
1　野菜・果物																						
2　精肉																						
3　鮮魚																						
4　その他の食料品																						
5　紳士服・洋品																						
6　婦人服・洋品																						
7　子供服・洋品																						
8　呉服																						
9　肌着・下着																						
10　化粧品																						
11　医薬品																						
12　書籍・文具																						
13　家具・ｲﾝﾃﾘｱ																						
14　家庭電器製品																						
15　台所用品・日用雑貨																						
16　スポーツ用品																						
17　時計・宝石・ﾒｶﾞﾈ																						
18　贈答品																						
19　外食・喫茶																						
20　クリーニング																						
21　理容・美容																						

2　市内での買物に利用する主な交通手段に１つ○をつけてください。
（１）徒歩　（２）自転車　（３）バイク　（４）自家用車　（５）タクシー　（６）バス　（７）電車

3　市内での買物に対する満足度に１つ○をつけてください。
（１）とても満足　（２）どちらかといえば満足　（３）ふつう
（４）どちらかといえば不満　（５）とても不満

4　市内で買物をする理由は何ですか。該当するものすべてに○をつけてください。
（１）商品が豊富である　（２）商品の質がよい　（３）値段が安い　（４）サービスがよい
（５）高級専門店が多い　（６）駐車場が広い　（７）交通の便がよい　（８）明るく開放的
（９）ﾚｼﾞｬｰ・娯楽施設がある　（10）昔からのなじみ　（11）その他（　　）

5　松山市へ買物に行く場合の主な交通手段に１つ○をつけてください。
（１）徒歩　（２）自転車　（３）バイク　（４）自家用車　（５）タクシー　（６）バス（７）電車

6　市外で買物をされる理由は何ですか。該当するものすべてに○をつけてください。
（１）商品が豊富である　（２）商品の質がよい　（３）値段が安い　（４）サービスがよい
（５）高級専門店が多い　（６）駐車場が広い　（７）交通の便がよい　（８）明るく開放的
（９）ﾚｼﾞｬｰ・娯楽施設がある　（10）昔からのなじみ　（11）通勤や仕事などの都合から
（12）レジャーを兼ねることができるから　（13)その他（　　）　裏に続く

＜Ⅳ　余暇活動圏＞

1　下の１～11の余暇活動（レジャー）について、過去５年間でどの地域へよく行かれましたか。それぞれの項目について３つまで○をつけてください。その他については記入してください。

地域 / 余暇活動	東温市										松山市	今治市	西条市	新居浜市	大洲市	八幡浜市	宇和島市	西予市	県内のその他	県外
	東温市総合公園	アクロス重信	塩ヶ森ふるさと公園	天然温泉利楽	さくらの湯	東温市歴史民俗資料館	高畠華宵大正ロマン館	坊っちゃん劇場	滑川渓谷	市内その他										
1　スポーツ																				
2　公園散策																				
3　マリンレジャー																				
4　キャンプ・ハイキング等																				
5　ウインタースポーツ																				
5　ボウリング																				
6　ショッピング																				
7　映画・演劇・コンサート																				
8　遊園地・テーマパーク																				
9　美術館・博物館水族館・動物園等																				
10　温泉																				

2　次の(1)～(3)の余暇活動について、過去５年間で最も遠くへ行かれた場所をお答えください。

（１）日帰りの余暇活動場所
（　　）都道府県（　　）区市町村

（２）１泊の余暇活動場所
（　　）都道府県（　　）区市町村

（３）２泊以上の余暇活動場所
（　　）都道府県（　　）区市町村

＜Ⅴ　通勤圏＞

1　生徒のお父さんの勤務地についておたずねします。該当するものに１つ○をつけてください。その他の県内や県外の場合は、県名、市町村名を記入してください。

（１）東温市　（２）松山市　（３）松前町　（４）伊予市　（５）砥部町　（６）西条市
（７）その他の県内（　　）市町村　（８）県外（　　）都道府県

2　生徒のお母さんの勤務地についておたずねします。該当するものに１つ○をつけてください。その他の県内や県外の場合は、県名、市町村名を記入してください。

（１）東温市　（２）松山市　（３）松前町　（４）伊予市　（５）砥部町　（６）西条市
（７）その他の県内（　　）市町村　（８）県外（　　）都道府県

＜Ⅵ　医療圏＞

1　あなたや家族の方が医療施設を利用される場合、下の表の疾病の時、次のどの地域の医療施設をよく利用されますか。１～７の疾病について、それぞれの該当欄に１つずつ○をつけてください。その他については、県内は市町村名を、県外は県名を記入してください。

地域・医療施設 ＼ 疾病の種類	東温市			松山市		砥部町		西条市		その他	
	個人医院	愛大病院	愛媛病院	個人医院	総合病院	個人医院	総合病院	個人医院	総合病院	個人医院	総合病院
1　内　　科											
2　外　　科											
3　眼　　科											
4　皮膚泌尿器科											
5　耳鼻咽喉科											
6　歯　　科											
7　高度な医療											

2　上記１で答えた病院・医院を選んだ理由は次のどれですか。２つ選んでください。
（１）交通の便がよい　（２）専門性　（３）近い　（４）評判　（５）信頼
（６）規模が大きい　（７）昔から受診している　（８）その他（　　）

3　お宅にとって医療施設への利便性はどうですか。該当するものに１つ○をつけてください。
（１）とても便利　（２）どちらかといえば便利　（３）ふつう
（４）どちらかといえば不便　（５）とても不便

＜Ⅶ　その他＞

1　四国各県へはどの交通手段をよく利用しますか。該当するものに１つ○をつけてください。
（１）ＪＲ　（２）高速バス　（３）高速道路経由　（４）国道（11･33･56号など）のみ

2　九州方面へは次のどのルートをよく利用しますか。該当するものに１つ○をつけてください。
（１）三崎ー佐賀関航路　（２）八幡浜・三崎ー別府航路　（３）八幡浜ー臼杵航路
（４）宿毛ー佐伯航路　（５）松山ー別府・大分航路　（６）航空機

3　中国地方へはどの交通手段をよく利用しますか。該当するものに１つ○をつけてください。
（１）自動車・しまなみ海道経由高速道路　（２）自動車・瀬戸中央自動車道経由高速道路
（３）ＪＲ　（４）旅客船・フェリー　（５）高速バス

4　関西地方へはどの交通手段をよく利用しますか。該当するものに１つ○をつけてください。
（１）自動車・しまなみ海道経由高速道路　（２）自動車・瀬戸中央自動車道経由高速道路
（３）自動車・徳島自動車道経由高速道路　（４）ＪＲ　（５）旅客船・フェリー
（６）高速バス　（７）航空機

5　中部地方以遠へはどの交通手段をよく利用しますか。該当するものに１つ○をつけてください。
（１）自動車・高速道路　（２）ＪＲ　（３）高速バス　（４）航空機

6　西予市まで高速道路が開通しましたが、南予地方へは次のどの交通手段をよく利用しますか。該当するものに１つ○をつけてください。
（１）ＪＲ　（２）自動車・国道　（３）自動車・高速道路　（４）バス

－－お忙しいところ御協力ありがとうございました。－－

Ⅷ　観　　光

1　はじめに

観光は、旅行業、宿泊業、輸送業、飲食業、土産品業等極めて裾野の広い産業であり、その経済効果は極めて大きいとされている。観光庁の資料では平成18年度において、二次的な経済波及効果を含む生産効果は国内生産額945兆円の5.6％の52.9兆円、雇用効果は総雇用6,405万人の7.4％の442万人と推計されている。このように、観光はわが国の経済、人々の雇用、地域の活性化に大きな影響を及ぼすものであり、21世紀のリーディング産業と考えられている。

そうした中で、平成19年（2007）１月には観光立国推進基本法が施行され、その後政府が一体となって「住んでよし、訪れてよしの国づくり」に取り組むことを発信している。そして、地方公共団体・民間の観光地づくりの取組を強力に支援することが必要であるとし、平成20年10月１日に国土交通省に観光庁が設置された。

さて、愛媛県においても、行政や観光事業者、地域住民が一体となって地域固有の歴史や文化をテーマにして、観光資源化しようとする新しい取組が始まっている。それは、従来の「施設づくり型」に対して「まちづくり型」と呼ばれるものに移行していることが指摘されている。[1)]

図１の愛媛県の観光客数の推移をみると、しまなみ海道が開通した平成11年には一時的に264.6万人を記録したが、その翌年は落ち込んだことが分かる。しかし、本四架橋や四国内の高速道路が整備された効果は、一定の底上げの効果をもたらしており、その後平成15年に向けて徐々に観光客が増加に転じている。これは、平成15年の４月から10月にかけて「えひめ町並み博2004」が開催されたことなどが影響していると考えられる。この「町並博」は、地元住民・団体が参加するまちづくり型の博覧会として、古い町並みが残る内子町、大洲市、宇和町（現西予市）の３つを拠点としながら、広範囲の地域を展覧会場と見立てて行事が展開された。このような、テーマを設定したイベントなども含めて、観光客を増やすためには「行ってみたい」と思わせるきっかけが必要である。「なぜそこを志向するのか」という観光行動の要因として、その地域独自の魅力をいかに高めていくかが問われている。

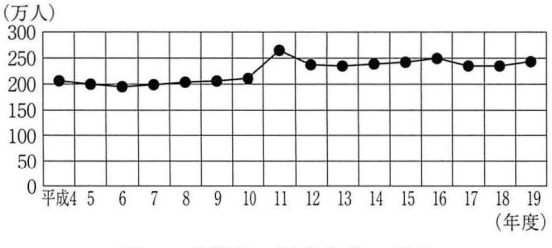


図１　愛媛県の観光客数の推移

注）愛媛県経済労働部観光物産課資料より繁桝義一作成

図２は平成19年度の愛媛県経済労働部観光物産課が報告した「観光の目的別」の資料である。

これをみると、買物が22.12％を占め、次いで文化・

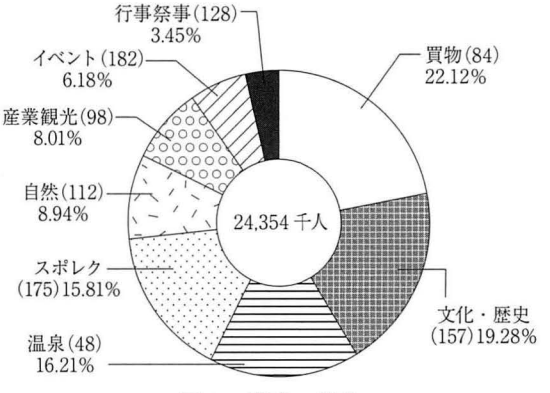


図２　観光の目的

注１）１人の観光客が複数の観光地を訪れる場合は各々の分野でカウントしている。ただし、行事祭事、イベントは、開催会場の分野でカウントされていることがある。
注２）（　）は調査か所数。
注３）愛媛県経済労働部観光物産課「観光の目的別」（平成19）より繁桝義一作成

歴史19.28％、温泉16.21％、スポーツレクリエーション15.81％の順であるが、その前年との変化をみると、文化・歴史は＋4.29％と他の項目に比べて増加していることが指摘されている。

次に、何を参考にして目的地を決定しているかについて図３に示した。

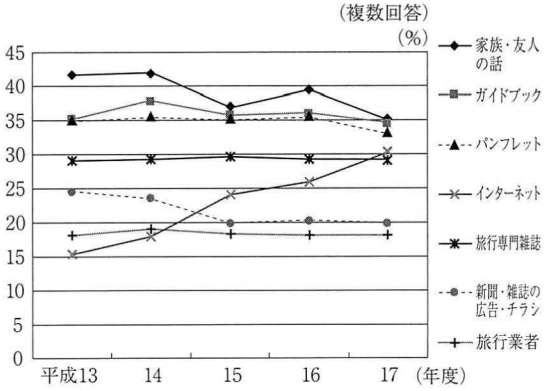


図３　宿泊観光旅行の目的地を決定する際に参考とするものの変化

注）日本観光協会「観光の実態と志向」（平成18）より繁桝義一作成

これによると、やはり身近な情報源である家族や友人からの話、ガイドブック、パンフレットが上位を占めていることが分かる。しかし、その比重は平成16年度から17年度にかけて下降しており、その代わりにインターネットによる情報が飛躍的に伸びている。平成13年度には15.4％であったものが平成17年度には33.2％となり、旅行専門雑誌を上回ったことが情報メディアの現状をよく表している。このような動向を踏まえながら東温市の観光を概観してみる。

２　概観

(1)　スポーツ・温泉・文化の３本柱

観光振興戦略の進め方として、観光資源や観光施設の特性、地域の歴史・文化・産業などを総合的に検討したコンセプトの設定とイメージの形成が大切であると言われている[2)]。

特に観光イメージについては、観光地が送り出す様々な情報をはじめ、観光客の経験談、マスコミの意見、世間の評判などによって徐々につくられていくので、東温市という地域を一つのブランドとしてイメージを創出していきたいものである。

このような視点より観光資源を考えたときに、スポーツ・温泉・文化の３本柱というバランスの良い施設設備を持っていることが特色である。

スポーツ・レクレーション施設として「アクロス重信」がある。ここが全国的に注目されるようになったのは、平成21年（2009）１月23日に開催されたスノーボード世界選手権大会の男子ハーフパイプで松山城南高校３年生の青野令選手が優勝したことによる。彼は小学校４年生からこの「アクロス重信」で練習を始め、平成16年にはJOCジュニアオリンピックで優勝、翌17年には連覇を達成した。平成18年には15歳にしてシニアの大会であるFISキスマークカップスノーボードジャパンに出場して優勝を果たした。その後は日本代表として世界を舞台に戦い、「2006-07スノーボード・ワールドカップ」ではハーフパイプ競技で富良野大会、カルガリー大会で優勝を果たし見事総合優勝を果たした。次の目標は平成22年に開催されるバンクーバー五輪で、日本人初のスノーボードでのメダル獲得である。是非この機会にスノーボードを楽しむ人々を増やし、日本最大級の本格ハーフパイプの施設の存在を強く発信したいものである。

温泉では、見奈良天然温泉「利楽」と「さくらの湯」（東温市ふるさと交流館）がある。しかし「アクロス重信」のゲレンデでスノーボードやスキーを楽しんだ後、車で約20分走り道後温泉に行くケースが多い。ぜひ東温市内の温泉と道後温泉との違いをアピールしながら、「アクロス重信」と東温市の温泉をリンクさせるために、交通アクセスを割安にしてネットワークをつくりたい。

文化では「坊っちゃん劇場」がある。西日本初の地域文化発信の常設劇場で、夏目漱石の小説『坊っちゃん』が発表されてから100年目の平成18年４月にオープンした。この劇場の特徴は音声ガイドのシステムが導入され韓国語・中国語・英語で聞くことが出来ることと、音響効果が高く、役者の息づかいや臨場感を鮮明に伝える「イーサーサウンドシステム」が取り入れられていることである。

「ミュージカル役者」の誕生する町づくりと、愛媛の歴史的・文化的伝統を舞台芸術で表現する劇場を目指して設立された。文化発信の常設劇場・愛媛の文化

特使としての活躍も期待されている。

以上のような３本柱は、それらを組み合わせることによる可能性を秘めている。歴史文化の「旅」を様々な形で提案できる要素を持っている。

(2) ホームページ「観光ナビ」

ホテル、旅館にとって予約は命綱であると言われる。予約はエージェント、予約電話、広告、営業マンなどホームページ以外からでも入れる。しかし、今後インターネットを通じた旅行売り上げが現在の15%（全旅行売り上げに対して）から30%に達すると予想されており、このホームページの情報発信の内容と方法は今後ますます重要となってくると思われる。

旅行会社の人の話によると「ホームページは宿泊施設の顔であり、玄関であります。順番から言うと、先にお客様が出会うのは、実際の建物でなく、施設を紹介したホームページです。最近の傾向として宿泊施設選びの最後の決め手はホームページになっています」と言われている。確かに、旅行、出張、宿泊選びなどのとき、必ず観光関係や、自治体が開設しているホームページなどを見ることが多くなっている。

図４　東温市ホームページ「観光ナビ」

注）東温市ホームページより

そこで、東温市のホームページを検証してみると、非常に見やすく、分かりやすい。特に以下の３点について優れていると思われる。

① サイトに訪れた人の欲しい情報が入っている。

② 全体のバランスと配色がよい。

③ 画像が明るい。

特に①について、特筆すべきは、車で走ることを想定しながら、視覚的にドライバーの見る標識を写真の中で記して、左右に曲がるなどを解説している点である（図４）。また、地図も分かりやすく、また観光スポットをエリアに分けたり、春夏秋冬に分類したりして旅情を誘っている。道順など旅行者の身になった具体的な情報を分かりやすくしている工夫が、人にやさしい東温市観光をアピールしているといえる。

（繁桝　義一）

３　観光資源

(1) 分布と変遷

図５に東温市のおもな観光資源を、表１に近年の観光関連年表を、図６に東温市誕生後の入込客数の推移を示している。

表１　東温市の観光関連年表

昭和57年	（1982）国道11号バイパス開通
平成元年	（1989）ハタダお菓子館開店
2年	（1990）高畠華宵大正ロマン館会館
6年	（1994）伊予西条～川内インターチェンジ開通
10年	（1998）さくらの湯開園
11年	（1999）足立の庄開園
〃	アクロス重信開設
12年	（2000）見奈良天然温泉利楽開園
13年	（2001）足立の庄閉園
14年	（2002）愛媛わんわん村開園
16年	（2004）重信町と川内町が合併して東温市が誕生
18年	（2006）坊っちゃん劇場開園
〃	愛媛わんわん村閉園
19年	（2007）えひめ酒だる村閉園

注）「東温市市役所資料」より川井博樹作成

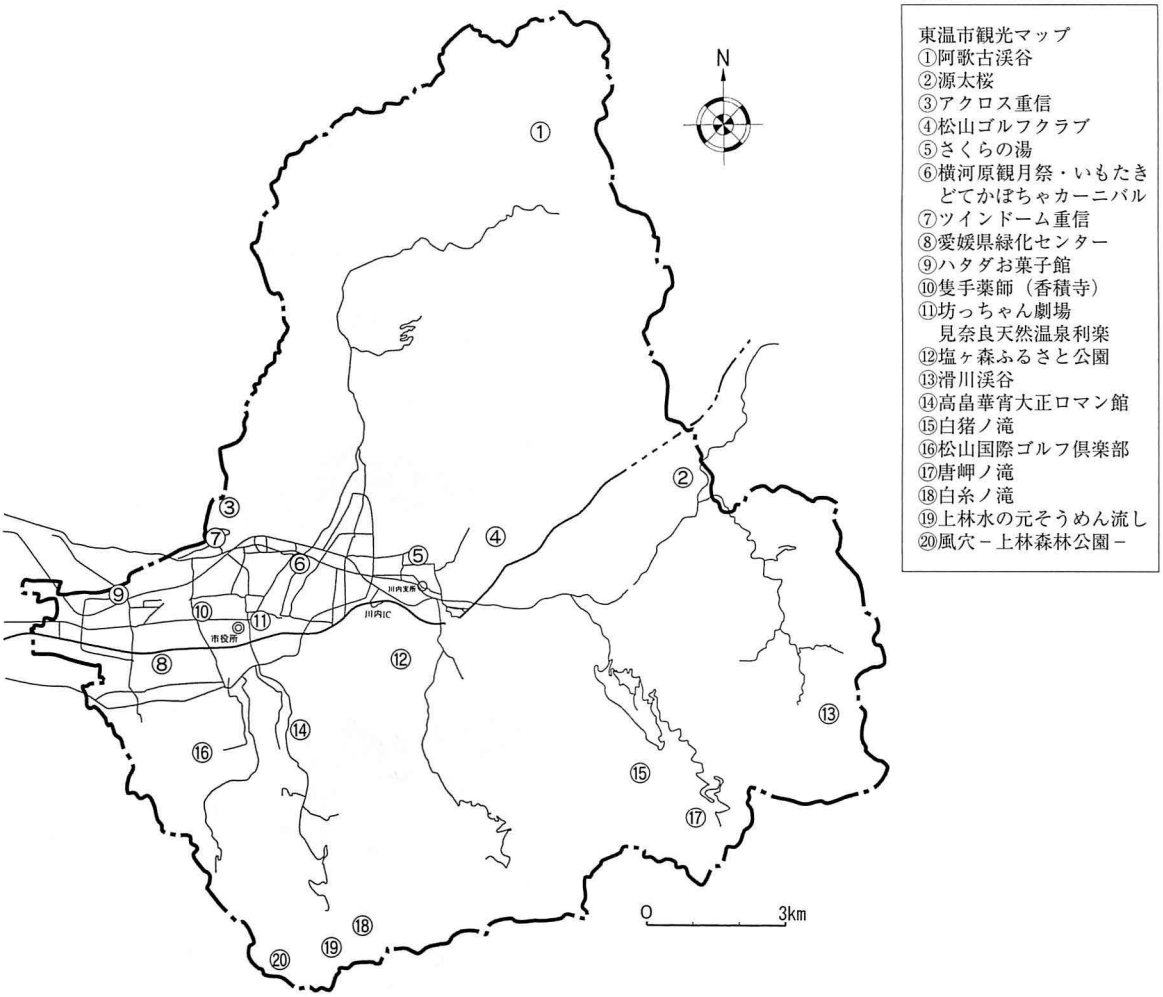


図５　東温市観光マップ

注）「東温ナビゲーション」より川井博樹作成

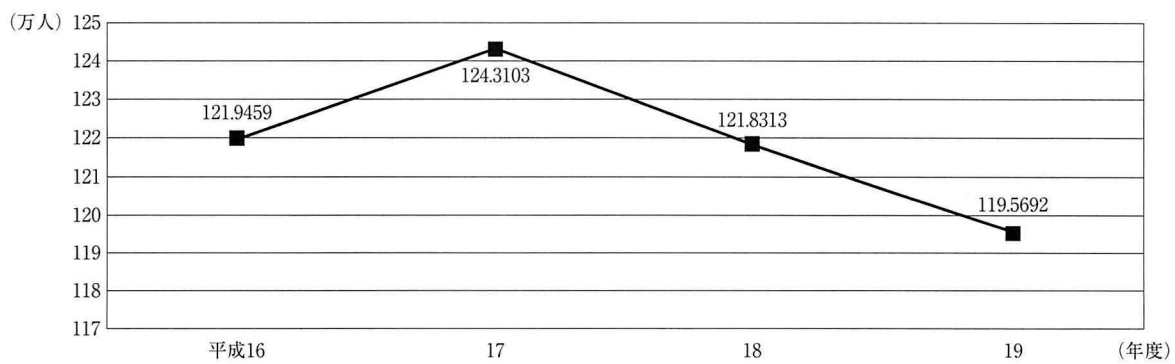


図６　東温市の入込客数の推移

注）東温市役所資料より川井博樹作成

(2) 坊っちゃん劇場

「坊っちゃん劇場」は、西日本では初めて地域文化発信の常設劇場として旧重信町見奈良に平成18年(2006) 4月にオープンした。愛媛県のビージョイグループと秋田県のわらび座が共同出資をして設立された。レスパスシティへの集客の目玉として、日本有数の劇団として知られる「わらび座」を中心に年間300回の公演をめざしている。客席数450弱で観客との一体感を大事にした本格的なミュージカル上演劇場で、国内ではめずらしい「デジタルサウンドシステム」を導入している。愛媛県、四国、瀬戸内の歴史的・文化的伝統を舞台芸術で表現している。初公演ではミュージカル「坊っちゃん！」(平成18年4月～19年3月)、第2弾はミュージカルコメディ「吾が輩は狸である」(平成19年4月～20年3月)、第3弾ではミュージカル「龍馬」(平成20年3月～21年3月) が上演された。第4弾として、しまなみ海道10周年記念作品「鶴姫伝説」(平成21年4月～22年3月) が上演中である。オープンからの来観者を平均した図7から、学校関係が30%と多数を占めていることがわかる。総合学習の一貫として多くの小・中学校が利用しており、県内の利用学校数が98校、約18,000人 (高校は19校、約6,000人) の児童・生徒が訪れている (平成20年度)。また、図8の旅行会社手配の来観者のエリアをみてみると、四国地区が57%、中国地区が37%であり、高速道路を活用した1日観光としての役割は十分に果たしていると考えられる。今後は、松山市内の観光地や宿泊施設との接続をどう取り組むかが課題となる。また、コンセプトの1つとしている、ミュージカル役者の誕生する「まちづくり」をめざす劇場として、県内高校出身者が2名活躍しており、今後ますます地域貢献と地域の活性化が期待できる。

写真1 坊っちゃん劇場

注) 平成20年9月 川井博樹撮影

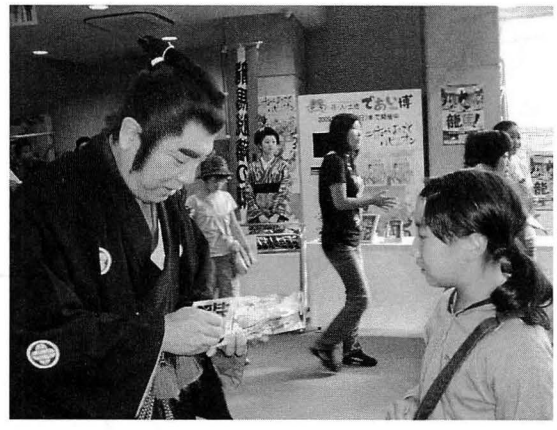


写真2 わらび座劇団員との交流

注) 平成20年9月 川井博樹撮影

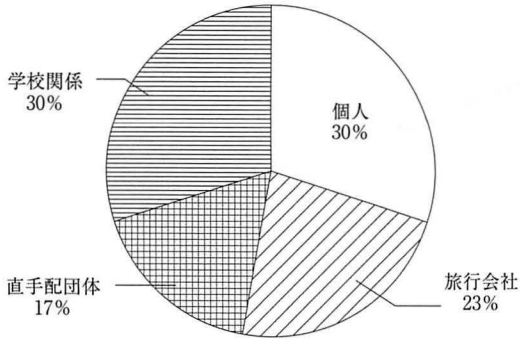


図7 坊っちゃん劇場来観者種別割合

注) 坊っちゃん劇場の資料より川井博樹作成

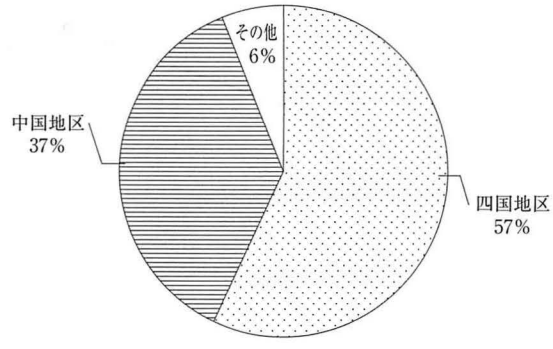


図8 旅行会社手配の来観者のエリア

注) 坊っちゃん劇場の資料より川井博樹作成

(3) 見奈良天然温泉　利楽

旧重信町見奈良に平成12年（2000）７月にオープンした。坊っちゃん劇場に隣接し、レスパスシティ内にある。西日本最大級の野天風呂と深さ1,500mより湧水する源泉は、泉温49℃と高温。泉質はナトリウム塩化物・炭酸水素塩温泉で、神経痛や筋肉痛などの治療に効果がある。24時間利用できる家族風呂や宿泊施設、レストラン・宴会場も充実しており、幅広く利用できるよう工夫されている。図９から、年間約25万人が利用しており、東温市の集客の目玉の一つとなっている。

(4) さくらの湯（東温市ふるさと交流館）

旧川内町北方に平成10年４月にオープンした。図９から年間約35万人の利用者があり、東温市で最も高い集客施設であることがわかる。地域住民の生活に根付いており、日常の交流の場となっている。また、泉質が良いことから、旅行雑誌の「じゃらん」で人気投票１位を獲得したことがある。大浴場のほか、家族風呂を５室備え、トレーニングルーム・温水プールも入館料で利用できる。農産物直売所「さくら市場」を併設している。

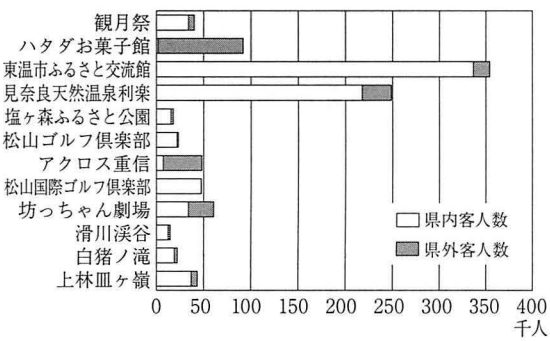


図９　主要観光施設・イベント入込客数（平成19年）

注）東温市役所資料より川井博樹作成

(5) 高畠華宵大正ロマン館

旧重信町下林に平成２年10月にオープンした年間約７千人の来館者（平成16～18年）があったが平成19年は４千人台と落ち込んだ。大正時代の挿絵画家高畠華宵（宇和島市出身）の美術館で、㈲カドヤが母体となり華宵の子孫が理事長として運営している。華宵の作品をはじめ、大正ロマンの画家の作品時代資料を収蔵し、年４回のテーマ展と年２回の特別展を開催している。ミュージアムショップにはポストカード・便せん・しおりなどオリジナル華宵グッズが販売されており、また、美術館の一角の喫茶コーナでヨーロッパの名陶で大正ロマンの雰囲気を味わうことができる。平成21年１月から一時休館となっている。

写真３　さくらの湯

注）平成20年９月　川井博樹撮影

表２　高畠華宵大正ロマン館テーマ展一覧

《常設テーマ展》（平成17年～平成21年）
第42回　松山－上海直行便就航１周年記念「上海モードと華宵」
第43回　華宵の絵本展
第44回「華宵の少年画」－《チャレンジ展示：華宵萌え》付き－
第45回　大正ロマン・永遠（とわ）に若し
第46回「しゃぼん玉とんだ」～大正の唄と抒情画～
第47回　第一回遠藤コレクション寄贈記念展覧会「女優展」
第48回「初公開　華宵・新館蔵品展」
第49回「華宵没後40周年～法円寺のパパやママによろしく～」
第50回「秋　歴史風俗絵巻展」
第51回「華宵とすごろくパラダイス」
第52回「華宵の子供絵展～ファンタジー世界のこどもたちへ～」
第53回　華宵生誕120年「恋の時代展」
《特別企画展》（平成17年～平成21年）
第22回　愛と幻想の抒情画家「シャガール版画展」
第23回「金沢湯涌温泉の恋」～竹久夢二展～
第24回「江戸の鯰絵展」
第25回「花園少女展」～かいち・フォーゲラー・華宵～
第26回　高畠華宵生誕120年特別展　幻の原画新発見！ 華宵・夢二と『少女の國』のさしえ画家たち

注）「高畠華宵大正ロマン館ホームページ」より川井博樹作成

写真４　高畠華宵大正ロマン館

注）平成20年９月　川井博樹撮影

写真６　隻手薬師

注）平成20年９月　川井博樹撮影

写真５　美術館内「カフェ・カショー」

注）平成20年９月　川井博樹撮影

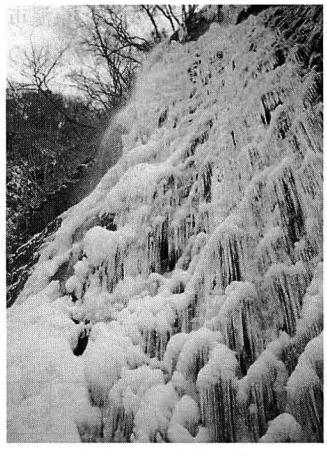


写真７　白猪ノ滝

注）東温ナビゲーションより

(6)　隻手薬師（香積寺）

旧重信町田窪に位置し、地元はもとよりたくさんの人々から厚い信仰を受けている高野山真言宗のお寺で、隻手薬師の名で親しまれている。毎日12日が縁日で、特に初薬師、節分、４月、終薬師は大いに賑う。伊予十三佛霊場第七番でもある（写真６）。

(7)　白猪ノ滝

旧川内町河之内の問屋に白猪ノ滝がある。皿ヶ嶺峰県立自然公園の中にある高さ96mの滝で重信川上流、表川白猪越の渓にかかり、その落下する姿はまさに自然の偉大さを感じさせられる。四季それぞれ美しい景色であるが、特に冬の景色は幻想的。厳しい寒さが続くと、滝の水が凍りついて滝全体がまるで氷の彫刻のような姿を見せる（写真７）。また、毎年11月３日は白猪ノ滝まつりが開催され錦に染まった紅葉を楽しむ大勢の人々で賑わう。

(8)　皿ヶ峰と風穴（かざあな）（上林森林公園）

皿ヶ峰は、旧重信町上林に位置し、皿ヶ峰連峰県立自然公園に指定されている。山頂付近の竜神平には泉があり、夏はキャンプ場になる。松山近郊のハイキングコースとして登山者が多く、頂上からの眺めは壮観である。

上林森林公園には、水の森・光の森・風の森の３つのエリアがあり、特に風の森にある風穴（写真８）は、

写真８　風穴

注１）柵のむこう側の岩穴より夏は冷気が吹き出している。
注２）平成21年９月　川井博樹撮影

写真９　アクロス重信

注）平成20年９月　川井博樹撮影

岩穴から四季を通じてほぼ一定の風が吹き出し、夏になると外気との温度差により神秘的な霧が発生することから、涼を求める大勢の人々で賑わう。特に上林「水の元」そうめん流しの営業日には多くなる。

(9)　源太桜

旧川内町河之内の国道11号の桜並木で知られる桜三里に残る最も古い桜を「源太桜」と呼んでいる。松山藩士、矢野五郎右衛門源太が藩の囚人を使役し、中山川沿いに桜を植えた際に、苛酷な労役にたえかねた囚人が「桜三里は源太が仕置き、花は咲くとも実はなるな」と怨嗟の声を残したという故事にちなんだものである。樹齢は約300年で、現在は２本の桜が残っているだけとなっている

４　レジャー施設・スポーツ施設

(1)　アクロス重信

旧重信町西岡に平成11年（1999）11月にオープンした（写真９）。久万スキーランドや高原ゴルフ倶楽部を手がける久万総合開発グループが、競技力の向上に重点を置いて設立した。国内最大級の屋内ゲレンデで全長90m、幅45mのスケールを誇り、一年中スキー・スノーボードを楽しむことができる（写真10）。最大の特徴は、SAJ公認のハーフパイプで全長が100mあり、国内はもとよりアジア各国から合宿に訪れる。オープンした際には日本ナショナルチームのメンバーがこけら落としをした。初年度は10万人が利用したが、ここ数年は６万人程度となっている。

写真10　ゲレンデ風景

注）アクロス重信提供

図10より、本来のスキー・スノーボードシーズン前の８月～11月に来場者のピークがあることがわかる。これは、平成20年までは夏休み中にジュニアオリンピックの会場となっていたことや各国ナショナルチームの合宿が行われているからである。また、本格シーズン前の練習として多くの人々が全国から訪れている。その理由として、積雪には手をかけ、常時70cmをキープしていて、良質のパウダースノーを降らせる高技術システムを採用していることがあげられる。また、ゲレンデには２WAYワンメイクジャンプ台やレール・ボックス等のJIBコースがあり、遊べるアイ

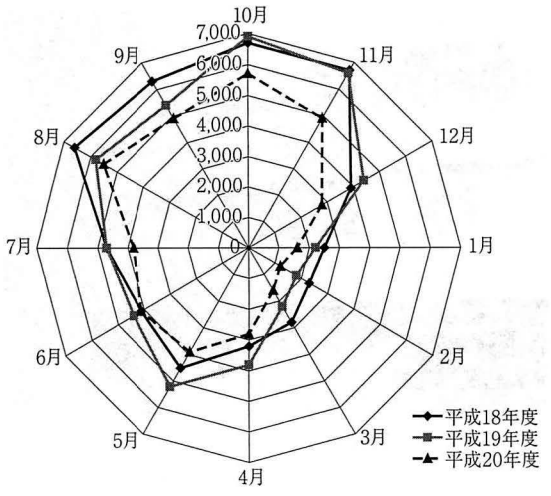


図10　アクロス重信の月別利用者数

注）アクロス重信の資料より川井博樹作成

テムが満載である。道具類はすべてレンタルできるほか、初心者対象ボードスクールも開講される等、初心者から上級者まで楽しめるゲレンデとなっている。

(2)　松山ゴルフ倶楽部と松山国際ゴルフ倶楽部

松山ゴルフ倶楽部は昭和33年（1958）11月、県内で待望の本格的なゴルフ場として旧川内町松瀬川に開場した。当初は現在のアウトの９ホールのみだった。最初のメンバーは300人足らず。当時は松山ゴルフ倶楽部川内コースと言われていた。今のような恵まれた施設もなく、ゴルファーは弁当持参で、悪路の“酷道”と言われた国道11号を往復したという。開場の頃はゴルフ人口も少なく、入場者は１日平均約30人。メンバーは新居浜の住友関係者が目立っていた。昭和39年11月には９ホールを増設し、倶楽部ハウスを新築竣工した。平成10年（1998）開場記念40周年をむかえた。西日本最高峰の石鎚連山を望み、眼下に広がる道後平野を眺めながらプレーが楽しめる。コースは10万本の松が立ち並ぶ林間コースで、変化に富んだコースレイアウトに加え、手入れの行き届いたベントグリーンが伝統的コースならではの風格をたたえている。

松山国際ゴルフ倶楽部は昭和45年７月に旧重信町上林にオープンした。現在、パシフィックゴルフグループインターナショナルホールディングス株式会社（平成20年12月現在、全国128ゴルフ場体制）の傘下にある。コースは、荘厳な皿ヶ嶺連山を見渡せる素晴らしい景色をバックに、戦略性に富み、チャレンジ・リベンジを駆り立てられるコースが堪能できる。

(3)　東温市運動公園・ツインドーム重信

旧重信町西岡に位置し、テニスコートの他、野球・サッカー・陸上競技に利用できる多目的グラウンドには観客席もある。高台にあり市内を一望できる。

ツインドーム重信はドーム型の体育館で、バスケットコートで２面・バレーボールコートで３面の利用ができる。観覧席248席、更衣室・シャワー室・ジョギングコースなどの設備が利用できる。また、アスレチックジムには、空気圧式筋力トレーニングマシン７台・エアロビクス機器10台・フリーウェイト器具などがあり、楽しみながら体力づくりができるよう個人別トレーニングメニューも作成してくれる。図11にあるように、年間延べ10万人以上の利用者がある（写真11）。

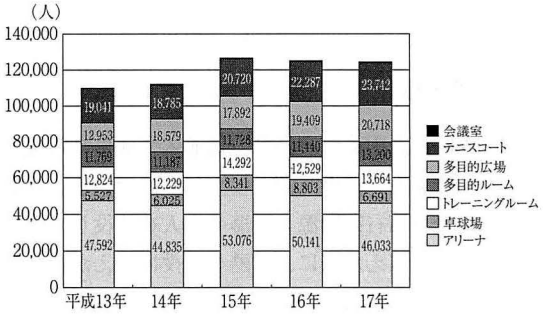


図11　ツインドーム重信・総合公園年間延べ利用者数の推移

注）東温市役所資料より川井博樹作成

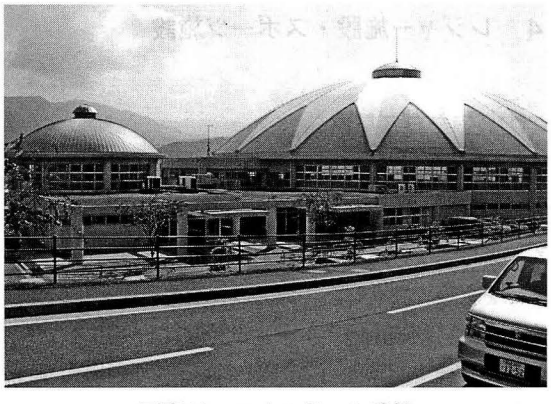


写真11　ツインドーム重信

注）平成20年９月　川井博樹撮影

5　イベント

(1)　観月祭

旧重信町横河原橋付近で８月下旬に行われるイベントで、約3,500発の花火大会は県下でも人気があり、図９にあるように、約５万人が訪れる。沿道には夜店が立ち並び、会場は月見踊りやいもたきで賑わう（写真12)。

写真12　観月祭

注）平成20年８月　川井博樹撮影

(2)　どてかぼちゃカーニバル

旧重信町見奈良のレスパスシティにおいて、９月上旬に開催される。出品された巨大な飼料用かぼちゃの大きさ、色つや、形などを競うコンテストである。市内外から数百点のかぼちゃが大集合し、200kgを超えるかぼちゃが出品されることもある。会場ではバザーやミニイベントも行われる（写真13)。（川井　博樹）

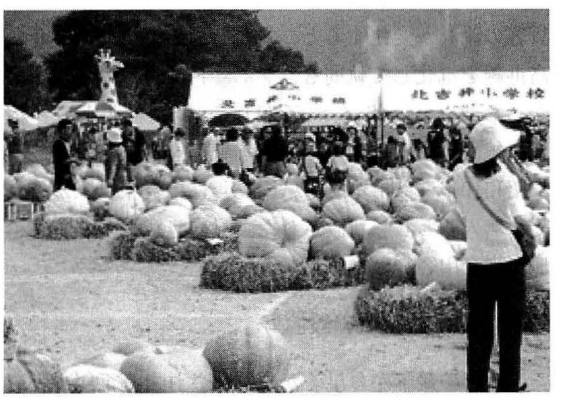


写真13　どてかぼちゃカーニバル

注）東温市役所提供

6　まとめ

松山自動車道の川内ICに近く、中心都市松山近郊の観光地という地理的条件の中で、集客力のある独創的で魅力ある文化施設、スポーツ施設、温泉など観光産業の育成が図られている。「点」としての開発については、各施設とも充実した観光拠点として認知度において一定の成果を挙げている。しかし今後、観光の圏域を広げるためには、「点」から「線」への開発が必要となるであろう。交通のアクセスや周遊コースの設定などネットワークとしてつなぎ、そして「とうおんし」という面的な観光ブランドとして、つくりあげることも可能であろう。（繁桝　義一）

注及び参考文献

1）株式会社いよぎん地域経済研究センター　主席研究員　黒田明良（平成15年)「愛媛県内各地の新たな観光戦略と今後の課題－地域の歴史や文化を活かしたまちづくりで個性を磨く！－」

2）長谷政弘編（平成15年)『新しい観光振興』発想と戦略　同文館出版

○日本観光協会『数字でみる観光2007－2008年度版』

○山村順次（平成７年)：『新観光地理学』大明堂

○東温市（平成18年)：東温市市勢要覧

○東温市（平成18年)：東温市統計書

○東温市（平成20年)：東温ナビゲーション

○高畠華宵大正ロマン館ホームページ
http://www.kasho.org

○愛媛県：「観光客数とその消費額」調査結果

○新井政義編（平成３年)：『愛媛県風土記』旺文社

○愛媛新聞社広告局著（平成10年)：『愛媛ゴルフ史』

宇和島南中等教育学校　繁桝　義一

伊　予　高　校　川井　博樹

Ⅸ－１　伊予鉄道横河原線沿線の景観と地域変貌

１　はじめに

純粋の民間鉄道として阪堺鉄道（現南海鉄道）に次ぐ歴史の伊予鉄道会社（現伊予鉄道）により建設された横河原線の開通は、沿線の集落に大きな影響を与えた。さらに、モータリゼーションの進展に伴い道路網も整備され、県都松山市の衛星都市としての都市化も進み、沿線の景観は劇的に変化している。

ここでは、横河原線の開通や道路整備などによる横河原線沿線の景観の変貌について考察していく。

２　横河原線の開通

(1)　平井河原線開通と横河原延長

明治21年（1888）営業運転を開始した日本初の軽便鉄道となる松山（現松山市）～三津間の良好な営業成績から、同24年１月の総会で三津～高浜間と外側[1]～久米間の路線延長が決議された。さらに、外側～久米間は同年５月平井河原（現平井）[2]までの延長に変更され、８月から工事が始まった。石手川鉄橋や立花駅付近の用地買収において、県内初となる公用土地買上規則（土地収用法）を適用した土地強制売買[3]等による中断もあったが、明治26年５月７日に平井河原線（7.1km）の運転が開始され、６月からは２時間毎の運転となった。

日尾八幡神社の鳥居前町で金毘羅（讃岐）街道の宿場町でもあった久米ではなく、当時商家が８軒ほどの淋しい所[4]といわれた平井河原に終点を変更したのは、東予方面への中継地としての機能をより意識したものと考えられるが、高浜線が「１日１マイルの収入が９円に対し、第二区（平井河原線）は開業時農繁期でもあったためか、その半分の５円」[5]と不振であったため、機能強化のため「浮穴、久米両郡東部地方から松山、三津に至る貨客の経過地」[6]で重信川の渡河点である横河原までの再延長を明治29年決定した。明治32年10月４日に横河原線（13.2km）が全線開通し、１日17往復、所要50分の１時間毎の運転となった。

平井河原～横河原間（5.87km）で横河原駅以外の新設駅は田窪（現牛渕）[7]のみであったが、これは蒸気機関車は駅間距離が短いと出足が悪くスピードが出ないため輸送効率が低下する[8]ことが影響したためと思われる（表１、図１）。

なお、終点駅を金毘羅街道の宿場町として栄えていた川上でなく横河原としたのは、伊予鉄道が郡中方面へ路線を計画した際に重信川の架橋工事が困難なため中止したことや、横河原再延長を決定した年に松山～郡中間（10.8km）で開通した南予鉄道が重信川の鉄橋工事で難航したことなど、架橋工事の困難さがあったと考えられるが、横河原が終点駅となったことで横河原と川上の盛衰に大きな影響を与えることになった。

(2)　戦前の横河原線の状況

大正元年（1912）８月10日平井～田窪間に貨物駅の播磨塚駅（現牛渕団地前駅付近）が設置され梨を出荷していたが、昭和６年（1931）３月３日廃止された。

昭和２年国鉄予讃線が松山まで延び東予方面からの貨客の流れが変化すると、対抗措置として昭和６年に高浜線を電化して軌間も２フィート６インチ（0.762m）から３フィート６インチ（1.067m）に拡張され、横河原線も貨物直送化のため同年軌間を拡張した。

昭和10年には梅本駅が、同13年には見奈良駅がそれぞれ無人駅として新設された。見奈良駅はゴルフ客や皿ケ嶺登山客なども利用した[9]。

(3)　電化と新駅の設置

国鉄との競争から早くから電化された高浜線や郡中線（昭和25年電化）に対し、横河原線と森松線[10]は蒸気機関車のままであったが、沿線住民の増加に対応

表１　伊予鉄道横河原線駅一覧

駅名	松山市からの営業距離(km)	駅の設置時期				営業開始日	備考
		平井河原線開通(明治26年)	横河原延長(明治32年)	昭和10年代	昭和40年代以降		
石手川公園	0.8				◎	昭和47年６月14日	
いよ立花	1.4	◎				明治26年５月７日	駅名を立花から伊予立花（現いよ立花）へ変更（昭和２年）
福音寺	2.9				◎	昭和43年１月１日	
北久米	3.9				◎	昭和42年１月１日	
久米	4.5	◎				明治26年５月７日	現在地に移転（昭和56年）
鷹ノ子	5.6				◎	昭和42年10月１日	現在地に移転（昭和53年）
平井	6.9	◎				明治26年５月７日	駅名を平井河原から変更（明治35年）
梅本	8.2			◎		昭和10年５月１日	現在地に移転（昭和56年）
牛渕団地前	9.0				◎	昭和45年５月１日	
牛渕	10.0		◎			明治32年10月４日	駅名を田窪から変更（昭和41年）
田窪	10.9				◎	昭和42年１月１日	
見奈良	11.6			◎		昭和13年９月１日	
愛大医学部南口	12.4				◎	昭和56年８月10日	
横河原	13.2		◎			明治32年10月４日	

注）『伊予鉄道百年史』及び伊予鉄道ホームページにより窪田賢治作成

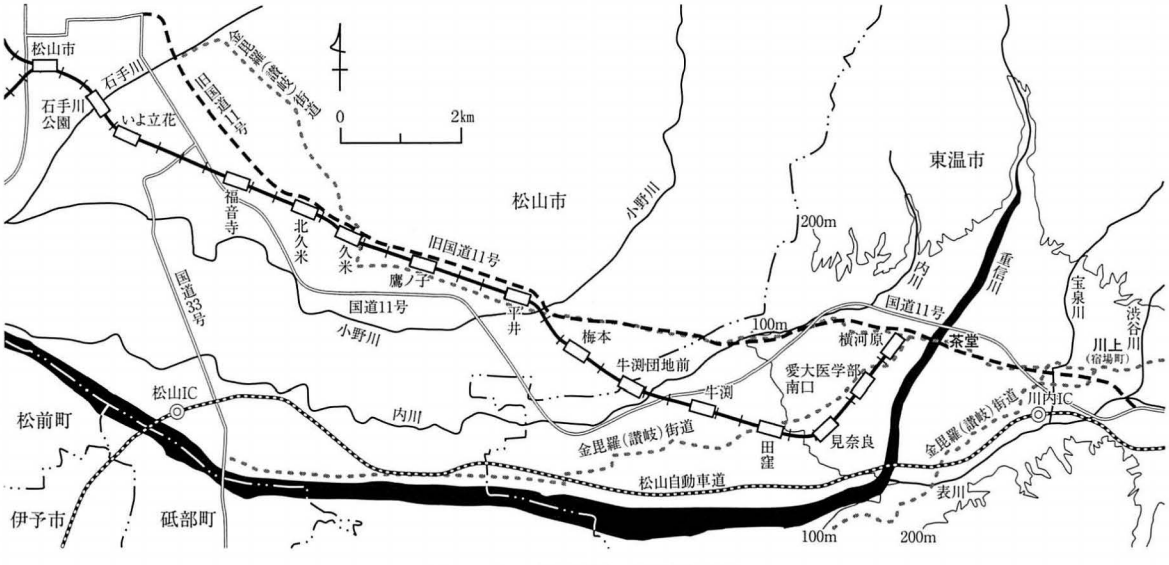


図１　伊予鉄道横河原線沿線図

注）窪田賢治作成

表2　伊予鉄道横河原線関係年表

年（西暦）	月日	事　　項
明治20年(1887)	9／14	伊予鉄道会社（現伊予鉄道）設立
21年(1888)	10／28	松山～三津口～三津間で鉄道運輸業開始
22年(1889)	7／20	松山駅を外側駅に改称
24年(1891)	1／17	定時総会で三津～高浜間と外側～久米間の路線延長を決議
	4／1	高浜線、久米線の路線延長に仮免許
	5／17	臨時総会で久米延長を平井河原延長に変更決議
	8／10	外側～平井河原間の鉄道建設工事に着工
25年(1892)	3／17	平井河原線用地買収に鉄道用地協議会設置を申請
	7／6	平井河原線用地買収に県土地収用審議委員会が決裁
26年(1893)	5／7	平井河原線〈新設駅：立花・久米・平井河原〉の運転開始
	6／3	平井河原線２時間毎の運転開始
29年(1896)	4／20	臨時総会で横河原延長案決議不成立
	5／2	横河原延長案の仮議決
	5／27	臨時総会で５月２日の仮決議を議決
31年(1898)	9／8	横河原延長の仮免許
	12／20	平井河原～横河原間の運輸免許
32年(1899)	3／31	平井河原～横河原間の線路延長工事に着手
	10／4	横河原延長線〈新設駅：田窪（現牛渕）・横河原〉の運転開始
35年(1902)	6／1	外側駅を松山駅、平井河原駅を平井駅に改称
41年(1908)	10／11	伊予鉄道唱歌（作詞：大和田建樹、作曲：田村虎蔵）発表
大正元年(1912)	8／10	平井～田窪間に播磨塚駅（貨物駅）新設
昭和２年(1927)	3／1	松山駅を松山市駅、立花駅を伊予立花駅（現いよ立花）に改称
６年(1931)	3／3	播磨塚駅廃止
	10／6	横河原線の軌間拡幅工事竣工
10年(1935)	5／1	梅本駅新設
13年(1938)	9／1	見奈良駅新設
20年(1945)	7／26	松山大空襲のため鉄道軌道線路・車両等に甚大な被害
	7／27	高浜、郡中、横河原、森松各線の一部を除き運転再開
25年(1950)	5／1	松山市駅新築竣工（５月10日移転）
29年(1954)	2／1	横河原線、森松線でディーゼル機関車の運転開始（坊っちゃん列車姿消す）
38年(1963)	10／5	久米の井ファミリー温泉（日尾開発㈱と共同）開業
39年(1964)	11／1	伊予鉄ボーリングセンター（四国最大規模）開業
41年(1966)	11／1	田窪駅を牛渕駅に改称
	12／1	伊予鉄スポーツセンター竣工
42年(1967)	1／1	北久米駅・田窪駅新設
	6／10	電化第一期（松山市～平井間）運行開始
	10／1	電化第二期（平井～横河原間）完了、全線電化。30分毎運転開始。鷹ノ子駅新設。
	10／16	伊予立花～横河原間で朝ラッシュ時の増便を実施
43年(1968)	1／1	福音寺伊予鉄スポーツセンター前駅（現福音寺駅）新設
	7／1	北久米駅に列車行き違い設備竣工
	9／30	横河原線、郡中線用電車を西武鉄道より4両購入
45年(1970)	5／1	牛渕団地前駅新設
46年(1971)	7／1	20分毎運行開始
47年(1972)	6／14	石手川公園駅新設
	9／1	松山市～平井間で朝ラッシュ時の臨時列車増発開始
49年(1974)	9／3	沿線住宅の急増により、朝ラッシュ時に増便
	11／20	愛媛大学医学部移転
51年(1976)	5／28	横河原駅、牛渕駅に駐輪場設置
	10／2	愛媛大学医学部附属病院開院
	10／28	北久米駅に駐輪場設置
52年(1977)	1／25	横河原線の全区間重軌条化完了
53年(1978)	3／14	鷹ノ子駅移転。牛渕団地前駅及び横河原駅のホーム延長工事竣工
	5／8	平井駅新築竣工
	5／12	福音寺駅ホーム延長工事竣工
	5／31	伊予立花、福音寺、牛渕各駅の新築竣工。伊予立花駅ほか５駅ホーム延長工事竣工。
	6／25	北久米駅及び久米駅の仮延長工事竣工
54年(1979)	3／20	北久米駅改良工事竣工
55年(1980)	2／2	川内グリーンタウン分譲開始
56年(1981)	4／22	久米駅移転
	5／11	梅本駅移転
	7／11	松山市駅構内高浜・横河原線直結工事竣工
	7／20	見奈良駅新築竣工
	8／10	愛大医学部南口駅新設。高浜～横河原間の直通運転開始（15分毎運転）。
57年(1982)	4／16	福音寺駅ホームの改良工事竣工
	5／30	田窪駅ホームの改良工事竣工
平成10年(1998)	2／1	プリペイド式「い～カード」が郊外線での使用開始
17年(2005)	8／23	日本初電車・バス・タクシー共通ICカードシステム「ICい～カード」使用開始
18年(2006)	4／1	梅本駅の駅舎改修、駅名表示を「梅本駅　四国がんセンター前」に変更

注）『愛媛県史　地誌Ⅱ（中予）』『伊予鉄道百年史』『伊予鉄が走る街　今昔』により窪田賢治作成

した輸送力増強の必要性からディーゼル化が計画された。昭和29年（1954）２月１日からディーゼル機関車による運転が45分間隔で開始されたことで蒸気機関車（坊っちゃん列車）は姿を消した。[11]

昭和30年代に入ると自動車の利用が増え、バス部門に力を入れていた伊予鉄道は平井～横河原間のバス路線化を決定した。駅周辺住民は存続運動を展開し、それを受け、昭和42年北久米と田窪（旧田窪駅は前年牛渕駅と改称）が新設され、昭和42年６月10日には第一期区間（松山市～平井間）が電化され（写真１）、10月１日の第二期区間（平井～横河原間）の電化完了により、30分毎の電車による直通運転を開始した。

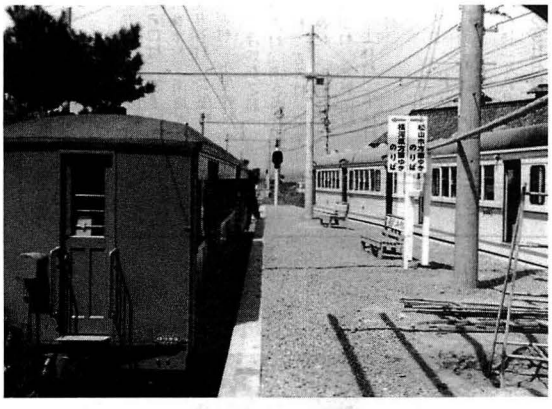


写真１　松山市行き電車と横河原行きディーゼル機関車の乗り換え（平井駅）

注）昭和42年（1967）８月　窪田重治撮影

さらに、鷹ノ子駅や福音寺スポーツセンター前駅（現福音寺駅）のほか、県営牛渕住宅団地や播磨台団地の開発による住民の増加に対応した牛渕団地前駅や、全国でも珍しい鉄橋の上にある石手川公園駅も開設された。

その後、輸送量増強のため鷹ノ子駅を現在地に移転し、昭和53年から四両編成による運転を開始した。さらに、15分毎運行と高浜線との直通化のため久米・梅本・見奈良の各駅の現在地への移転を進め、昭和56年には愛大医学部南口駅を新設し、高浜～横河原間の直通運転を開始した。また、通勤・通学者用の駐輪場の整備や、久米駅や梅本駅を起点とするループバスを運行するなど、横河原線の利便性は現在も向上している（表２）。　（窪田　賢治）

３　横河原線開通による集落の変貌

(1)　川上宿場町の盛衰

渋谷川扇状地の扇端に立地する川上は金毘羅街道の宿場町として繁栄し、町内には里程標や道標、金・石常夜灯が多く残っている（写真２～５）。

川上宿は「讃岐金毘羅宮や石鎚大権現等の講参りが出入りした。（中略）駄馬・商家・宿屋が建ち並び屋号をもった商家が拾数軒もあり、典型的な宿場町が形成されていた。領主代官の御定宿があり、笠方役所から駄馬の搬出する材木の中間問屋があった他各種商売が繁盛」[12]していた（図２）。川上には「米田屋という宿屋があって石鎚山の祭礼の期間はそこに沢山のお山登りの行列が宿泊したり、休憩して昼食をとったり」していた。[13]

上之町は分署坂で中之町・下之町と繋がり、伝馬屋があった（写真６～９）。伝馬屋は近世宿駅の問屋場で、宿場の公用人馬の継立をつかさどった宿場の長にあたり、道中奉行の支配で駅業務を管轄した。上之町の佐伯屋は明治の頃「鍵屋金持ち佐伯屋地持ち」といわれた地方随一の商家で、[14]数人の番頭に女中まで使用する大店であった。[15]明治40年（1907）には芝居小屋名越座が興行を始め、戦後もしばらく続いていた。川上神社（大宮大明神）の参道石段奉献世話人には、天保２年（1831）申卯歳８月鍵屋仁兵衛・伝馬屋覚四郎・戎屋国右衛門・熊野屋半次郎・島屋嘉蔵・三原屋和平・米田屋政蔵らの豪商名が刻まれている。

しかし、明治32年に横河原線が開通すると貨客は横河原に流れ、川上宿は交通集落としての機能を横河原に奪われ衰退してしまった。さらに、明治35年の国道改修で、中之町の分署坂下から右折して市場・天神・滝ノ下・船野山山麓を経由し土谷に至る新道が開通すると、渋谷川と表川の合流する市場・天神町が松瀬川・井内・河之内の渓口集落として新街村を形成した（写真10）。

(2)　横河原駅開通前の渡津集落横川（横河原）

重信川扇状地の扇央に立地する横川（横河原）の集落は標高130m、金毘羅街道と大洲・宇和島街道の交点にあり、重信川を渡る渡津集落で自然堤防上にあり、

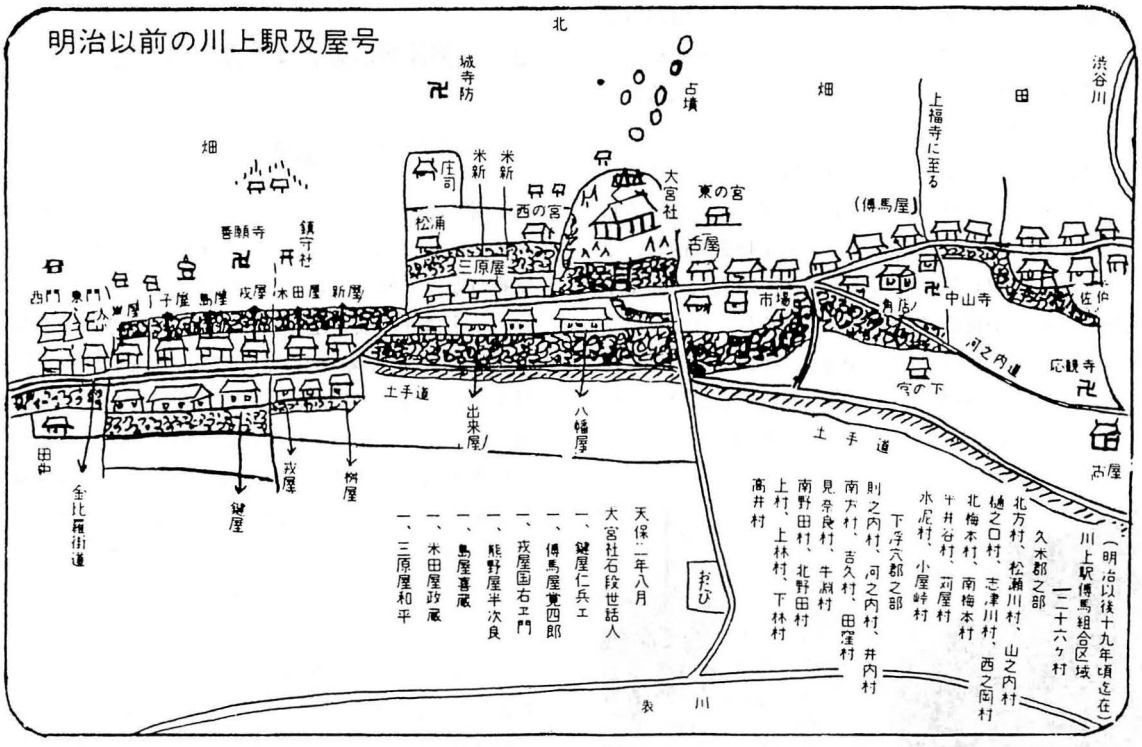


図2　明治以前の川上駅と屋号

注）『川内町誌』（1961）より転載

写真2　金毘羅道の道標（川上宿・中之町米田屋前）

注）嘉永３年（1850）建立（再建）。
平成元年（1989）５月　窪田重治撮影

写真3　川上宿・上之町の道標

注）「左　讃州こんぴら、右　名こへこんぴらへ壱里（河之内道）」の分岐点
平成元年（1989）５月　窪田重治撮影

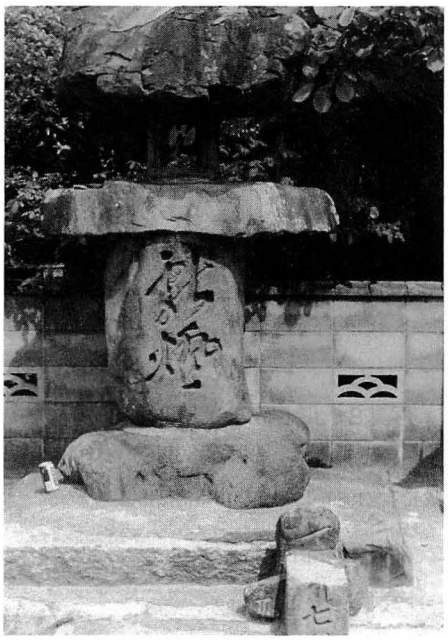


写真４　北方茶堂の金・石常夜灯と「金毘羅へ廿七里」の里程標

注）里程標は根元で折損。建立松木覚右衛門。
平成元年（1989）４月　窪田重治撮影

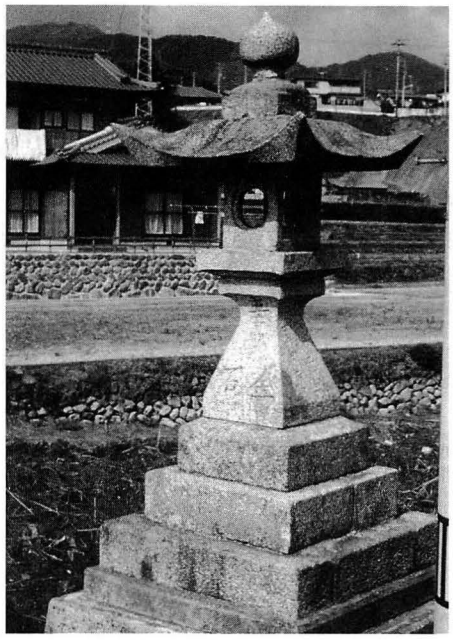


写真５　金・石常夜灯（東温市横灘・金毘羅街道沿い）

注）平成３年（1991）４月　窪田重治撮影

写真６　川上宿の名残をとどめる中之町

注）米田屋の屋号が残る。横河原線開通までは繁盛した。
昭和59年（1984）５月　窪田重治撮影

対岸の茶堂とは対向集落である（写真11）。茶堂には川渡し人足の人足溜りがあり、江戸末期まで出水期には水量によって「背負い」「肩車」「四人担（かつぎ）の乗せ台」によって渡河していた[16]。

重信川は「近来年々砂石の堆積多く、殊に横河原停車場付近は非常なる堆積にて河床は近傍の地盤より高く甚しきは堤防よりも尚高き所あり屢々（しばしば）水害を受く。この川は常時水なき石礫不毛の磧（せきせん）川なれとも、時ありて水量常に大なることあり」[17]といわれ、横川の集落は飲料水の確保に苦労し、飲料水は井戸水に頼っていた。最初の井戸は明治20年以前に山内愛次郎が醸造目的に掘った通称「愛さん井戸」で、付近８戸が利用し

写真７　川上宿・中之町

注）戎屋、米田屋、鍵屋など屋号をもった豪商が軒を並べた。
平成元年（1989）５月　窪田重治撮影

写真８　川上宿・中之町（米田屋前）

注）分署坂（金毘羅道・左）と明治35年の国道改修による新道（右）の分岐点。
平成元年（1989）５月　窪田重治撮影

写真９　寂れてしまった川上宿・上之町

注）平成元年（1989）５月　窪田重治撮影

写真10　天神町の新街村

注）松瀬川・井内・河之内の渓口集落として渋谷川扇状地の扇端に立地。
平成３年（1991）４月　窪田重治撮影

写真11　重信川と渡津集落

注）横河原橋から下流方向を望む。左岸茶堂と右岸横河原の対向集落。
平成元年（1989）４月　窪田重治撮影

表３　横河原の戸数変化

（単位：戸）

年代	明治初年	明治42年（1909）	昭和13年（1938）	昭和30年（1955）	昭和47年（1972）	昭和56年（1981）	昭和61年（1986）	平成11年（1999）	平成17年（2005）
戸数	2～3	樋之口・横川　45 志津川・横川　44 計　89	203	385	762	791	840	957 〈2,300人〉	840 〈2,016人〉

注１）横河原は昭和35年「横河原区」として樋之口・志津川の小字から分離し独立区となる。
注２）『重信町誌』「重信町勢要覧」「東温市統計書　平成18年度版」などにより窪田重治作成

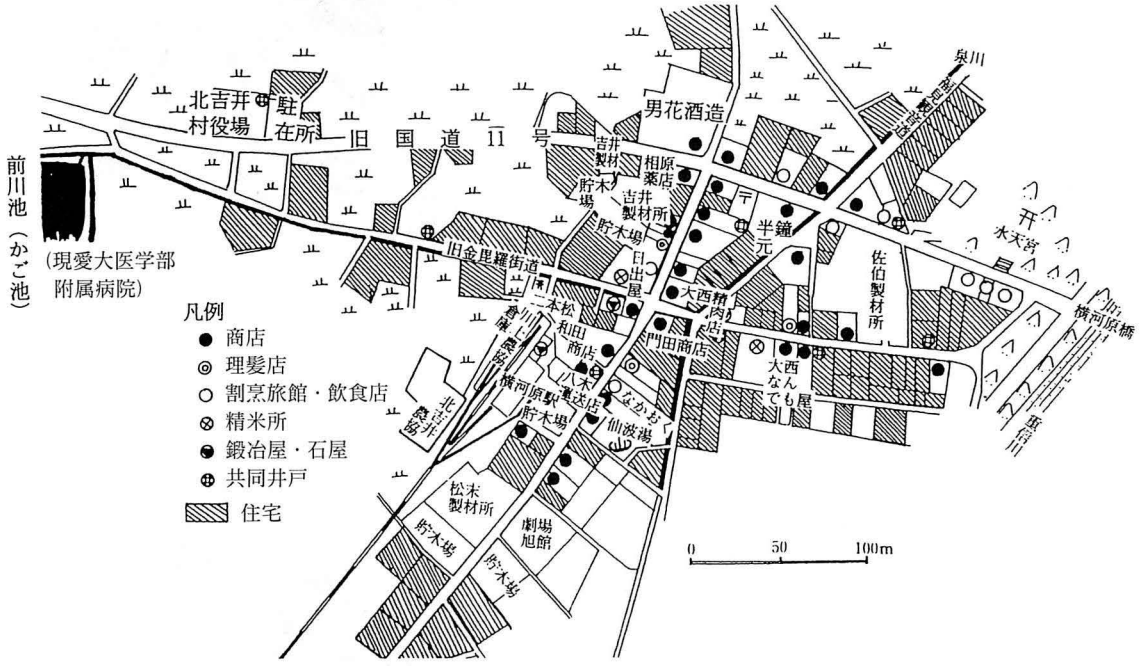


図３　横河原駅前集落（昭和15年頃）

注）窪田重治作成

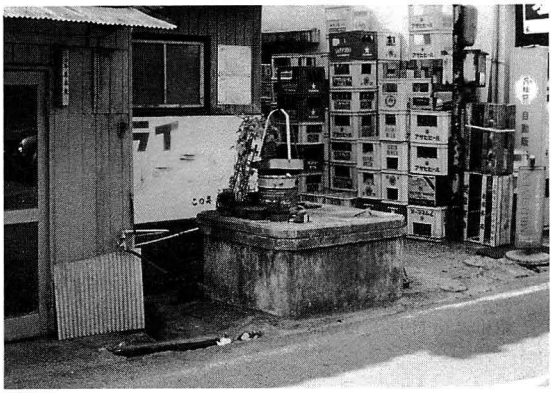


写真12　横河原駅前通りの辻井戸（共同井戸）の残象

注）木桶の釣瓶がシュロ縄で滑車に吊され、近隣の人々が水汲みに集った。寄棟の雨覆いがあったが、上水道施設の完備で不要になり、コンクリートで覆われている。
昭和57年（1982）８月　窪田重治撮影

写真13　横河原に唯一残る辻井戸（共同井戸）

注）上水道の普及で壊廃が進んだ。
平成３年（1991）７月　窪田重治撮影

た。その後、街道筋に中井戸・下井戸の辻井戸（共同井戸）が掘られ、深さは７間（12.6m）の深井戸であった。明治10年代わずか数戸の渡津集落であったが、横河原線開通で松林が拓かれ、駅前通りを中心に民家が急増した（表３）。明治40年頃には駅前通り端に新たな辻井戸が掘られ、大正６年（1917）には二本松・本町・水天宮と合計７ヵ所掘られた（写真12・13）。

大正６年森松～横河原間の里道改修（新郡道）、大正９年からは金毘羅街道の道幅を４mから7.5mへの拡幅と屈曲を直す改修を行い、新道が昭和２年（1927）に完成した。新道の開通を機に旧道（金毘羅街道）・新道（旧国道11号）・駅前通り（郡道）・福見観音道（山之内街道）を軸にした井型の集落が形成され、横河原駅から横河原橋まで新街村の駅前集落が発達した（図３）。

集落の形成とともに飲料水の水不足が深刻化し、昭和４年土居藤太は八木菊次らと簡易上水道施設の建設に取り組み、昭和５年有志22名と日掛５銭の出資を担保に農業会から資金を借入れ、菅原の醸造井戸を水源とした。株主72戸その他20戸計92戸、横河原全世帯の38％がこの簡易水道の恩恵に浴した[18]。横河原集落発展の草創期に、飲料水確保の労苦を重ねた先覚者土居藤太、簡易上水道組合長八木菊次、世話人として協力した中奥文吾・富久宇太郎・松末磨多一の努力は特筆に値する。

(3) 横河原駅前集落の成立と発展

横川（横河原）は、金毘羅参りや石鎚登山客が重信川の出水による川止めになった時に宿泊する程度の渡津集落で、明治23年頃までは14戸の一寒村であった。明治32年（1899）に平井河原線が横河原駅まで延長され、横河原駅は横河原の代名詞でありシンボル的存在であった通称「二本松」の巨松のたもとに開設された（写真14・15）。

地籍は温泉郡北吉井村大字樋口（ひのくち）字横川と大字志津川（しつかわ）字横川・桟敷（さじき）に属し、地籍から駅名を横川駅にしようとしたが、山陽本線に横川駅（広島県）があることから横河原駅になったという[19]（写真16）。それ以来、駅名が地名として定着し、昭和35年樋口・志津川の小字から分離して「横河原区」となった。

終点の横河原駅は、新居・周桑郡及び東温地方を背景とする貨客輸送の拠点になり、農林産物の集散地として昭和２年予讃線の松山延長まで、東予方面と松山を結ぶ陸上最短ルートの中継地になった。なお、開通当時の横河原～松山間の乗車賃は３等11銭であった（表４）。

写真14　横河原の代名詞「二本松」の巨松

注）志津川の天満神社の御旅所で、若宮さんが祀ってある。松くい虫の被害で枯れ、昭和57年伐採された。
昭和53年（1978）12月　窪田重治撮影

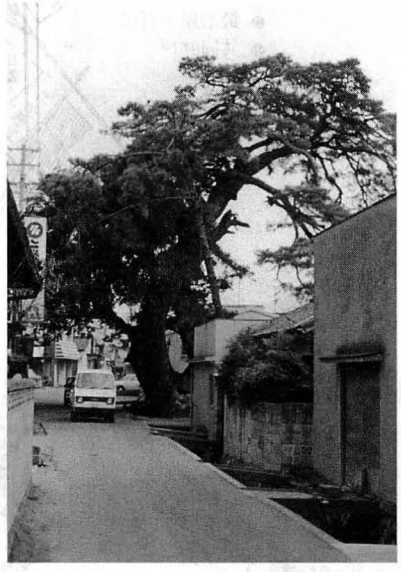


写真15　「二本松」と金毘羅街道

注）道路が樋口と志津川（「二本松」側）の境界。道路沿いの水路が灌漑用水路の南井手。
昭和53年（1978）12月　窪田重治撮影

表4　横河原駅からの乗車賃の変化（3等料金）

（単位：銭）

駅 / 年次	田窪（現牛渕）	平井河原（現平井）	久米	立花（現いよ立花）	外側（現松山市）	古町	三津	高浜
明治32年（1899）	3	6	7	10	11	13	17	19
34年（1901）	4	7	9	13	14	17	21	24
45年（1912）	4	8	11	15	15	17	24	26
大正7年（1918）	5	9	12	17	19	21	27	31
9年（1920）	7	13	17	24	27	30	39	46
昭和2年（1927）	7	13	17	24	27	30	39	46
11年（1936）	7	13	17	24	27	30	39	46

注1）『値段史年表』朝日新聞社（1988）によると、全国平均の日雇賃金の1日平均は明治33年37銭、44年56銭、大正7年96銭、昭和2年1円98銭、昭和12年1円43銭であった。
注2）『五十年史』伊予鉄道電気株式会社（1836）により窪田重治作成

写真16　終点駅の横河原駅

注）「横河原」の駅名が地名となった。
平成16年（2004）10月　窪田重治撮影

鉄道開通により、駅周辺には樋口や志津川をはじめ隣村の川上・三内（みうち）、さらに周桑郡・越智郡など東予地方からの移住者が店を構え、客馬車・人力車夫を生業とする人々も居住し、民家商家が建ち並んだ。石工屋・自転車屋・精米所・散髪屋・肉屋・鮮魚屋・日用雑貨の萬屋のほか、荷馬車運送業者も多くいたので蹄鉄鍛冶屋もあった。表通りの専業商店は大正6年（1917）24軒、昭和13年（1938）76軒、昭和37年90軒、昭和47年76軒で、昭和57年には66軒あった（表5、写真17・18）。

集落の発展により、村の中枢機関が志津川から移転した。明治42年北吉井小学校が志津川上市から志津川131へ東移し、大正4年11月には御大典事業として北吉井村役場の新築移転が計画され、翌年6月落成した。県に提出した「村役場変更許可申請書」には「新位置（北吉井村大字樋口）ハ、横河原駅ノ西端ニ属シ、横河原

表5　横河原商店街の店舗構成

（単位：軒）

種類	軒数	種類	軒数
医院	1	めがね・時計店	1
旅館	3	薬局	2
自転車屋	3	カメラ店	1
ポンプ・水道店	2	菓子屋	2
書店	1	パン屋	1
肉屋	2	電気製品・サービス店	3
飲食・喫茶	6	苗木商	1
運送店	1	製材・家具	2
理髪店	3	とうふ屋	1
美容院	2	てんぷら屋	1
化粧品店	2	酒造業	1
衣料品店	3	寝具屋	1
銀行	2	履物屋	1
郵便局	1	クリーニング店	1
酒販売店	3	洋服仕立屋	1
料理・仕出し屋	3	精米・製麺業	1
石材業	1	歯科医	1
雑貨品店	3	米穀店	1
マージャン店	1	合計	66

注）昭和57年9月5日窪田重治調査

写真17　横河原駅前通りの商店街（昭和32年）

注）昭和32年（1957）7月　窪田重治撮影

写真18　横河原駅前通りの商店街（平成元年）
注）平成元年（1989）８月　窪田重治撮影

ハ大字志津川及ビ樋口ノ二部落ヨリ成リ、戸数137人口682人ニシテ東西一丁南北一丁余ニシテ人家稠密将来商業発展ノ地ナレバ適当ナル位置ナリ（中略）松山ニ通ズル国道ニ面シ横河原停車場付近ニシテ交通モットモ便利ナリ」[20]とある。また、横河原郵便局が大正11年（1922）７月17日開局し、昭和３年（1928）に新道（旧国道11号）沿いに新築し、昭和９年２月11日から集配達業務を行った。

横河原の変貌ぶりを『北吉井村誌』は「横河原線が開通したとき、民家僅か２～３軒あるのみにして、小松原の荒廃地にすぎず、婦女子の通行も昼間さえ危険視されるところであったと古老はいう。然るに今日人家200余軒を算し、商家櫛比（しっぴ）の現状であり、一行政区が設けられ、本村の大玄関口たるの発展をみたるは一重に伊予鉄道の恩恵である。本村以東の貨物の集散地であり交通の要衝として、将来益々発展するであろう」[21]と記している。

(4)　貨客の集散と商業の発展

高浜虚子は横河原駅について「讃岐街道に沿ひ東予地方を往復する関門である。此駅から重信川を渡って18丁（1.96km）行くと川上である。川上はこの街道の大きな宿駅で商家が沢山ある」[22]と解説し、大和田建樹作詞の伊予鉄道唱歌11節では「終点駅の横河原／おりて進めば讃岐道／夏白糸を繰出だす／白猪唐岬（しらいからかい）滝近し」とうたっている。また、新緑・紅葉の頃には滝見物の行楽客や小中学生の遠足で松山方面からの乗降客で賑わい、駅前には降客を待つ人力車・客馬車がたむろしていた（表６）。

表６　人力車・客馬車・荷馬車の分布（大正10年）
（単位：台）

旧町村名	人力車	客馬車	荷馬車
久米（松山市）	2	－	1
小野（松山市）	－	－	－
北吉井（旧重信町）	6	－	12
川上（旧川内町）	7	1	4
三内（旧川内町）	－	3	22
合　　計	15	4	39

注）『温泉郡勢』（大正12年）により窪田重治作成

人力車は川上・三内方面の人が多く利用し、時には桜三里を越えて周桑郡まで客を送った。明治末期には駅に待機する客馬車は10台を下らなかったといい、横河原と東予地方を結ぶ重要交通機関で、横河原～湯谷口（ゆやぐち）（県道）間の料金は42銭であった。

大正初期に乗合馬車が出現し、大正８～９年頃には５～６人乗りの乗合馬車が、川上１台・桧皮峠（ひわだ）３台・横河原２台・湯谷口に３台あった。峠越えが１日１往復あり、湯谷口で乗り継いでいた。運賃は横河原から桧皮峠まで15銭、湯谷口まで30銭、横河原駅から湯谷口方面と河之内金毘羅前まで走ったという[23]。

大正６年川上村天神の越智誉六が川上～横河原間に６人乗り小型バスによる乗合自動車営業を始め、大正９年５月には河之内～横河原間を運賃50銭で営業運転を開始した[24]。大正８年に東予自動車が西条～横河原間の乗合自動車営業を開始し、人力車・客馬車業者に致命的打撃を与えた。昭和２年の予讃線松山駅開通後は、周桑自動車が営業を引き継ぎ、松山～湯谷口（県道）～小松を直結した。

材木を主とする農林産物は、山之内・川上村・三内村から荷馬車・トラックで横河原駅に搬送され、駅周辺は材木・薪炭・竹・杉皮などの集積場になった。駅構内には貨物専用の引込線が敷かれ、松山・三津・高浜方面との貨物の流通に対応した（図４、写真19）。

松山方面からは、生活必需品・雑貨類・肥料農薬・農機具類が駅止で送られ、これらの集配達は駅前の八木運送店が取り仕切り、専属業者が牛馬車で配送した。横河原には、昭和20年代荷馬車運送業者がまだ10余軒あった。

大正４年設立の川上信用購買組合（現JA）は横河原駅に土蔵造りの穀物倉庫を建設し、専用ホームを構え、北吉井信用購買組合（現JA）も駅西側に事務所・

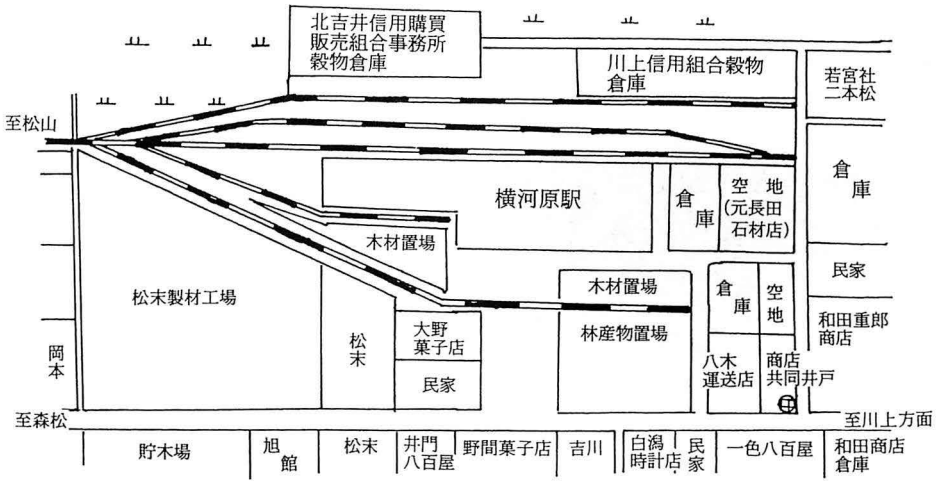


図4　横河原駅付近（昭和10年代）

注）記憶をもとに窪田重治作成

写真19　横河原駅前広場

注）駅前広場に貨物用引込線が敷かれ、林産物の集積場となっていた。
昭和59年（1984）5月　窪田重治撮影

写真20　旧川上信用購買組合の米麦穀物倉庫

注）昭和57年（1982）8月　窪田重治撮影

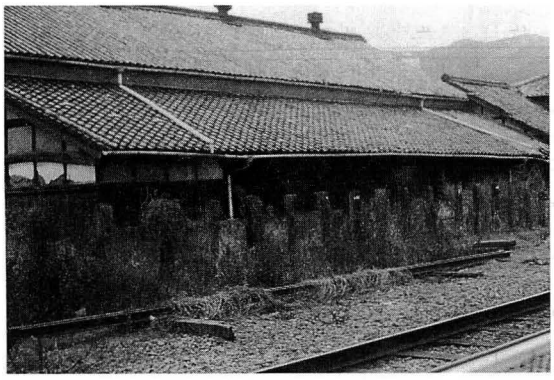


写真21　旧北吉井信用購買組合の穀物倉庫

注）平成２年（1990）１月　窪田重治撮影

倉庫を建設した（写真20・21）。大正９～10年の横河原線の営業実績をみると、乗降客数は松山市駅・伊予立花駅に次ぎ、貨物では松山市駅に次ぐ取扱量で、東温地方の貨客流通の一大拠点であった（表７）。

表７　横河原線の駅別貨客数

駅名	乗降者（大正９～10年）		貨物輸送量（大正８年）	
	乗車（人）	降車（人）	発送（ｔ）	到着（ｔ）
松　山	1,164,210	1,121,570	12,908	32,611
伊予立花	298,735	281,191	2,267	3,783
久　米	96,917	98,645	2,686	2,874
平　井	104,095	105,765	4,172	2,996
播磨塚	－	－	16	39
田　窪	80,882	80,848	3,263	1,992
横河原	142,253	162,689	8,676	4,546

注）『温泉郡勢』（大正12年）により窪田重治作成

横河原延長により、松山の通勤・通学圏が拡大し、昭和初期の学生は、「横河原駅までほとんど歩いての通学で、自転車は２～３人であった。靴の消耗するのを惜しんで、横河原駅前の知人宅に靴を預けておき履きかえて、家庭までの往復は下駄で通学した。朝７時発の汽車に乗車するので、冬など６時頃に家を出た。河之内の女学生は勿論のこと、北方海上（きたがたかいしょ）などの女学生は提灯をつけ」[25] 途中まで送ってもらっていた。

定期券利用者の居住地の概況をみると（図５）、横河原駅には奥松瀬川（三軒屋）・河之内・井内・山之内の荒木谷（あらきだに）からの通学生がいた。

昭和６年（1931）５月１日に高浜線が電化し軌間を拡幅したため貨物輸送に支障が生じ、横河原線も軌間を統一して高浜線との直通輸送に対応した。

交通路の変化は産業立地にも変化をもたらした。交通の難所であった「横河原渡し」に大正８年全長130m、高さ３ｍの木製の橋が完成した。茶堂側の南柱には、「札ノ辻より三里半」と刻まれていた。昭和５年10月にはコンクリート橋の横河原橋（263.3m）が完成した。大正６年（1917）森松～横河原間に新郡道が貫通し、新道（旧国道11号）も昭和２年には完成して、横河原は鉄道・道路交通の要衝となった。

この状況のもと、松末磨多一は大正２年、焼玉エンジンを動力源に駅前で製材業を興した。電力利用は大正10年10月からで、駅構内に専用引込線を敷設して松山・三津方面と直結した。広島県大長村（おおちょう）（大崎下島）からみかん箱の注文もあった。大正13年川上村出身の佐伯運三も、新道沿いで製材業を始め、富久宇太郎も吉井製材所を創業して横河原の主力産業となった。大正14年樋口の和田伍郎が新道端で酒造業を創業し、地酒「男花」を醸造している。精米所も３軒あったが、成瀬は火災で廃業し加藤と富久の２軒が戦後も営業していた。富久は戦前、盆前になると素麺をつくっていた。

商業も繁盛し、中奥・日乃出屋の割烹旅館が駅前通りで営業していた。中奥旅館は昭和20年２月から飛行場設営隊の宿泊所になった。旧道筋の大西商店（なんでも屋）・駅前通りの和田重郎商店（和田店）は、志津川出身で横河原の老舗である。門田商店（門店（かどみせ））は、昭和11年横河原で最初にアイスキャンデーを作り始めた。新道縁の半鐘元は樋口出身で、横河原の大店であったが閉店し跡地は新郵便局になっている。屋号の源になった半鐘櫓は横河原橋のたもとに移転している。

駅前の銭湯仙波湯も廃業したが、戦時中は松山二十二連隊の兵隊も西岡の演習場から夕刻入浴に来ていた。他にタンス屋・下駄屋・仕立屋・葬儀屋・揚げ屋・こんにゃく屋・まんじゅう屋・米屋・薬屋あらゆる業種が集中する商業集落に発展した（図６）。戦前の横河原には開業医は無く、川上か田窪から往診してもらっていた。

横河原の堤防の空き地では人形芝居や大相撲巡業も催され、不定期の牛市もたった。大正12年の新道開通で、金毘羅街道脇（和田葬儀店横）にあった「右松山

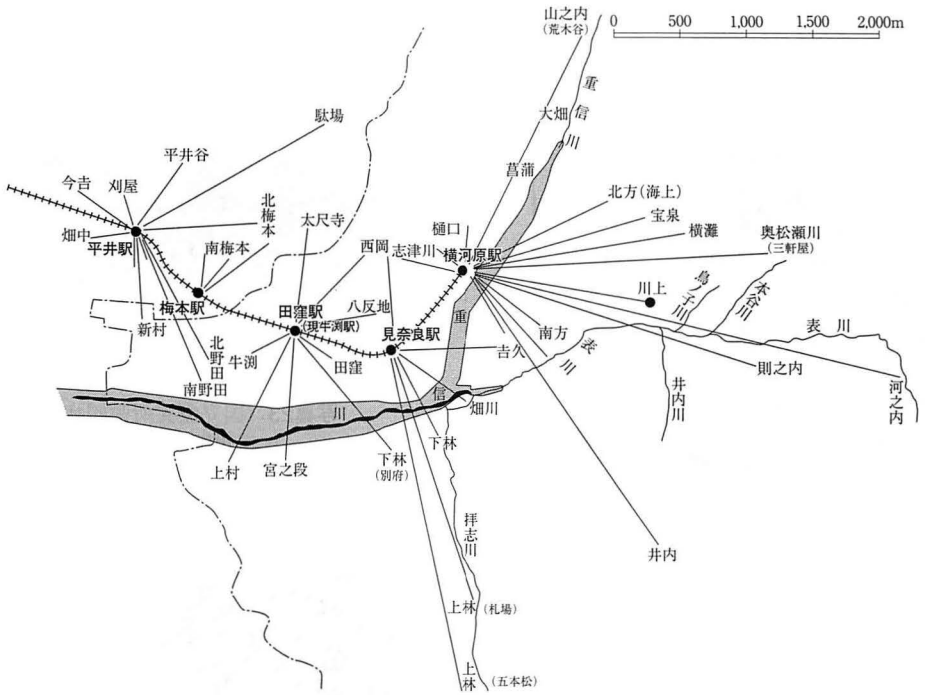


図5　昭和年代の汽車通勤・通学生の定期券利用者の居住範囲概況図（昭和20年代まで）

注）窪田重治作成

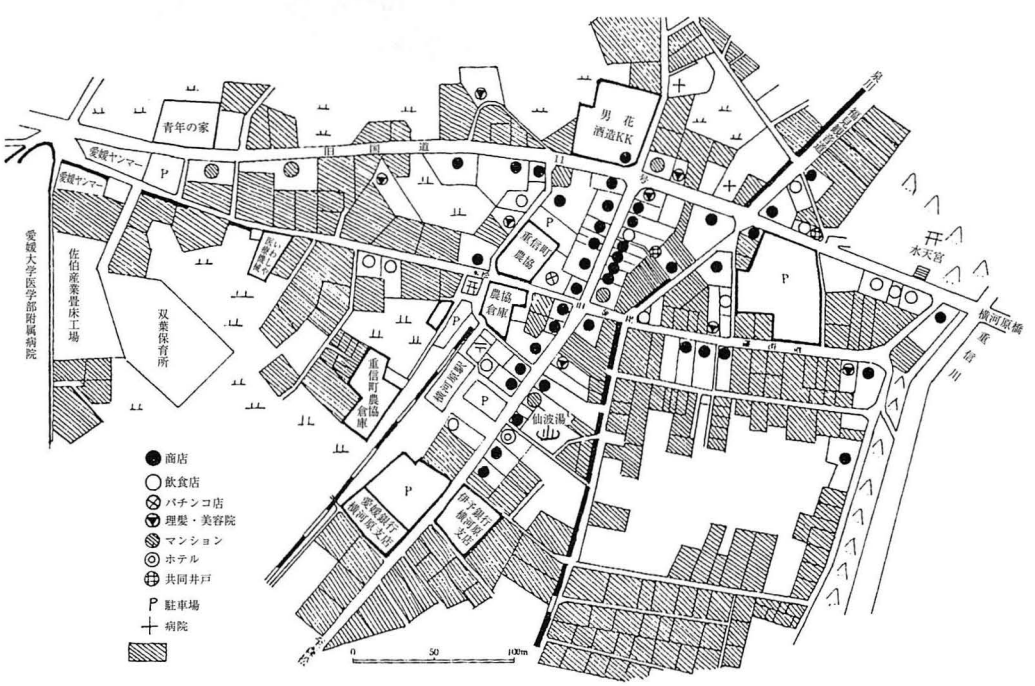


図6　横河原駅前集落と商店の分布

注）昭和56年（1981）現地調査により窪田重治作成

写真22　横河原の相原薬店前にあった「右　松山御城下道」の道標

注）平成３年（1991）５月　窪田重治撮影

御城下道・左大洲街道・世話人志津川中野某」の道標を、約50m北の新道（旧国道11号）と郡道の分岐点・相原薬店前に移した。この道標に自動車が衝突して傾いていたが、昭和47年頃夜の間に盗難にあった。現在松山市歩行町の料亭の玄関に立っている（写真22）。

横河原水天宮は、水難鎮護の願を込め久留米の水天宮を勧請したものである。終点になって急速に人家が増え大集落が形成されると、集落守護のため社殿を造営し、大正12年に樋口三島神社境内社から分離還御が行われ列格が認められた[26]。

昭和13年（1938）８月に傷痍軍人愛媛療養所の設置が決定し、翌年７月５日松山陸軍病院から第１回入院患者20名が伊予鉄道の特別列車で横河原駅に到着した。以後、善通寺陸軍病院・佐世保海軍病院から入所し、開所時100人を超す患者を迎え、11月30日開所式を挙行した（写真23～25）。療養所の官舎が建ち、医師職員で人口も急増し、商店街は活気にあふれた。

(5)　横河原線の電化と都市化

昭和29年２月１日、開通以来走り続けた四輪連結水

写真23　国立療養所愛媛病院（現国立病院機構愛媛病院）

注）クヌギ林の平地林に傷痍軍人愛媛療養所として開所した。平成２年（1990）１月　窪田重治撮影

写真24　傷痍軍人愛媛療養所時代の古い木造病棟と見奈良原の黒松の残象

注）平成４年（1992）２月　窪田重治撮影

槽付蒸気機関車（坊っちゃん列車）が廃止され、ディーゼル機関車に変わり、客車も改造ボギー車両になった（写真26）。所要39分（22往復）となり、松山との密着度は一層高まった。

ところが、昭和30年代後半からの高度経済成長は都市的産業の就業機会を増大し、農山村地域の過疎化を促した。さらに、エネルギー革命により薪炭材需要が無くなり、外材輸入の影響で林業が不振に陥り木材の流通が途絶えた。さらに、テレビの普及に伴い駅前の旭館も廃館して伊予銀行横河原支店となり、昭和28年吉井製材所跡にオープンしたユニオン劇場も昭和39年閉館した。引き継いだ桑原晴敏は横河原の映画の灯火を絶やすまいと頑張ったが、昭和42年廃業して桑原衣料品店になった。

写真25　愛媛病院内に残るクヌギ林の平地林の残象
注）平成４年（1992）２月　窪田重治撮影

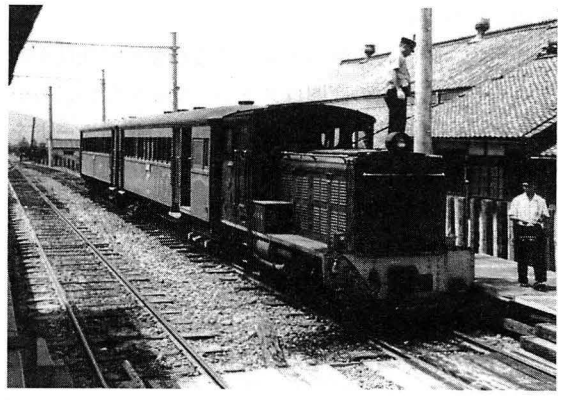


写真26　横河原駅の仮設ホームに停車中のディーゼル機関車とボギー型改良客車
注）横河原駅の電化工事中。
昭和42年（1967）８月　窪田重治撮影

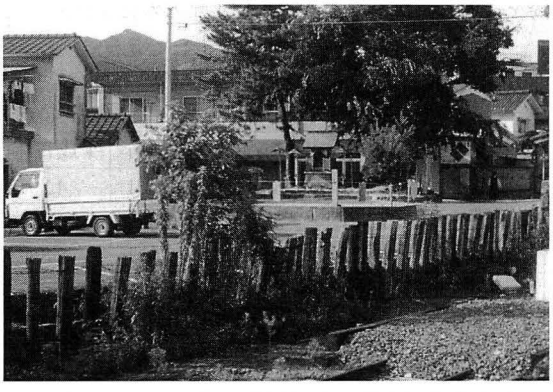


写真27　旧川上信用購買組合の米麦穀物倉庫跡
注）駅西駐車場として利用されている。
平成３年（1991）７月　窪田重治撮影

写真28　横河原駅周辺
注）貨物専用引込線は撤去され、建物も移転・撤去され空き地化している。
平成16年（2004）10月　窪田重治撮影

国道の整備により道路交通が活性化し、貨物はトラックに、乗客はバス・マイカーへと鉄道から離れ、横河原駅の川上農協の倉庫跡も伊予鉄駅西駐車場になった。北吉井農協も移転し、引込線も撤去され、駅周辺は昼間でも閑散としている（写真27・28）。

戦後、積極的にバス部門の営業に取り組んだ伊予鉄道の営業収入は、バス路線の拡充と相まって鉄道部門収入を圧倒し、鉄道は苦境に陥った。国道11号バイパスの整備とともに、昭和35年７月23日伊予鉄バス川内営業所を開設、営業を開始して路線の新設・拡充・延伸をはかり、便数を増やした結果横河原駅の利用客は激減した。物流の変革によって伊予鉄道は貨物輸送の取り扱いを中止し、貨客ともに鉄道の利用が減少した。

しかし、大量輸送機関の機能をフルに発揮するための鉄道の近代化には消極的で、昭和40年１月30日森松線を廃止した伊予鉄道は、赤字を理由に平井～横河原間も廃止してバス路線化を決定した。この決定を死活問題と駅周辺の住民を中心に存続運動が盛り上がり、昭和41年５月「横河原線電化期成同盟会」を結成し、９月26日には伊予鉄道本社前に重信町民千数百名が集まって町民大会を開き廃止反対運動を展開した。住民の運動とともに、鉄道沿線の開発計画・公共機関・県営住宅団地の誘致など官民一体となった鉄道利用客の増加対策が功を奏し、昭和42年10月１日全線電化が完成し（写真29）、20分毎の運転となった。さらに、昭和56年８月10日から高浜線との直通運転により、松山市駅まで所要26分、15分間隔での運転で松山市のベッドタウン化が一層進み、沿線の都市化に対応して新駅

を開設した（表８）。

しかし、時間的距離の短縮による移動の利便性が向上すると、横河原の商圏はストロー効果で松山に吸引され、商業活動は沈滞化した。こうした沈滞ムードを活性化したのが、愛媛大学医学部の誘致と附属病院の開院である。昭和47年５月志津川の前川池[27]と周辺の水田６万坪（19万4,255㎡）を買収し、総工費200億円を投入して昭和48～51年にかけて建設された。伊予鉄道も昭和56年愛大医学部南口の新駅を開設し、利用者の便をはかっている（写真30～42）。

横河原駅周辺には国土交通省四国地方整備局四国山地砂防工事事務所重信川出張所・東温市消防署・銀行支店や郵便局が立地し、アパート・マンションの建設も盛んで、北吉井小学校周辺の都市化変貌は著しく、松山の都市化外縁地帯を形成している。

４　扇端地域の開発と駅前集落の立地

扇央の横河原から見奈良・田窪にかけての見奈良原・大野原・田窪原は砂礫層に覆われた乏水性の平地林で、クヌギ林が広がり昼間でも追剝が出没したという。愛大医学部南口駅付近には、戦前、北吉井村の避病舎が建っていた（図７）。

大正６年（1917）浮穴村の資産家豊島直行が、見奈良原に40haの桑園を開いて養蚕業の振興をはかったが、土壌が桑園に不適で成果をあげないまま、昭和13年傷痍軍人愛媛療養所の建設用地に買収された。

昭和12年（1937）には松山財界人の結成する松山ゴルフ倶楽部（松山打球会）が見奈良原に本格的ゴルフ場を造成し、伊予鉄道は昭和13年無人の見奈良駅を開

表８　東温市内の横河原線各駅の乗降客数

（単位：100人）

	昭和27年	昭和37年	昭和47年	昭和51年	昭和56年	昭和63年	平成５年	平成10年	平成17年
横河原	7,179	2,716	4,536	6,858	5,932	4,219	3,741	3,591	4,291
愛大医学部南口	－	－	－	－	850	5,735	5,341	5,045	4,289
見奈良	2,552	2,490	7,599	8,992	10,400	4,457	3,686	2,957	2,862
田窪	－	－	2,334	3,197	3,355	3,618	3,497	2,532	2,217
牛渕（旧田窪）	4,725	3,910	2,988	2,682	2,219	1,534	1,199	1,065	1,072
牛渕団地前	－	－	4,392	6,678	6,313	5,125	4,623	3,655	3,579
合　計	14,456	9,116	21,849	28,407	29,069	24,688	22,087	18,845	18,310

注）『重信町誌　改訂版』「東温市統計　平成18年度版」により窪田重治作成

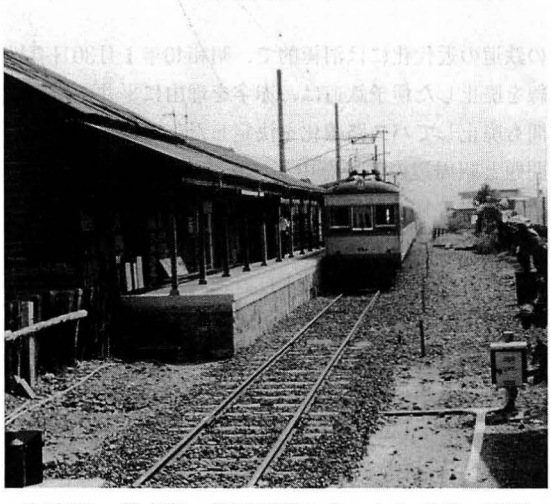


写真29　終点駅・横河原駅のホームとボギー電車

注）昭和57年（1982）８月　窪田重治撮影

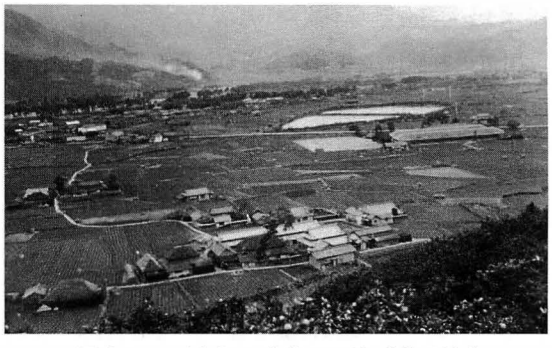


写真30　扇央部の農業用皿池「前川池」

注）池畔を金毘羅街道、旧国道11号が通り、池の手前にある北吉井小学校の周辺には水田が広がっていた。東温市樋口から。
昭和27年（1952）12月　窪田重治撮影

写真31　前川池の潰廃と愛大医学部の用地造域（附属病院建設予定地）の景観（志津川）

注）昭和47年（1972）９月　窪田重治撮影

写真32　愛媛大学医学部関連施設用地の造成（志津川）

注）用地内の松の木は素鵞神社の社叢で、神社は天満神社の境内社に遷座され、社叢の松はキャンパス内に残された。民家の直前を金毘羅街道が東西に通る。金毘羅街道は往環道とも呼ばれ、街道沿いの田を往還端の田と言った。
昭和47年（1972）９月　窪田重治撮影

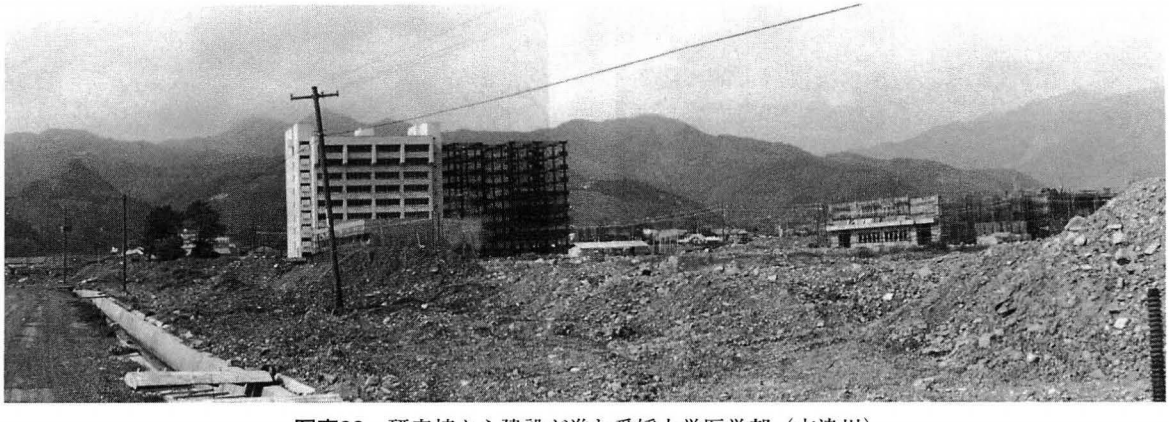


写真33　研究棟から建設が進む愛媛大学医学部（志津川）

注）昭和48年（1973）５月　窪田重治撮影

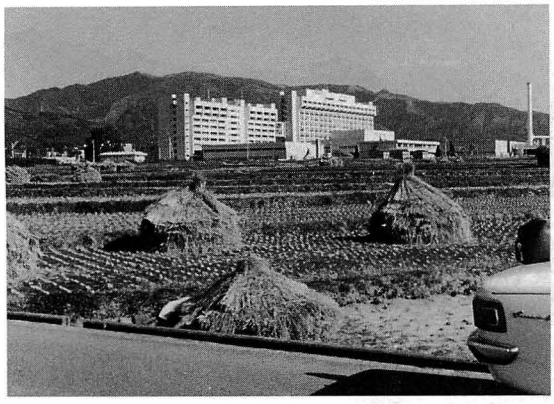


写真34　愛媛大学医学部と附属病院

注）素朴な田園のなかにそびえる白亜の殿堂。
昭和49年（1974）11月　窪田重治撮影

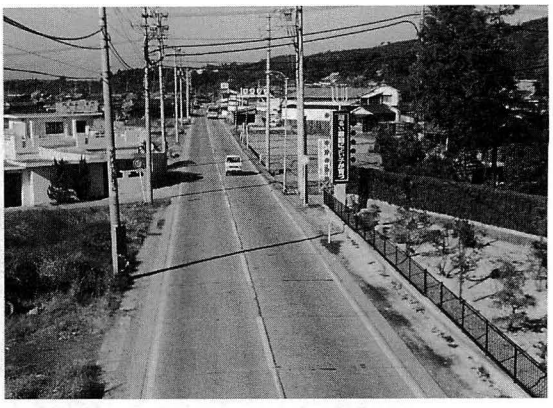


写真35　北吉井小学校前の旧国道11号沿線の景観（昭和48年）

注）昭和48年（1973）11月　窪田重治撮影

写真36　北吉井小学校前の旧国道11号沿線の景観（松山方面）

注）都市化が進んでいる。
平成19年（2007）11月　窪田重治撮影

写真37　北吉井小学校前の旧国道11号沿線の景観（東予方面）

注）平成19年（2007）11月　窪田重治撮影

写真38　北吉井小学校周辺の景観（昭和47年）

注）都市化の初象。
昭和47年（1972）11月　窪田重治撮影

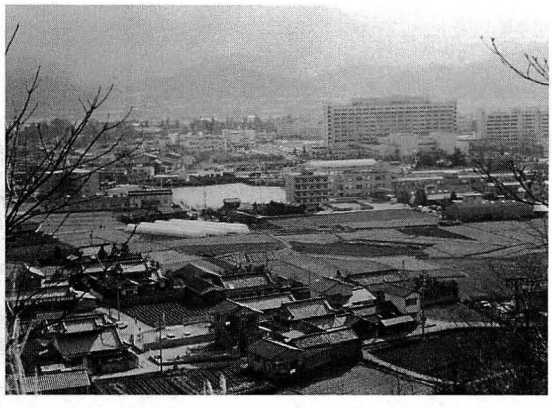


写真39　北吉井小学校周辺の景観（昭和57年）

注）都市化の顕象。
昭和57年（1982）12月　窪田重治撮影

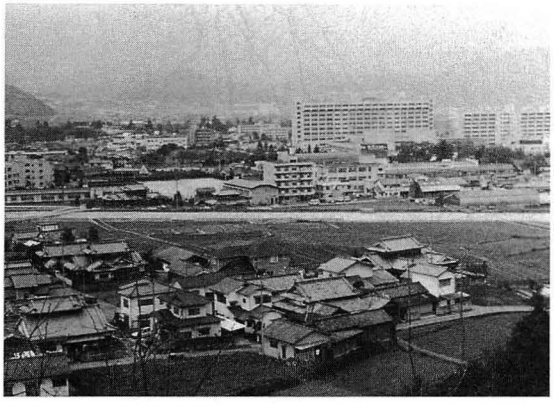


写真40　北吉井小学校周辺の景観（平成３年）

注）写真中央は建設中の国道11号。
平成３年（1991）３月　窪田重治撮影

写真42　愛媛大学医学部南口駅

注）クヌギ林の無人地帯にアパート・マンションの建設が進む。
平成19年（2007）11月　窪田重治撮影

写真41　愛媛大学医学部と附属病院

注）都市化の顕象。
平成元年（1989）４月　窪田重治撮影

写真43　見奈良駅

注）無人駅として開設。電化改良工事で、離合駅として現在地に移転。昭和56年にモダンな新駅舎となった。
平成19年（2007）３月　窪田重治撮影

写真44　見奈良ゴルフ場跡地の住宅地

注）昭和20年には陸軍飛行場として利用された。
平成19年（2007）４月　窪田重治撮影

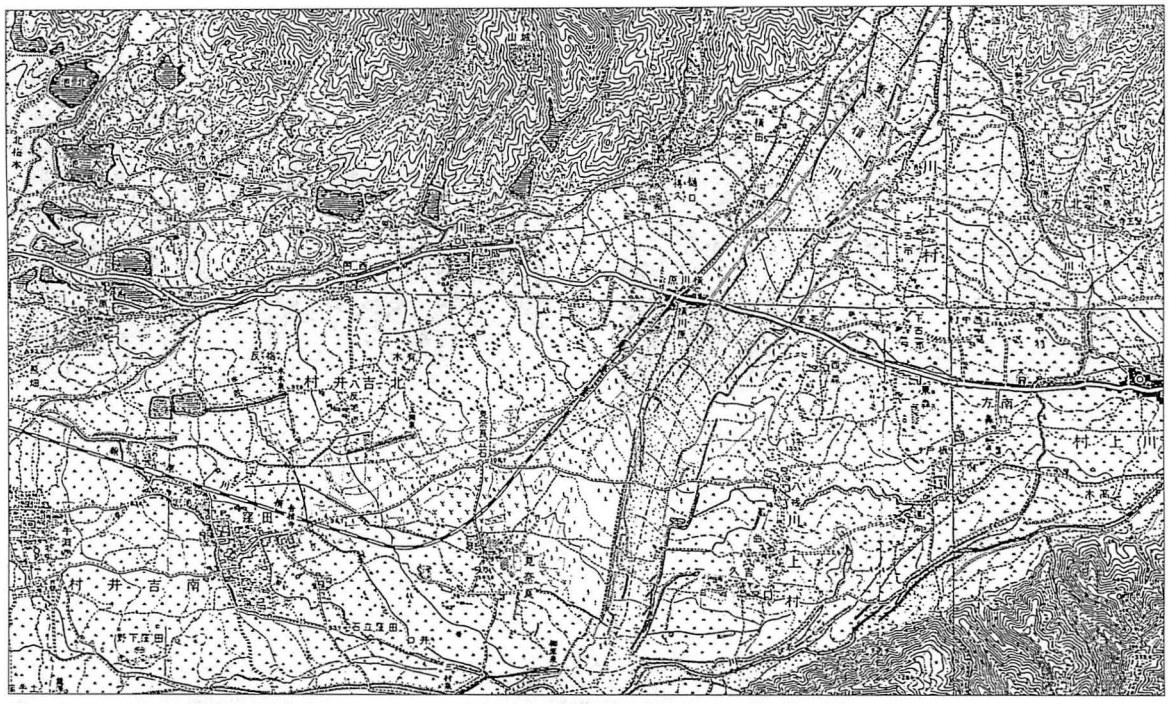
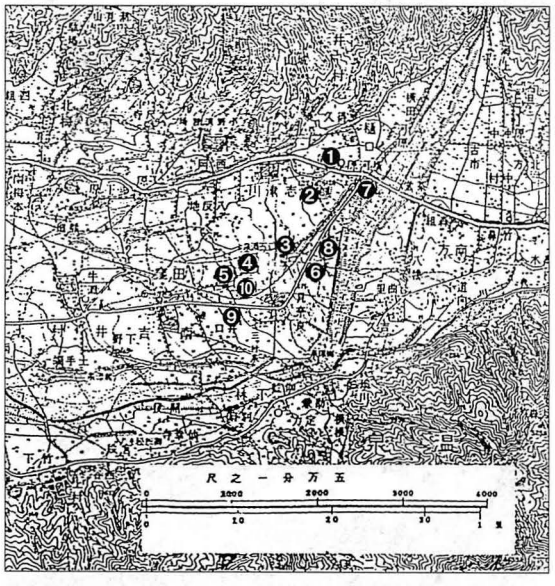


図7　重信川扇状地の扇央部に敷設された横河原線

注）明治36年（1903）　大日本帝国陸地測量部測図



①北吉井小学校　②愛媛大学医学部附属病院　③東温高校
④重信中学校　⑤しげのぶ特別支援学校　⑥みなら特別支援学校
⑦東温消防署　⑧愛媛病院　⑨東温市役所　⑩中央公民館

図8　横河原扇状地と公共・文教施設の分布

注）地理調査所（1928）地形図「松山南部」
昭和３年（1928）資料修正により作成

設した（写真43・44）。見奈良駅は、川向こうの川上村吉久・畑川・拝志村の上林・下林や北吉井村志津川の一部通勤・通学者が利用した（図５参照）。

昭和18年、戦況の悪化によりゴルフ場はグライダーの滑空訓練場になり、松山から中等学校生徒が訓練に通った。昭和20年には本土決戦に備え、突貫工事で秘匿の陸軍飛行場（松山東飛行場）・簡易滑走路全長約900m、幅約65mが急造された。誘導路が樋口の菖蒲まで達し、田窪駅付近には木造の格納庫が２棟建っていた。

戦後、沿線のクヌギ林（写真45）や飛行場跡地が開放され、引揚者の住宅地・県立東温高校・重信中学校や東温市役所・商工会館などの公共・文教施設が集中立地し、愛大医学部などとともに学園医療地区を形成し、イメージを変えている（図８、写真46～48）。

田窪外分団地も開発され、昭和42年田窪駅を新設し、駅周辺の宅地開発が進んでいる（写真49～51）。なお、旧田窪駅は前年11月牛渕駅と改称した。

明治32年（1899）平井～横河原間の南吉井村大字牛渕字堀池に、旧田窪駅（現牛渕駅）が設置された。地

写真45　田窪原（田窪外分）のクヌギ林の平地林

注）平成19年（2007）３月　窪田重治撮影

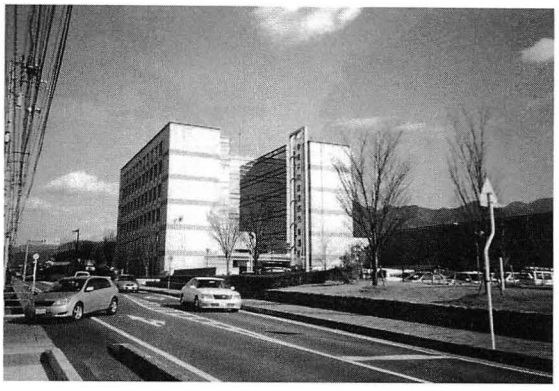


写真47　東温市役所（見奈良）

注）平成19年（2007）３月　窪田重治撮影

写真46　見奈良原のクヌギ林の平地林に開校した県立東温高校

注）昭和47年（1972）５月　窪田重治撮影

写真48　見奈良駅周辺に集中立地する市立の公共・文教施設

注）東温市の中核地帯を形成。
平成４年（1992）１月　窪田重治撮影

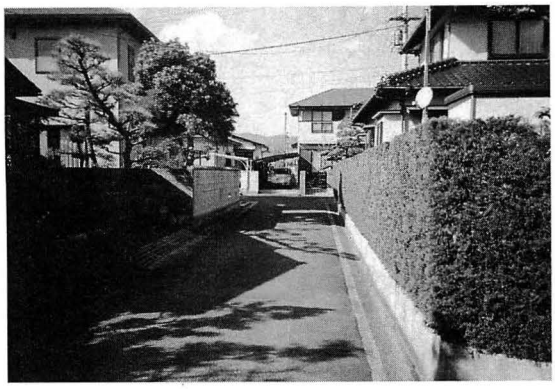


写真49　田窪外分団地の新興住宅

注）クヌギ林の平地林が宅地化された。
平成19年（2007）３月　窪田重治撮影

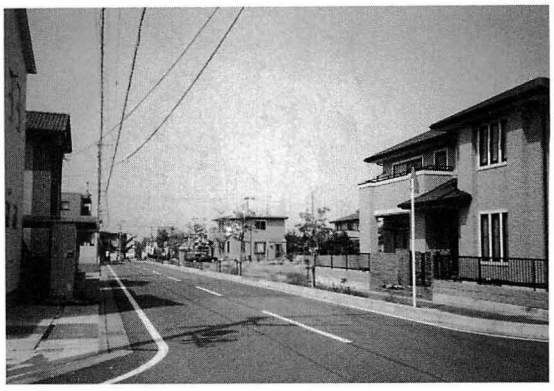


写真51　田窪駅周辺の宅地開発

注）平成19年（2007）４月　窪田重治撮影

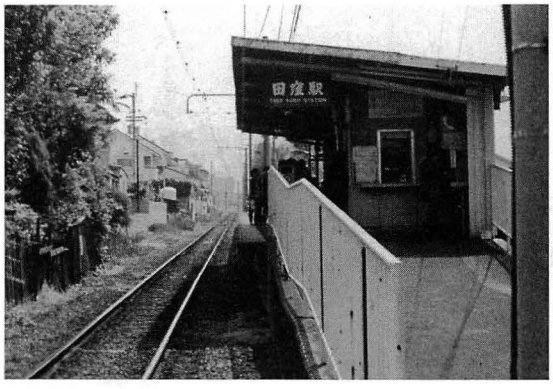


写真50　新設の田窪駅

注）昭和42年開設。旧田窪駅は前年に牛渕駅と改称。
平成19年（2007）４月　窪田重治撮影

写真52　牛渕駅前商業集落

注）旧田窪駅として開設され、昭和41年に牛渕駅と改称。
平成３年（1991）３月　窪田重治撮影

写真53　牛渕ミュージアム

注）駅前の旧南吉井農協の倉庫・組合事務所を改修して利用。平成15年末に閉館。
平成３年（1991）３月　窪田重治撮影

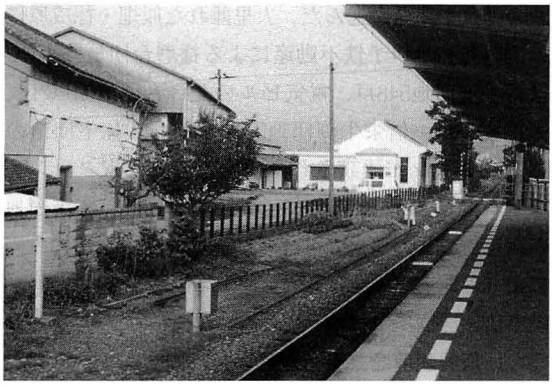


写真54　旧南吉井農協の穀物倉庫と組合事務所

注）牛渕駅にあった貨物専用引込線は撤去された。
平成３年（1991）３月　窪田重治撮影

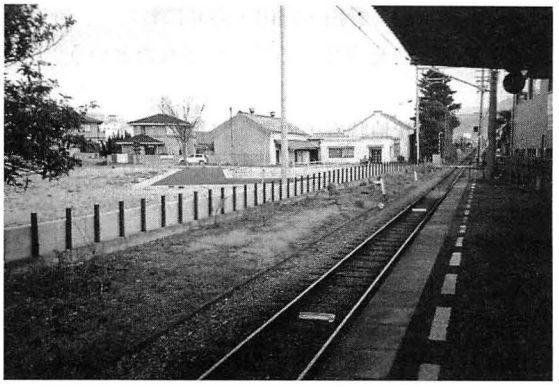


写真55　牛渕駅構内の貨物専用引込線跡と駅周辺の宅地化

注）平成19年（2007）３月　窪田重治撮影

籍は牛渕であるが駅名は田窪駅といった。駅が設置されると駅前に信用組合（現JA）の倉庫・事務所が建ち、貨物用引込線が敷設され、村内産品の物流拠点となった。松田･高須賀の両製材所が駅を中心に立地し、酒販店・米穀店・鮮魚仕出し屋・衣料品店・石材業・田窪座もあり、駅前商業集落を形成した（写真52～55）。

旧田窪駅の利用者は広範囲で、牛渕･田窪を中心に北吉井村西岡・八反地、小野村（現松山市）の太尺寺（たいしゃくじ）、川向こうの拝志村下林・上村（うえむら）・宮之段あたりから通勤・通学に利用された（図５参照）。拝志村出身で高野山大僧上を勤めた井上龍雄は、「宮之段あたりの人は、町へ行くのには田窪（現牛渕駅）まで歩いて汽車に乗った。（中略）田窪から松山までの汽車賃は20銭ほどだったが、１ヶ月定期で買うと２円73銭ほどであった。田窪まで歩いて35分位かかったように思う。（中略）家と駅の間には重信川があり、川原の大きな石を拾って細い道をつけていたが、永久橋は森松か横河原まで行かねばならないので、丸木橋を川の中に四ヶ所ほど架けていた。これは少し多く出水すると流失するのを恐れて取りはずすので、徒歩で渡らねばならない」[28]、「川は広いし、道が悪いので川原を通るのが一番困難で時間がかかった。石ころ道なので皮の靴も２年ともたなかった。（中略）靴の破損もひどいので、女学生の中には、お宮（浮嶋神社）のやぶろ（灌木の茂み）の中に履物を置き、履き替え」[29]たと苦労を述懐している。

写真56　徳威三嶋宮

注）徳威原の開発で上津社・中津社を廃し、下津社に合祀した。
平成19年（2007）４月　窪田重治撮影

5　牛渕団地住宅の建設と駅前集落の形成

内川の右岸、播磨塚洪積台地南縁の下原（しもはら）・熊畑（くまのはた）・徳威原（とくいばら）にかけて舌状に扇状地の微高地が広がっている。徳威原は播磨塚洪積台地を起点に小野・久米・浮穴方面に広がる広大な地域であり、『伊予国風土記』によると、台地の一部に播磨国司来目部小楯（くめべのおだて）の墓など13基の古墳があったことから播磨塚といった。

徳威原の開発は、蒲生忠知が寛永６年（1629）に思い立ち、「社寺奉行伊勢兵庫・郡奉行三雲主馬・郡代官浮潤三郎右衛門・同山形兵左衛門等に命じ、徳威中津社・上津社を取除き下津社（野田三島神社）に合祀し奉り、松柏の大樹を伐り除き水田438町歩を開拓」[30]した。その範囲は播磨塚の南西部を中心に西岡・牛

渕・梅本・水泥（みどろ）・野田・窪田・高井にわたり、野田の徳威三島宮・西光寺はこの時に移されたという[31]（写真56）。

しかし、扇状地特有の砂礫層に覆われた乏水性の地形で、水の便の悪い微高地は開発から取り残され、藩政時代にはぜ畑が開かれ、明治以降は小規模なぶどう・桃・柿（愛宕柿）やみかん畑が開かれたが、新村（しんむら）あたりまで平地林が残っていた（写真57・58）。

明治33年（1900）旧松山藩士内田実は、播磨塚（現自衛隊）に拓いた10haの内田深耕園で梨の栽培を始めた。明治45年、牛渕団地前駅付近に臨時貨物駅の播磨塚停車場を特設して出荷した。大正４～５年頃まで経営を続けたが、井上要に譲渡して上京した。播磨塚停車場は昭和６年廃止された。

昭和42年に横河原線が電化されると、沿線に住宅団地の誘致や開発が進んだ。人里離れた熊畑・徳威原には、昭和42年伊予鉄不動産による播磨台団地119戸や県営牛渕団地548戸、電気ビルの北野台団地50戸、大栄住宅66戸、信栄牛渕団地35戸など一大住宅団地のニュータウンが建設され、松山市のベッドタウンとなった（写真59～67）。伊予鉄道は昭和45年牛渕団地前駅を新設して住民のニーズに対応した。新駅の設置により、駅前を中心に銀行・スーパー・理髪店・軽食喫茶店・居酒屋・アパート・マンションや病院などが建ち、新興駅前商業集落が形成された。

隣接する松山市南梅本町には四国がんセンターが平成18年４月１日開院し、梅本駅を起点に四国がんセンター・フジグラン重信SCを結ぶ梅本ループバスが運行され、駅周辺の整備も進むなど、横河原線沿線の景観は、現在も日々新たな変貌を遂げつつある。

写真57　牛渕団地周辺のはぜ畑（昭和34年）

注）東温市牛渕・北野田と松山市南梅本町の境界地域。
昭和34年（1959）７月　窪田重治撮影

写真58　徳威原（北野田）の平地林

注）平成19年（2007）４月　窪田重治撮影

写真59　牛渕団地前駅周辺で開発が進む住宅団地

注）昭和47年（1972）５月　窪田重治撮影

写真60　伊予鉄不動産による播磨台団地

注）昭和47年（1972）５月　窪田重治撮影

写真61　県営牛渕住宅団地

注）昭和55年（1980）９月　窪田重治撮影

写真62　牛渕団地前駅周辺の都市化（昭和55年）

注）スプロール化による虫食い状の都市化が進む。
昭和55年（1980）９月　窪田重治撮影

写真63　牛渕団地前駅周辺の都市化と県営牛渕団地（昭和55年）

注）昭和55年（1980）９月　窪田重治撮影

写真64　牛渕団地前駅の駅前新興商店街の誕生
注）昭和55年（1980）９月　窪田重治撮影

写真65　牛渕団地前駅の通勤・通学用駐輪場
注）平成17年（2005）10月　窪田重治撮影

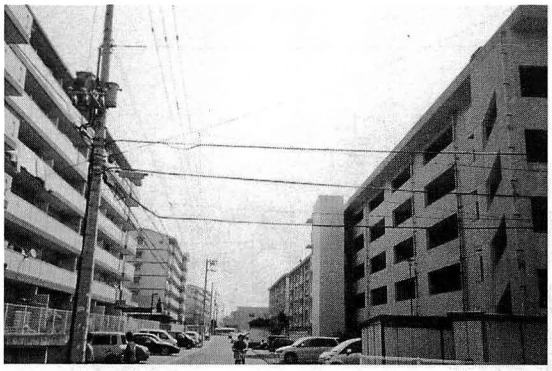


写真66　県営住宅・牛渕団地の高層アパート
注）横河原線の利用客増加対策に誘致。
平成19年（2007）10月　窪田重治撮影

写真67　徳威原の平地林の名残
注）徳威三嶋宮の社叢と平地林を開発し宅地化した住宅団地。
平成19年（2007）４月　窪田重治撮影

6　おわりに

交通の発達と変革は、集落の立地形成と盛衰を大きく左右する。明治末期に伊予鉄道が開設した横河原線は、松山平野の東奥部の貨客集散の拠点として、沿線の地域産業発展の大動脈としての役割を果たし、沿線集落の発展に大きな影響を与えた。また、鉄道の電化やモータリゼーションの進展にともなう道路網整備などにより、現在も地域構造の変革に大きな役割を果たしていることを論証してむすびとする。

（窪田　重治）

注および参考文献

1）　明治22年（1889）７月20日に駅名を松山から外側へ変更したが、明治35年６月１日再び駅名を松山に改称した。昭和２年（1927）の国鉄予讃線松山延伸により松山駅の名称を国鉄に譲り、同年３月１日松山市駅と改称した。

2）明治35年６月１日駅名を平井河原から平井に改称した。

3）伊予鉄道株式会社（昭和62年）：伊予鉄道百年史40頁

4）小野村史編纂委員会（昭和35年）：小野村史216頁

5）前掲書３）40頁

6）前掲書３）42頁

7）昭和41年（1966）11月１日駅名を牛渕に変更し、現田窪駅は昭和42年１月１日に設置された。

8）窪田重治（平成16年）：伊予鉄道横河原線の駅前集落の形成と変貌「重信史談」第23号　84頁

9）前掲書８）　84頁
10）明治29年（1896）１月26日立花～森松間（4.46km）で開業、昭和40年11月30日廃止された。
11）機関車は鉄道記念物に指定され、機関車と客車は愛媛県指定有形文化財として梅津寺パークに展示。平成13年10月12日から、道後温泉～松山市と道後温泉～ＪＲ松山～古町間の路面電車２系統で、ディーゼルを動力とした「坊っちゃん列車」の運行が開始された。
12）川内町（昭和31年）：川内町誌　133頁
13）北川淳一郎（平成５年）：四国山岳夜話・上　４頁
14）川内町（昭和43年）：続川内町誌　311頁
15）川内町老人クラブ連合会（昭和59年）：ふるさとの記録・くらしの思い出　23頁
16）前掲15）28頁
17）愛媛県教育協会温泉郡部会（明治42年）：愛媛県温泉郡誌　101頁
18）宮内龍蔵（昭和26年）：横河原水道史「伊予史談」130号　28～31頁
19）武智成彬（昭和64年）：愛病周辺の昔とその変遷『五十周年記念誌　国立療養所愛媛病院』143頁
20）重信町（昭和50年）：重信町誌　191頁
21）前掲20）　617～618頁
22）松山市立子規記念博物館友の会（昭和59年）：松山道後案内　復刻　付伊予鉄道の栞（原著：高浜虚子、明治37年）　88頁
23）川内町教育委員会（昭和50年）：わたくし達の川内町　60頁
24）川内町（平成４年）：川内町新誌　934頁
25）前掲15）　48頁
26）武智成彬（昭和57年）：神仏判然令夜話「重信史談」第１号　36～43頁
27）志津川に築いた４haの灌漑用溜池。地籍から前川池という。砂礫層の皿池で床練りしても漏水が多く、通称は「かご池」。戦時中北吉井国民学校児童の水泳場にもなった。
28）井上龍雄（平成３年）：ふるさと回顧(5)「重信史談」第10号　78頁
29）井上龍雄（平成６年）：ふるさと回顧「重信史談」第12号　56～66頁
30）前掲書４）　94頁
31）武智成彬（昭和64年）：ひかぶら談話蒲生・松平氏「重信史談」第８号　33～35頁

○愛媛県（昭和59年）：愛媛県史　地誌Ⅱ中予
○愛媛県立東温高等学校地域研究部（昭和63年）：東温地区の旧街道
○愛媛県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会（平成14年）：伊予市の風土と人びとのくらし
○愛媛県東温市横河原区（平成18年）：横河原区誌
○大野鐵・速水純（平成18年）：伊予鉄が走る街今昔
○窪田重治（昭和62年）：伊予鉄道横河原沿線の駅前集落－その立地と変貌「『社会科』学研究」13号
○窪田重治（平成４年）：伊予鉄道・横河原沿線の駅前集落－その立地と変容『城下町松山と近郊の変貌』
○窪田重治（平成７年）：松山市の郊外鉄道の開通と沿線の変貌「伊予史談」第298号
○窪田重治（平成11年）：横河原扇状地の開発と集落の立地と発展「重信史談」第11号
○窪田重治（平成12年）：伊予鉄道横河原開通百年横河原駅前集落の立地と変容「伊予史談」第316号
○窪田重治（平成16年）：伊予鉄道横河原線の駅前集落の形成と変貌「重信史談」第23号
○窪田重治（平成19年）：扇状地農村の用水開発と都市化に伴う農村景観の変貌「東温史談」第２号
○栗田繁光（平成元年）：愛媛の国鉄回想
○篠原重則（昭和64年）：愛媛県東温地区の旧街道の人々の生活「愛媛県立東温高等学校研究紀要」第３集
○坂東梅生（昭和59年）：重信学園地区の歴史地理学的研究「愛媛県立東温高等学校研究紀要」第１集
○藤本雅之（平成９年）：愛媛県における鉄道の変遷「愛媛県総合科学博物館研究報告」№２
○村上節太郎（昭和34年）：愛媛県新誌
○村上節太郎（昭和35年）：果樹栽培地域の研究
○村上節太郎（昭和59年）：伊予路の金毘羅街道「愛媛の文化」第23号

松　山　市　窪田　重治
松山中央高校　窪田　賢治

Ⅸ－２　東温市の水利史　－菖蒲堰を中心として－

１　はじめに

当地方の先行研究としては西原正周氏の「重信町菖蒲堰とその史的変遷について－特に水論を中心として－」伊予史談181号、「農業用水の歴史と慣行と水論について－温泉郡重信町北吉井地区を中心にして－」愛媛県高等学校社会科研究会『会報』14号の詳細な論考が知られている。『重信町誌』（昭和50年）、『愛媛の土地改良史』（昭和61年）にもその成果がいかされている。筆者も「伊予における水論について」『愛媛の歴史地理研究』（平成16年）、『愛媛の水をめぐる歴史』愛媛文化双書（平成18年）に菖蒲堰をとりあげて論述したことがある。

２　東温地区の用水源

一級河川重信川の上流部に位置する。源流は東三方ヶ森（1232.1m）である。流れは阿歌古（あかご）渓谷を下り、谷口の山之内大畑で横河原（見奈良）扇状地を形成している。支川の表川は本谷川・井内川・宝泉川・渋谷川を合わせて、吉久で合流する。さらに拝志川・佐川川を受けて西の松山市に注ぐ。一方支川の内川は日吉谷を下り菖蒲堰の余水を合わせ松山市へ流れる。

重信川は古来荒廃（こうはい）河川（荒れ川）として知られ幾たびかの洪水に見舞われてきた。また山麓には多数の溜池が築造され水田の用水を補給してきた。

扇状地の扇央に当たる地帯は地表水は少なく伏流水となり、土質は砂礫層からなっている。そのために水田は宿命的な水不足に悩まされてきた地域である。扇端部にはお吉泉・柳原泉・三ヶ村泉・龍沢泉・玉淵泉などの湧水がみられ、用水源として重要な役割を果たしてきた。

明治38年（1905）の２万分の１地形図でみると川上村北方は皆田となっているが、北吉井村の八反地、見奈良立石付近は桑畑と雑木林の記号が占めている。横河原の共同井戸も乏水地帯の象徴であり、愛媛大学医学部のところにあった前川池（俗にカゴ池）も洩れ水が激しかったという。東温高校の一隅にはクヌギ林があり、金毘羅街道の碑が建てられている。重信川は表流水がなく涸れ川で両岸に鎌出しの水制が下流に向かって逆Ｌ字型に列をなしている。

また、皿ヶ嶺連峰の山腹には見事な棚田が営々と造られている。上林・井内・河之内地区には渓流、あるいは溜池による用水開発が江戸時代からみられた。

統計的には明治５年（1872）の「村高溜池水源堤堰泉樋橋取調帳」（愛媛県立図書館蔵）の旧久米郡で知ることができる。堰で西岡８、志津川４、樋口３、山之内３、北方28、松瀬川67とある。また泉は西岡２、志津川２、樋口１、北方３である。残念ながら旧浮穴郡分はない（表１）。

表１　旧久米郡村高及び灌漑水利施設
（明治５年・1872）

村名	高（石）	堰	掛井手	溜池	筧	埋樋	泉	門樋	橋梁	備　考
西　岡	583.369	8	3	7	2	2	2	2	4	水門　1
志津川	985.280	4	1	4	4	3	2	4	7	泉井手1
樋　口	390.461	3	1	3	1		1	2	10	
川之内	310.660	3	3						16	
北　方	1,219.190	28		6	23	1	3	6	35	
松瀬川	276.644	67		18	13	9			28	

注）愛媛県立図書館行政文書蔵により門田恭一郎作成

全国的なものでは、用水源別比率の明治42年（1909）がある。これによると温泉郡は河川49.0％、溜池26.2％、井戸0.6％、泉13.0％、その他8.0％で河川からの灌漑が半分を占めていたことがわかる。溜池は北宇和郡、越智郡、東宇和郡、伊予郡、温泉郡の順番である（表２）。

昭和28年（1953）ごろの調査では、井堰掛りに次ぎ湧水掛りが多くなっている。また同資料で井堰及び自然取入の灌漑面積、取水量などを知ることができる。

表2　愛媛県の用水源別比率（明治42年９月）

用水源種別	河川	溜池	井戸	湖沼	泉	その他	計	田の面積
愛媛県	51.2%	26.2%	1.6%	0.1%	14.8%	6.1%	100.0%	47,721ha
温泉郡	49.0	30.7	0.6	0.0	13.0	6.7	100.0	10,230
宇摩郡	52.5	22.5	7.2	—	9.8	8.0	100.0	2,894
新居郡	42.8	6.6	4.3	—	33.8	12.5	100.0	4,197
周桑郡	52.4	16.3	2.1	—	28.2	1.0	100.0	4,070
越智郡	45.6	38.0	1.9	—	10.1	4.4	100.0	6,298
伊豫郡	47.7	30.8	1.3	0.0	19.6	0.6	100.0	3,839
上浮穴郡	31.6	3.5	—	—	—	64.9	100.0	1,601
喜多郡	64.8	15.1	0.2	1.5	15.9	2.5	100.0	3,309
西宇和郡	70.8	5.9	2.0	—	21.2	0.1	100.0	1,349
東宇和郡	54.0	33.5	0.5	—	12.0	—	100.0	3,789
北宇和郡	55.0	42.8	0.1	—	1.7	0.4	100.0	4,984
南宇和郡	75.8	12.9	—	—	10.9	0.4	100.0	1,157

注）「田ノ灌漑排水ニ関スル状況調査」（農商務省農務局）より門田恭一郎作成

重信川の62％を菖蒲上堰（北方）、38％菖蒲下堰（樋口・志津川・西岡）で水利権及び慣行が明示されている（表３・４）。

慣行水利権は明治29年（1896）の河川法でも認められており、旧記が重んじられ、上流優先・古田優先が原則であるために水論・裁判では旧記・古い史料や慣行が証拠として常に提示されることになる。

菖蒲堰は「そだ堰」と呼ばれるもので、葉付き松木や笹が堰の材料として使用され、「一文字堰」といって川を横一直線で堰切る方法であった。

表3　東温市の灌漑別水源

村名	井堰掛	溜池掛	湧水掛	余水掛	計（町歩）
三内	26.8	—	—	—	26.8
川上	267.9	129.0	16.1	—	413.4
北吉井	131.8	—	71.2	—	203.0
南吉井	265.3	—	174.0	—	439.3
拝志	—	21.1	150.5	—	150.8
計	691.8	150.5	391.0		1,233.3
	(65.1%)	(12.2%)	(31.7%)		(100%)

注）『道前道後平野農業水利改良事業計画書』農林省岡山農地事務局　昭和28年（1953）により門田恭一郎作成

表4　東温市の井堰及び自然取入（昭和28年・1953）

名称	所在地	河川名	構造	灌漑面積	水利権及慣行
三島堰	保免字三島	井内川	自然取入	26.8ha	
菖蒲上堰	山之内字大畑	重信川	割石練石積	130.0	重信川の62％を上堰
一之堰	南方字天神	表川	〃	20.0	
二之堰	南方字高木	〃	野面練石積	20.0	
三之堰	仝上	〃	野面空石積	7.0	
畑川堰	吉久字吉久	〃		6.0	
菖蒲下堰	山之内字大畑	重信川	割石練石積	131.8	重信川の38％を下堰
三ヶ村堰	見奈良	〃	集水暗渠空石積	120.0	
田窪牛洲堰	見奈良字田ノ窪	〃	〃	116.0	
見奈良堰	吉久字吉久	〃	〃	27.3	
栗ノ井堰	下林字栗ノ井手	林川	野面空石積	(95.0)	
助兼堰	下林字助兼	〃	〃	(10.0)	
五反地堰	下林字五反地	〃	〃	(6.0)	

注）『道前道後平野農業水利改良事業計画書』農林省岡山農地事務局　昭和28年（1953）により門田恭一郎作成

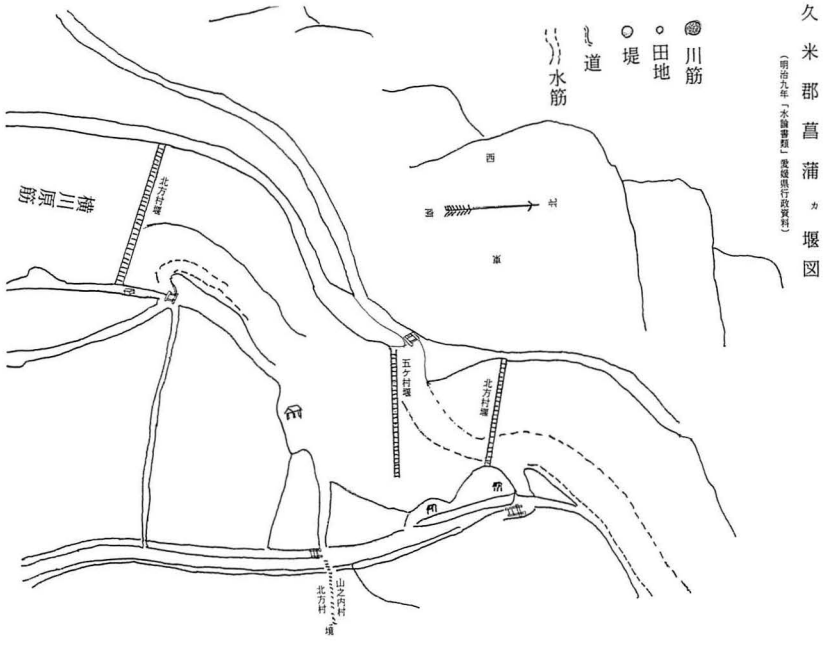


図1　久米郡菖蒲堰図

注）愛媛県行政資料「水論書類」により門田恭一郎作成

表５　東温市の水利年表

年　代		事　項
嘉吉元年	1441	和田式部少輔通爰が、菖蒲堰の水利権を大興寺に寄進。 （ただし、原本は明治６年大興寺消失のため焼亡という）
慶長５年	1600	このころ伊予川（重信川）の改修をした。
寛永19年	1642	段の下（菖蒲井堰）の分水規定がつくられた。
寛文６年	1666	浮穴郡13か村による雨乞い祭りを、築島神社で行った。
寛文７年	1667	上野上池（牛淵）築造。
天和２年	1682	田窪・牛淵村で地ならし。牛淵村はこの年から村移りをはじめ天保８年(1837)に終わる。
貞享５年	1688	黒穂池（松瀬川）を、築造す。
享保17年	1732	享保大飢饉で年貢全額免除。この年、浮嶋神社と徳威三嶋宮間で「御面渡御祭」はじまる。
元文４年	1739	菖蒲堰の分水をめぐって、樋口外４か村と北方村と水論あったが、分水率は明確に決まらなかった。
宝暦４年	1754	滝の下泉（下林）の分水規定が、採定された。
安永元年	1772	重信川堤防や田窪・見奈良原・西岡・志津川・山之内に櫨が植え付けられた。
天明５年	1785	菖蒲堰の分水で北方村と樋口外４か村で水論おこる。
天明８年	1788	菖蒲堰の分水で北方村と樋口外４か村で水論おこる。
寛政２年	1790	三ヶ村泉（北濃田・南濃田・牛淵）を完成。見奈良の埋樋を郡普請で施行。
寛政年間	1789～1801	菖蒲堰の自然流水減少につき田窪・牛淵の両村が水利権を放棄するとの口碑がある。
文化４年	1807	彦八池（上村）築造。
天保３年	1832	通り谷池築造。
天保５年	1834	牛淵村、水木泉（志津川村内）を掘削する。
天保７年	1836	田窪村、玉淵泉（志津川村字八段池）を掘削する。
天保10年	1839	三ヶ村（柳原）掘貫水門ができる。
弘化元年	1844	原上池（松瀬川）の洩留及外腹付工事を行う。
弘化２年	1845	佐古谷池、郡普請で築造。
嘉永６年	1853	大旱魃。
安政２年	1855	黒穂池（松瀬川）増築完成す。
安政５年	1858	苔谷池（北方）を、起工す。同７年（1860）４月完成す。
万延元年	1860	吹上池、北野田・南野田・南高井の３か村で増築。
明治元年	1868	谷口池（吉久）を、見奈良地区が改修、現在は畑川が利用。
明治３年	1870	笠坪池（北方）を、起工す。
明治５年	1872	若宮池（松瀬川）、増築修理。
明治９年	1876	菖蒲堰の大落水で、北方村と樋口・志津川・西岡の３か村と水論があり、双方に負傷者がでる。愛媛県の仲裁を仰ぐ。
明治10年	1877	吹上池を、引水不便のため南方にゆずる。
明治28年	1895	山戸池（松瀬川）嵩上げ工事。
明治29年	1896	河川法（慣行水利権を認める）。
明治32年	1899	西岡・志津川で裏田堰分水で水論。
明治33年	1900	裏田堰紛騒で、西岡が志津川を提訴した。
明治34年	1901	裏田堰問題で、志津川は大審院に控訴。
明治39年	1906	田植えの正条植が普及した。
明治45年	1912	重信川北堤防決潰し、龍沢泉が埋没する。
大正２年	1913	重信川の62％を上堰（北方村）、38％を下堰（五か村）。北方村下堰を廃止する。
大正７年	1918	豊島直行が見奈良原40町の開墾をはじめる。 ７月笠坪池（北方）、大雨のとき土手が切れる。
大正12年	1923	大西良実らによって、重信川治水研究会発足。
大正13年	1924	この年、旱害と降雹。
昭和７年	1932	山之内ノ除ケ堰堤工事、県直営事業で10月完成す。
昭和９年	1934	大旱魃。見奈良と畑川、樋口と志津川・西岡、北野田と高井で水論。
昭和16年	1941	宝泉池（北方）を、着工。同18年（1943）完成。
昭和18年	1943	７月重信川南堤防決潰して、拝志村未曾有の大水害を蒙る。
昭和21年	1946	南海大地震により道後温泉の出湯とまる。
昭和25年	1950	曲谷池（北方）を、着工す。
昭和27年	1952	拝志村の水害地が復旧する。
昭和33年	1958	菖蒲堰（頭首工）着工、同38年（1963）完成す。
昭和40年	1965	国営道前道後平野農業水利事業完成す。
平成13年	2001	除ケ堰堤（山之内）が国の登録有形文化財となる。

注）『重信町誌』（1975年）・『川内町誌』（1961年）・「水論書類」（愛媛県行政資料）などにより門田恭一郎作成

3　水利の史的考察

東温市関係の水利年表を作成してみた（表５）。これで考察してみると、菖蒲堰関係の水論が特に多く、突出していることである。溜池築造では北野田・南野田・南高井の３か村が８㎞も遠くはなれた松瀬川村の吹上池を増築していることは驚異的である。しかし水掛りの不便から明治10年（1877）に南方村へ譲っている。

さて、菖蒲堰関係の水論は、昭和38年（1963）の近代的な頭首工（合口）の完成で、終止符が打たれた。これまでの史料が北吉井土地改良区に大切に保存されている。特に「野村互手記」なる「菖蒲堰書類」は貴重なものである。愛媛県行政資料の明治９年(1876)「水論書類」（愛媛県立図書館蔵）と照合してみると、水論の度に旧記写が提出され、藩庁・郡役所・県庁で検証されていることである。

嘉吉元年（1441）の和田式部少輔通爰からの書状が常に明示されている。原本は既に焼失したようであるが、写しは関係部署で保管されている。『川内町誌』『重信町誌』をはじめ西原正周氏の論考にもかならず掲載されている。

史料(1)

為光井出之事

任先例堰切二申付、御条於向後相違有間敷之状、如件

嘉吉元年六月十日　　和田式部少輔通爰　判

大興寺北方丈参

史料(2)

大興寺北方衆中江

為光井て先きのむねに任て太小木にてせききりたるべきもの也。拝之もし此旨をそむき、こうげ小土をおき候は、いわれざる事なり、仍為末代之状、如件

嘉吉元年六月十日

（十五人の連署）

この史料に対する意義が大正２年（1913）の「陳述補充書」（「菖蒲堰書類」）に残されている。

為光井て（為光井手即チ本井堰ノ名）先きのむねに任せて太下木（粗朶ヲ云フ）にてせききり（堰切）たるべき物也もし此旨を背き　こうげ（こうげ方言にして叢ヲ鎌等ニテ切取り叢根ニ土ノ付着セル儘ノモノヲ云フ）小土をお（置）申候は謂れさる事なり

以上ノ意義ナルヲ以テ本井堰ヲ用ユル事ハ古来禁スルモ自然ニ固ル砂利ノ堆乗ハ禁止セズ実際砂利ノ堆乗ナリシヲ水論ノ目的ヲ達シ難キモノナリ

とある。具体的な説明で大変参考になる。

「大興寺」は北方に現存する古刹である。和田式部少輔通爰なる人物は本史料では菖蒲堰の管理権者であったと思われる。この和田氏はかつて樋口の岩伽羅城主で菖蒲下井掛りの地域、志津川郷を領有していた。

明治９年（1876）の「水論書類」（愛媛県立図書館蔵）の絵図（図１）によると、この菖蒲堰には、上堰（北方）、下堰（樋口・志津川・西岡）に分かれて築造されていた。さらに下流側に北方井堰がある（大正２年に愛媛県の裁定で廃止される）。

志津川文書（東温市立歴史民俗博物館蔵）の「覚」の中に貞享５辰年（1688）７月田窪村庄屋九郎右衛門と牛淵村庄屋善兵衛から志津川村半右衛門に当てたものがある。

覚

一、田方五拾三反壱畝拾参歩　　樋口村
　米田水　日数　五日五夜　　志津川村
　内　三日二夜　志津川村　　西岡村
　　一日二夜　西岡村
　　一日壱夜　樋口村

一、田方三拾町八反三畝廿三歩　　牛淵村
　米田水　日数　一日一夜　　田窪村
　（中略）

〆

右者久米郡西岡村志津川村樋口村、浮穴郡田窪村外分牛淵村外分へ先年より山之内水引来ル処ニ分ヶ口之極も無御座候ニ付今度両郡相談之上者番水ニ仕日数並井手符米右書付之通相極申上ハ以来少茂申候無御座、仍後日判付如件

貞享五辰年七月十二日

とある。また元禄16未年（1703）４月にも同様な史料がある。

（前略）

樋口村新田水口ハ五ヶ村之水上二候而分り不申候而も志津川村之趣義ニ相成候段申出又々相談有之船小屋五ヶ村井手分股の頭土どゞ設り之上ニ格別井手口ヲ明壱分通分水仕五ヶ村ヱ左之通り相極

一、壱分五厘　一日一夜　　樋口村

一、四分　　三日二夜　　志津川村
一、弐分　　一日二夜　　西岡村
一、壱分五厘　一日一夜　田窪村
　　牛淵村

〆

一、九分　五ヶ村刻割方定法
　　日夜六日ニ一廻り宛夜養水取可申定有
　　（後略）

元禄16年の史料は樋口新田の井口を分離し上手に築造したことである。この土地は「嘉左衛門新田」とよばれる庄屋地であったためという。その後も慣行として今日に至っている。

4　菖蒲堰の構造と修繕

堰の構造・材料については明治５年（1872）の「池川堤防改修繕帳」(愛媛県立図書館蔵)(『松山市史料集』第13巻所収）に詳しい。

○久米郡北方村
菖蒲上堰　用水堰　松２間片枠　12組　高５尺・横２間　新規１ヶ所
同　下堰　用水堰　松２間片枠　８組　高５尺・横２間　新規１ヶ所
右入用
松木　40本　長２間・末口７寸　柱木
松木　120本　長２間・末口５寸　樋根太木共
葉付松木　800本　長８尺
笹　60束　但１束５尺縄ニシテ
外
松木　3,651本
葉付松　800本

○久米郡志津川村、西岡村、樋口村
横川原菖蒲
堰水取　２間片枠　16組　高５尺・横２間　新規
右入用
松木　32本　長５尺・末口７寸　柱木
松木　96本　長２間・末口５寸　樋扣木共
葉付松木　640本　長８尺
松木　８本　土台木
笹　48束　但１束５尺縄廻

と堰の修復には大規模な材料が用意されなければならなかったのである。季節堰であり、洪水のたびに補修が必要であった訳である。

年代は詳かでないが「上井堰分水所甲号図」（北吉井土地改良区蔵の「菖蒲堰書類」）によると堰の間数20間３尺（約27m)、洪水防止のためと思われる箱枠が上手に３か所あり、淀みをつくっている。さらに北方村分流と三ヶ村分流がある。下手に１箇の箱枠が左岸を防御している。１間片枠が７か所で堰を支えている。そこに葉松歯朶掛をして、その上に砂が置かれていたようである。三ヶ村分流と歯朶掛越流の水が配分されている。北方村水番小屋も設けられ水利の厳しさを物語っている（写真１)。

三ヶ村堰は以前五ヶ村堰と呼ばれていた。浮穴郡田

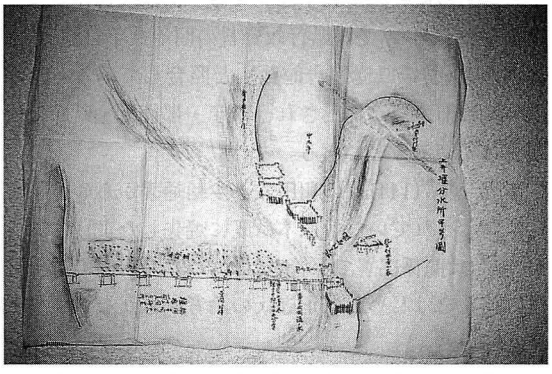


写真１　菖蒲上堰（北方村）（従来の絵図）

注１）時代は不明であるが、総間20間３尺（約27m)、洪水防止の箱枠が４か所、北方村分流と３ヶ村分流があり、１間片枠が７か所、北方村水番小屋ももうけられ、水利配分のきびしさを物語っている。
注２）北吉井土地改良区蔵

写真２　菖蒲堰（頭首工）

注１）昭和38年に近代的な統合堰となる。洪水吐、土砂吐、取水ゲートが平成10～13年度に総事業費366,260千円で完成する。
注２）平成20年９月　門田恭一郎撮影

窪村、牛淵村の両村が同じ菖蒲堰掛りであったが、自然流水が減少して、水田の用水灌漑に不足を生ずるため年々争論が絶えなかった。因って寛政年間（1789～1801）に藩庁の差配によって田窪・牛渕の両村は水利権を放棄するに至ったという。柳原泉が寛政10年（1798）の掘削で、玉淵泉は天保７年（1836）の設営、柳原堀貫水門が天保10年（1839）の完成、ともに田窪・牛淵の用水源である。

５　旱魃時の用水慣行

旱害時の特別慣行として、「菖蒲堰書類」には、－重信川筋大落水ノ順序説明書－がある。

一、平水

平水トハ大字樋口大字志津川大字西岡各部落トモ勝手ニ灌漑スル期間ヲ云

一、刻割

刻割トハ田養水右三部落内欠乏ノ域ヲ生シタル場合ニ於テハ各部落協議ノ上時日定メ分水ヲナスモノナリ旧慣ニヨリ大字西岡ハ流末ナルヲ以テ先トシ及志津川及樋口ト順ヲ定メタルモノナリ而シテ其日数ハ一回ヲ五日五夜トス一日トハ（旧例ノ定メタルヲ変更セシコトナシ）日ノ出ヨリ日ノ入リヲ一日トス刻割合ハ大字西岡二夜一日大字志津川三日二夜大字樋口一夜一日トシテ幾回トナク取水ヲナス順序ナリ其間ニ於テ降雨水有之トキハ平水ニ復シ勝手引トナスモノナリ

一、大落水

大落水トハ右ノ刻割ヲ施行シ倍々欠乏ノ場合ニ於テ重信川筋大落シヲ施行スルモノニテ大字西岡大字志津川ノ二部落ヨリ請求スルモノナリ（後略）

とあり、一応合理的な用水配分を目指したものである。

大落水は差配水とも云われるもので、安政年間（1854～60）には内川筋の梅本・畑中・窪田（日瀬里）にも配水されたことがあるという。文政９年（1826）より現今明治43年（1910）に至る間80数回に及び天保３年（1832）に６回、天保10年（1839）に５回も施行せられたと記録されている。

この大落水での水論が明治９年（1876）に起こっている。この時の様子は「水論書類」（愛媛県行政資料）に詳細である。なお大落水慣行は愛媛県の裁定で大正２年（1913）に廃止された。

写真３　菖蒲堰の分水工（北方62%、重信側38%）

注１）水利配分の赤い目印が水論の厳しさを物語る。
注２）平成９年11月　門田恭一郎撮影

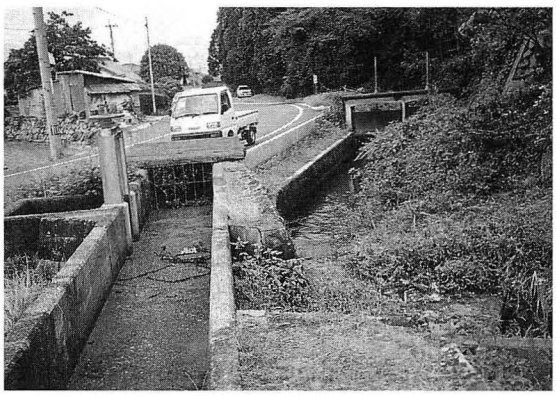


写真４　段ノ下堰（樋口と志津川・西岡の分水堰）

注１）複雑な水路網が入り交じっている。水門ゲート、近くに樋口神社がある。
注２）平成20年９月　門田恭一郎撮影

写真５　裏田堰（右：西岡と左：志津川の分水堰）

注１）明治32年（1899）に水論、同33年から35年にかけて裁判になり、広島控訴院、大審院までもちこまれた。
注２）平成20年９月　門田恭一郎撮影

この「水論書類」には菖蒲堰井掛村々反別付がある。

○字海上・古市・川上西側横川原

一、117町４反６畝28歩　　北方村
　　但シ池掛リヲ除ク
一、164町１反４畝10歩　　三ヶ村
　　但シ池掛リヲ除ク
　内
　　36町７反14歩　　樋口村
　　81町８反１畝歩　　志津川村
　　45町６反２畝26歩　　西岡村
　　〆
　合計　　281町６反１畝８歩

右者天保12丑年（1841）取閲久米郡村々養　水畝書抜候計ニ候也

明治９年（1876）７月１日

と用水量の決定に水田面積が参考資料として提出されているのである。

水論史料としては元文４年(1739)、天明５年(1785)、天明８年（1788)、明治９年（1876）などのものが、北吉井土地改良区にある。また、嘉永５年(1852)の「樋口志津川両村水論日記」などが東温市立歴史民俗博物館に所蔵されている。なお北方土地改良区の史料は未見である。

最後に県営菖蒲堰用水改良事業（昭和33～38年度）について説明しておく。従前の堰はそだ堰(葉付松木・笹などを用いる）であったので渇水時は全水量の取水が望めなかった。また洪水時にはしばしば堰が流失し農業用水の取入に困難を来していた。そこで菖蒲上堰と下堰を統合し、上堰より上流約300ｍの岩盤上にコンクリート造りの堰を築造し農業用水の完全取水を期した。川内、重信両幹線水路はコンクリート三方張にて改修された。分水工の配分比は川内62%、重信38%で、前述の大正２年（1913）の裁定が遵守されている。また10年に１度程度の渇水年においては農林水産省道前道後平野農業水利事業より補給水を受けることが出来、用水計画の完璧を期されることとなった（「同事業概要書」、写真２～５)。

本調査で、北吉井土地改良区理事長渡部宗清氏に史料の拝借の便を図っていただいた。また東温市立歴史民俗博物館の学芸員下坂憲子さんには史料撮影のご配意をいただいた。記してお礼申しあげます。

参考文献

○西原正周（昭和41年）：重信町菖蒲堰とその史的変遷について　－特に水論を中心として－「伊予史談」181号
○西原正周（昭和45年）：農業用水の歴史と慣行と水論について－温泉郡重信町北吉井地区を中心として－、愛媛県高等学校社会科研究会「会報」14号
○門田恭一郎（平成16年）：伊予における水論について（武智利博編「愛媛の歴史地理研究」所収）関奉仕財団
○門田恭一郎（平成18年）：「愛媛の水をめぐる歴史」愛媛文化双書52
○恒岡定俊（昭和50年）：菖蒲堰と北吉井地区の水利について「重信史談」７号
○窪田重治（平成４）：城下町松山と近郊の変貌「松山平野の水利開発に関する歴史地理学研究」所収
○重信町（昭和50年）：「重信町誌」
○川内町（昭和36年）：「川内町誌」
○愛媛県（昭和61年）：「愛媛の土地改良史」
○松山市（昭和60年）：「松山市史料集」第12巻
○国土交通省四国地方整備局（平成20年）：「重信川水系河川整備計画」

松山市　門田恭一郎

Ⅸ－３　明治時代の旧街道と町並み

１　はじめに

愛媛県教育委員会は、平成７年（1995）から平成９年にかけて、『愛媛県歴史の道調査報告書』７冊を刊行した。このうち、東温市域の旧街道は第３集『讃岐街道』（平成８年）にまとめられ、街道の歴史的背景が記述されるとともに、近世の街道が確定され、その現状が現地調査によって報告されている。巻末には旧街道とされる道筋が２万5000分の１地形図上に朱線で示され、容易に理解できるよう工夫されている。

この報告書が刊行されて以降、旧街道に対する関心が高まり、山内譲氏『伊予の地域史を歩く』（平成12年、青葉図書）、清水正史氏『伊予の道』（平成16年、愛媛文化双書刊行会）、川岡勉氏・内田九州男氏編『伊予松山と宇和島道』（平成17年、吉川弘文館）などの概説書が相次いで刊行された。また愛媛県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会編『愛媛県の歴史散歩』（平成18年、山川出版社）も、県下の旧街道や町並みを取り上げている。

本章では、これらの成果に導かれながら、東温市域における、明治時代の旧街道と町並みについて、現地調査や文献・史料をもとに新たな知見を加えてみたい。課題は多岐にわたるが、本章では、史料を読み解いて明治時代の旧街道や町並みの復元を目指し、そこから江戸時代の旧街道や町並みを考える糸口を提供したいと思う。また、名所とされた中山越の曙橋について、従来の文献で紹介された記述に対して、筆者なりの考えを開陳したい。

また本章では、国道11号の前身である、松山から西条方面へ向かう旧街道を「讃岐街道」と呼称することにする。使用した明治時代の文書は、いずれも愛媛県立図書館が所蔵する「愛媛県行政資料」「伊予八藩土地関係史料」にある明治期行政文書である。なお、明治時代前期、東温市域の北半分は久米郡、南半分は下浮穴郡に所属していたことにも留意したい。

２　東温市域の明治時代の旧街道

⑴　東温市域の旧街道

東温市域の旧街道については、篠原重則氏（当時東温高校教諭）による「愛媛県東温地区の旧街道と人々の生活」（東温高校研究紀要第３集、平成元年）と、その指導によって東温高校地域研究部が作成し愛媛県教育委員会が主催する第２回地域生活文化研究発表大会で最優秀（知事）賞に輝いた労作「東温地区の旧街道」（昭和63年）に詳述されている。これらの調査報告の恩恵を受けつつ、文書にみえる関係記事を紹介しながら、讃岐街道などの旧街道について述べる。使用した文書は明治10年代に作成されたもので、近世の旧街道を考える上で重要なものである。

⑵　明治12年の「道路橋梁調」

「愛媛県行政資料」のうちに、明治12年（1879）から13年にかけて、県下各郡から県へ現状を報告した「道路橋梁調」あるいは「道路橋梁取調書」がある。例えば久米郡西岡村（現在の東温市西岡）の場合は、

字旛摩塚ヨリ字流レ口ニ至ル
長拾七町　　巾弐間　　仝西岡村構

と記載されている。「旛摩塚」は播磨塚のことであろう。このように「道路橋梁調」は、特定地名間の街道の長さや道幅、管轄する村名が記載されて、旧街道の記録として貴重なものである。東温市域に関係する記事をまとめると、表１のとおりである。また、道路とともに橋梁の報告もなされている。道路と同じく関係記事をまとめると、表２のとおりである。この２つの表に出てくる小字地名や橋梁名などを手がかりにして、明治12年ごろの、近代初頭の讃岐街道の道筋を復元することができる。

表１　東温市域における讃岐街道の道筋・長さ・幅（明治12年）

郡	村　名	通　過　地　名	道の長さ	道の幅	備考
久米郡	西岡村	字播磨塚～字流レ口	17町	2間	
	志津川村	西下市～下馬所	8町48間	2間	
	樋口村	字下馬所～字横河原堤塘	6町10間	2間	
	志津川村	字横河原堤塘ニ跨ル分	11間	2間	
	志津川村	字横河原堤塘以東、河流中央ニ至ル	1町14間	2間	
	北方村	字横川原中央～字斉院ノ木分股（同所ヨリ東南方村構）	11町 2間	2間	
		字南方村構ヲ除ク字上砂～東南方村境北方分曲り橋	50間	2間	
	松瀬川村 南方村	字川上	1町58間	1間	※
	松瀬川村	字川上～河ノ内村エニシ谷	33町42間	2間	
下浮穴郡	南方村	北方村境字斎院木～松瀬川村境字川上中山寺東角	769間	2間	※
	南方村 松瀬川村	松瀬川村境字川上中山寺東角～同村字廣瀬	106間	2間	※
	河之内村	松瀬川村字檜皮谷～惣野林作宅前	1,360間	1間3尺	
	河之内村	惣野林作宅前～本谷口	22間	1間1尺2寸	
	河之内村	本谷口～惣野友七宅前	57間	1間3尺	
	河之内村	惣野友七宅前～千原村境字田桑	961間	1間1尺2寸	

注）明治12年・13年に各郡から県へ提出された「道路橋梁調」「道路橋梁取調書」（愛媛県行政資料「河海溝池許可工事」所収）より柚山俊夫作成。※印の部分は重複があり、不整合がみられる。

また、下浮穴郡役所から提出された調書には、川上付近と河之内の街道図面が添付されている。川上付近の街道図面は、現在の北方・南方の地区境界と図面の境界線（当時は久米郡北方村・下浮穴郡南方村なので村界であり郡界である）が相違していて問題があるが、図面をそのままトレースして図１のように作成した。

河之内の街道図面は、檜皮谷橋から周布郡境までの略図であり、同様に図２を作成した。図２によれば、檜皮谷橋は久米郡松瀬川村と下浮穴郡河之内村の境界であった。引岩橋と七郎ヶ谷橋との間が札場地区で、街道は二瀬川橋でいったん本谷に渡ってから、土谷川の左岸へ帰り、土谷地区へ進んでいる。

(3)　明治14年の「道幅調」

「愛媛県行政資料」のうちに、明治14年（1881）から15年にかけて、県の指示によって村ごとに戸長から郡へ、さらに県へ「古来の道幅」を報告した「道幅調」あるいは「道幅取調書」という文書がある。残念ながら、久米郡の関係文書はあるが下浮穴郡関係は見出すことができない。これも前項と同様、東温市域の関係記事をまとめ、表３にした。讃岐街道は当時「国道三等」と呼ばれた。愛媛県下には国道一等や二等はなく、東京から松山を結ぶ国道三等（当時は国道31号とされた）のみが国道であった。

表２　東温市域における讃岐街道架設の橋梁(明治12年)

郡	村　名	所在地	橋梁数	長　さ	幅	材質
久米郡	西岡村	斉院ノ木	1	4間	2間	板橋
	樋口村 (志津川村構)	桟敷	1	2間	2間	板橋
	北方村	吹矢ノ元	1	1間	2間	石橋
下浮穴郡	南方村	上砂	1	3間	1間4尺	板橋
		モカリ橋	1	1間	1間2尺	石橋
		小坂	1	1間	1間	石橋
久米郡	松瀬川村	渋谷川	1	4間	1間3尺	土橋
		吹上	1	2間	1間3尺	木橋
		ドンコ池	1	2間	1間3尺	土橋
		佛谷	1	2間	1間3尺	土橋
		佛生川	1	2間3尺	1間3尺	土橋
		本谷川	1	13間	2間	板橋
		二瀬川	1	2間	1間3尺	土橋
		二瀬川向	1	2間	1間3尺	土橋
		蛇鎐	1	2間	1間3尺	土橋
		市五谷	1	2間3尺	1間3尺	土橋
		エンジ谷	1	4間	1間3尺	土橋
下浮穴郡	河之内村 松瀬川村	桧(ママ)皮谷	1	3間3尺	1間	土橋
	河之内村	檜皮	2	2間	2間	－
		引岩	1	2間	2間	土橋
		七郎ヶ谷	1	2間	2間	石橋
		二瀬川	2	3間3尺	2間	土橋
		田桑	1	8間	2間	板橋

注）明治12年・13年に各郡から県へ提出された「道路橋梁調」「道路橋梁取調書」（愛媛県行政資料「河海溝池許可工事」所収）より柚山俊夫作成。

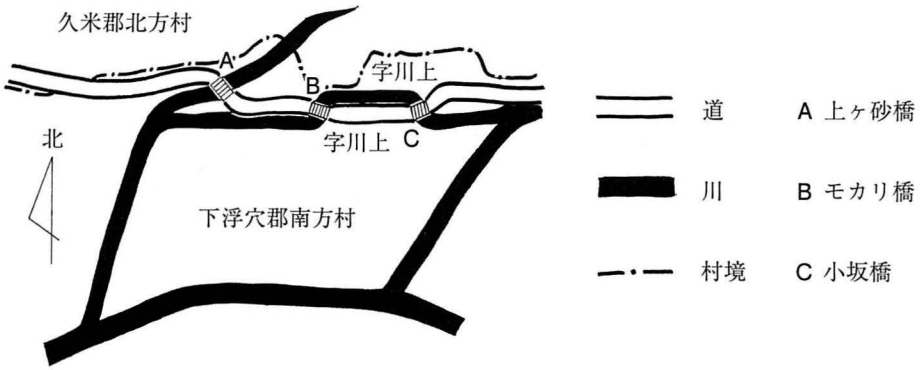


図1　川上周辺の街道略図（明治12年）

注）「道路橋梁取調書」に添付された図面のうち、川上周辺をトレースして柚山俊夫作成。

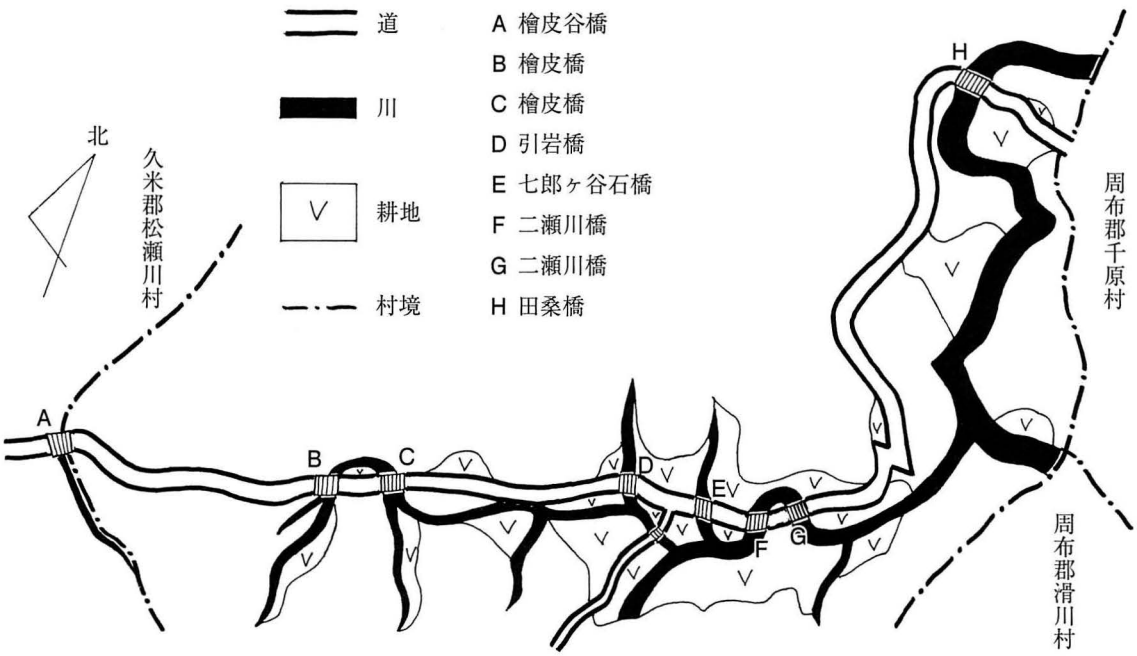


図2　河之内の街道略図（明治12年）

注）「道路橋梁取調書」に添付された図面をトレースして柚山俊夫作成。

志津川村からは、国道三等のほか「御奉行道」と「山之内道」も主要道路として報告がなされている。志津川村戸長藤田健太郎が明治14年（1881）11月18日付けで郡長に報告した「道幅調」によれば、御奉行道は、江戸時代に松山藩の３奉行が秋に巡見に来たとき通過していた道筋で、田窪村と志津川本村とを結ぶという。志津川本村とは東温市志津川の小字「町筋」のことで、讃岐街道沿いの町場（本章３節で後述）のことであろう。

(4)　明治17年の「久米郡地誌」

「久米郡地誌」の各村誌には、村内の道路について詳細に記述されている。ここでは、志津川村誌に記載されている道路記事を紹介する。なお、「下浮穴郡地誌」は未定稿で、しかも東温市域の村々は記事がない。

志津川村の国道について「久米郡地誌」は、次のとおり記述する。

国道、村ノ東方字垣ノ内樋口村境ニ起リ、西方字

表３　東温市域（旧久米郡）における旧街道の道幅・街道名称（明治 14 年）

道路名	古来道幅	村　名	経　路	道路の別名
			備　考	
国道三等	２間	西岡村	久米郡志津川村々界（字流レロ）～以西梅本村南分境	旧称御巡見道或ハ中山街道
	２間	志津川村	久米郡樋口村々界（字下馬所）～以西西岡村境	旧御巡見道或ハ中山街道ト云
			志津川村字本村内ハ該北山ニ方リ、吉山城ト唱ヱ古城址アリ、其麓下ニアリシ小市街志津川町ト旧称セシ由ニテ、東西凡五町ノ直径ハ道幅特ニ広濶ニシテ弐間二尺ヨリ下ラサル所アレトモ、聴間道程ノ平均ヲ得、或ハ定尺弐間ト伝唱スルヲ以如此	
	２間	北方村	久米郡志津川村界～下浮穴郡南方村界	
	２間	松瀬川村	下浮穴郡南方村～同郡川之内村	
			温泉郡三番町ヨリ起、久米郡北久米村鷹子村水泥村畑中村梅之本村西之岡村志津川村、下浮穴郡南方村ヲ経テ同郡川之内村ヱ至、旧来御順見道兼ル	
御奉行道	１間２尺	志津川村	下浮穴郡田窪村々界ヨリ東北隅ニ向ヒ志津川本村国道筋ニ連絡	
			旧藩政度毎三年目ニ一回三奉行ト称スル行政官秋色巡見ノ砌、定径ノ道筋也	
山之内道	１間	志津川村	久米郡樋口村々界ヨリ当村字本村ニテ国道筋ニ連絡	
			志津川村字本村国道筋ヨリ起リ同郡樋口村ヲ経テ同郡山之内村ニ通ス	

注）明治14年・15年に各村戸長から郡へ提出された「道幅調」「道幅取調書」（愛媛県行政資料「土木例規」所収）より柚山俊夫作成。

表４　志津川村の道路一覧

道路名称	重　複	起　点	長　さ	分岐道	
		終　点	幅	分岐場所	分岐道名
国道	村の東方字垣ノ内、樋口村境		８町19間	字川崎500番地	左へ南方村通路
				字川崎506番地	左へ吉久道
	西方字北裏、西岡村境		２間	字町筋528番地	右へ樋口村通路
				字町筋636番地	左へ御奉行道
大洲街道	村の東方字桟敷349番地、国道接続の処		15町32間３尺	字桟敷299番地	左右へ南方村通路
				字野中401番地	左右へ吉久道
	南方字力石、田窪村境		１間	字夏梅969番地	左右へ見奈良村通路
				字力石1091番地	右へ御奉行道
西岡村通路	国道重複	村の中央（636番地）	２町６間	－	
		西方村境、字北裏	－		
樋口村通路	国道重複	村の中央（636番地）	６町５間	字中西99番地	右へ中道
		同字528番地			
	村境字中西		４尺８寸		
南方村通路	国道重複	村の中央（636番地）	10町１間	字桟敷299番地	左右へ大洲街道
		字川崎500番地			
	村境字桟敷		４尺８寸		
見奈良村通路	御奉行道重複	村の中央（636番地）	８町13間	字夏梅969番地	左右へ大洲街道
		字千田窪1284番地			
	南方村境字力石		１間		
田窪村通路	御奉行道重複	村の中央（636番地）	12町54間３尺	－	
		字南裏1424番地			
	村境字八反地		１間		
中道	村の東方字中西99番地、樋口村通路接続の処		２町７間３尺	－	
	同字樋口村境		１間		
吉久道	村の東方字川崎506番地、国道接続の処		８町18間	字野中401番地	左右へ大洲街道
	南方字夏梅、見奈良村境		１間		
御奉行道	村の中央字町筋636番地、国道接続の処		11町26間	字南裏1424番地	右へ田窪村通路
				字千田窪1284番地	左へ見奈良村通路
	南方字力石、田窪村境		１間	字力石1091番地	左へ大洲街道

注）明治17年完成の「久米郡地誌」のうち志津川村誌の「道路」項目の記述より柚山俊夫作成。－は記述なし。

北裏西岡村境ニ至ル、長八町拾九間幅弐間、中間字川崎五百番地ニテ左へ南方村通路ヲ岐シ、同字五百六番地ニテ左へ吉久道ヲ岐シ、字町筋五百弐拾八番地ニテ右へ樋口村通路ヲ岐シ、同字六百三拾六番地ニテ左へ御奉行道ヲ岐ス

続いて大洲街道ほか村内の主要道路について記す。これらの内容を表４で表し、同時期の「地誌付久米郡地図」をもとに、志津川村内道路網図を図３で表した。

志津川村の中央は、志津川村誌の末尾に記載があるように、字「町筋」の636番地付近の交差点である。

ここを起点に、西岡村通路・樋口村通路・南方村通路・見奈良村通路・田窪村通路・御奉行道の６本の道路が出ている。また大洲街道は、国道から349番地の横河原付近で南へ分岐し、299番地付近で南方村通路と、401番地付近で吉久村通路と、969番地付近で見奈良村通路と交差し、1091番地付近で御奉行道と接する。

このように、国道と大洲街道が東西の動脈となっているが、志津川村の町筋から放射状に道路が展開している。これらの道路網の正確な復元地図は、明治時代の地形図や現代の住宅地図などを見ても、愛媛大学医学部や住宅団地の建設など開発が行われて昔の道筋が失われ、また途中の経路や交差地点の番地の位置等が把握しにくく、作成が困難である。

３　志津川の町並み

(1)　志津川町村

前節で志津川村の道路について述べたが、東温市志津川は江戸時代、「志津川町村」と呼ばれていた。慶安元年（1648）の「伊予国知行高郷村数帳」では「志津川村」であるが、元禄13年（1700）の「伊予国村浦記」や天保５年（1834）の「天保郷帳」では、いずれも「志津川町村」と表記されている（平凡社『愛媛県の地名』昭和55年、「行政区画変遷・石高一覧」）。

「町」の字がつく松山領内の村としては、「新町村」（今治市大西町）、「荏原町村」（松山市）、「久万町村」（久万高原町）がある。江戸時代にはそれぞれ、新町・荏

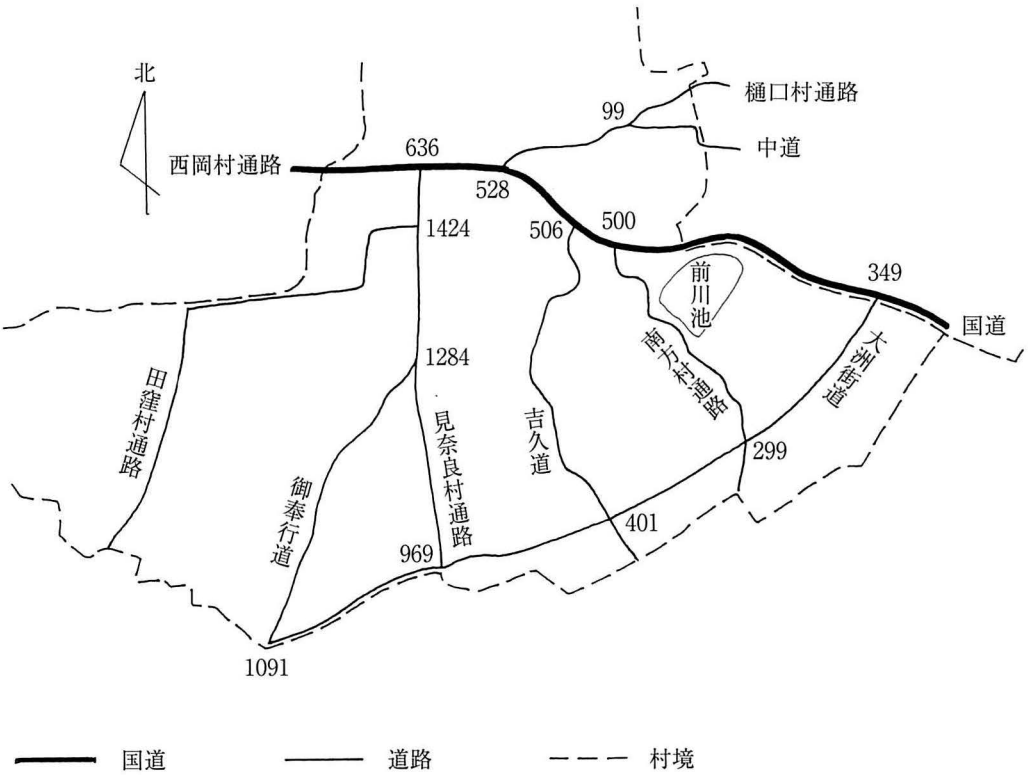


図３　志津川村内の道路網図（明治17年）

注）愛媛県立図書館蔵「地誌付久米郡地図」より柚山俊夫作成。図中の数字は交差点・分岐点付近の地番（表４参照）で、原図に加筆した。

原町・久万町という在町があった村である。この３町と同様、志津川町村にも志津川町があった。ただ、松山藩関係史料で「十ヶ所郷町」とされた町場に志津川町は含まれていない（『松山市史料集第４巻近世編３』昭和59年、1086ページ）。

志津川町は讃岐街道沿いの宿場町でもあった。また前節３項・４項にあったように、樋口村を経由して山之内村と結ぶ「山之内道」や、田窪村と結ぶ「御奉行道」など、東西幹線だけでなく南北に通じる街道も存在していた。このような交通の結節地点に町場が形成されたものであろう。

明治以降は、川上あるいは横河原に交通の中心機能を奪われ、衰退したものと思われる。

(2) 明治時代の町並み

土地台帳である明治10年(1877)作成の「段別畝順帳」及び東温市役所国土調査課提供の現行地籍図及び法務局保管の旧図から、明治時代前期の町並み復元に努めた。「畝順帳」には土地１筆ごとに小字名・地番・地目・面積・所有者名が記載されるほか、その土地の周囲に道路や水路があれば、その長さや幅も記されているので、その情報をもとに復元図を作成した。したがって、街道の道幅をはじめ現状と相違することや、一部、作成者の推測によって描いた箇所があることをお断りしておく。

図４によれば、志津川町の町並みは「下市（シモイチ）」「町筋（マチスジ）」「町畑」「上市（カミイチ）」「市頭（イチカシラ）」「地蔵元（ジゾウモト）」の６つの字からなり、町並みの北側には「北裏（キタウラ、北浦とも書く）」、南側には「南裏（ミナミウラ、南浦とも書く）」の小字が帯状にある。また「町筋」の東に「市頭」「上市」、西に「下市」の小字がある。「町畑」の小字がなぜ町並みの中央片側にあるのか、今後の課題ではあるが、「町」や「市」の付いた小字地名が分布し、典型的な在町形態を示している。

表３の備考欄に、北の山岳地帯に吉山城があり、その南麓にあった小市街を志津川町とかつて呼んでいたと記されている。戦国時代には山城に付属した小さな町場が形成されていた。吉山城を南へ下ると慈光寺があり、城主の和田氏の菩提寺で霊廟もある。寺は山上

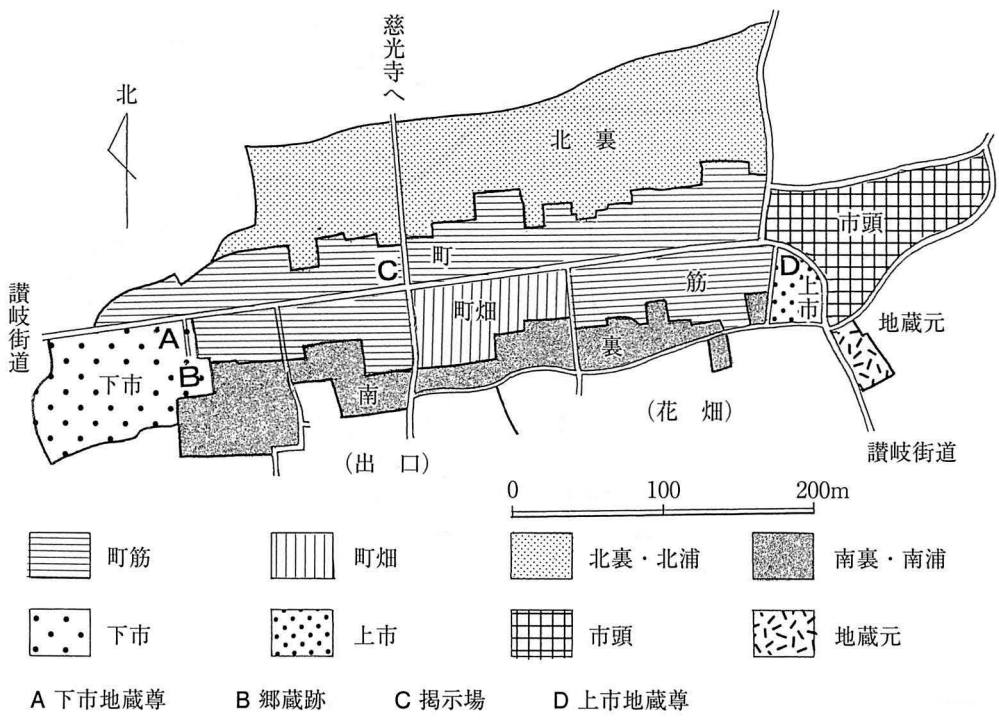


図４　志津川の町並み一帯の小字図（明治10年）

注）「段別畝順帳」（愛媛県立図書館蔵）、旧図（松山地方法務局蔵）、現行地籍図（東温市国土調査課提供）より柚山俊夫作成。

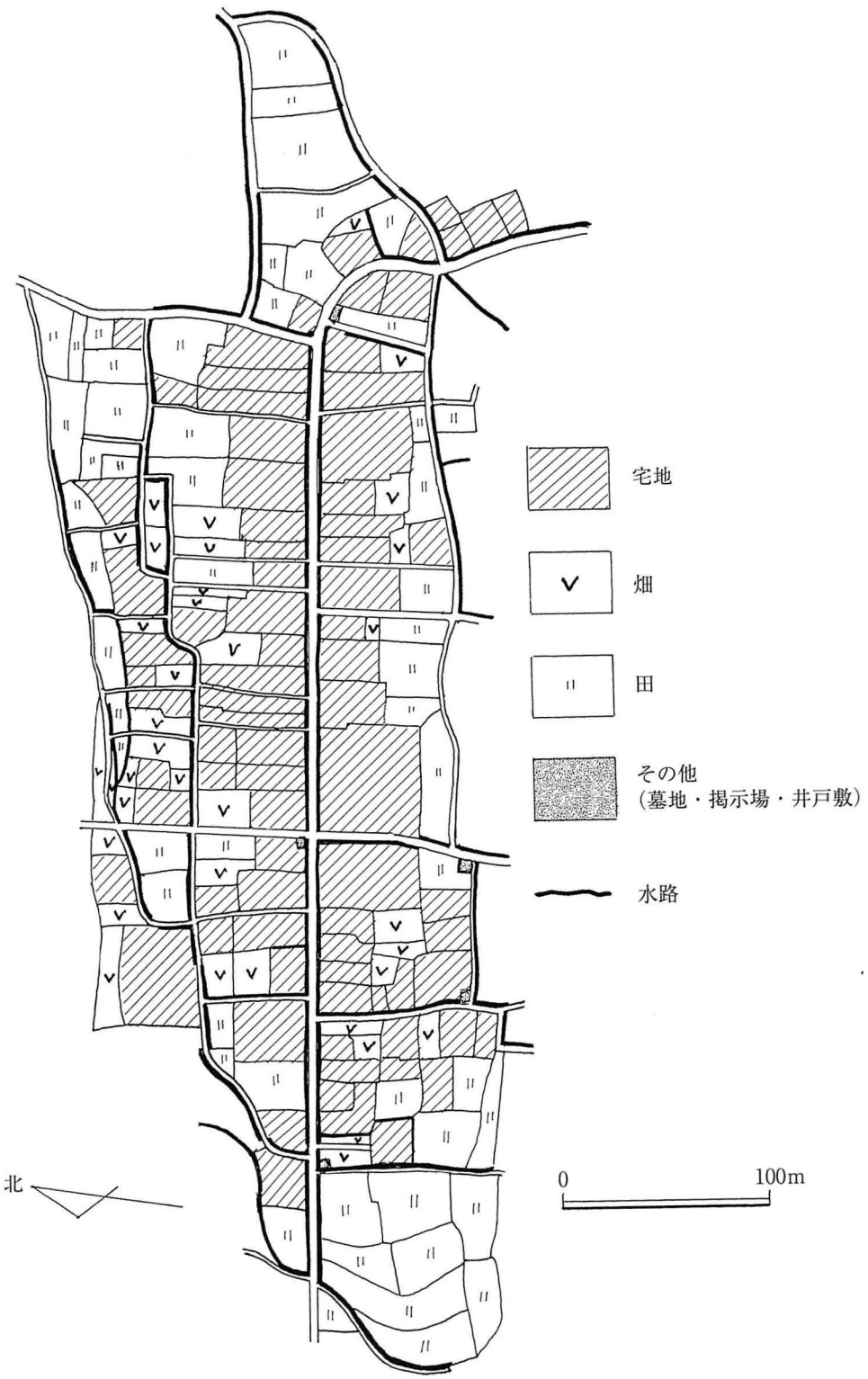


図5　志津川の町並み復元図（明治10年）

注）「段別畝順帳」（愛媛県立図書館蔵）、旧図（松山地方法務局蔵）、現行地籍図（東温市国土調査課提供）より柚山俊夫作成。

の吉山城と志津川町の間にあり、城主の館と想定することもできる。慈光寺の門前の道を南下すると町並みの中央（掲示場のある四辻）に至り、さらに南へ進めば字「出口」に至る。そのような南北の道に、東西に走る讃岐街道が交差するという道路景観である。

図５は、土地一筆ごとの土地利用を表した明治前期の町並みの景観復元図である。間口が狭く奥行きが長い短冊形の土地が多く、街村的景観を示している。家の裏（街道の反対側）に地続きで自家用の田畑がある事例（町筋の宅地の所有者と、その背後の北裏または南裏にある田畑の所有者とが同一である）は、およそ３分の１である。

「久米郡地誌」で志津川村の中央とされる636番地付近の交差点の北西側敷地には、1446番地（636番地の斜め前、1447番地の東南隅）があり、その面積は４歩、地目は「掲示場」である。この付近には広大な面積の宅地が２筆あるので、志津川町を代表する富商の家であろう。また、村の中央とされる交差点から南へ延びる道筋の両側の小字は、「出口」である。２節４項で述べた、見奈良村通路・田窪村通路・御奉行道の３本の道筋として重複している道路が町場を南へ出たところが、「出口」なのである。

なお下市には、郷蔵があった。郷蔵とは、江戸時代の年貢米を収蔵する村の倉庫である。街道には面していないがすぐ近くの土地で、村全体でみれば町並みの西側で西岡村境に近く、松山への年貢米輸送を考えた位置にある。また町の東西に地蔵があり、それぞれ所在地の小字名から「下市地蔵尊」「上市地蔵尊」と呼ばれている。

４　川上の町並み

(1)　川上地区の地形と村境

平成20年（2008）８月、川上の町を現地調査した。川上の町場が江戸時代から明治時代にかけて当地方の中心集落であったことは、多くの文献がすでに指摘している。

江戸時代には宿駅として伝馬が置かれたとか、豪商がいたとかといった、町場ならではの歴史を持ち、昔をしのばせる町並みが残されている。

本節で述べる地名「川上（かわかみ）」とは、町場としての川上地区（「川上駅」と呼ぶ文献もある）のことである。明治の川上の町の賑わいについては、「広報かわうち」第55号（昭和43年）に、その思い出話が多数収録されている。

現地調査で気がついたことは、第一に、川上の町場が段丘崖の上にまず立地し、段丘崖下に町並みが広がったと想定できることである。そのような類例としては、県内では松丸（北宇和郡松野町）、卯之町（西予市宇和町）を挙げることができる。川上の町が扇状地の扇端に位置することを指摘する文献はあるが、段丘崖の存在に関心を払いながら、川上の町場のあり方を述べた文献や論考は少ない。山本アツ子氏「花と水と石垣のふるさと川内」（愛媛県生涯学習センター編『わがふるさとと愛媛学Ⅵ』平成11年）、窪田重治氏「扇状地農村の用水開発と都市化に伴う農村景観の変貌」（「東温史談」第２号、平成19年）などがある。

第二に、川上の町場は行政区画が分割されているということである。近世から繁栄した町場は、通常、ひとつの町（あるいは村の中の町）となってひとつの行政区画になる。ところが、川上は、江戸時代には街道を挟んで北側に北方村、南側に南方村、また東は松瀬川村と、３か村に分断され、「川上村」は江戸時代の村名としては存在しない。江戸時代の史料では、「南方村之内　川上」とあって、「川上町」とは呼んでいない（『松山市史料集第４巻近世編３』平成59年、1088ページ）。

特に、街道を挟んで道の両側の町が別の区画になるというのは珍しい。郡中（湊町・灘町）あるいは北条（北条町・辻町）など、２つ以上の町から成り、街道に対して垂直に境界線が走る町場はあるが、川上は、街道に平行・一致して境界線が走る町並みなのである。村の境界付近に町並みが形成されたのはなぜだろうか、その理由は不明であるが、今後の研究課題としたい。

(2)　明治時代の町並み

志津川町と同様の資料から、明治時代前半の町並み復元図の作成に努めた。

図６を見ると、一見して図４の志津川の町並みの小字とは違うことに気付く。それはまず、町場特有の小字がみられないということである。「町裏（チョウウラ）」はあるが、その「町」がついた地名が公称され

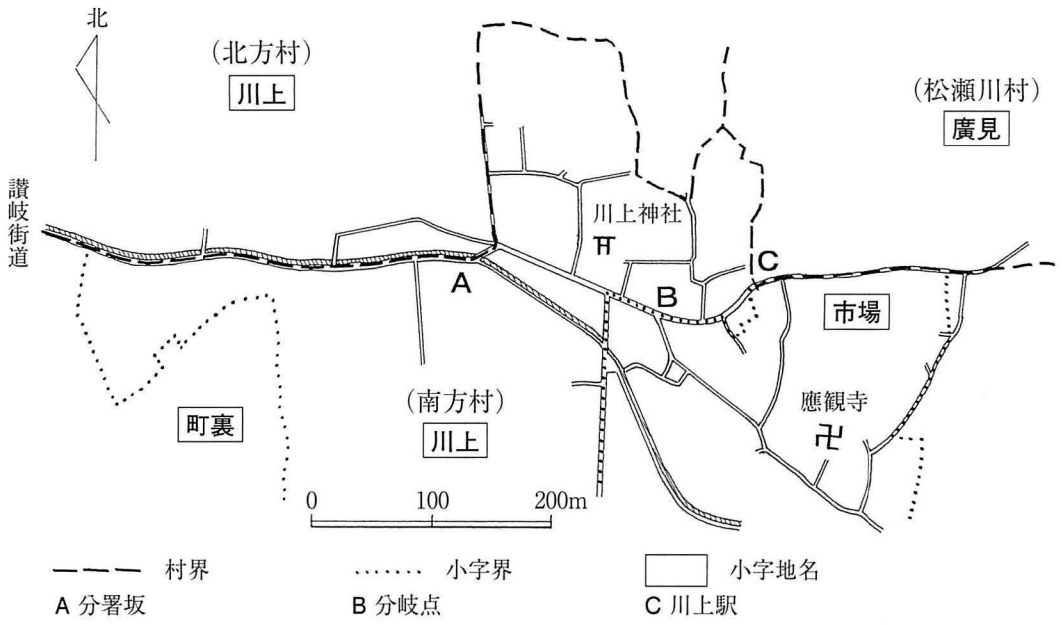


図6　川上の町並み一帯の小字図（明治12年）

注）各村「地価一筆限帳」（愛媛県立図書館蔵）、旧図（松山地方法務局蔵）、現行地籍図（東温市国土調査課提供）より柚山俊夫作成。

ていない。「下之町」「中之町」「上之町」などは、川上で現在使用されている地名だが、明治時代前期の土地台帳には、小字としての町地名の記載がないのである。また、志津川のような、道路に沿った小さなまとまりの小字がない。なぜ、町並みはあるが、町地名がないのであろうか。

また、北方村の川上と南方村の川上が隣接して存在する。松瀬川村には、小字「横灘」「廣見」を包括する中字「川上」があり、町場としての川上の一部である。明治10年代の松瀬川村に、川上という字名を記録する行政文書がある（表1及び『愛媛県史資料編近代2』昭和59年、319ページ）。このように、明治初めには、この町場のかなりの部分は「川上」という小字で把握されていたのである。

図6のB地点は、南に延びる道筋（市場・天神に向かう道）の分岐点であるが、分岐点の東側、現在道標がある場所には、明治時代初期には小さな池があった。

次に図7をみると、志津川のような、間口が狭く奥行きが長い短冊形の土地があまり見られない。志津川の町並みには計画性が感じられるが、川上の町並みは自然発生的な景観である。特に、川上の西の地域（現在の「下之町」一帯）は、一筆の土地区画が東の地域に比べると大きい。

町筋の賑わいぶりは、「広報かわうち」平成16年（2004）8月25日号の「特集　金毘羅街道を歩く。」が詳しく、要領よくまとめている。それによれば川上駅＝伝馬継ぎ場（伝馬屋）は、松瀬川村1番地にあったという。現地には、昭和49年（1974）に建立された「川内郵便局発祥之地」の石碑がある。明治の初め、郵便制度開始に伴って川上駅に郵便取扱所が設けられたのである。

分署坂の下には西流する用水路に橋が架かっている。この橋は、図1のように明治12年（1879）には小坂橋と呼ばれていた。「分署」の名の由来は、松山警察署川上分署が坂上の432番地にあったから（『愛媛県史地誌Ⅱ（中予）』461ページ渡部英隆氏作成の「明治初期の川上と主な町並」図より）であろう。この橋の付近に道標があり、西から来た人は道標の「左讃州金毘羅道」に従い、分署坂を上って行ったのである。

ところで図7を見ると、明治前期にはすでに、川上駅が川上の町場の東端に位置し、町の中心地であるようには見えない。また図8によれば、川上の町並みの西にある○印が川上村役場で、現在は下之町集会所の場所である。また〒の記号は、郵便局である。このよ

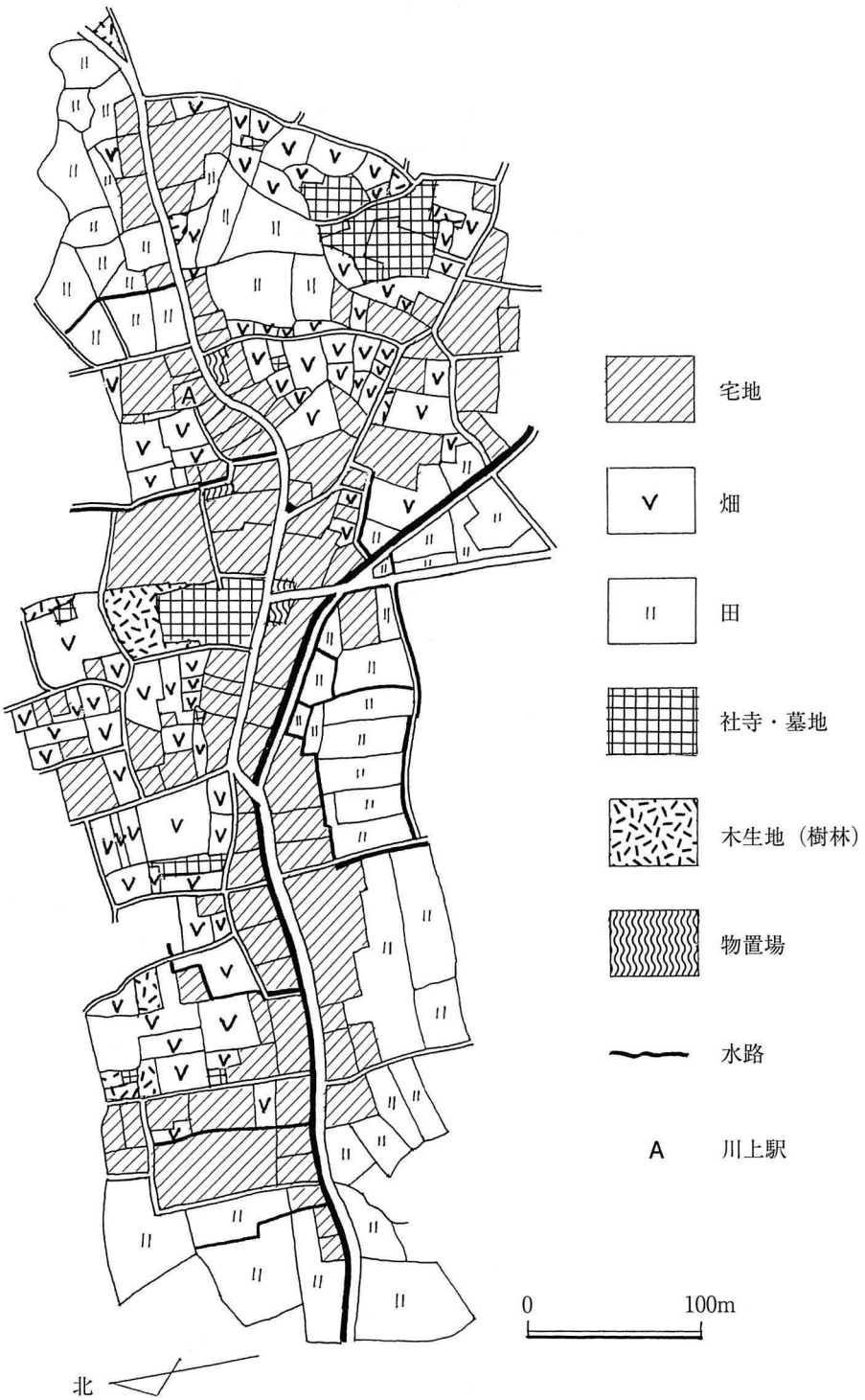


図7 川上の町並み復元図（明治12年）

注）各村「地価一筆限帳」（愛媛県立図書館蔵）、旧図（松山地方法務局蔵）、現行地籍図（東温市国土調査課提供）より柚山俊夫作成。

うに、川上の町場の中心地は、明治後期には町場の西（現在の下之町）にある。また、明治時代の市場や天神には、旧街道沿いに町並みが見られない。

こうしてみると、川上神社一帯の町並み（分署坂を上がり、川上神社前を通って市場への分岐を過ぎて川上駅に至る町筋。段丘崖の上部の「上之町」一帯）が、比較的古くにできた町並みで、その後、現在の「下之町」一帯、段丘崖の下部に町並みが作られて、川上の町並みは西へ延びていったのである。このようになった要因として、地形と水利が影響しているものと思われる。

また、従来の川上駅から東北の吹上池の北を通って檜皮峠に向かう街道より、図６のＢ地点で南に折れて川上の東南の市場・天神から本谷川沿いに檜皮峠へ進む新道が、だんだん主流になったからかもしれない。そのように交通ルートが変化したため、吹上池の北へ向かう道筋に面した川上駅あたりの人の往来が減少したのであろう。江戸時代の後期には、町並みの中心が次第に西へ移動しつつあったのではないか。

江戸時代後期、町並みはあったが、南方村や北方村から独立して町（町年寄がいる自治体）を形成するほどの経済的な求心力に乏しく、町地名を称するだけの中心性はなかった。その理由としては、川上の後背地が東温市東部に限られ、丹原など道前地方からの物流も少なかったことが挙げられよう。

以上はいずれも図６～８からの不十分な考察に過ぎず、文書など他の根拠資料を提示しながら多面的に考察することが必要で、川上の町並みの変遷とその要因を探ることは今後の課題である。

５　桜三里の名所「曙橋」について

(1)　地誌に記された曙橋

半井梧菴（なからい ごあん）が幕末に執筆し明治２（1869）年に発行した『愛媛面影』と、同じく半井

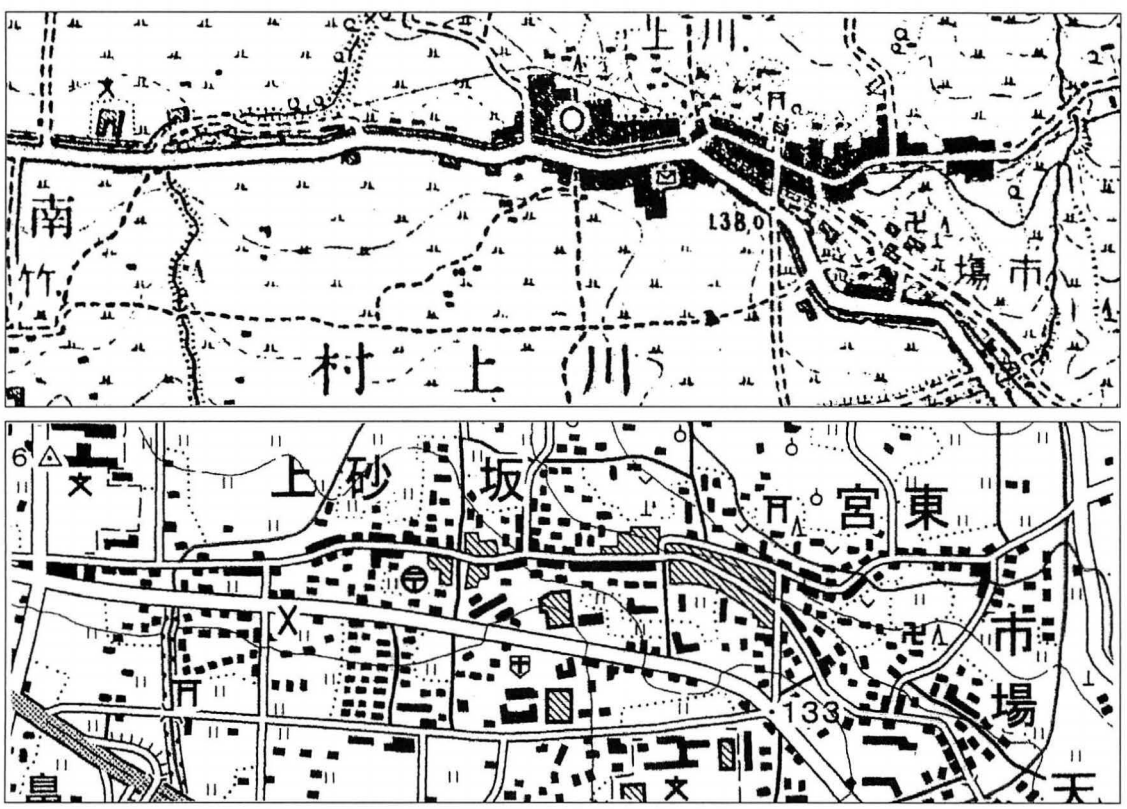


図８　川上付近の新旧地形図比較

注）上は明治38年陸地測量部発行の明治36年測図２万分の１地形図「川上」、下は平成17年国土地理院発行の平成16年更新２万5,000分の１地形図「伊予川内」の一部で、それぞれ１万分の１に拡大した。

が明治5年（1872）に編さんを始めて７年に完成したとみられる「伊予国地理図誌稿」の両方に、曙橋の景観が描かれている（図９と図10）。『愛媛面影』「伊予国地理図誌稿」ともに、橋を主題とした景観の図は他に類例がない。

『愛媛面影』は近世から近代への過渡期に著された伊予国の地誌である。近年、今村賢司氏によって精力的に研究が進められ、曙橋も取り上げられている（「企画展解説　愛媛の名付け親　半井梧菴－地誌「愛媛面影」の世界－」愛媛県生涯学習センター発行『愛媛人物博物館人物探訪』第７集所収、平成17年、愛媛新聞社発行『愛媛面影紀行』平成17年）。

また、「伊予国地理図誌稿」は、筆者が「伊予史談」342・343号（平成18年）に「愛媛県編『地理図誌稿』と『地理図誌』について」と題して、その成立過程や伝来を考察した。「伊予国地理図誌稿」では、周布郡千原村の地誌のなかに曙橋と中山越の説明がある。

> 曙橋　澗流ニ架シタル板橋ニシテ、上ニ屋舎ヲ造リ雨露ニ侵サラシム、此ハ周布郡ヨリ久米郡ニ出ル間道ニシテ、路傍ニ桜樹ヲ植并ヘタレハ俗ニ櫻三里ト称ス、中山越是ナリ
>
> 中山越　小松三里　来見四里　川上四里　松山　周布郡ヨリ久米郡ニ出ル間道ニシテ、小松ヨリ松山ニ至ルニ官道ニ由ルトキハ行程十七里、然ルヲ此間道ニ由レハ十一里ニシテ松山ニ達ス、サレトモ山路険嶮ニシテ車馬通難シ

図10のように、「伊予国地理図誌稿」には「千馬ガ嶽曙橋図」が描かれて（林丑之輔が描いたとみられる）いて、『愛媛面影』の「中山越　曙橋」図と同じ視点である。

なお、曙橋のある田桑（タグワ、東温市田桑）は近年、中世交通の要所にみられる地名として服部英雄氏『峠の歴史学』（朝日新聞社、平成19年）に紹介され、注目されている。日本の禅宗は中国の寺院に倣って、旅の修行僧のための宿泊所を交通の要所につくっており、この宿泊所を旦過（タングァ）と呼んだ。服部氏の指導を受けた東昇氏が「愛媛県におけるタンガ地名と四国遍路」（『中世景観の復原と民衆像－史料としての地名論－』所収、花書院、平成16年）に、東温市の田桑と北方の海上にある田桑を紹介し、曙橋の図も掲載している。

桜三里の範囲は、渡部高義編『川上村のおもかげ』（昭和26年）32ページに、「いわゆる桜三里というのは、小檜皮田峠あたりから、土屋－千原（七里）－落合（八里）の間を云う」とある。

(2)　曙橋の位置

筆者は平成20年（2008）８月の東温市地域調査の際、門田邦彦氏に案内していただいて「あけぼの橋跡」の立て札がある場所（左岸）を訪れることができた。現地調査によれば、図11の左図のとおりで、現在は、上空を送電線が通過しているほぼ直下の地点である。日照り続きでダムの水量が少なかったためか、現地の川岸には石積み（橋台か）が残存しているのが確認できた。対岸（右岸）では坂道が下流側から下り、水中に没していた。

(3)　曙橋の規模

表２にみえる田桑所在の板橋が曙橋である。明治12年（1879）には長さ８間、幅２間であった。明治13年の「愛媛県統計概表」によれば、長さ10間以上の橋梁は県下（ただし伊予国のみ）に116か所ある（『愛媛県史資料編近代１』754ページ以降参照）。曙橋は当時の愛媛県下で長大な橋ではない。しかし、他の橋は橋脚あるいは川船で継いでいたが、曙橋には橋脚はなく、屋根付きであったから、旅人にとっては珍しい橋であったと思われる。

(4)　曙橋の別名

昭和36年（1961）に発行された『川内町誌』554ページに、「一五、曙橋、一名鞘橋」という項目名の次に「（前略）図にある如く橋に屋根があつて、一名鞘橋とも言つて、道行く人にめづらしがられたものであつた。」と記述されている。

ところで『愛媛面影』には、「又曙橋と名くる復道あり、山城東福寺の通天橋に似たり」と記す。京都東福寺の通天橋は、屋根付き橋で紅葉の名所であるという。半井梧菴は晩年を京都で過ごすなど、京都にゆかりの人物であったから、京都の寺院の屋根付き橋との類似を指摘したのであろう。そして、本文の「復道」に「さやばし」とふりがながある。

漢字の「復道」は、『大漢和辞典』（大修館書店）によれば「上下二重の道。二階建ての廊下。」という意味だという。屋根付きを「上下二重」と見たのであろ

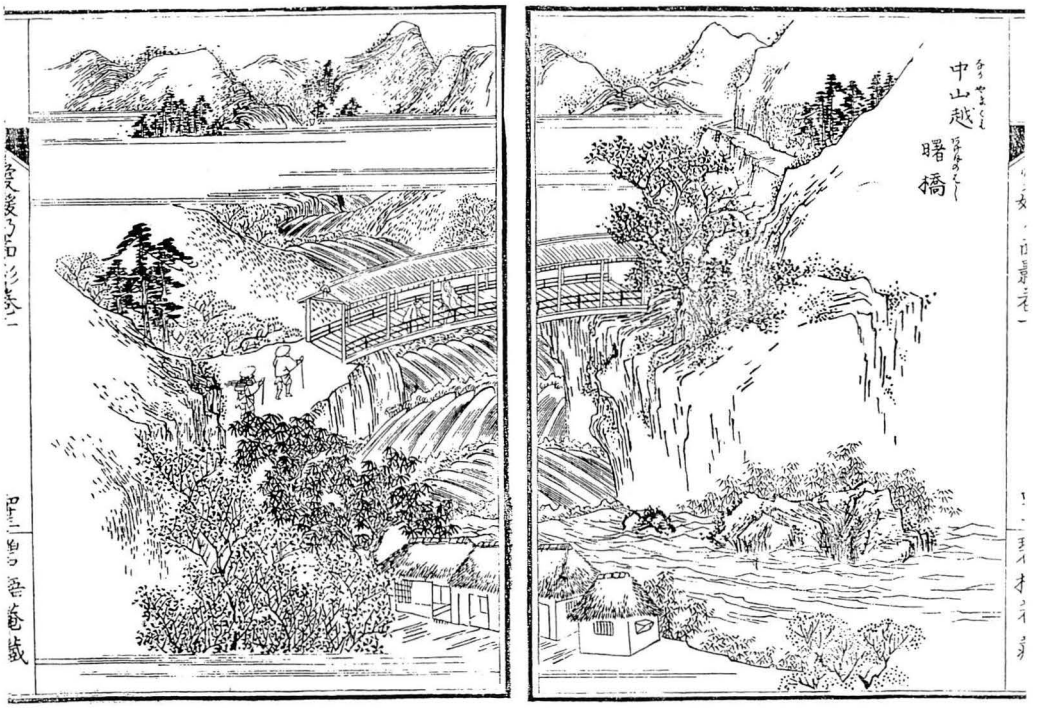


図9　『愛媛面影』に描かれた「中山越　曙橋」の図

注)『愛媛面影』から転載。

図10　「伊予国地理図誌稿」に描かれた「千原村千馬ガ嶽曙橋図」

注)「地理図誌稿」より転載。

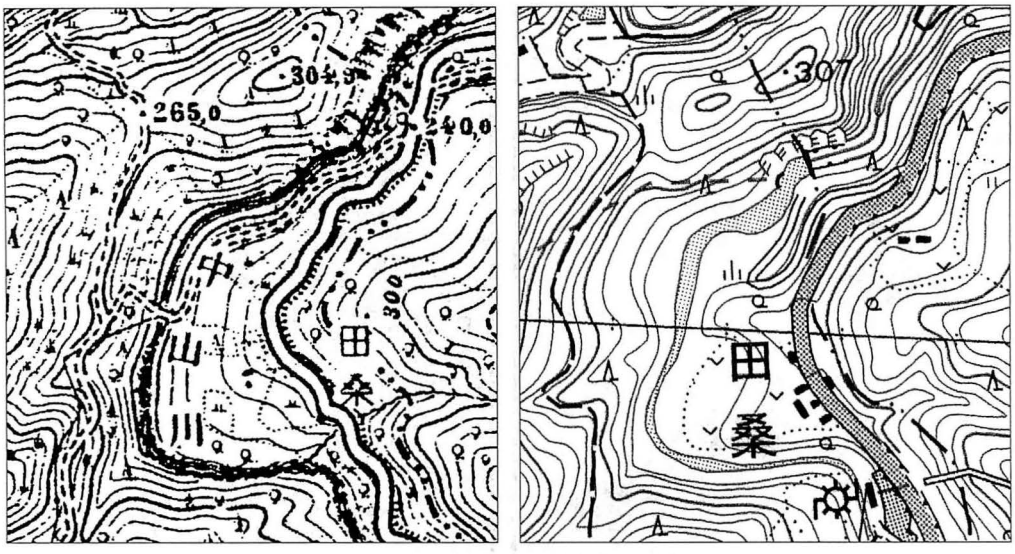


図11　曙橋付近の新旧地形図比較

注）左は明治38年陸地測量部発行の明治36年測図２万分の１地形図「松瀬川」、右は平成17年国土地理院発行の平成16年更新２万5,000分の１地形図「伊予川内」の一部で、それぞれ１万分の１に拡大した。

うか。「さやばし」の語は国語辞典にないが、香川県の金刀比羅宮に鞘橋（さやばし）という屋根付き橋があり、その鞘橋の名は、橋の形が、刀の鞘のように反っていることから名づけられたという。讃岐街道の別名を「金毘羅街道」ともいい、伊予からの参詣人が帰り道で曙橋を見て、橋の反った形が金刀比羅宮の屋根付き橋「鞘橋」と似ているところから、「さやばし」の名をあてたのだろう。

関連して想像をたくましくすると、「復道」は、「覆堂」の当て字ではないか。「覆堂」とは、『日本国語大辞典』（小学館）によれば、「建造物を保護するために、外側からかぶせてつくった建物。鞘堂」という意味である。ここでも「鞘」が登場するのである。

いずれにせよ、『愛媛面影』の本文を素直に読めば、曙橋と名のついた「復道（＝鞘のように反った形の橋、あるいは鞘のように覆った橋）」がある、という文である。つまり、曙橋は固有名詞であるが、復道＝「さやばし」は普通名詞として用いられている。すでに酒井孝氏が「つえを止める中山越」（愛媛県生涯学習センター『わがふるさと愛媛Ⅳ～平成10年度愛媛学セミナー集録～』、平成11年）のなかで、「『曙橋』という、屋根付きの鞘橋という種類の橋がかかっていたのです」と述べている。鞘橋の名は、曙橋の異名（別称）ではないのである。

なお、図２にあるように、曙橋を「田桑橋」と呼ぶ例は確認できる。明和８年（1771）に作成された「久米郡手鑑」（伊予史談会編『伊予郡・和気郡・久米郡手鑑』平成４年）には、「一田桑大橋　御公儀普請」という文言（「田桑の鞘橋　御公儀普請」ではない）が記載されているから、曙橋を田桑橋、あるいは田桑大橋とも呼んでいたのである。

(5)　曙橋図の構図

ここでは、『愛媛面影』や「伊予国地理図誌稿」に描かれた曙橋の図が、A上流から下流を見た図か、逆に、B下流から上流を見た図か、どちらか、ということを問題にする。

筆者は、A上流から下流を見た図ではなく、B下流から上流を見た図と考える。

『愛媛面影』と「伊予国地理図誌稿」の記述順序をみると、ともに伊予の東から西へ向かって順に記事を掲載している。読者は、伊予国を東から西へ歩いていくように本文を読み、景観の図を眺めているはずである。そうすると、ここで突然、松山側から西条側を向いているような（A上流から下流を見ているような）視点が提示されるより、西条側から松山側を見る（B下流から上流を見る）視点と解するのが自然である。

『愛媛面影』では、周布郡の名所を紹介する中で「中

山越」について、「周布郡滑川に沿て西久米郡に出る山道あり、中山越と名く」と記し、続いて曙橋を説明する。中山越は、千原村－河之内村－松瀬川村のルートである。「西久米郡に出る山道あり」という表現から、曙橋への視点も周布郡から久米郡への視点、つまりB下流から上流を見た景観と解するべきである。

「伊予国地理図誌稿」には、図10のとおり「千馬ガ嶽曙橋図」が描かれている。千馬ガ嶽（せんばがだけ）は千羽ヶ嶽・千羽ヶ岳とも書かれる。この図は、冊子の見開きに描かれた図で、左半丁に曙橋、右半丁に千馬ガ嶽が大きく描かれている。そして両図は一体のものとしてつながっている。実際に中山川の左岸にある千馬ガ嶽が、中山川の右手に描かれているから、この図はB下流から上流を見た視点なのである。そして、左半丁に描かれた曙橋の景観は、『愛媛面影』の「中山越　曙橋」の図９と同一の視点であるから、『愛媛面影』の図も、B下流から上流を見た景観なのである。

明治13年（1880）10月、下浮穴郡河ノ内村平民近藤林内と戸長近藤寛蔵から愛媛県令関新平に宛てて「道路変更之義ニ付願」が出されている（明治13年「河海溝池許可工事」）。これは、当時の街道（土谷から中山川左岸の山中を通り田桑の曙橋で右岸に渡るルート）を変更し、土谷から落出までは川の左岸を行き、左岸から落出に橋で渡り、そのまま右岸沿いに周布郡へ進むコースを開通させるよう願い出た願書である。この願書には計画の図面が添付されている。図面では、当時の街道には「旧道嶮岨」、計画の新道には「新道平坦」と添え書きされている。

この図面のうち、田桑の曙橋あたりを図化したのが図12である。周布郡・下浮穴郡境には境界を示す標柱（「久米郡手鑑」に「田桑道ノ上　周布郡境立石」とあるので石柱であろうか）が描かれている。下流側から右岸の道路沿いに上って来ると、道路と川の間に家が２軒描かれている。そのあと曙橋への坂道を下り、曙橋を渡ると坂道が山をまっすぐ上がっていく。この橋の両側の景観は現地調査でも確認できた。

さて、明治13年（1880）の図面にみられる家２軒は、曙橋の図に描かれた、街道と橋の間にあるように見える家であろう。『愛媛面影』には図９のように３軒、「伊予国地理図誌稿」には図10のとおり２軒が描かれている。明治13年の図面には、曙橋を東から西へ渡った左岸には、家は描かれていない。家は、中山川の右岸に

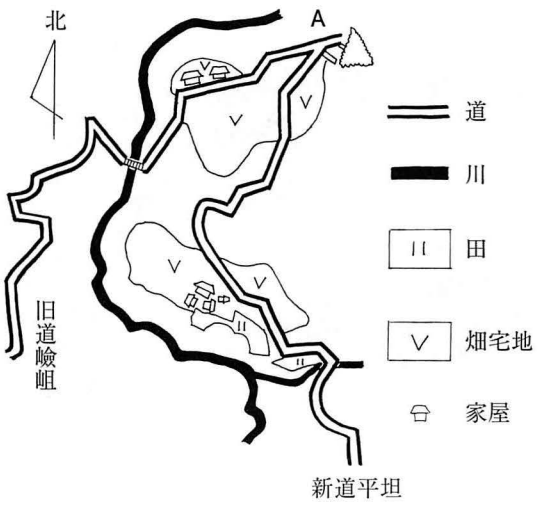


図12　曙橋一帯の道路略図（明治13年）

注）「道路変更之義ニ付願」に添付された図面のうち、曙橋一帯をトレースして柚山俊夫作成。A地点には一本の大木が描かれ、「周布郡下浮穴郡界」と記された柱が描かれている。

あって、橋と郡境の間にある。このことからも、『愛媛面影』と「伊予国地理図誌稿」の曙橋の図は、B下流から上流を見た景観と断定することができる。

「伊予国地理図誌稿」の左半丁のみ提示して、A上流から下流を見た視点で曙橋周辺の景観を説明する文献があるが、それは誤りである。

(6)　曙橋の失われた時期

昭和36年（1961）に発行された『川内町誌』554ページに、曙橋は「大正初年の頃取り除かれた。」と記述されている。これがその後の各種文献に引用され、いわば定説になっているようである。

ところが、黒河健一氏は「大正十五年頃取り壊したと土地の古老は話す」と記す（「伊予史談」189～191合併号、昭和43年）。また、『愛媛県史地誌Ⅱ（中予）』（昭和59年）463ページには、「『愛媛面影』の挿絵にある中山越の曙橋は、昭和20年頃まで残っていたが、現在は見られない。」と村上節太郎氏が書いている。

一方、「広報かわうち」平成16年８月25日号８ページには、「大正９年に作られた２代目・曙橋」と説明のある橋の写真（図13）がある。屋根がなくなっており、橋の名「あけぼのは（「し」の字は見えない）」と刻まれた石柱が見える。

今村賢司氏『愛媛面影紀行』（平成17年、愛媛新聞

図13　大正時代の曙橋

注）「広報かわうち」2004年８月25日号より転載。

社）に、近くの土谷集会所に作られた、曙橋の復元模型の写真が掲載されていたので、平成20年（2008）８月、現地調査を行った。写真をよく見ると、橋の復元模型のそばにある石柱には文字が刻まれている。

現地調査によれば、石柱は全部で４本あり、模型の前方右の石柱には「曙橋」と刻まれ、左の石柱には「あけぼのはし」「大正十二年九月架設　三内村」と刻まれている。石柱に刻まれた「あけぼのはし」の文字は、「広報かわうち」に掲載された曙橋の石柱の文字と同一である。残り２本は、倒した状態で橋の復元模型近くに置かれていた。土谷地区の区長ら２名の方に聞き取り調査したところ、この石柱は田桑の曙橋の両岸にあったが、いつの頃か、個人宅へ移動していたのを川内町教育委員会に持ち帰り、平成10年頃までに地元が要望して、石柱を土谷集会所の敷地内に保存することにしたという。

この石柱はもともと、田桑にあった曙橋の一部であり、橋名を記した歴史遺産である。大正12年（1923）に曙橋の架け替えをしたとき作られた石柱であろう。そうすると「大正初年の頃取り除かれた。」とする『川内町誌』の記載は、屋根付き橋が取り除かれたという意味であろうが、その後継の屋根付きでない曙橋には触れていないことになる。

屋根付きでない曙橋は、石柱に刻まれているとおり、大正12年に架設された。そうすると、屋根付きの曙橋は、大正12年までに失われたと考えられるが、その時期が大正初年かどうかは判明しなかった。

６　おわりに

本章では、東温市域における明治時代の旧街道と町並み、また曙橋について、明治時代の文書を使用して筆者の考察を述べてきた。

まず、文書に記された讃岐街道などの明治前期の道筋を紹介した。讃岐街道の道幅は平地では２間、山間部では１間３尺～１間１尺であった。また、横河原で南西方向へ分岐する大洲街道の道幅は１間であった。

そして、道筋に展開する町並みとして、志津川と川上を取り上げ、明治時代前期の町並み景観の復元に努めた。志津川は小字地名の分布や土地区画の形状から、典型的な在町であるが、明治時代以降は衰退し、これまであまり注目されなかった。一方、川上は、自然発生的な集落で、地形や水利、交通ルートの変化のために、町場の中心が東から西へ移動したと想定される。また、村境に立地することや町地名が残存しないことから、近世には中心性が未発達だったと考えた。

さらに、街道筋としては東温市の東端にあたる田桑にあった曙橋について、位置や規模、別名など文書や現地調査に基づいて考察し、従来の報告や概説書で述べられた記述をいくつか補訂した。

歴史地理学的な地域調査では、①可能な限り先行文献を収集し、②各文献の矛盾点を洗い出し、文献間の引用の因果関係（どの本から孫引きしているか）を突き止め、③一次史料やそれに近い信頼性の高い史料を実際に確認し、④現地での聞き取りや遺物を調査する、などの作業を通して、過去の不確かな、あるいは誤った言説を正す努力を重ねていくことが必要である。それらの作業が本稿とて十分ではないのは自覚している。原典確認・現地調査の重要性を強く再認識させられた東温市地域調査であった。

参考文献

○平凡社（昭和55年）：愛媛県の地名
○重信町（昭和63年）：重信町誌
○川内町（平成４年）：川内町新誌
○東温市（平成18年）：東温市の文化財

愛媛県教育委員会生涯学習課　柚山　俊夫

地理共同調査の歩み

	調　査　年	報告書発行年	報　告　集　名	合本
1	昭和33（1958）	昭和38	青島の地理的共同調査研究報	愛媛の地域調査報告集（1980）
2	34（1959）	40	地理研究紀要（久万町畑野川の民家と遍路宿の集落ほか）	
3	35（1960）	37	昭和36年度愛媛県科学技術教育研究集録 （佐田岬半島の地理学的共同研究）	
4	36（1961）	37	三島・川之江・銅山川地域の総合調査概報〔第一報〕	
5	37（1962）	38	四国西南開発地域の共同調査（その一） －御荘・城辺・船越・由良半島－	
6	38（1963）	40	四国西南開発地域の共同調査（その二） －宇和島・北宇和郡－	
7	39（1964）	41	越智郡島嶼部の共同調査－大島・大三島・伯方島－	
8	42（1967）	43	周桑平野の地理	
9	45（1970）	46	大洲盆地の地理	
10	49（1974）	50	宇和盆地の地理共同調査	
11	52（1977）	53	砥部町の地理共同調査	
12	56（1981）	57	川之江市の地理	愛媛の地域調査報告集（二）（1990）
13	58（1983）	59	津島町の地理	
14	61（1986）	62	今治市の地理	
15	平成元（1989）	平成２	宇和島市の地理	
16	4（1992）	5	西条市の地理	未刊
17	7（1995）	8	内子の町並みと人々のくらし	
18	10（1998）	11	鬼北盆地の風土とひとびとのくらし－三間町・広見町・松野町－	
19	13（2001）	14	伊予市の風土と人々のくらし	
20	16（2004）	17	新居浜市の風土と人々のくらし	
21	20（2008）	21	東温市の風土と人々のくらし	

東温市の風土と人々のくらし

発　行　日　平成21年11月20日
編集・発行　愛媛県の高等学校地理歴史・公民科教員で組織された
「東温市地域調査委員会」
委員長　米　澤　俊　二
伊予郡松前町大字北黒田119番地２
愛媛県立伊予高等学校
TEL089(984)9311
印　　刷　セキ株式会社
松山市湊町７丁目７－１　TEL089(945)0112